
IS インフィニット・ストラトス ~ 黒衣の侍 ~

あつくすぼんばー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス ～黒衣の侍～

【Nコード】

N3154S

【作者名】

あつくすばんばー

【あらすじ】

IS学園に男子学生二人が入学。片方は織斑一夏、織斑千冬の弟、それだけでも話が大きいのに、もう片方は千冬の師匠！？
全く15歳らしからぬ男子生徒、柏木翔かしわぎ しょうと織斑一夏、二人を中心に
して物語は始まる。

主人公&IS設定（前書き）

おおよそ見切り発進、よろしくお願いしまーす！

主人公&IS設定

主人公設定

名前：柏木翔

年齢：もうすぐ16歳になる15歳

身長：168cm

体重：59kg

容姿：短すぎず長すぎない程度の長さの黒髪に鋭い眼光が特徴的で、精悍な顔つき、容姿だけ見たならば15歳に見えないほどの落ち着いたきと雰囲気を持ち合わせ、実際の身長以上に背が高く見えるというマジックが起こっている。

容姿の格付けとして表すならば上の下辺りだが、格好いいというより男前というジャンル分け。

性格：良い意味でも悪い意味でも一本筋の通った性格、しかし、頑固者というわけでもなく、冗談に対しての寛容さも持ち合わせている。

備考：好きな言葉は徹頭徹尾と唯我独尊、これは最初から最後まで自分の信念を貫き通して前へ進むという彼の考えから好きになった言葉。自分が良ければ後はどうでも良いという考えが基本的にはあるが、自分が良いと思う事〃周りも自分も楽しめたり切磋琢磨出来る事と言う図式なので結果的にはいつも丸く収まっている。

男ならば自分の信念を背負い、意地を貫き通してこそと言う考えを持っているので基本的に自信に溢れている、がその自信に見合う實力を持っているのも確かな事実。

剣道ではなく剣術をやっており、経験は10年前後、過去に千冬と試合をしてそこで勝ってしまった事や彼の人物像などが重なってどんな化学反応を起こしたのかはわからないが、千冬に師匠と仰がれる事態に陥り、現在も一夏の実家に帰って来た時などは師匠と呼ばれている。

昔からあらゆる事を考え、思考する事が好きで、自分が疑問を持った事に対して自分が納得するような答えが出るまで思考する事を止めないと言う性分があり、その中で生きていく意味や自分が生きている人生においての生甲斐や自分がどういう人間かなど哲学的な事を考えていた時期もあり、その答えも自分なりに出しているので、15歳とは思えないほどの言葉が出てくる。

小さい時の筈や一夏の師匠でもあった。

ちなみに中学時代のあだ名は翔の兄貴。

IS設定

機体名：黒衣 零式

機体色：黒

機体コンセプト：突進力＋重量による圧倒的な一点火力、エネルギー兵器に打ち勝てる物理攻撃

機体特徴：高性能PICと各部に取り付けられたスラスターの併用で、圧倒的な加速性能と方向転換性能を得た機体、スラスターの位置は、両脚部合わせて4つ、腕部パーツの両肘辺りに合わせて2つ、翼はないが、背部に二本の鞘のようなものが伸びており、その鞘に3つつスラスターが並び、二本合わせて背部に6つ、肩のパーツの前面背面に1つつ、両肩合わせて4つのスラスターがついている。

鞘のような部分は前面に移動させる事が出来、肩の部分にあるスラスターと合わせて使う事により後方に加速する事も出来る。

エネルギー使用の大部分を推進力、方向転換などのスラスターに使用しているため、思っているよりも燃費はいい。

分類的には第三世代型ISではあるが、使い手次第では第四世代にも勝る可能性のあるISと開発者の束に言わしめるほどの性能。

武器：正宗零式

武器特徴：シルエットは日本刀だが、刀身は厚く長大、折れない事

を最優先に作られ、最大の特徴として刃の背に当たる部分にスラスターが取り付けられ、刃自体が加速する仕様の武器になっている。そのため、重量がかなりあり、扱う者を限定する。

ワンオフ・アビリティー：不明

プロローグ

インフィニット・ストラトス、通称ISと呼ばれるマルチフォームスーツが篠ノ之束の手によって開発された時、世界の情勢は一変した。ISには通常兵器がまるで役に立たず、IS一機であらゆる戦況へ対応が可能、陸海空、どの戦力もISには通用しない。その認識が世界へ広まった時、兵器への転用が危惧されたが、世界の思惑から外れ、スポーツとしてISを扱う競技などが多くなり、完全に兵器へ転用されると言う事態は回避された。

このように一見すると完璧な戦闘力を持つように思えるISだが、一つだけ致命的な欠陥があった。

それは、ISは詳しい原因は不明だが、女性にしか扱えないと言う事。その事実が浮き彫りになった時から、女性優遇の体制が世界中に広まり、そして現在は女尊男卑の風潮が広がっている。

しかし、どのような事象の中にも例外と言うものが存在するように、女性しか扱えないはずのISにも例外はあった、たった二つだが、世界と言う広い範囲の中で、日本のIS学園一年一組、そこに二つの例外は集められていた。

「織斑先生と呼べ」

台詞と共に振り下ろされた出席簿の向かう先は、世界で二つの例外の一つ、織斑一夏の頭だ。

凡そ人の頭から出てはいけなような衝突音と共に悲鳴を上げた一夏は痛みを我慢しつつ、自分を殴った人物を改めて驚きの感情と共に見やる。サマースーツの似合う実の姉、織斑千冬を。

「はい……織斑先生」

自らの救援を昔の幼馴染、篠ノ之箒へと視線に乗せて送っていたのだが、その熱視線によるラブコールは悉く失敗に終わり、妙に納得できないような、腑に落ちないような、そんな感情を抱きながらも自分の自己紹介の番はもはやする事がないと判断し、未だに痛む頭をさすりつつ席に着く。

その一夏の様子にこれ以上は言っても仕方ないと判断したのか、千冬の視線は一夏の後ろの席、二つの例外のもう片方へ視線を向ける。静かに席に座り、落ち着き払っている精悍な顔つきと鋭い眼光を視界に入れた千冬の目が少し細められる。

「次、自己紹介をしる」

千冬のその声に、例外の二つ目は音もなく静かに、起立し、威風堂々と言う言葉が似合いそうな雰囲気以自己紹介を始める。

「名前は柏木翔、特技は剣術、趣味は読書、一夏とは幼馴染で見ての通り俺たちは男だ、ISについては素人も良い所だが、その辺りも含めてよろしく願います」

表情を変えることなく言い切り、静かに着席する翔、その静かな自信に何か感じる所があったのか、周りの女性たちは一夏や千冬の時のように黄色い声を上げるでもなく、ほう……となにやら余韻に浸っているようなため息をつく。

着席した翔を待っていたのは、屈託のない笑顔を向けてくる一夏だった。

「フォロー、サンキューな」

そう言って笑みを向けてくる一夏に、薄く笑みを返す翔。

「気にするな、今までと同じ事をしてるだけだ」

心に余裕があるのか、そう言いながら一夏の感謝に当たり前の事だと返す翔は、どう見ても15歳の雰囲気ではない。

幼馴染との短いやり取りを切り上げ、すぐさま前を向くよう一夏に促す翔にクールな笑みを送る千冬に気が付き、薄く笑みを返す翔は精神的に15歳ではないのだろう。

その後自己紹介は粛々と進んでいく事になる。

世界でたった二つの例外を内包した日本のIS学園、その例外とは、男がISを動かしたと言う事実。その二つの例外を一つの学園内に押し込めたままこの物語は始まる。

プロローグ（後書き）

さて、さっそく路頭に迷いそうだぞ

一斬 漢は行動で語るものだ

現在、一時間目終了後の休み時間。回りは女子ばかりのため翔と話し込んでいた織斑一夏はポニーテールと鋭い瞳が印象的な人物、篠ノ之箒との会合を果たしていた。その様子を周りの女子生徒は固唾を呑むようにして遠巻きに観察している。

「箒…？」

呆けた様に箒の名前を呼ぶ一夏に眉尻をびくりと動かす箒のその姿は一見すると不機嫌そうに見えるが、実はそうでもない、本人としては表情が喜色に歪まぬ様に努力しているため、先程の様な反応になっただけだ。

だが、それを自覚しているのは本人だけで、周りからすれば不機嫌に見える箒の反応に、一夏は少したじろぎ、翔は相も変わらず着席したまま腕を組み、箒をじっと見ている。

「お久しぶりです、師匠」

不機嫌そうに見えた箒が口を開くと同時に、少し頭を下げる。その箒の様子に翔は軽く笑い、一夏は苦笑を刻む。

「そう言う堅い所は変わらないな、箒」

「だよなあ、同い年だぜ？」

そう言って笑う一夏に鋭い視線を向ける箒、無論たじろぐ一夏。その二人の様子に、今度は翔が苦笑を刻む。

「少し、一夏をお借りしてもよろしいですか？」

「構わん、積もる話もあるだろう、持っていけ」

あれ？ 俺の意思とかそういうのは？ と疑問を抱いている一夏をスルーして二人で話を進めている箒と翔、すぐさま話は纏まったのか、箒は一夏の腕を掴む。

「あ、あれ？ 俺だけ？ 翔は？」

「俺は後でも構わん、行つて来い、一夏」

翔が付いてこない事にも疑問を覚えたのか、疑問をぶつけるが、さりと返され、箒に意味深な笑みを向けて頑張って来い、などと言葉を送るが、一夏の頭には無論クエスチョンマーク、箒は少し頬を赤くしながら二人は教室の外へと消えていく。

二人がいなくなり、席の辺りが静かになった翔は、おもむろに立ち上がり、教壇を登り、自分を遠巻きに見ている女子生徒全員に声をかける。

「皆気になるのはわかるが、見られるだけではこちらとしても少々気になる、そこで、何か聞きたい事があれば質問してくれ、俺はそれに答えよう」

どうだ？と教卓に手をつき、あたりを見渡す翔に、女子生徒一同は呆けたように翔を見返していたが、その言葉の意味を理解すると、爆発。

津波のように教卓の前へと押し寄せる女子生徒に物怖じせず、掌を前に押し出し、勢いを止める。

「一気に聞かれても答えようがない、まずは席に着け、それから一人一人の疑問に答えよう」

落ち着いてそう言う翔に女子生徒達はすぐさま席に着く、その様子に翔は苦笑を一つ落とすと、一人一人の質問に簡潔且つ丁寧に答えていく。

「名前は？」

「柏木翔だ、聞かれそうな事を言っておこう、愛称は好きに呼ぶと良い」

「趣味は？」

「言ったと思うが読書だ、雑食性でな、雑誌から小説まで何でも読む」

「身長は？」

「168cmだ」

その答えに、170cmはあると思ったけど……と言つ疑問の声があつたが、時間は限られているのでスルーした。

「付き合っている人はいますか？」

「今はいない」

「タイプの女性は？」

「剣術ばかりで考えた事がなかったな、これからはそういう事も見ていこう」

と、そこまで終わった所でベルの音が聞こえる。同時に、第一夏が連れ立って扉を開ける様子も横目で確認する。
ふむ、と一つ頷いて翔は辺りを見渡す。

「えーと、何、やってるんだ？」

一夏の素直な疑問に、もう一度ふむ、と頷く。

「うむ、ドキドキ、得体の知れない男子生徒に質問してみよう、先生は柏木先生です、のコーナだ」

全く表情を変えず、真面目な声音で出てきた台詞はおよそ真面目ではなかった。

「相変わらず真面目な顔して冗談言うその癖直さないか？」

「ふむ、善処しよう」

その二人のやり取りに、今のは冗談だったと言う事実には安堵の息をつく生徒の声が一夏の耳には新鮮だったが、自分も最初は真顔で冗談のような嘘を言われて3日は信じた事を思い出す。3日後翔にあれば嘘だったと言われ荒唐無稽な嘘を信じ込まされた自分にちよっぴり自己嫌悪したのも良い思い出である。

「おい、さつさと席に……何だ？座ってるじゃないか、何か……つてまあいい、声を張る必要がないだけ楽になったと思っておくか」

一夏が幼き頃の思い出に浸っている間に一夏の姉、つまり担任の織斑千冬が教室の扉付近に立って少し驚いた表情になっていた。そして今現在席に着いていないのは一夏と翔の二人のみ、筈はいつの間にか席に着いていた、中々に要領の良い行動だ。

「さつさと席に着け、織斑、柏木」

担任の教師が入ってきてても未だに席に着かない男子学生二人に当然の如く出席簿を振り下ろす。

ゴンッ、コッソ。

明らかに鼻屑を感じる音に一夏は堪らず声を上げる。

「いつてえ〜！ 明らかに今の鼻肩じゃないんですか！？」

「馬鹿者、私が私の師匠に向かって強く出られると思っっているのか？」

その発言に女子生徒達から悲鳴が上がりそんな気配を察知した千冬と翔は生徒達を眼光で黙らせる。

「構わん、ここにいる間は俺も皆と同様、ISの事を学ぶ者だ、同じように扱ってくれ、いいな？ 千冬……ではなく、織斑教諭」

織斑教諭、と言った所で、千冬の瞳は少し細められたが、一瞬の事だったので翔以外は気が付かなかった、仮に気が付いたとしても、翔ではその瞳がどのような感情の色なのかは見分けられなかったである事は事実である。

「では、そのように……さて、全員席に着いた所で授業を始める」

「あ、あの、師匠って……一体？」

授業開始を千冬が宣言した所で、副担任である、山田先生、本名山田真耶から疑問の声が上がる。それに対して千冬は簡潔に答える。

「柏木……いや、師匠は私の剣の師だ」

重大事実をさらりと言ったのけた千冬の声は、ほんの少し苛立ちが混ざっていたが、誰もそれに気づく事はなく、驚愕した声を上げていた。私達と同年だね？ 年下の男の子が？ などと言った会話が小声でされている。最もすべて聞こえているが……。

そんな声にも身動き一つしない翔の様子を視界に入れた千冬は、低く見られているような声色で話されているのに何故何も言わないのか？ と苛立ちを感じたが、師が何も言わないならば弟子の自分が

何か言うわけには……

「年齢など関係ない、師匠が私より強かったただけだ、お前たち小娘に何がわか……」「そこまでだ、千冬」……わかりました」

全然我慢出来ていなかった、千冬を止めた翔を見やるとその瞳は悠然とこう語っていた。

『言いたい奴には言わせておけ』

翔のそんな様子を見た千冬は何となく安堵と嬉しさを感じ、場を仕切りなおそうと咳払いを一つ。

「では、改めて、授業を始める、山田先生」

「は、はい……」

今までのやり取りに呆けていた真耶は急にかけられた声に体を震わせながらも教壇に立つ、その様子を既に何時ものクールな表情に戻った千冬は見やり、視線を翔、一夏へと移す。

（一夏ももう少し師匠の様に受け流す事を覚えてくれればいいんだが……）

自分が声を上げなければ席を立ててまで声を荒げていたであろう弟の事を思い、すぐに自分もか、と思い直し苦笑を浮かべ、すぐに顔を引き締める。

教科書を読む真耶の声が教室を包み、周りの生徒は静かにノートを取りつつ、ちらちらと視線を二人の男子生徒へと送る者もいる。そんな教室の中、織斑一夏は額に冷や汗を浮かべながら必死に表情を取り繕っていた。

（ぜ、全然わかんねえ…）

そう、何を隠そう、この織斑一夏、今まで全てのISに関する授業の内容を全く理解していなかったのだ。それと言うのも一夏がIS学園に入学するにあたって必読と大きく書かれたISの基礎知識に関する資料を電話帳か何かだと思い捨ててしまったのだ。無論その資料は翔の元にも届き、翔はそれに目を通していたので授業の内容を概ね把握できている。

（はあ、仕方ない、聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥、だ）

「あ、あの……「はい、山田先生」……え？」

何もわかりませんと言えるような雰囲気ではないが、覚悟を決めて先生に聞こうと声を上げようとしたとき、一夏の声を遮る様に低めのよく通る男子生徒の声上がる。それと共に一夏の後ろの席の椅子が鳴る音と共にもう一人の男子生徒、柏木翔が何時もの感情を悟りにくいクールな表情で立っていた。

「はい？何ですか？柏木君」

「わからない所があります」

「何処ですか？遠慮せず聞いてください」

生徒から質問されるのが嬉しいのか、ほにやっとした笑顔と共に翔に聞く。

「全てわかりません」

恥ずかしげもなくその一言をノータイムで発する翔を目の前に真耶は笑顔のまましばし固まり……

「え？え？ぜ、全部ですか？」

「はい、全てです」

「お、おい……」

真耶とのやり取りの間に一夏が声を挟もうとするが、真耶が慌てて、他の女子生徒に分からないかどうかを聞いている内に片目を瞑り、笑みを浮かべた口元に人差し指を立て、喋るというジェスチャーを一夏に送る。

その仕草は一夏だけでなく千冬にも向けられたもので、翔の仕草をしつかりと見ていた千冬は翔へと歩み寄る。

「必読と書いてあった資料はどうした？」

「剣術の鍛錬の時、誤って細切れにしまいました」

「そうか……仕方ない、後で送っておくから必ず呼んでおくように」
「承知」

そう言われ、着席の瞬間、一夏の机に丸めた紙を投げ入れる。

何食わぬ顔をして席に着いた翔に疑問を抱きながらも一夏は渡された紙を広げる。

『帰ったら俺の資料を貸してやる、今度はちゃんと読んでおくようにな』

簡潔にそれだけが書かれていた。

（何これ？ありがてえけど、格好よすぎだろ）

一夏の頭にフツ、と静かに笑みを浮かべる翔の顔が思い浮かび、消える。

不言実行、行動で語るのが男ってもの、この男の道を間近で見せられてきた一夏はそれに憧れ、同じようにこなそうとするが、中々こ

の男のように後を濁さず事を起こす事が出来ない、だからこそ憧れるのだ。

この後この授業は一夏がどう考えても同じ年に見えない少年への憧れを強くしながら進む事となった。

一斬 漢は行動で語るものだ（後書き）

この小説は情熱が続くかねー？
続くと嬉しいなー

二斬 漢は時に泥も被るものだ

柏木翔、鍛錬中の不注意で学園からの資料を細切れにしたと白状した時間の授業が終わった休み時間、一夏は自らの席の椅子に後ろ向きに座り、翔と顔突き合わせていた。

「わりい、正直助かった、あの事知られたら千冬姉に何回殴られたかわかんねえからなあ」

想像するだけで恐ろしい、と顔色を青くさせ、ブルブルと震えている一夏、その様子に少し済まなそうな表情の翔。

「そうか、しかし、スマンな、千冬には恐らくバレているぞ、話を合わせるように合図したからな」

「い！？ 教室出る時千冬姉に睨まれたのはそれでか……」

ああ、憂鬱だ、と嘆く一夏に苦笑を一つ。

「まあ、いいさ、恥かく所を代わりになってくれたんだ、それだけで感謝。まあ、罪悪感もあるけどな」

「気にするな。俺に友を救うチャンスを与えた、とでも思っておけ」

そんな図々しい事思えるか、と今度は一夏が苦笑する。と、そこで一夏でも翔でもない声が間に入る。

「ちょっとあなた」

その高圧的な女性の声に一夏と翔は視線をそちらへ向ける、そこにいたのはウェーブの掛かった金色の髪と意志の強そうな瞳が印象的

な女子生徒だった。その女子生徒の雰囲気は正しく現代の女性の雰囲気と同じものを纏っている。

現代の女性、つまり、ISが普及してから今までの女性の事、ISと言うのは女性しか扱う事が出来ない、つまりそれは女性優遇の制度が強まり、男性の肩身が狭くなると言う風潮が蔓延している世界で、男性よりも女性の方が優れていると考えている人間が多くなつた世界と言う事である。

今ではその様な世界の常識が固定化し、女性〃偉いの図式が成り立ってしまっている。その事から、女性が男性を下に見る事が多くなっているのだ。そして今日の前にいる女子生徒は、その世界の中で普通の、つまり世界の常識に則つた様な女性だった。

「えっと、君は？」

怪訝な表情でその女子生徒に問う一夏に金の髪を持つ女子生徒は大げさに驚いてみせる。

「まあ、私を知りませんか？ このイギリス代表候補生……」「セシリア・オルコット、だったな？」……あら、あなたは知っていたようですね？」

「知ってるのか？ 翔」

「自己紹介あつたからな、名前だけは覚えている、代表候補生と言うのは初めて聞いたがな」

よく覚えてたなー、と感心している一夏をよそに、件の女性 セシリア はフルフルと体を震わせている。

「あ、あなた達は私を馬鹿にしていらっしやるの？」

「いや？ 別に」

「初対面で人を馬鹿にするほど落ちぶれてはいないつもりだが……」

純粹に何言ってるんだ？ と言う表情でセシリアの言葉に答える一夏と翔、その二人の様子に我慢が出来なくなつたのか、セシリアは

翔の机に両手を強く叩きつける。

「馬鹿にしています！ このイギリス代表候補生でこの学年の主席たるセシリア・オルコットを！」

「主席、そりやすげえなあ」

「なるほど、優秀なのだな、主席とは恐れ入った」

二人の純粹に感心したような声に幾分か気分が良くなったのか、ふふん、と金色の髪を払う仕草をする、彼女自体はかなりの美人であるため、その姿は非常に絵になる。

「で、では、本題ですが、あなたに色々教えてあげてもよろしくてよ？」

そう提案するセシリアに声をかけられた筈の翔は何も答えない。その様子におかしさを感じたのかセシリアはもう一度翔に問いかける。

「ちょっと聞いていますの？」

段々セシリアの声に苛立ちが混じってくる。それから何度も何度も翔に問いかけるがその結果は無視。さすがに我慢できなくなったのか、顔を真っ赤にして翔の肩を掴み自らに向かせる。

「あなたはせっかく私が話しかけているというのに何故その様な態度なのですか!？」

「誰の事を言っている？」

「ですからあなた……「あなたとは誰だ?」……え?」

セシリアの台詞に声を被せた翔の顔は何時も通り感情を悟らせないクールな表情だ。その表情を見たセシリアは思わず気圧される。

「誰だと聞いている、名前を呼べ、でないと誰か分からん」

「な、ならば名乗りなさい」

「自己紹介はしたはずだ何故覚えていない？」

「こ、この私がわざわざあなた達の様な人の名前を覚えてあげると言っているのですよ？ 素直に名乗ればよろしいんじゃない？」

セシリアの発言に思わず一夏が立ち上がろうとしたが、翔の手に遮られる。翔の表情は相変わらずクールな表情だが、少しばかりの同情のような色が見て取れた。

「自分は優秀だと自信を持つのは構わない、俺もそれなりの自信を自分に持っている、だが、人を見下すのは感心しない、いつか足元をすくわれるぞ」

諭すような口調で言われたセシリアは、気圧されたように、もういいですわ！と翔の肩を離し、自らの席へ戻っていった。

「さて、授業を始める、の前に、再来週のクラス対抗戦に出る代表者を決める」

自薦他薦は問わないぞ、と言う千冬の言葉に、女子生徒の手が挙がる。

「はい、織斑君がいいと思います！」

「お、俺え！？」

「はい、私は柏木君がいいです！」

「ふむ…」

一夏と翔の名前が拳がっていく中で、一夏は予想外の出来事に慌て、翔は何時も通りの反応。どうやら一夏の男は黙って不言実行、いかなる時も冷静にそして完璧に対処する男像へは程遠いようだ。

そうこうしている内に翔と一夏の名前はどんどん拳がり、一夏はさらに慌てる。

「他に候補者がいなければこの二人のどちらかになるが？ちなみに他薦されたものに拒否権はない、選ばれた以上は覚悟しろ」

我慢できずに異議を申し立てようとした一夏は異議を申し立てる前に千冬に封殺され、うぐつ、と言葉に詰まる。対照的に翔は予想できた事だ、とでも言うように目を瞑り、腕を組み、落ち着いている。変わらず一夏と翔の名前が拳がる中で、ある女子生徒から大きな声が上がる。

「納得できませんわ！」

ある女子生徒　セシリアは興奮したのか、椅子を鳴らして勢い良く立ち上がる。

「その様な選出は認められませんわ！　この私セシリア・オルコツトを差し置いて男がクラス代表などいい恥さらしですわ！」

自分の発言に段々勢いづいてきたのか、セシリアの音量は落ちない。そのセシリアの弁に、一夏は少しうんざりしたような表情、だが少し安堵も感じているような表情をしており、翔は先程と然程変化は見られない。

「実力から言えば私がクラス代表になるのは必然です！何せ私は入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

そのセシリアの発言に、内心、自分以外にクラス代表をしたいと名乗り挙げている人物がいてよかった、やる気のない人間よりもやる気のある人間を起用した方がいいと思う、などと安堵していた一夏が疑問の声を上げる。

「入試ってあれか？　ISを動かして闘うやつ」

一夏の疑問にセシリアがノータイムで回答を寄越す。

「それ以外入試などありませんわ」

セシリアの回答にますます疑問を深め首を傾げながらも、セシリアの発言のおかしな点について指摘する。

「俺も倒したぞ、教官」

一夏のその台詞に数秒言葉を失うセシリアだが、その言葉を理解すると共に表情が驚愕の色に変わっていく。信じられない発言に一夏の席へつかつかと歩み寄り、わざわざ一夏を指差してから発言する。

「あ、あなたも教官を倒したって言うの！？　わ、私一人だと…」

まさに驚愕、と言った表情をしているセシリアに一夏の後ろに座っている人物から声が掛かる。

「女子では、と言う事ではないのか？」

その人物、柏木翔が発した犬も食わぬような落ちに辺りは沈黙に包まれ、セシリアは舞い上がっていた自分を思い返したのか白い肌が

段々と赤く染まっていく。

羞恥を誤魔化す為にかは分らないが、翔の席につかつかと歩み寄り、苦し紛れに翔へ問いかける。

「そ、そういうあなたはどうですの!？」

「俺如きが勝ったんだから翔ならさくつと……」「俺は負けたぞ?」
「……なん……だと?」

その事実が信じられないと言うように、今度は一夏の顔が驚愕の色を浮かべ、それに反比例するようにセシリアの表情は喜色を帯びていく。

「おーっほっほっほ、やはり大きな事を言ってもあなたはその程度と言う事ですわね!」

翔が負けた事が余程衝撃的だったのかセシリアの発言が耳に入っていない一夏は反応できなかったが、千冬はセシリアの発言をしつかり耳に入れ、眉尻を不機嫌そうにピクリと動かし、口を開こうとした瞬間、笑われている当人から声が上がっていた。

「他人を見下すな、足元をすくわれるぞ、そう言った筈だが?」

有無を言わさぬ声色の中に少し諦めの入った声色、その声にセシリアも思わず高笑いを止める。

「な、何ですか? 偉そうに言った癖に負けた者の言葉などどうと言う事ありませんわ」

どもりつつも言い切ったセシリアに翔はため息を一つ。

「ならば仕方ない、俺がお前の足元をすくう最初の人間になろう、
織斑教諭、クラス代表の決定権を賭けて決闘、と言う事で構いませ
んか？」

千冬に確認を取る翔に、わかった、と一つ頷く千冬。

「いいですね、後で泣いても知らなくてよ？」

「ふむ、一度挫折をしなければ成長せぬか、溢れる才能、止めてお
くには惜しい、憎まれ役は俺がなろう」

戦意満々の二人に千冬からの出席簿が落ちる。

「少し落ち着け、後オルコット、席に着け」

ガッン！！ ゴチン

やはり今度の出席簿アタックの音も大いに鼻屑の見える音がした。
その証拠に、翔は特に顔色を変えず、

「ふむ……」

と頭をさすっているのに対し、セシリアは……

「~~~~~!!」

自らが上流階級の出だと言つのを忘れたかのように頭を押さえ声も
なく床に転がっている。

「明らかに鼻屑だよなあ……小さい頃からだけど……」

そう小さくつぶやく一夏の発言が聞こえたのか、外を見ている筈の

表情は諦めたような表情で、静かに一夏の意見に賛同するようにうつ頷いていた。

「話は纏まった、勝負はクラス代表の決定権を賭けて一週間後の月曜、放課後に第三アリーナで行う、それぞれ用意しておくように」

「承知」

「ッ~~~~~!」

その話し合いの最後は、普通に返事をする翔と、痛みで返事すら出来ずに床でのた打ち回っているセシリアと言う何とも締まらない最後で幕を下ろした。

ちなみに痛みが中々引かず席にすら戻れないセシリアに容赦なく千冬からの出席簿アタックが追い討ちをかけた。

二斬 漢は時に泥も被るものだ（後書き）

今は勢がいいよー、何処まで続くこの勢い！

三斬 漢は黙って前へ進むものだ

セシリアと翔の決闘話が決定した日の放課後、教室にいるのは翔と一夏だけ、会話の内容は必然と言うか、一週間後の月曜に行われる決闘へ話がシフトしていく。

「本当に大丈夫かよ？ あの時セシリアって奴教官に勝ったんだろ？」

「まあ、問題無いんじゃないかと思っている」

一夏の心配をよそに、飄々と心配ないと言ってくる。何時もと変わらない翔の態度に本当に大丈夫かよ、とため息一つ。思えば、翔の事について心配するのは今に始まった事じゃない、大事な所では折れる事のない信念を貫く時、翔は周りに心配させる、そして何事もなかったように終わる。

「もし俺が実力的に下だとしても、今回だけは負けてやるわけにはいかん」

確固とした強い意志を秘めた翔のその言葉に、一夏は安堵を覚える。

「まあ、お前がそう言うなら大丈夫なんだろ」

「当たり前だ、何を心配している、馬鹿者」

一夏の意見に肯定する意見が飛んでくるが、それは翔本人から発せられたわけではない、翔本人の視線は教室のドア付近に居る千冬に向けられている。ドアの縁に背を預け、腕を組みながら発する言葉はある意味翔自身よりも翔の事を信頼している自信が感じとれる強さの声。

「お、織斑先生、速いですよ。ってああ、よかった、織斑君も柏木君もまだ教室に残ってくれてたんですね」

千冬に軽い非難を言いつつ教室に翔と一夏が居ると認識し、教室に入ってきたのは、一年一組の副担任、山田真耶である。その表情は安堵に彩られ、へにや、やら、ほにやと言ったような擬音が似合う表情になっている。見ていて実に微笑ましい限りだが、良かったと言ふ事は何か翔と一夏に用があるのだろうか。

「千冬姉に山田先生……」

「織斑先生、だ」

すかさず千冬からの訂正が入った事に一夏は多少げんなりしながらも、真耶の用事の方が気になるので、気にしない事にする。

「えっとですね、お二人の寮の部屋が決まりました」

真耶の用事の内容に、一夏と翔は顔を見合わせる。どちらも顔に浮かぶのは疑問。

「山田教諭、一週間は自宅から通学すると聞きましたが？」

「事情が事情なので無理やりねじ込んだみたいですよ」

「でも荷物とかあるんで一度家に……」それなら私が手配しておいた「……は？」

「携帯の充電器と着替えがあれば十分だろう、ありがたく思え」

何時もと同じ声の調子でそう言う千冬に、あ、ありがとうございませ……と苦しそうに返すしかない一夏。真耶はその姉弟のやり取りに苦笑を浮かべている。

「俺の荷物も送ってあるのか？」

千冬と同じように何時もの調子で問いかける翔に、千冬は是と答える。その答えに得心がいったと一つ頷く。

「どういう事だ？」

翔が納得している事について純粋な疑問を浮かべる一夏に、千冬はため息を一つ、真耶は仕方ありませんよ、と苦笑、翔は一夏に向き直り頭を使え、と言い簡潔に説明を始める。

「俺たちは今現在世界で二人しかいない男でISを扱える特異なケースだ、そう言う存在は大抵サンプルやモルモットと呼ばれる場合が多い、そんな存在がふらふらと出歩いてみる、どうなると思う？」

翔のその発言に一夏もようやく納得の表情を浮かべ、同時に冷や汗を浮かべる。

「俺達はギリギリの所に居るって事か」

「そう言う事だ、その事実から考えて後々専用のISも与えられるだろうな、具体的には自由にIS学園の外と行き来出来るようになる時期までには、な」

つまりは、世界のあらゆる国からしてみても、男がISを扱えるケースというのは特異で、そのメカニズムを説明すれば男でもISが扱える時代が来るかもしれない。その為に二人が危険な状況に陥らないという保証は無い、専用機の時期や与えられる根拠についてはそれについての防衛手段としての意味合いで与えられるだろうという翔の推察だ。

翔の世界の状況を含めた自分達の立場とそれによって取られるであろう防衛策の推測を披露された三人の反応は三者三様、自分の立場

が思っているより危うい状況に冷や汗を浮かべる者、推察の仕方とその結果に素直に驚く者、これぐらい考えられて当然と言う様の一つ頷く者、誰が誰かは推して量るべし。

「す、すごいですね、柏木君、ホントに15歳ですか？」

生徒の年齢を疑うIS学園女教師、山田真耶。これが普通の反応であるが、いかんせん状況が悪かった、翔の事を昔から知る姉弟に挟まれてはこれが当然というような反応しか返ってこないのは必然だ。

「俺、平和ボケしすぎたかな？」

「何時もお前の頭の中は平和だろう、柏木を見習え」

「見習うも何も、柏木君の推察、教師陣の会議を見てきたんじゃないかと思う位当たってるんですけど……」

頭を捻り悩む一夏、中々難しい要求を出す千冬、それに苦笑する真耶、三人を見ながら思考はセシリアとの対決へと思いを傾ける翔。結局先程の翔による推察は物事を長い目で見た時のもので、とりあえず今考えねばならない事は、セシリアとの対決にどう勝つか、その一つに尽きる。

「ふむ……」

と、意味の無い一言を合図に思考を加速させようとするが、何か思い出したかのような一夏の声にはそれは遮られる。

「あ、そうだ」

「何だ？」

一夏の声に千冬が聞く態勢に入ったのを見て、再度思考へダイブし

ようとするが、一夏の口から飛び出てきた疑問は自らも関係ある話だったので、またしても阻止される。

「聞いてからずっと気になってただけど、翔を倒した教官って誰なんだ？ 未だに信じられないんだけどさ」

「私としては何故柏木君が負けなと思うているのかが謎なんですけど……」

その二人の疑問に、千冬は本当に珍しい事に不機嫌そうな表情で舌打ちまで打つ。不機嫌そうな千冬に気に障るような事を言ったのかと一夏と真耶は冷や汗を浮かべるが、どうやら見当違いだったようで、千冬は行き場の無い怒りを表に出しているだけのような不機嫌さ。

「あんなもの、勝った内に入らん……」

不機嫌そうに、それで居て納得のいかなさそうに呟く千冬に、一夏と真耶は誰が翔の相手をしたのか悟り、互いに翔へ言葉を掛ける。

「仕方ないですよ、織斑先生が相手じゃ……」

「ますます不思議だ、何で勝ってないんだ？」

「「え？」」

同時に口をついた言葉はタイミングが同時でも、内容的には真逆の内容。互いに自らの常識の中で埋まっていない溝があるようだ。それに対して試合内容にますます納得がいかないような表情で溝を埋めるための説明を始める。

「まず私と柏木では地力に差がある、生身では私が柏木に勝つ事は出来ん、ISを使えば勝つ事は可能だが、条件が同じになれば勝つ

事は不可能。ISの動きは基本的には操っている本人の動きだ、イメージが重要な飛行などはどけておくとしても剣の扱いと言う点において特に変わることは無い」

そこまで話して苛立たしげに組んだ腕の指が忙しく動き、眉間にも皺が寄る。試合内容が頭の中でリピートされているのか喋らなくなってしまうた千冬の後を翔が引き継ぐ。

「剣の扱いと言う点において千冬は俺に勝った事が無い。そしてそれは現在まで変わっていない、あの日もどれほど上達したか見るつもりだったんだが……まさかISの武器があんなに脆いとは俺も思わなかった、一撃で剣が折れてそれは千冬が武器を破壊したと言う判定で千冬の勝ちになった」

事の真相を把握した二人の反応は当然の事ながら分かれる、一夏はそう言うからくりか……と納得し、真耶は今までの自分が信じていた常識を覆され、しばし呆然。

実際の話、真耶の反応も仕方ない事ではある、ISは女性しか扱えないとされてきた、その中で千冬はモンド・グロツソの総合優勝者で、実質世界最強の座についていた。それはつまり表向きには千冬が世界最強というのが常識であるわけで、その常識が実は間違いで世界最強の女性は普通に負け続きでしたなんて、もはや理解不能の御伽噺のようなものである。

「この私の師匠が高が15年かそこらしか生きていない小娘に侮られている事実が何よりも私を苛立たせる……よし、柏木、放課後は必ず私の所へ来い、ISを動かす上で何が大事かしっかり教えてやる」

「承知」

寮の部屋が決まったので翔と一夏に伝えにきたただけだったはずが、自らの常識を壊され、最後には師弟の関係がISにおいては逆に変わった所を見せられ終了した。

「なんだかなあ、少し同情します、山田先生」

幼い頃、二人に振り回されてきたであろう一夏の哀れみが籠った声が真耶にとっては慰めにもなり、少し痛かった……。

月曜日、放課後、第三アリーナピット内。

翔、一夏、千冬、真耶の四人は翔の専用機が届くと言う事でピット内に待機していたが、未だその兆しは無い。

その事実には若干の苛立ちを感じている千冬、おろおろと焦っている真耶、自分の事ではないのにまだかな？と定期的に翔に問いかけている一夏、壁に背を預け、目を瞑り腕を組んで静かに待機しつつ、時折話しかけてくる一夏に反応する翔。遠巻きに見てみれば何となくシユールな光景だが、その光景を楽しんでいる暇は無い、時間は迫っているのだ。

一夏のまだかな？の問いかけが26回目到達した時、ピット内の扉が開き、そこに目を向けた時、一番目に入るのが、うさみみ、そうUSAMIMIである。その後、造形の整っているであろう顔や大きく突き出た胸などが目に入り、そこでようやく立っているのが女性だと分かる。

その姿を目にした時千冬は思わず、遅い、と叫びそうになるが、そのUSAMIMIはそれよりも早く翔の下へ駆け寄る。

「しょーくん！あなたの愛しの束さんがお届けものだよ」

そう言いながら翔に抱きつく女性。

「東、落ち着け、お前が届け物ではなくお前の持っているISが俺への届け物だろう」

冷静にそう言いながらぐいと身体を押し付けてくる束を押し返す。その翔の行動にぶうぶう、と声を上げる束だが、突然首根っこを掴まれ後ろに引っ張られる。

「およ？」

「およじゃない、遅いぞ、束」

「やあ　ちーちゃん、久しぶりだね」

相変わらずの友人に頭が痛くなってきたのか、片手で頭を押さえる千冬。一夏は突然現れた消息不明の筈だった篤の姉が現れた事ではし呆然。

「いつくんも久しぶりだねえ」

「え？あ、はい、お久しぶりです、束さん」

中々ショッキングな光景につい普通に再開の挨拶をしてしまう一夏、そうじゃないだろ、と自分で突っ込みながら頭を抱えてしまう。真耶は突然現れた見慣れない人物に警告を送りたいが、翔や織斑姉弟の知り合いっぽいので声をかけられず、おろおろとしている。

「束、山田先生が困っている、一応関係者以外は立ち入り禁止と言う事になってるから自己紹介をしろ」

翔のたしなめるような声に、束の顔は不満げな形を作る。

「えー、知らない人はいいいよ、しよーくんやちーちゃん達が分かっ

てればそれで……「束」……わかったよう、するよう自己紹介、篠ノ之束だよ……これでいい？　しょーくん」

まあ、名前だけで十分だろう、と翔は苦笑し、千冬はますます頭が痛くなったのか米神を指で揉んでいる。真耶はその名前に何処か引っ掛かる所があったのか考え込んでいる。

千冬が米神を揉んでいる隙に千冬の手から脱走した束は、組んでいた腕を解いている翔の右腕にしがみつく。その光景を見た千冬は口元と眉尻が一瞬だけだがひくりと動く。

「束、何をしている……」

「おややあーん？　ちーちゃんてば自分がこーんな事出来ないから束さんにジェラシー感じちゃってるのかなあ？」

「べ、別に……つく、それはいい、さつさと柏木から離れてISを

……」

「柏木！？　ちーちゃんどうしちゃったの？　何か余所余所しくなっていないかい？」

ニヤニヤと言う音が似合いそうな笑顔を浮かべる束にますます眉間に皺を寄せる千冬。一食触発と言った雰囲気だが、その空気を断ち切ったのは誰が予想したであろう、先程まで頭を抱えていた一夏だった。

「そ、それより！　翔のISは！？　もう時間迫ってるぞ！」

「む、そうだな、束、俺のISは何処だ？」

一夏と翔の声に束はニヤリと笑うと自らの胸の谷間から、黒く小さなネクタイピンのようなアクセサリーを取り出す。ちなみにどうでも良い事だが、あまりに刺激的な光景に一夏は耳まで赤くして目線を無理やりに明後日の方向へ向けていた。

翔は動揺する事無く、束からその黒いピンを受け取る。

「で？ 束、きちんと柏木が使うに値する仕様に仕上げてきたんだろっな？」

千冬が束に確認すると同時に考え込んでいた真耶から「篠ノ之束って、あの篠ノ之博士！？」などと言う実に今更な台詞が上がっていたがそんなものは全く聞こえていない様に束はISの説明を始める。

「勿論だよ ちーちゃん ISの名前は黒衣 零式、世代的には第三世代だけど、使い手によつては束さんが今筈ちゃんの為に作ってる第四世代ISをも凌ぐ性能を持つてるよ これと言った特殊兵装はないけど、しょーくんが使つならもう特殊兵装と言つてもいいほどの武器を一つ付けてるよ」

束が言つた衝撃的事実、第四世代ISと言う単語を特に気にする必要もないとスルーしつつ、ふむ、と千冬と翔は一つ頷く、この辺りは師弟である事を感じさせるタイミングの良さ、そして考えている事もほぼ同じ、鬼才天才の篠ノ之束がここまで言う限り、何の心配もないだろう、と言うのが師弟の出した答えだった。

「じゃー、目的の物も渡したし、束さんはそろそろ行くよ しょーちゃんなら初期設定のISでも十分だろうからね 闘つてる内に初期化と最適化は終わると思うよ」

「じゃーねー、とピットを出て行こうとする束に翔は声をかける。

「束、感謝を、それと、たまには連絡して来い、心配するからな」
「じゃあ、また今度、専用の回線で連絡取れる端末を送るよー」

首だけ翔に振り返り、笑顔で、今度こそじゃーねー、と言ってピットの扉を潜る束。もうしばらく会う事もないのだろうが、あの天才の事だ、特に心配はする必要もあるまい、と渡された自らの剣へと視線を送る。

「いけるか？ 柏木」

そう問いかけてくる千冬に対して翔の答えは一つしかない。

「愚問、進むべき道があるのなら進むのみ」

そう答えた翔の身体が、光に包まれ、治まったとき、まず見えるのは装甲の黒、次いで目を引くのがスラスターの多さ、初期設定の機体にしては明らかに数が多い、そして、ISのデザインとしては珍しく、シャープさがなく、どちらかと言えばごつごつとした印象を与える。

ふむ、と黒い装甲に包まれた掌を握り、開く。

「特に問題はないか？」

「む、特に問題はありません」

初期化と最適化が正常に進んでいる事を目の前に浮かぶモニターで確認し、千冬にその旨を伝え、千冬は一つ頷く。ISを正常に起動させた翔に一夏と真耶も近づいていく。

「へえ、それが翔のISかあ、何か、厳ついな」

ごつごつとしていて厳ついデザインのISが翔に似合いすぎていると判断した一夏は思わず苦笑。真耶も同じような表情を浮かべている。

「よし、時間だろう、問題ないなら行って来い。大事なのはイメージだ忘れるな」

「承知」

アリーナへと続くピットの先へと向き、移動を始める。

「一度折られなければ見えない道もある、今一度間違えた道を正し進ませる為にも、柏木翔、推して参る！」

何時もクールなその瞳には普段からは考えられないほどの情熱が宿っている。ピット内から飛び出した翔を見送る三人はモニター室に向かいながら、燃えている翔など久しぶりに珍しいものを見たと言っていた。主に一夏が……無論騒ぎ過ぎて千冬に殴られたの言うまでもない。

三斬 漢は黙って前へ進むものだ（後書き）

うーむ、もう束さん登場させちゃったけど…問題ないかねえ？
まあ、いいかあ、細かい事は後で考えよう！元々見切り発進だしね
！

四斬 漢は他人を受け止める器がでかいもんだ

第三アリーナ、上空、ピットから出てきた黒を纏った翔と、青を纏ったセシリアが睨み合って……いや、睨んでいるのはセシリアで、翔はそれを受け流しているに過ぎない、いくらプレッシャーを掛けようと柳に風、暖簾に腕倒しといったような手応えのなさを感じつつもそれに飲まれぬようセシリアは虚勢を張る。

「どうやら、逃げずに出て来たようですね」

「逃げる理由がない」

過剰でもなく過少でもない自信を纏って言い切る翔に、セシリアは奥歯をかみ締める。平常心でセシリアの前に立つ翔は今までセシリアが見てきたどの男ともタイプが違う、セシリアと同世代の男子とは一線を画すその雰囲気、セシリアは何故か苛立つ。

「あなたを見ていると何故か苛立ちますの」

「知らんな……今はただ、全力でぶつかり合うのみ」

ぶつかり合わなければ分からない事もある、それを翔は知っていた、だからこそセシリアの前に立つ。そして今、分かり合うため、自らの意地を貫くための戦いの火蓋が切られた。

「さあ、踊りなさい！ このセシリア・オルコットとブルー・ティーズの奏でる円舞曲で！」

セシリアが構えエネルギーの塊を打ち出した物は、ビーム兵器や、エネルギー兵器とも呼ばれるレーザーライフルに分類され、名は、スターライトmk？と呼ばれている。スターライトmk？から打ち

出されたエネルギーの弾を翔は余裕を持って回避、セシリアも当てようとは思っていなかったらしく、この弾の意味合いとしては、セシリアのIS、ブルー・ティアーズの特殊兵装、射撃型自律機動兵器、ブルー・ティアーズ（BT）を展開するための牽制弾と言った所か。

当てるつもりのない牽制弾とはいえ、狙っていないわけではない、言うなれば、少し狙いの甘い弾と言う感覚だ、翔としても避けなければほぼ確実に当たる弾を避けないわけにはいかず、真右へ回避するが、直線的な回避方向へ牽制弾により稼いだ時間で展開したBTからの射撃がそれを追いかける。

セシリアの傍に待機しているBTから撃ち出される弾を直線軌道で避ける翔に対し、翔の前方から真つ直ぐ向かってくるビーム、それを曲線を描く下降で避けようとするが、失敗、絶対防御は発動しなかったため、量は少ないがシールドエネルギーが削られる。目の前に展開されている小さなサブモニターを横目で確認し、その事実を認識している筈だが、翔の顔に焦りはない。ハイパーセンサーで強化された翔の動体視力には雨の様に降り注ぐエネルギーの弾がはつきりと見えていた。

（ふむ……）

第三アリーナの戦闘映像をモニター室でセシリアと翔の戦闘を見ている人物が四人、内二人は戦闘データの収集・解析、後の二人はただの観戦と言ってもいい、まあ、この戦闘で何か見本になるような事があれば、それを学び取ってもらうために同席を許可した、と言う思惑もデータ収集・解析している二人の思考の中にはあっただろう。

ちなみにここに居るメンバーは、千冬、真耶、一夏、それに一夏が連れて来た筈の四人で、真耶はデータを収集するため小さなモニタ

ーの取り付けられたデスクに着き、収集しつつモニターに視線を固定している。千冬は収集されたデータを大きなモニターで表示させ、それを頭の中で解析する事に勤めている。一夏は先程から武器も出さず攻撃を避けてばかりの翔に焦り、慌てつつも大きい方のモニターに視線は釘付け。箒は腕を組み、少し怪訝な表情でモニターを見ている。

「おいおい、翔の奴どうしちゃったんだよ……良い様にやられっぱなしじゃねえか……」

眉間に皺を寄せ、呻く様に声を出す一夏。避けるばかりで一向に反撃しない所か武器すらも出さない翔が一夏には理解できなかった。

「師匠は一体何をやっているのだ……」

小さい頃に剣を教えてもらっていた箒としては、今の翔の姿はどうも逃げ腰のように見えるようで、不機嫌そうに眉間に皺が寄っている。

が、その中にも違う意見の者がいるようで、一夏と箒の見解とまた違う者、千冬と真耶はこの状況を不利とは捉えていなかったようで、真耶は感心したように声をあげ、千冬は何時ものクールな表情に見えるが、よくよく見てみれば、比較的穏やかな雰囲気を纏っていた。

「凄いですね、柏木君、判断力、分析力、それにISの扱いも、どれを取っても15歳とは思えませんよ」

明らかに不利な様に見える翔の方へ賞賛の声を上げる真耶に、一夏と箒から、どういう事だ、と疑問が投げかけられるが、それについては千冬が口を開く。

「柏木が攻撃に転じず、回避に専念しているのは機体の特徴を把握するのにそちらの方が効率的だからだろう、攻撃という動作を排除する事によって機体の加速性、旋回性、制動性などの機体の軌道に関する性能は少しでも掴みやすくなる筈だ」

そう説明する千冬だが、視線はモニターに映るセシリアと翔の戦いから外れていない、千冬の考えでは、翔は既に機体の特徴を掴んでいると考えている。その証拠としては実に単純、先程からセシリアの射撃が殆ど当たっていないという事実からその答えを導き出しただけだ。

「攻撃するにしても、接近、後退、回避してからの接近などの行動がある、この行動を最も効率よくこなす為に絶対に必要な事、それが自らのISの軌道性能の把握だ、どのような軌道が出来るのか、どのような軌道が苦手なのか、それを把握するしないによって攻撃チャンスの幅がかなり違う」

参考に良く見ておけ、締めくり、一夏と箒は感心したような声を上げる。が、千冬としては機体の機動性云々よりもISの使い手として、最初に使うISでまず初めに機体の機動性を把握するという事から始めた翔の判断力を見習ってほしいと言うのが本音だ。初めにそうする事によって、自分の機体を把握する上で、謂わばおまけの様な物も見えてくる。それは、相手の癖や行動、攻撃方法、回避方法、など相手のデータを機体を把握しながら同時に収集出来る側面がある。戦闘に関して相手の事を知るといのは大きなアドバンテージでもあるのだ。

無論、毎回毎回そんな事が出来るかといえは無理だろう、相手が多数いる時はそんな事をしている暇はないし、味方が多数いる時は分析する前に終わっているだろう。だが、この様に誰にも邪魔される可能性がなく、1対1という状況では翔の判断は最善といえる。相

手の手札のある程度を看破し、尚且つ自分の手札を隠す、理想的とすら言える運びなのは間違いない。
画面上で繰り広げられる戦いを分析したその結果は、千冬の翔への敬愛度が上がった結果に終わった。

「全く、いつまで逃げているつもりですか？ 逃げていては何も変わらなくてよ？」

小馬鹿にしたような声音と共にセシリアのBTからビームが放たれ、スターライトmk？が逃げ場を潰すように翔の回避軌道上へ向けられる。放たれたエネルギーの弾を直角に上昇する事で回避。

「なら、お言葉に甘えて攻撃へと転じさせてもらおう」

その一言と共に武器を検索、1件該当、近接格闘用ブレード、その表示を見た瞬間、翔の両手は左の腰の辺りへ移動する。丁度刀を引き抜くような形で右手を引き抜くと、日本刀に良く似た形のブレードが握られていた。

その武器を見た瞬間セシリアは笑いと共に声を掛ける。

「中距離射撃型の私に近距離格闘武器で挑もうなんて、お笑い種ですわ」

せせら笑うセシリアに翔は、ブレードを正眼に構え答える。

「教えてやろう」

「何を教えて下さるのかしら！」

ブレードを静かに構えている翔へ向かって、スターライトmk？が

火を噴く（火じゃないけどね）、放たれたエネルギーが翔に到達する寸前、突如として掻き消える。何が起こったのか理解しかねるセシリアは続けてBTによる射撃を行うも、やはり翔に到達する前に掻き消えるようにして霧散している。

BTから放たれた最後のビームが掻き消えた時、翔の持っているブレードが横へ振り抜かれている形になっている状態を見てセシリアは翔が一体何をやっていたのかを理解して額に汗を浮かべる。

「あ、あなた、ビームを……」

焦っているセシリアに静かに告げる、何を教えたかったのか。

「教えてやるといった筈だ、俺の剣に断てぬ物など、ない」

この試合を見ている全員が信じられないものを目にした瞬間だった。信じられないものだが、翔がやった事は実に単純、だが、まず普通は誰にも出来ない事、だからこそ信じられないものなのだ、翔はただ単純にビームを切った、もっと正確に言うならば、あまりの剣速にビームが霧散し掻き消えたといった方が正確だろう。

「さて、教えたい事も教えた所で、いかせてもらっ
「くっ……」

信じられないものを目にしたおかげで少し焦り気味のセシリアだが、そう易々と接近を許すわけにはいかない、定石通りにスターライトmk?で牽制、その後に回避方向をBTによる射撃で制限し、その場に止める。実際セシリアの策は基本的な事だが、実に有効な策の内の一つである事は事実。それを言うだけならまだしもするのは思っているより遥かに難しい、それを正確にこなせるセシリアは確かに優秀なのである。

それに対し、翔はブレード一本でビームをかき消し、被弾はないものの、その場に止められる。描いた図とは違うが、奇しくも結果はセシリアの思う通りになっていた。

（ふむ、流石に距離の問題は如何ともしがたいな、接近しなければ埒が明かんか……）

千冬が言っていたように飛行し、空中で移動するにはイメージが大事で、自分に一番あったイメージの仕方がIS操作の上で一番効率の良い方法だと聞いていた。そこで何時もの様に相手に踏み込む事をイメージする。

瞬間、自らの身体を置いてきたような感覚と共に、周りの景色が縮み、知覚した瞬間、セシリアの背後へと抜けていた。

「なっ！？」

「っ！？」

スターライトmk?の射撃体勢に入っていたセシリアに向かって直進してくる翔が見え、うつすらと笑みを浮かべていたセシリアだったが、気が付いた時には自らの背後に抜けている翔を認識した瞬間、驚きを隠せないように声がでていた。

それはセシリアだけではなく、セシリアに驚きを与えた原因も同じような声を上げていた。

が、翔はセシリアの背後に抜けたと思った瞬間に機体を反転、もう一度同じ要領でセシリアの背後に迫り。懷に飛び込んだ瞬間、ブレードを一閃。バリアを抜ける事はなかったが、シールドエネルギーを削る事には成功。

それと共に、翔は完璧にこのISの特性を把握した。

（直線軌道が得意で曲線軌道が極端に苦手なISだと思っていたが

……なるほど、こういう事か」
「ククッ」

それを理解した途端、自分の勘違いと、このISの非常識な仕様に思わず笑い声を漏らしてしまう。が、すぐさま表情を元に戻し、このISの仕様を確認する。

（このISの特性、それは……）

直線軌道が得意で曲線軌道が極端に苦手なIS、ではなく、線の速さを極限まで突き詰め、曲線的な軌道をほぼ捨てたIS。これが正しい表現で、実際扱ってみると、前者と後者が全く違う事が良く分かる。直線的な移動においては総てを置いて行く速さを手に入れたISの回避軌道、それは、攻撃の射線軸上から直線的に回避する事の連続という行動になる。無論、進んでいた方向から唐突に向きを変える事は、普通のISの速度なら誰もが実行可能であろう、が、普通のISでは手に出来ない速さを自覚した零式の軌道では、いくらISを使っていると言っても、常人では使いこなすのは至難の業だろう。故に、この零式は……

（俺の専用機とは……よく言ったものだ）

と言っわけなのである。

尋常ではない速さでBTの攻撃を避けるも、油断なくスターライトmk?を構えるセシリアに接近の隙は少ない、それに、零式には速さはあるが、決め手に掛ける決定的な事があった。

（こちらの攻撃が軽すぎる）

そう、速さと突進力を自覚したのは良いが、それに対してブレード

が軽すぎるのか、取れる戦法としては、BTとスターライトmk？の攻撃を切り払い、回避し、隙を突いて急速接近し攻撃その後BTからの攻撃を回避するため急速離脱、と言うヒット&アウェイの戦法ぐらいしかないのが事実。その他に取れる作戦としては、どうかしてBTを破壊して、セシリアに接近しブレードによる手数でシールドエネルギーを削りきる戦法ぐらいだが、その為にはBTの破壊が大前提。

（BTを破壊した所であちらがジョーカーを隠し持っていると考えるのが妥当だが…この際四の五の言っていられんか）

普通ならば対処がしにくい部分を狙って放たれたBTのビームを回避、その後、自分が持っているブレードを振りかぶり……。

「ぜえあー！」

「な！？ ブレードを投げるなんて！？ 何を考えていますの！？」

とは言いつつも、かなりのスピードで迫ってくるブレード、奇抜な行動に一瞬反応が遅れたセシリアは避けるには遅すぎると判断し、スターライトmk？での迎撃へシフトする。2発3発と撃ち、ブレードが弾かれた時には既にBTは翔の手によって、折られ、貫かれ、蹴り碎かれ、突き壊されていて、それをした張本人はセシリアによって上空に弾かれたブレードを掴みセシリアへと急降下する態勢に入っていた。

その態勢に入っている翔を見た瞬間、セシリアの口元は笑みの形を刻む。

「かかりましたわ……」

上空から急降下してくる翔へ、セシリアのブルー・ティアーズの腰

パーツの奥から2機のミサイルのようなものが発射される。

「おあいにくさまでしたわね、ブルー・ティアーズは6機ありましてよ！」

「言った筈だ、俺の剣に断てぬ物などない、とな」

ミサイルに向かって急降下していく、ミサイルに接触する瞬間、ブレードを一閃。

その瞬間、翔の姿は爆発に包まれる。

「翔っ！」

「まさか、師匠が……」

一夏が思わず声を張り上げ、箒は信じられないとばかりに呆然と呟く。

「問題ない、ししょ……ん、んっ、柏木があの程度の策を看破出来てない訳がないだろう」

何やら思わず間違えそうになったのか、咳払いの後に翔が負けたという予測を否定する。が、少し遅かったらしく、それを聞いていた真耶から珍しい事にからかいの声が飛んでくる。

「でも、織斑先生が呼び方を間違えそうになるなんて……信じててもちよっと心配しちゃったんですよね？」

それを聞いた千冬はおもむろに真耶の傍まで行き、自然な流れのまま左手で真耶の頭を鷲掴み、そのまま右の脇に頭を持っていき、右腕と横腹で真耶の米神を締め上げる。気のせいか妙な音までなっ

いる気がする。

「山田先生……私はからかわれるのが嫌いだ」

「つゝゝゝ!!」

千冬は平坦な声でそう告げ、真耶は痛さで声もでないのか、声にならない声を上げながら、千冬の腕をタップする事しか出来ていない。そんな和気藹々とした二人の様子から心配する事はないと判断した筈と一夏は互いに無言で煙の晴れる直前のモニターを見詰める。爆発の煙が去った後に出てきたのは、明らかにさっきまでとはシルエットの違うISと武器を携え、堂々とそこに浮いている翔の姿があった。

「これで終わつたと思いますが……」
(やけに爆発の規模が小さかったような気がしなくもないですわね?)

セシリアが小さな疑問を抱えている内に、どんどんと煙が晴れてくる、そこにはさっきまでとは明らかに違うシルエットのISを纏った翔がいた。

背部からはスラスターが3つ縦に並んだ刀の鞘のような棒が二本突き出し、胸部は黒が覆う部分が明らかに増えている、腕パーツも肘辺りに小型のスラスターが追加されている。だが、何より変わっているのは翔が右手で持っている武器。先程までは日本刀のようなシルエットだったブレードが、刀身は分厚く巨大で長大、刃の背にはスラスターが並んでいて、柄もかなり長くなり、柄尻に手を添えても隙間がかなり開くほどの長さまで伸びている。

翔の目の前には初期化と最適化が終了したという報告と武器の名前が載せられたモニターが表示されていた。

そしてその武器の名前は……正宗零式。

一次移行を終えた認識した翔は、視線をセシリアへと向ける。

「あの後に追撃を加えて丁度良い位だと、認識を改めておけ」

それを聞いたセシリアは悔しそうに唇をかみ締める。

「俺のエネルギーはまだ残っている、頼みの綱のジョーカーも見切った、勝負は決まったと思うが？」

降参を促す翔の台詞に何か線に触れるものがあつたのか、眉間に皺を寄せながらスターライトmk?を構える。

「それでも……それでも私は負けるわけにはいきませんわ！」

セシリアの何か頑なな思いを感じ取った翔は目を瞑り、正宗を構えて、目を開く。

「その意気や良し、オルコット、お前の想い俺にぶつけて来い、それを俺は一度折る、それから先は柔軟さを手に入れた新しいお前になり、前へ進め」

正宗零式の柄を両手で握り、右肩に刃の背を乗せて担ぐ。

「お前のその信念、一度断ち切らせてもらう、柏木翔、推して参る！」

何時も剣を振るっている時の踏み込みの速度を意識する、瞬間、景色を置いていった黒衣零式が疾走する。瞬く間にセシリアの正面に接近するが、セシリアのスターライトmk?の銃身が翔を捕らえた

と思った瞬間、セシリアに見えていた翔の姿は忽然と消え去り、セシリアの視界に薄く影が差し込み、セシリアが翔のいる位置を把握し身体ごとスターライトmk?を真上に向けた瞬間には既に翔の正宗零式のスラスターから圧縮されたエネルギーが噴出している所だった。

「チエストオオオオ!!」

景色を置いて行くISの姿に正宗零式から噴出するエネルギーが纏わりつき、一瞬の煌きのようにセシリアへと向かう。その姿を捉えたセシリアは思ってしまう。

「きれい……」

そう思った瞬間、上空を向いているセシリアの腹部に正宗零式がバリアーを易々と着き抜け、搭乗者を死なさないために絶対防御が発動し続け、一気にシールドエネルギーがゼロになり、試合終了のブザーが第三アリーナに鳴り響く。

その音を聞いた翔は正宗を瞬時に量子化、気絶して落下しているセシリアを追い抜き、急制動を掛けながら両手で受け止める。

『試合終了、勝者、柏木翔!』

判定アナウンスを背に、セシリアを抱き上げたまま、保健室へと足を向ける翔。

セシリア・オルコット対柏木翔 勝者 柏木翔。

余談ではあるが、セシリアを抱っこしながら保健室へ向かった翔を見た千冬が、弟とその幼馴染の首根っこを掴んで、ISの使用許可

を取り、第三アリーナに籠ったと言う、内容はその後生還した一夏と箒に聞くと青い顔をして顔を横に振るようになっていたとか。

四斬 漢は他人を受け止める器がでかいもんだ（後書き）

書き上げてみたら戦闘しかしてない事実には驚く俺。

こつ、もう少し和気藹々とした会話まで入れられなかったもんかねえ…

戦闘シーンだらだら書きすぎたかも、次からの反省点に加えておう！

五斬 漢には時に強引さも必要だ

IS学園保健室、今現在ここには二人の人物がいる。最もその内の片方は保健室のベッドの中で穏やかにお休み中だ、もう一人は起きているが、ベッドの横にある椅子に腰掛け本を読んでいる。タイトルは「盆栽と交通規制」もう意味不明である。タイトルのにも意味不明、盆栽と交通規制の関連的にも意味不明、タイトルが盆栽と交通規制なのに表紙の絵がスマイル100%といった感じで眩しい笑顔の黒人のお兄さんなのも意味不明、しかし、一番意味不明なのは内容を想像する事も出来そうにない本を真面目そうな顔で読んでいるこの男、柏木翔が一番意味不明である事は明白だろう。

それに対し、ベッドの中で穏やかに眠っているのは、起きている時ならば、意志の強そうな瞳と金色の髪が特徴的な美少女、セシリア・オルコットで、今は決闘が終わり、気絶したセシリアを保健室のベッドへ寝かせ、起きるまで待機するつもりだった翔が残り、今現在の状況になっているわけだが、その状況にも変化が現れる。

「ん……こ、こは、何処ですの？」

「む、起きたか」

目を覚ました様子のセシリアに、件の本を閉じて声を掛ける。セシリアはベッドに横たわったまま辺りを見回し、ここが保健室だと言う事を認識すると、目に見えて落ち込む。

「私は、負けた、のですね……」

悲しそうに瞳を閉じるセシリアに、翔は声を掛けず、何時ものクールな表情を崩さず、静かに座っている。

「こついつ時は慰めの言葉など、掛けるものではなくて？」

「勝者が敗者に掛ける言葉など、何を言っても同情にしか聞こえないものだ、そしてオルコットはそれを望むような人物ではない、間違っではないと思うが、どうだろうか？」

「確かに間違っではないですけど……ふふっ、おかしな人」

そういつて密やかに笑うセシリアは、色々な感情を押し込めて笑っているように見えた。セシリアが今何を思っているのかと言う事は、翔の知りえる所ではない、が、それを知ろうとする事は出来る。

「さて、オルコット、そのまま良いからこちらから質問がある」

翔からの問いかけがあるという言葉に、何ですの？ とベッドに横になりながらも小首を傾げるセシリア。

「君は何故、そこまで勝ちに拘る？ 何か理由があるのか？」

翔からそう問われた瞬間、セシリアは全身を強張らせる。そして何かを思い出すかのように、日が暮れかける直前の窓へ視線を向ける。そのセシリアの反応に、特に何かアクションを起こすわけでもなくセシリアが何かを話し出すのを待つ姿勢をとり、椅子に座っているだけ。

どれくらい沈黙が流れなのか、正確な時間は分からないがセシリアの口が開く。

「その話は……必ずしなければなりませんの？」

少しの悲しさを秘めたその声音と、全体的に儚げな雰囲気漂わせている今のセシリアは、普通の男子ならば深くは聞かないだろうが、生憎と目の前に座っている男子は普通の男子でも、聞かぬ振りをす

るような優しいな男子でもなかった。

「無論だ、それに、言うだろう？ 敗者は黙って勝者に従え、とな」

そう言いながらにやり、と笑う翔は見方によってはひどい悪党に見えるのであるう、だが、今のセシリアには何故かその言葉に安堵を覚えていた。そして気が付けば嬉しそうに微笑みの表情を浮かべていた。

「見掛け通り性格通り、強引ですね」

そういつて笑うセシリアは、そして、また少し遠い過去を思い出すような表情で、ぼつりぼつりと語りだす。何故セシリアが勝ちに拘り、勝たなければならないと思うのか。

「私には両親がいません、二人とも三年前の越境鉄道の横転事故で亡くなりましたの……」

普段のセシリアからは感じられない衝撃的な話が飛び出しても、翔の態度は変わらず、相変わらずセシリアの話を静かに聴いている。そんな翔の姿が何故か少し嬉しく感じて、小さく笑みを浮かべる。

「母は私の憧れでした、とても厳しかったけれど今の風潮が広がる前からずっと強かった母に憧れていましたの……」

そこまで話したセシリアの目に何処となく何かを煙たがる色が見て取れるが、特に気にした風もなく、翔は話の続きをセシリアに促す。

「それに比べると父は名家に婿入りしたためか、母の機嫌を伺って何時もおドオドしていましたわ、そんな父を見ていましたから、小

さい頃から、将来情けない男とは結婚しない、と思っていましたわ」
そう話すと、少し照れ臭そうに笑う。

「ISが発表されてから二人の間の溝がさらに深まって、親子三人で過ごす時間はなくなっていましたわ、そんな二人だったのに、あの事故の日何故か一緒にいて、結局私に莫大な遺産を残して、私を一人置き去りにして二人は居なくなっていましたわ」

そこまで言い切ると少し悲しそうな色を帯びた瞳を外へと向ける。
そのセシリアの視線に釣られるようにして翔も外を見る。日は完全に落ちていて、人工の明かりが保健室の中を照らしていた。

「それで？ どうなった」

そこから先を中々話そうとしないセシリアに、背中を押すような気持ちで先を促す、この話を聞かない事にはセシリアを前へ進ませる事は出来ない、翔はそう感じていたから。

「それから……私の周りには金の亡者が群がってきました、私は両親が残したものを誰にも渡す気はありませんでした。その為に私はありとあらゆる事を勉強しましたわ、そして、IS適正テストでA+の適正が出た私に政府は国籍保持のため、いくつもの好条件を提示しました。そしてそれは両親の残したものを守る為にも役立つもので、私はイギリス代表候補生、そしてブルー・ティアーズのマスターに選ばれ、稼動データと戦闘経験値を得るため、ここへやってきたのですわ」

そこまで話し終わると、これが私が勝ちに拘る理由ですわ、と少し安堵したような表情で言い終えた。恐らく、ここへ来て誰にも言え

なかった事を言い終え、何となく肩の荷が下りた、いや、誰かに知っておいて欲しかったのかも知れない、自らが闘う理由を、だが、翔としてはそこで納得されては困るのだ、前へ進ませるための背中を押すためにこの話を聞いたのに、それでセシリア自身が納得してしまえば、その戦う理由は更に頑なになってしまふのだ。

「なるほどな、奪われないために努力して勝ち続けてきて、代表候補生となって奪われない地位を保持するために勝ち続ける、と言うのがオルコットの理由か」

それも今日、あなたに負けてしまいましたけれど、と舌を出しながら恥ずかしそうに微笑む。

「確かに努力によつて得られる勝ちもある、だが、全ての努力が報われる、努力が偉い、努力は無駄にはならない、そんな奇麗事を言うつもりは俺にはない、報われない努力もある、無駄になる努力もある、それがオルコットの場合、俺だったと言う事だ」

自分の今までの努力が無駄だと、自分の前では無駄だったと言われたような気がして、身を起こし、掴み掛かろうとしたが、決闘のダメージが残っているのかまたベッドへ沈む。

例えばセシリア自身が本当にそう思っていたとしても、積み重ねてきた努力を他人にそれを指摘し踏みにじる権利などあるはずないのだから。

「と君は思っているようだが、それは勘違いだ、君は、その時から前へ進めていないそしてオルコット、君が前へ進むための第一歩、それは他者を見下さない事、その要素があるだけで格下から足元をすくわれ、目の前の敵の強さを見誤る、まずはこれから踏み出してみると良い、少しずつでも構わない、前へ進むんだ」

必死に起き上がろうとしていたセシリアの肩を押さえながら、翔から言われた言葉に少し呆然としていた。言葉としては比較的要領を得ないような言葉だったが、頭の良いセシリアは翔が何を言いたいかを何となく理解したのか、やさしく微笑む。

「不器用、ですね？　我がクラスの代表さんは」

クスクスと笑うセシリアに懨然とした表情をしながらも、自分の思惑通りに勘違いしているセシリアにニヤリと笑みを向ける。

「何を言っている？　俺たちのクラスの代表は一夏だ」

唐突に出てきた一夏の名前が予想外すぎたのか呆然というか、完全に呆けたような反応のセシリア、その反応の良さに更に笑みの色を濃くする。

「ど、どーいうことですか！？　私達は確かにクラス代表を賭けて……」

その発言にすかさず切り返す、その表情は翔にしては珍しく、少し楽しそうに笑みを浮かべている。そんな表情の翔もいいな、とか余計なことを思ったセシリアだったが、それは脇にどけておく。

「何を言ってるんだ？　俺は確かに言ったぞ？　『クラス代表の決定権を賭ける』とな？」

そう言われたセシリアの頭の中には確かに千冬が声高らかにその内容の決闘を宣言している様子が再生され、その内容の理解を始めていく。クラス代表の決定権〓クラス代表を決定する権利と言っ事な

らば、クラス代表を決める権利が勝った方に与えられると言う事。ようやく理解したセシリアは少し非難するような視線を翔に向けていた。

「これって、一種の詐欺じゃなくて？」

「何の事だ？」

そう言いながら非難の視線を送ってくるセシリアを軽く受け流す。何時もの翔の表情と態度に、もう、と諦めたように、セシリアはため息をつく。

「では、ここまで手の込んだ事をして何故織斑さんなのですか？」

これだけは答えてもらおうというような雰囲気 of セシリアに圧されたわけではなく、最初から答えるつもりだったようで、比較的すらすらとその理由が語られる。

「あいつはあまりにも経験がなさ過ぎる上に、剣を握っていたのもかなり前の話、地力がないなら、実戦経験が必要だ、その点、クラス代表と言う立場ならそれには事欠かないからな」

その理由を聞いて、納得、と言った表情をするセシリア。

「織斑さん、雰囲気的にもそう言う役はやりたがらないでしょうしね」

だからと言ってここまでする翔に苦笑を浮かべる。案外この男は一夏には甘いのではないだろうか、と考え、微笑を浮かべる。そして何となくその笑みに何かを見透かされたように感じたのか、翔は口を開く。

「おい、オルコット……「セシリア」……む？」

決闘のダメージは大分和らいだのか、ベッドから身体を起こして、話しかけてくる翔の唇に人差し指を押し付ける。

「セシリア、と、名前でお呼びくださいな？」

そう言って片目を閉じるセシリアに、ふむ、と一つ頷く翔。

「そうだな、ぶつかり合った者同士、名前では呼ばなければかえって失礼か、では俺の事も翔と呼べ」

提案ではなく命令断定のような形で言うてくる翔に、らしい、と思いつつ、はい、と肯定の返事を返すセシリア。

「ではセシリアも動けるようになった事だからな、寮に戻るか」

「了解ですわ」

そう言つて椅子から立ち上がる翔、セシリアもベッドから起き上がり、翔の横に並び二人連れ立って寮へ歩き出す。

日は完全に沈み、空には星と月が浮かんでいた。

寮へ帰ってきて翔と別れたセシリアは部屋でシャワーを浴びていた。汗をかいて不快だった所に少し熱めの温度のお湯が自らの白い肌を叩く感触が心地良い。そこでふと鏡に映る自分を見て、思い出すのは何故か自分を負かせた男の事。

初めてだった、今まで見てきたどの男とも違う、信念を貫き通し、誰にも媚びない強い意志を持った瞳。そして実際彼は強かった。剣

一本で圧倒的に完膚なきまでに負かされた、手も足も出ないというのはああいう事を言うのだろう。黒い影に光が纏わるその光景が綺麗で、そう思った時には意識が刈り取られていた。気が付いたら保健室で、そこで彼と話をして、ここへ入学してからも誰にも話すつもりがなかった話までしてしまつて。それから前へ進めと言われて、彼が背中を押してくれるなら前に進めるかな、と思つたりもした。それから彼は意外に一夏に甘くて、それがわかつた時の彼は……

「少し、かわいかつたな……」

言いながら彼が拗ねた様な慥然とした顔が浮かび、その次に悪戯が成功した時の子供のような笑顔も浮かぶ。やっぱりかわいい所もあると思う。クールなだけが彼の顔じゃない。それから名前を呼び合つて……そこでふと彼の唇に触れた自分の右手の人差し指が目に入る。

気が付けばそれを自分の唇へと押し付けていて、自覚した瞬間に全身が熱くなつた。

「な、何をしているの！？私つてば！」

それでも、名残惜しくて何となく自分の右手の人差し指に視線が行つてしまう。それから無理矢理視線をはずし頭を振り、でもやはり、思い浮かぶのは彼の色んな表情。それを思い出すと思つてしまう。

「もっと、もっと、彼の事が知りたい……」

そう呟いてからもう一度鏡を見してみる、そこには一般的に見て美少女と言われるであろう自分の顔と、そこそこ大きな胸に同性達が羨む細い腰、全体的に見てもいいプロポーションだと思う。そんな自分を頭の中で彼と並べてみる。

「うん、違和感なんてないですね」

などと、そんな妄想ばかりが膨らんでいくセシリア、結局広がる妄想に歯止めが利かず、寝付いたのは日付が完全に超えてからだった。

決闘の翌日、IS学園一年一組。

この学園に二人しかいない男子生徒の片割れ、織斑一夏は現在、黒板に書かれた信じられない文字を目にして、開いた口が塞がらない所か、もう少し開いたら顎が外れるのではないかと心配になるほどである。

その一夏がこんな事になっている理由。

「はい、一年一組クラス代表は織斑一夏君に決定しましたー、あ、一繋がりでいい感じですね」

おめでとう、織斑君と書かれた黒板を背に、一年一組副担任、山田真耶が何が嬉しいのかニコニコと笑顔で、その理由を発表していた。その事実に一夏はよろよろと手を上げる。

「はい？ 何ですか？ 織斑君」

「な、何で俺がクラス代表なんですか？ 翔とセシリアがクラス代表の座を賭けてたんじゃあ？」

凹みまくりながらも何とか言い切った一夏に、千冬が出てきて一夏の勘違いを正す。

「織斑、お前は私と柏木の話の内容を聞いていなかったのか？ 私達は『クラス代表の決定権を賭けて』と言ったんだぞ？」

さりと千冬から言われた一夏は、その言葉の意味を理解しようと沈黙、数秒後、昨日のセシリアと同じ図式が頭に浮かび、昨日の決闘でその件の権利を勝ち取った存在へと顔を向ける。最も、その動きは壊れた機械のようにゆっくりとしたものだ。そうして一夏の後ろの席に座る権利者は何時もと同じく何処吹く風というような表情でそこに座っていた。

「翔！ お前何て事してくれたんだ！」

柏木君やるう！ やら、わかってるねー！ 等と女子生徒の声が響く中で一夏は思わず翔の肩を揺らしに掛かる、が、実際びくともしていない。

そんな中一人の女子生徒 セシリアが立ち上がり、その理由を一夏に説明する。

「落ち着いてください、織斑さん、この決定にはちゃんと理由がありますのよ？」

その言葉に一夏の肩揺さぶり（全然揺れてなかったが）が止められる。

「理由？」

「ええ、そうです、織斑さんはISの経験は浅い、そうですわね？」
間違いではないので、一夏はその問いかけに素直に頷く。それを見たセシリアも言葉を続ける。

「IS操縦において一番の糧は実戦経験ですわ、その点、クラス代表になれば戦闘の機会には事欠きませんから、ISの操縦が上達す

るための近道と言っわけですわ」

セシリアの説明に、なるほど、と納得しかけるが、それは翔も同じだったと言っ事を思い出す。

「なら、翔だって同じ……」

と言いかけた瞬間、一夏の発言は千冬の出席簿アタックによって強制的に中断させられた。

「馬鹿者、同じなどあるか、柏木はお前と地力が違う。大体、昨日の戦いもあれだけ闘えたのは柏木の地力とイメージする力が日々の剣術の鍛錬で養われていたからだ」

昨日翔があれだけ闘えた事のからくりは千冬が言ったよう、そこにあった、翔にとって、剣術の鍛錬の時、仮想の敵をイメージし、その明確にイメージされた仮想の敵と戦うと言った鍛錬もメニューにあるため、イメージする力と言っものは飛びぬけて強い。

以上の理由を千冬に説明された事で、一夏も納得せざるを得ない。

「わ、わかつたよ、だけどじゃあ、また昔みたいに俺に稽古つけてくれよ」

実戦経験と同じ様に自らのISに合った技術を身につけるために、翔へ稽古を頼む。ちなみにこの時一夏は既に自分のIS、白式を手に入れている。それを使って千冬の訓練と言っ名の憂さ晴らしにつき合わされたのは一夏の中で記憶に新しい。

「いきなり俺の稽古についてくるのは無理だな、俺と今のお前との差はそれほどあるという事だ」

昔から翔は無理な事は何があっても無理と言う性格だったが、それは今も変わっていないようで、ばつさりと切り捨てられる一夏。そして落ち込む。しかし、翔はそんな事は予想済みだったのか、こちらのやり取りを見ていた箒へ向かって一夏に見えないようにピースサインを出す。

「まあ、落ち込むな、剣の方はまず、箒に見てもらえ、それである程度耐えられる様になったら稽古つけてやるよ」

先程のピースサインの意味を理解したのか、箒は少し頬を赤くさせながら立ち上がる。

「わ、私がか!？」

「そうだ、箒なら剣道で全国大会優勝を果たしているからな、基礎などを学ぶなら丁度いいだろう」

「どうだ? と問うてくる翔に、少し考える一夏。が、すぐに答えは出たのか、一つ頷く。

「分かった、なら、箒、放課後稽古つけてくれ」

「う、うむ、そこまで言うなら仕方ない……」

サンキューな、と言って笑う一夏の顔を見て、一夏の見えない角度で、ぐっと小さくガットポーズをした後、翔へ向かってサムズアップ、翔もいつもと変わらない感情を悟らせないような表情でサムズアップ、と、そこまでのやり取りで、セシリアが何か思いついたのか、もじもじとしながら翔へ話しかけてくる。その頬は気のせいかもしれないが、ほんのり赤く色づいているように見える。

「あ、あの、翔さん、で、でしたら、放課後はお時間が空くのですよね？」

翔とセシリアのやり取りの中で、セシリアの雰囲気と翔さん、と名前を呼んだ事で、千冬の眉尻がピクリ、と反応する。不幸にも一夏はその様子を目撃してしまったようで、机に顔を伏せて自分の殻に閉じこもってしまう。何かトラウマに触れてしまったようだ。

「ああ、それがどうかしたか？」

「で、でしたら、放課後、私に稽古を……」

つけてくださいませんか、と続けようとした所で、千冬の声に遮られる。

「小娘が、柏木に稽古をつけてもらうなど、10年早い、そもそも、柏木は放課後に私がISについて、マンツーマンで講義する事になっている」

気のせいかもしれないが、マンツーマンの部分が強調されたように聞こえたセシリアの眉は急角度で釣り上がっていく、が、口元はひくひくさせながらも笑みの形を浮かべている。ギリギリいっぱいで頑張っているらしい。

「あ、あら、織斑先生がですか？ その講義私も聞いてみたいですわ？ 参加してもよろしいでしょうか？」

セシリアの台詞に、ちっ、邪魔者め、と小さく千冬の口から聞こえた気がしたがきつと気のせいだろう。

「残念だが、私も……」一々確認を取らなくとも織斑教諭はセシリ

アだけ弾くなどということはせんだろう、面倒見がいいからな」……ああ、任せておけ、放課後だからな」

翔に面倒見がいいと褒められたのが嬉しかったのか、それともそのイメージを崩すわけにはいかないと思ったのか、断りの言葉を飲み込む、が、ある事に気が付いた千冬はセシリアを睨みつけ、セシリアも負けじと睨み返す。表向き世界最強の座に着いた者に睨み合いが出来るセシリアは実際の所かなり強いと思われるかもしれないが、この際スルーの方向で場面は動く。

千冬が気が付いたある事、それは、セシリアと翔が名前で呼び合っていると言う事実。その結果、セシリアも千冬から何かしら感じ取ったのか、その結果がこの睨み合いという結果。

その二人に挟まれた翔は、相も変わらず何処吹く風と言うような表情で授業の準備を進めていた。

結局この日の被害は千冬とセシリアの睨み合いによる一年一組の不気味なまでに静まり返った雰囲気と、妙に下がったような気がする温度に、トラウマに触れた一夏と言う被害になった。

五斬 漢には時に強引さも必要だ（後書き）

誰だよ、このセシリア…

六斬 漢は如何なる時も冷静に対処するもんだ

「ふうん、ここがIS学園かー」

現在IS学園授業の真っ最中のこの時間、IS学園に一人の少女が現れる、ツインテールと勝気そうなつり気味の瞳が印象的な少女だ。

「このあいつ等がいるのね……」

IS学園の校舎を見上げ、それでいて少女は懐かしむように声を漏らす。

「それにしても、あいつ等がISの操縦者になるなんてねー」

世の中分らないもんだわー、等と言いながら、IS学園の敷地内へずんずん入っていくが、少女は知らない、この後、少女自体が迷子と言う悲劇に巻き込まれ、走り回る拳句に、結局案内の人に道を聞くと言う、意地による負の連鎖が始まると言うことを、やはり少女は知る由もない……。

「では三人とも、武装を展開しろ」

現在一年一組は専用機持ちによる実働演習の真っ最中だ、一組の専用機持ちは、柏木翔、織斑一夏、セシリア・オルコットの三人だ。その三人が現在演習の中心、ISに乗る機会自体が少ない生徒に、ISとはどのようなものかと言う事を見せる演習と言ってもいい。そして先程千冬に言われた通り、三人は武装を展開する。一夏は両手を前に伸ばし、雪片を、セシリアは左手を横へ出し、左手にスタ

「ライトmk?を、翔は左腰に刀を抜く前に右手で柄を握るように構え、右手に正宗零式をそれぞれ展開する。常人にはどれも一瞬にしか見えないが、展開速度の順番としては、セシリア、翔、一夏の順番。」

「織斑、遅いぞ、0.5秒で展開できるようになれ」
「は、はい……」

辛口コメントの千冬に思わずたじろぐ一夏、千冬の前ではISを操縦し始めた時間など関係ない、結局一夏はまだイメージする力が弱いのだ。

「それに比べて、オルコットは流石に代表候補生と言った所か」
「ありがと……「ただし」……え？」
「そのポーズは止めろ、真横に銃身を展開して誰を撃つ気だ？」
「で、ですが、これは私のイメージを直すために必要な……」「直せ、いいな?」「……はい……」

千冬のコメントは褒めて終わる事はなく、上げた後に落とすと言う何ともえげつないコメント、ある種の私怨が入っているのかと疑ってしまいそうなほど褒められた気がしない声音だった。
流石のセシリアも少し気落ちしている。

最後に翔に目を向ける。翔自体は正宗を展開した状態から特に目立った動きがないまま何時もの様に何処吹く風、と言った表情で待機している。

「柏木は……そうだな、もう少し展開速度が速くなれば言う事がないな」
「承知」

千冬の簡潔なコメントに、翔も簡潔に答える。その対応に納得のいかない二人は思わず千冬を半眼で見てしまう。

「な、何だ、その目は」

「明らかな鼻屑を感じますわ……」

「左に同意」

その二人の抗議にたじろぎかけるが、すぐに何時もの表情に戻り、切り返す。

「柏木は展開速度が遅いと言うわけではないし、武器を展開する場所やポーズも問題ない、つまり、問題らしい問題がないと言う事だ、逆を言えばお前達二人は問題があったから、ああ言うコメントになっただけだ」

全くの正論に、ぐうの音も出せなくなる二人。反論はないと判断して、千冬は次の指示を出す。

「次はISの基本的な飛行操縦を実演してもらおう」

三人の中で明らかに飛行操縦が苦手な一夏の顔が顰められる。セシリアと翔は既に飛行のイメージが固定されているため飛行操縦が苦手と言うわけではない。翔の表情は変わらず、セシリアの表情にも変化は見られない。一夏だけが顔を顰めているが、千冬はそんな事はないとばかりに指示を出す。

「柏木、織斑、オルコット、その場から急上昇し、一定の高さまで上がったら水平に飛行しろ」

「承知」

「あん、待ってくださいな」

景色を置いて行く速さで上昇する翔、それに置いていかれないように同じように飛ぶセシリアだが、流石に上昇と言っても直線的に上昇と言う事であれば、零式には敵わず。セシリアが気が付いた時には、既に速度を落とし通常飛行に戻っていた。

「速過ぎるだろ……」

せめてセシリアに置いて行かれないようにと飛行に入るが、案の定、千冬から激が飛んでくる。

「何をのろのろしている、ブルー・ティアーズよりもスペック上の出力では白式の方が上だぞ」

千冬の激に一夏はセシリアのブルー・ティアーズへ目を向ける。確かに、飛行は苦手な一夏でもセシリアとはそんなに距離が離れていない、スペック上は出力が上と言うのは間違っていないのだろう。しかし……

「空を飛ぶためのイメージってどんなのだよ……急上昇は前方に角錐を描くイメージ、だっけ？」

頭の中にある授業で習った基本形のイメージを思い出し、急上昇を行っているが、しっくりこないのか、イメージが弱いのか、その速度はセシリアよりも遅い。規定の高さまで到達した一夏も通常飛行へ移行し、翔とセシリアへ追いつく。

「二人とも速いよなー」

感心したように、二人へ話しかける一夏。

「織斑さんが思う通りに動かせないのは、自分に合ったイメージがまだ出来上がっていないからですわ」

イメージねえ、と考え込む一夏に、セシリアのアドバイスに対して、然り、と頷いている翔。そもそも15歳の男子が然りと頷くものなのだろうか、その辺りに疑問はあるのだったが、状況はそんな事をおいて変化していく。

「うーん、そう言われてもな……中々これって言うのが分からないんだよな……そもそもこれ、どうやって飛んでるのかもわかんねえし」

一夏の純粹な疑問にクスクス、と笑いを漏らすセシリア。そしてからかう様な笑みを、一夏に向ける。

「説明しても構いませんが、反重力力翼と流動波干涉のお話になりますが……」

セシリアから発せられた、明らかに難解そうな単語二つに一夏の顔は顰められ、翔の顔に変化はないが、密かに耳がピクリと動いていた。

「いや、説明はいい……」

げんなりしながら説明を遠慮する一夏に、そうですか、と一つ笑みを零す。そんな反応のセシリアに、一夏が思う事は唯一つ。

（何か……一気に丸くなったなあ）

その一言に尽きる、周りを見渡せる余裕、と言うか、そう言う雰囲気を持ったと言う事が何となく理解できるのだ。

セシリアの急な成長に純粹に驚き、観察していると、突然幼馴染からの怒声が聞こえてくる。

「一夏！　いつまでそんな所にいるつもりだ！　早く降りて来い！」

一夏は下で叫んでいる筈の顔を見ると、何が気に入らないのか眉尻を吊り上げて、叫んでいた。真耶のインカムを奪い取って。

そう叫んでいる筈をセシリアも確認し、クスリと笑う。

「あら、もしかして勘違いさせてしまいましたかしら」

そのままクスクスと笑うセシリアは実に優雅な雰囲気纏っているが、一夏にはそんな事よりも、何に対して勘違いしているのか、と言う事が疑問だった。が、思わぬ所から、つい先程の話が掘り起こされる事になる。

「ふむ……反重力力翼、流動波干渉……重力に反発する力翼を行使する事によって、流動しているエネルギーや大気に何らかの干渉を起こすのか？」

等と一人先程までの話に疑問を持って掘り起こしている翔、一夏には何を言っているのかさっぱり分からなかったが、セシリアはそれに反応する。

「き、興味がありませんでしたら、今日の放課後、わ、私と……」

妙にもじもじとしながら恥ずかしいのか、頬をうつすらと赤く染め、これから提案しようとしていたセシリアに、いや、状況的に見れば

全員になのだが、声音とタイミングが明らかにセシリアへ向けられている千冬の声に、その提案は言い切る前に阻止される。

「柏木、織斑、オルコット……次は急降下と完全停止をやってみろ、目標は10センチ、オルコットは5ミリだ！」

明らかに一人だけ私怨が籠ったような目標を立てられる。単位が違うとかそういうレベルではない。

「くっ……鋭い勘ですこと……」

忌々しい、とセシリアが小さな声で呟いたような気がするが、きつと気のせいだと、聴いてしまった一夏はそう思い込む事にして、急降下へ集中する、と言うよりもうそれしか考えない事にする。隣も怖いし、下にいる自分の姉もなんだか怖いから。

急降下を始めた時、既にセシリアは急降下しており、翔に至っては完全停止を始めるような姿勢を取っている。自分もと集中していくが、何故だか完全停止のためのイメージが思いつかず、そして落下地点が知らぬ内にずれていたのか、セシリアと千冬が近くに見える。

（あれ？これってやばいよな？）

そう思った時には既に間に合わないタイミングだったが、その瞬間、白い壁のような物が視界に現れ次の瞬間には壁に顔から激突していた。ずるり、と激突した壁から顔を離してよくよく見てみると、それは白い壁ではなく、正宗の銀色が輝く刀身の腹だった。もう少し優しく止めてほしかったような気もするが、あのままだとセシリアと千冬にも被害が出ていたと思い直して感謝。

「すまん、助かったわ、サンキューな」

「気にするな、緊急事態だった故、手段は選べなかったがな」

言いながら左手で持っていた正宗を量子化し、収納する翔の後姿、一夏には妙に男らしく見えた。特に怪我はないか？と千冬とセシリアへ質問している翔を見てみると、箒が駆け寄ってきて翔と同じ事を聞く。

とりあえず問題ないと返しておく。翔達を観察していると、セシリアと千冬の頬が少し赤くなっているように思う。翔に守ってもらった事を今更自覚したのだろうか、セシリアはどうなのか、一夏には分らないが、自らの姉の事なら、良く分かっている。姉は昔から翔の事が好きで好きで堪らない癖に、翔に勝つまでは、やら、未だ修行中だなどと言って一向に素直になろうとしないのだ。勿論自分の姉の恋は実って欲しいとも思うし、応援もしている。だが、一夏は思う……。

（それじゃあ、翔は無理だ……千冬姉）

一度、中学の時の友達も交えて恋愛観と云うか、そう言うものについて話し合った事がある。内容的には大それたものではなく、中学生らしい、どの子が可愛いだとか、誰と付き合いたいかなどその様な内容だ。そんな話をしていく内に最初から全く会話に入っていない翔にスポットが当たった時に、一夏達は、今までに無いほどの衝撃を味わう事になる。スポットライトの当たった翔の第一声……それは。

「好きと言う感情に違いがあるのは知識として知っているが、その明確な違いがわからんのだが」

と言うもの、一夏達は大いに驚愕した。そして、一夏達の中で認識が変わる、それでも翔はそれなりに人気があるのだ、容姿こそ悪く

は無いが目立つほど良いと言うわけではない、それでも、一度決めた事は最後までやり、他人から頼まれ引き受けた時も最後までやりぬく、納得の出来ない出来事には相手が誰であれ物申す。そんな翔の姿は主に下級生から絶大な人気があった。男も女も関係なく翔に憧れていた。そしてその中には無論、翔の事が好きな女子もいたのだ、特に自分と翔の中学時代での友達の妹などは、わかりやすいほどだった。だがそれに全く気が付かない翔はなんと言う鈍感なのだ。そう一夏達は思っていた。だが、それは一夏達の勘違い。鈍いのではない。

（自分がそう言う風に人を好きになった事が無いから、相手が好意を持っているのが分かってても友愛しか判断できないだけなんだよね……）

何処の小学生……いや、幼稚園児の情緒だろう、と一夏は思う。今日、小学生でもLikeとLoveの違いくらい分かる。一夏自体もその違いは感覚的に分かっているつもりだ、しかし、それすらも分からないという翔は恋愛情緒的に15歳とは思えないほどに子供なのである。それを総合して一夏は思う。

（大変だな、千冬姉も……）

思考から意識を戻すと、授業は終了し、皆が着替えのため、ロッカーへ向かおうとしている所だ、自分もと思い、翔に声を掛ける為、どんな化学反応が起こったのか、頬を赤らめていたセシリアと千冬が睨み合っているのに、内心関わりたくないと思ってはいたが翔達の下へ近づく事にする。

「む？ 一夏か、授業は終わった、着替えに行くぞ」

一夏から声を掛ける前に、翔から気が付き声をかけてくる。それに肯定の返事を返そうとした瞬間。一夏に声を賭けてくる女子生徒。

「おーりむーらくーん、ちょっと聞きたい事あるんだけど？」

そう言って話しかけてくる女子生徒に、簾の眉尻がピクリと動くが、その意図が一夏には理解できなかったため、普通に会話を進める事にする。

「何？ 何か用？」

「うん、夕食の後、暇？」

その言葉に、夕食後の予定を考えるが、何も無かった。そんな自分に少しばかり寂しい気持ちを覚えるが、それは脇に退けて置き、返答する事にする。

「本当？ じゃあ、夕食の後ちょっと付き合ってよ」

女子生徒の誘いに不機嫌そうに眉間に皺を刻む簾が見えたが、怖いのでノータッチで誘いに答えようとすると、返答を聞かずに女子生徒が口を開く。

「柏木君も、篠ノ之さんも、オルコットさんも、それから、出来ればで良いんですけど、織斑先生も」

その不可解な誘いのメンバーにそこに居る全員がしばし呆然とするが、千冬以外は特に異論が無いのか、肯定の返事を返す。

千冬はしばらく考え込むが、何かを思いついたのか、肯定の返事を返す。

「じゃあ、織斑先生、夕食後に学生食堂の方に来てください、お願いしますね」

それだけ言うと、その女子生徒は身を翻し、ロッカールームの方へ走っていった。その後には首を捻る一夏、箒、セシリア。何時も通りの表情で何が行われるのか予想をしている千冬と翔だけが残った。

男子ロッカールーム

「前々から思ってたんだけどさ、お前の身体って明らかにおかしいよな？」

授業が終わり、一夏と翔の二人はロッカールームで絶賛着替え中。その中で一夏が翔の肉体について指摘している。

「む？ 何処がというか、何がだ？」

「いやいや、何だよその自分おかしくないっすからみたいな態度、普通俺達の年代では俺位が普通の肉体なんだよ」

言葉の通り、一夏の肉体は確かに平均的、昔一緒に剣術をしていた名残があるのか、やや筋肉が発達しているが、それでも15歳としての平均を大きく逸脱しているというわけではない。対して翔の肉体は、服を着ていれば一夏とそう変わらない体型に見えるが、現在、上半身に何も来ていない肉体はこれでもかと言うほどに絞り込まれた筋肉、意識していなくても浮き出ている腹筋と背筋、腕は指を動かすだけで何処の筋肉が動いているのか一目瞭然なほどに詰め込まれている。横腹の筋肉も発達し、筋が浮き出ている。などなど、明らかに15歳の少年の肉体ではない。

「別に太ってはいないだろう、全体的にはスマートな自信がある」

何を言っているんだこいつは、的なのりで返される。

「いや、俺が言いたいのは太いとか太くないとかそう言うことではなくてだな」

「ではどういう事だ？」

「筋肉絞り込むのはいいよ、筋肉発達しすぎてもボディービルダーみたいになるしな」

無論、翔の身体はボディービルダーのように大きく発達した筋肉が付いているわけではない。

「でも絞り込むにしても限度つてものがあるだろう、体脂肪率どれくらいだよ！」

「さてな？気にした事無かったが」

見た所、明らかに数%台は間違いないような肉体を見て、何となく自分がもしかしたら恐ろしく貧相なだけなのではないかという妄想に囚われ掛けるが、やはり翔の方がおかしいと思い直す。

「だが、俺も鍛えたくて鍛えたわけではなく、剣を振る内にこうなっていただけだ」

特に気にする事は無い、と言うように淡々と着替えを済ませていく翔に、何故か気分的に凹まされた一夏だった。

六斬 漢は如何なる時も冷静に対処するもんだ（後書き）

うつひょー、話が全然進んでねえw

まあ、ゆっくりだらだらいきますかね〜

七斬 漢は脇目も振らず前へ進むもんだ

「と言う訳で、織斑君、クラス代表就任おめでとー！」

夕食後、誘われた通りに食堂に待機していると、何処からとも無く「織斑一夏クラス代表就任パーティー」と書かれた看板が取り付けられ、大量のクラッカーが運び込まれる。夕食後なので食べ物は無いが、飲み物は結構な量が運び込まれ、現在一夏のクラス代表就任パーティーが開催された。

「成り行きだけど、クラス代表になったんだから祝わないとね」

実際成り行きでなったのだが、今からして言えば、翔の思う通りに動かされていたような気もする。そしてそれは多分気のせいではない。些細な意趣返しに一夏は非難の視線を翔へ向けてみる。が、本人はそれすら気にする事無く、紙コップに入れられたお茶をマイペースに飲んでいた。こうしてみると今更だが翔に文句を言いに行きたくないが、一夏は翔に近づけない理由があつた。そして今現在、その原因同士が翔を挟んで睨み合っている。

「オルコット……これは織斑を祝う場だぞ、織斑を祝いに行つてやらんか」

「それはそっくりそのまま織斑先生にお返しいたしますわ」

不敵な笑みを浮かべた千冬が笑顔を浮かべたまま青筋を浮かべると言う器用な真似をしているセシリアに一夏を祝いに行けと言い、それはそちらも同じ事だとセシリアも切り返す。そうやって睨み合っている二人を見て一夏は切実に思う。

（筭も機嫌悪い事を考えると……どちらも来ないでください）

セシリアと千冬の睨み合いに挟まれている翔と言えば、何も気にしていないように空になった紙コップを置いて、今日の実演授業について考えている。

目下課題については武装展開の速度向上が翔の一番の課題となっている。展開が遅いわけではないが翔としても納得の行かない展開速度だったのだろう。周りの喧騒など聞こえていない様に思考を加速させる。が、それを遮るように一つの声がこの場へ落ちてくる。

「あ、いたいた、話題の二年一組メンバーはここに居たんだねー」

そう言いながら織斑一夏クラス代表就任おめでとうパーティーに入ってくる女子生徒。最初に目に入った一夏の下へすたと近づいていき、一つの紙を手渡す。

「君が一夏君ですね、私は新聞部副部長、二年生の黛薫子です。これ、名刺ね、今回は話題の新生をインタビューしに来たの」

「はあ、どうも」

新聞部副部長、黛薫子、と簡潔に書かれた名刺を見ながら曖昧に返事をする。そして薫子は何かを探すように辺りを見渡す。

「何を探してるんです？」

「いやね？今話題のもう一人の男子学生んだけど……」

一夏は無言でもう一人の男子学生、つまり、翔のいる所を指差す。薫子はその方向に目を向けると、何も見なかったように一夏へのインタビューを始める。

「ど、どうも忙しいみたいです……」

まあ、無理も無い、と一夏は思う。実際に翔、千冬、セシリアが居る周りには人が居ないのだ。主な理由としては、代表候補生と表向き世界最強の人物から出ている威嚇のプレッシャーなど誰も受けたくないのが主な理由である事は明白。その中でも平然と考え事をしている翔の神経はどうなっているのかと疑問に思うが、考えても仕方ない事である。

「じゃあ、ずばり、クラス代表に感想とか聞いてみようかな」

そう問われて、一夏は答えに窮する。成り行きでなってしまったクラス代表、自分の意思など介在する余地の無かった役職について言える感想など限られる。当然その答えは、何とも面白みの無い普通の答えになった。

「まあ……何というか、頑張ります」

「え、なにそれ」

一夏の答えにたちまち不満な表情へシフト、インタビューに面白いも何も無いと思うが、薫子の中の常識ではそうではなかったように、一夏のコメントに納得していない。新聞部らしくカメラ、手帳、ペンを持っており、手帳に一心不乱に書き込んでいるのは何なのか、その答えがメディアの悪癖だと一夏は悟る事になる。

「いいよもう、それについては捏造するから」

その一言で一夏は思う。じゃあ聞くなよ。

捏造内容が書き終わったのか、手帳からペンを放すと、憂鬱そうにため息を吐く。

「うう、あそこ行きたくないなあ……でも、話題の男子生徒二人にインタビューしないと新聞部の名折れよね……」

息を吸って吐いて、よし！ と気合を入れると、薫子は翔へ向かって歩き出す。目を瞑り考え事をしているのか、身動きもしない翔に寝ているのではないかと疑うが、自己紹介を始める。

「どうも！私は新聞部副部長……」「二年の薫子だろう？」……えつと、はい、そうです」

さっきの自己紹介を聞いているとは思っていなかったのか、目を瞑ったまま名前を呼ばれ、思わず吞まれる薫子。薫子を視界に治めるために開かれた翔の黒い瞳が何となく印象的だった。

「で？俺に何を聞きたいのでしょうか」

年上にはそれなりの口調になる翔の意外さに少し目を見開くが、薫子に気付く事もなく、未だに睨み合っている二人をどうにかしなければインタビュー所ではないと、意を決して二人に話しかける。

「ちょっと待ってくださいね？ えつと、織斑先生、インタビューしますので少し抑えてもらえませんか？」

「ん？ 薫か、という事は、柏木へのインタビューか、まあ、いいだろう」

ありがとうございます、と頭を下げた後に、後でセシリアにもインタビューする旨を伝え引き下がってもらい、改めて翔へのインタビューを再開しようとするが、先にざっと翔の風貌を観察する。

年上や、地位のある者にも物怖じしない事からある程度の器はある

と予想。と、手帳に書き込む薫子。

「では、聞きますね？ この学園に来てからの意気込みを一つ」

薫子の質問に、翔の考える時間は短い。

「この学園に来ようと何をしていようと、ただ前へ進めるなら前へ進むのみ」

簡潔にそう答える翔の返答を受け、手帳にペンを走らせる。翔は弄つても特に楽しくないと判断したのか、すぐに切り上げると薫子はセシリアへ向かっていく。

インタビュ어가簡潔に終わり、お茶を探そうと当たりを見回すが、翔の視界にはお茶のペットボトルが見当たらない、すぐに欲しかったわけではない、と思い直し、また思考へとダイブしようとした翔の視界に紙コップに注がれるお茶が目に入り、注いでくれた人物へ目を向けると、千冬が稀に見る穏やかな表情で翔を見ていた。

「前へ進む、か相変わらずだな、お前は」

表情も穏やかなら、出てくる言葉も柔らかい。翔の隣に腰掛ける千冬は翔が变つていない事を喜んでいるのか、微かに笑みを浮かべている。

「変らないさ、今までもこれからも、立塞がるものがあるならそれを斬り払い、俺は前へ進む」

愚直なまでに真っ直ぐな翔の言葉に、何か眩しいものを見るように千冬は目を細め翔を見ている。そう言う翔を見て千冬は毎回思う事がある。

（そんな真っ直ぐなお前だから、私は救われ、励まされ、前へ進む事が……織斑千冬を始める事が出来たんだ）

だからこそ目標で、だからこそ憧れで、だからこそ……織斑千冬は柏木翔が好きなのだ。

「柏木君！専用機持ちの写真撮るからちよつと来て！」

薫子の声に、承知、と答え立ち上がる。

「お前がお前を始めた時、それは絶対に折れないものになった、自分が思う道を進め、織斑千冬」

千冬の師匠としての顔でそう言った翔の言葉に、目を見開き、千冬は是と答える。その答えに満足がいったのか、一夏とセシリアの下へ向かう。

「私は進みます、私の思う道を、師匠のように……」

その言葉を心に刻むと、次の瞬間には柏木翔の一番弟子、織斑千冬ではなく、IS学園教師、織斑千冬の顔へと戻る。

その後、セシリアと一夏、翔の三人の写真を取る事になったのだが、闘った者同士が握手している写真が良い、と言い出して、セシリアと翔が握手している写真を取る瞬間に千冬が乱入し翔と一夏の手を入れ替えるなどの事件が起こった以外は比較的平和に一夏のクラス代表就任おめでどうパーティは終了した。

そしてこれは余談だが、誰かに会議を押し付けられ、会議で決まった内容を纏めておくようにと言われた山田教諭が泣いていたとかいないとか……。

「おい、翔、聞いたか、二組に転入生が来たらしいぞ？」

授業が終了した休み時間、何時ものように自らの席に後ろを向いて座り、今日の話の種を翔へと撒いていく。その話の種に翔は食いつくが、焦りも驚きもその表情には見えない。

「む、転入生か、まあ、転入してくるぐらいだからな、それなりの実力者だとは予測できるな」

試験自体国の推薦がないと受けられない筈だからな、と言いつつ翔が転入の条件を頭から掘り出そうとしていると、翔と一夏の会話を聞きつけてか、セシリアがその輪に入ってくる。

「なんでも中国の代表候補生らしいですわ」

そう言うത്面白そうにセシリアは、ふふつ、と笑う。

「私の存在を危ぶんでの転入、と言う理由はどうでしょうか？」

「君には確かに才能はあるが、それは無いから安心していろ」

それなりに辛らつな翔のコメントに、セシリアも冗談で言ったのだろう、全然気にせずに、まあ、ひどい、と言いながら笑っていた。

「このクラスに転入してくるわけではないのだ、そう気にする必要も無いだろう」

自然な流れで会話に入ってくる筈。昼休みに入ると、大体このメンバーで話をしている場合が多い。たまに一夏と翔だけだったり、筈

かセシリアどちらかがいなかったりするが、大体この形で休み時間をすごしている。

「代表候補生か、どんな奴なんだろうな……」

一夏のふと呟いたその言葉に、篝の眉尻がピクリと反応する。一夏の中ではふと気になったほんの些細な疑問なのだろう。だがそれがいくらほんの些細なものでも、それを聞く人物にとってはそんな事はどうでもよくなり、その言葉自体が問題である事など、この日本の中でも数え切れないほどにある。今回は一夏がそのケースに当てはまるらしい。

「気になるのか？」

その言葉の中に少しではあるが、怒気がある事を悟れるなら、一夏はこの時自分の発言に気をつけた事だろう。

「え？まあ、少しはな……」

一夏の言葉に、篝の眉は完璧に釣り上がり、怒ったように言葉を投げかけられる。

「今のお前に女子を気にしている余裕などないぞ！ 来月にはクラス対抗戦があるんだからな！」

言っている内容は最もなのだが、怒鳴られるとは思っていなかったのか、一夏は釈然としない思いを抱えながらも頷く事しか出来ない。

「翔さんは、代表候補生、気になりました？」

一夏と箒のやり取りを見ながら、翔の返答が半ば予想出来つつも気になったので聞いてみるセシリアに、特に感情もブレも無く返答する翔。こちらは逆にあちらと違って静かなものである。

「何を気にする事がある、もし闘う事になるなら誰であろうと斬り捨てるのみ」

らしい翔の返答に、そうでしたわね、と笑うセシリア。本当に静かなものである。セシリアが前へ進んだ結果と言う可能性もあるが、翔がそう言う事を気にする性格ではない事も理由として挙げられる。

「まあ、そこまでしておけ、箒」

見ているのも飽きたのか、一夏に助け舟を出す翔に、しかし、師匠！と反論の声を上げる箒だが、それはセシリアに止められる。

「まあまあ、篠ノ之さん、織斑さんにとって今必要なのは実戦経験ですわ、それを積む為にも篠ノ之さんが織斑さんを鍛えてあげればよろしいではないですか」

手が足りないのなら手伝いますわよ？と言わんばかりのセシリアに、封殺された箒は納得できずとも頷く事しか出来ない。丸め込まれた形になった箒は首を傾げるが、気にしない事にしたようで、一夏に放課後の訓練を約束させる。

「まあ、確かに実戦経験は必要だしなあ」

一夏の声に答えるのは、箒でもセシリアでも翔でもなく、クラスメイトの女子生徒達だった。

「そつだよー、織斑君には是が非でも勝ってもらわないと！」

「優勝商品は学食デザート半年フリーパス券！ それもクラス全員分！」

「織斑君が勝つとクラス全員が幸せだよー」

そう言つて盛り上がる女子生徒達の勢いに圧され、首を縦に振る事しか出来ない一夏。この時押しに弱い自分を思わず殴りたくなつたと一夏は後々思う。

「まあ、うちには専用機持ちが三人もいるし」

「楽勝だよ！ ね？ 織斑君」

まあ、内一人は基本動作もままならないけどな、ってそれ俺じゃん！ などと心の中で自虐に走りながらも、激励してくるクラスメイトに表情を取り繕いながら一つ頷く。それなら何とか……と思いかけていた一夏の幻想を砕く事になる存在がそこに現れる事になる……

「その情報、古いよ」

その声が聞こえてきたのは教室の入り口の方から、そちらの方へ視線が集中し、声の主の姿が視界に入る。

「えっ？ その声……」

「二組も専用機持ちがクラス代表になつたの、そう簡単には勝てないよ」

ツインテールと勝気なツリ気味の瞳が印象的な少女、一夏と翔には見覚えのありすぎるシルエットの人物がそこに立っていた。

「お前……鈴、鈴か!？」

そう言つて立ち上がる一夏に、箒の眉尻はピクリと動くだけでは飽き足らず、ぴくぴくと痙攣しているように動いている。

「む、久しぶりに聞く名前だな」

翔のその台詞に、今度はセシリアの目が怪訝な目付きに変わる。知り合いである事は分かったが、どのような関係の知り合いなのか見極めようと、自体を静観する姿勢のようだ。

「久しぶりね……一夏、翔」

「久しぶりだなあ、鈴」

「うむ、久しぶりだ、元気そうだな、鈴音」

箒は一夏へ厳しい視線を向け、セシリアは翔と鈴音に探るような視線を向ける。一夏は箒の視線に気付かず、翔はセシリアの視線に気が付いてはいるが、害は無いと判断し、スルー。クラス対抗戦は、来月……。

「所で、このクラスの代表って、まさか、翔？」

そう問いかけてくる鈴音に首を振る翔。その瞬間全力のガッツポーズを決める鈴音。

「おっしゃあ！ これで勝つる！」

「落ち着け、鈴音、言語がおかしくなっているぞ」

翔の指摘にはっ、と気が付く鈴音。そんな様子の幼馴染に一夏はため息を吐く。

「まだ翔と闘うの怖いのかよ……」

「当たり前でしょ！ 普通でも闘いたくないってのに、IS装着したらアタシなんか真っ二つよ！ 真っ二つ！」

その台詞に、む、と押し黙る翔。何故かこの会話に関係なかったはずのセシリアは、会話の何処かでトラウマにでも触れたのか、青い顔で真っ二つ……と呟いていた。

七斬 漢は脇目も振らず前へ進むもんだ（後書き）

前はセシリアがデレたので今回は皆大好き千冬姉をデレさせてみた、後悔はしていない、ぶっちゃけると反省もしていない。

そしてやっぱりセシリアがおかしくなっている件、高飛車は何処へいった？

もう、あれだね、うちのセシリアはこうなんです理論（ごり押し）で通そう、うん、それがいい

八斬 漢なら選んだ道を後悔しないもんだ

中国の代表候補生で、一夏と翔の幼馴染、鳳鈴音が一年一組に乱入その後、自信が有るのか無いのか良く分からない挑発を一組に仕掛けた所で教室に入ってきた千冬に軽くあしらわれ、教室内から追い出された。この時点で、セシリアは鈴音を警戒対象から外していた。その理由としては色々あるが……何より大きいのが。

（織斑先生が恋敵をああも冷静にあしらう事から考えると問題なさそうですもの）

と今現在食堂で机を囲みながら、ラーメンを啜っている鈴音を見つづ、そう考えている。実際に何時もは冷静な千冬だが、翔の事になると冷静な判断を失う傾向がある。そんな千冬が、もし鈴音が恋敵であるなら、ああも簡単にあしらう事が出来るだろうか、セシリアの答えは否である。もしそれが出来ているのならばセシリアの事も軽くあしらう事が出来るはずだからだ。

「鈴、いつこつちに帰ってきたんだ？　いつ代表候補生になったんだ？」

一夏の純粹な疑問からくる質問攻めに、質問ばっかししないでよ、と苦笑を浮かべる鈴。翔も一夏に落ち着け、と声を掛けている。

ちなみに翔の前に置かれている食事は、白飯に胡瓜と白菜の漬物、シジミの味噌汁にメインはサバの味噌煮込み。どう見ても渋すぎるメニュー。食べ盛り的高校生が好んで食べるようなメニューではない。翔に声を掛けられた一夏の前に置かれているメニューも焼き魚定食と言ったようなチョイスだ。

サバ味噌に、うまい、と静かに舌鼓を打っている翔は、放っておい

ても一夏が自らの聞きたい事を勝手に聞いてくれると判断し、食事に集中し始める。

そんなマイペースな翔とは逆に、箒は一夏に対して詰め寄る。

「一夏！ そろそろどういう関係なのか説明しろ！ まさか、つ、付き合っているとかではないだろうな！？」

「べ、別に付き合ってるってワケじゃ……」

少し頬を赤く染めながら否定する鈴音。否定している割には何処となく嬉しそうなのは気のせいではないだろう。無論、箒の剣幕を何とかしたい一夏は鈴音の否定に乗っかる。

「そうだぞ、何でそう言う話になるんだ、ただの幼馴染だよ」

「幼馴染？」

どうどう、と箒を押さえながら、鈴音との関係を明らかにする一夏。その答えに箒は疑問を持つ。そして先程から会話に加わってこないセシリアと翔は互いにメインのおかずを少しづつ交換していた。何とも平和な一角である。何故あちらはあんなに平和で、こちらはこんなに苦労しなければならないのか、納得のいかない一夏は少し非難の籠った視線で翔を見るが、当然の如く何処吹く風、である。結局一夏の周りは幼馴染対幼馴染と言う図式に落ち着き、互いに牽制し睨み合う。

一夏達の会話を外から聞いている翔は自分が口を挟む場ではないと言うように、サバに箸を入れ、一口サイズに切って白飯の上に乗せ、その白飯ごとサバを口の中に放り込む。セシリアも、箒と鈴音は警戒対象にならないためか、優雅に食事を楽しんでいる。

「それで、実際の所どうですか？ 織斑さんとあの鳳さんが当たった場合、織斑さんは勝てると思いませんか？」

セシリアの言葉に目を瞑り、考え込む素振りを見せるが、すぐに結果は出て、目を開く。

「恐らく、無理だろうな、実際の話、鈴音は強い、今の一夏では負けは必死だろう」

何か対策を練っておくか……などと言いながらシジミの味噌汁を啜っている。翔がチャリと一夏達の方へ視線を向けると、あちらは中々にヒートアップしているようで、箒が机をバンバン叩き、サバ味噌が乗っているトレーがガタガタと揺れる。どうも一夏にISの訓練をするしないで揉めているらしい。どうも翔が口を挟める話へ移行してきたようなので、口を挟み、事態の收拾を計る。

「一夏に教えるのは私の役目だ！私が頼まれ……」そこまでにしる、箒「……し、師匠」

明らかに不満アリアリです、と言った箒を完全にスルー、箒にこの場を任せていると余計な火種を生むと判断したのか、会話の主導権を翔が握る。同時に、翔が味方についたと勘違いした鈴が口を開こうとした瞬間に、視線で牽制する。この場は完全に翔へ主導権が流れていた。言葉と視線で場を操る翔に、一夏は、相変わらず、すげえ、と感心。セシリアも、流石ですわ……と感心していた。

「一夏に実戦経験を増やさせたいのは山々なんだがな、今は剣を扱うと言う技術に集中してもらいたい段階でな、それが終わった時には鈴音も一夏に実戦経験を積んでやってくれ」

そう言われると鈴音には頷く事しか出来ない。最初から断固拒否と言う姿勢ではなく、今のタイミングは遠慮してくれ、と言う事なら

ば、鈴音としても何も悪い事はない。それが終わればいいだけで、一夏が成長を求めている限り、いつかはそのタイミングが来る、それも遠くない内に、確実に来ると分かっている未来なら待っていていれば良いだけ。

「わ、分かったわよ、放課後は遠慮する、その代わり、放課後の訓練が終わったら一夏の所に行っていていいよね？」

食べ終わったラーメンのトレーを持って立ち上がりながら、何故か一夏ではなく翔へ問いかける鈴音。

「む、別に構わんだろう」

そして何故かその意見を承認する翔。翔の言葉に、いよっし！とガッツポーズをとると、じゃ、そう言うことで、と食器を返しにいき、そのまま食堂から出て行く鈴音。あまりにも自然なやり取りで、突っ込む暇がなかった一夏は今になって突っ込みを入れる。

「おおい！ 何が構わんだろう、だよ！ 俺の予定を何でお前が決めちゃってんの！？」

「む？ すまん、ついな」

「ついですまねえよ！ 済んだら警察とかいらねえよ！」

「だが、暇だろう？」

「うっ、た、確かにやる事はないけどさ」

「ならば良いではないか」

「うーむ、結局そうなるのか？」

翔の肩までがっしりと持ちながら詰め寄る一夏だが、結局最後は丸め込まれる一夏。きつと後で不満そうな顔をしている筈に締め上げられるのだろう、同じ部屋だから逃げる事も出来ない。哀れなり。

ちなみに翔は現在一人部屋なのをいい事に、精神統一やら何やら、同居人が居ては話しかけられる雰囲気ではないような鍛錬をしている。その鍛錬中に翔を食事へ誘いに来たセシリアが精神統一の為に座禅を組んでいた翔に見惚れていたという事があったのは些細な事である。

学生寮に程近い少しスペースの開けた庭のような空間に、真剣を構えた翔が、巻き藁の様な物と向き合っていた。様な物、と表現したのは、巻いてある藁の下には、明らかに鈍い光を放っている鉄の棒が見えているからだ。普通藁を巻きつけるのは、木が一般的であるように思う。が、今翔が向き合っているのは巻き藁（鉄）である。

そして、それと翔との距離は9～10mといった所、日本刀の間合いかから考えるとそれなりに開いている距離。だが、翔が鍛錬を始めた時からこの距離は変わっていない。この距離で如何に速く、重い斬撃を繰り出せるかを突き詰めてきた。その結果がこの巻き藁（鉄）と向き合うと言う結果になったのである。

精神を目の前の物を斬る事だけ集中させ、全身の筋肉に軽く力を入れておく。集中が限界に達したのか、カツと目を見開くと巻き藁（鉄）へ向けて踏み込む、その速度は速く、目の前に居るのが人ならば或いは消えたように見えたのかもしれない、それほどに鋭い踏み込み、そして黒い袴と白い胴衣に包まれた肉体の筋肉が引き絞られ、握られた刀を全力で、且つ繊細に振る、鉄と鋼が接触する甲高い音が一瞬響いた後には、既に刀は振りぬかれ、斬られた巻き藁（鉄）の一部が宙を舞っていた。

「すううう、はあああ……」

そして、残心。静かに刀を鞘へ納めると、手を叩く音が辺りに響く。手を叩いていた人物は、斬り飛ばされた巻き藁（鉄）を持ち上げる

と、翔に近づき、声を掛けてくる。

「相変わらず惚れ惚れするような太刀筋だな」

「千冬か……」

果たして出てきた人物は、IS学園一年一組担任、織斑千冬その人だった。千冬は特に驚く様子のない翔から、巻き藁（鉄）の切断面へ視線を移し、また感心するような声を上げる。直径2cmはあろう鉄の棒の断面は滑らかなもので、研磨を掛けたのかと思うほどの断面であった。

「世界広しと言えども、生身でこれほどの斬鉄が出来る者はまず居ないだろうな」

その刀が名のある名刀ならいざ知らず、な。と続ける千冬。実際、翔の刀はよくよく見てみると刀身の真ん中の部分以外は全て刃が潰してある特殊な刀である。鈍ら所ではない刀だ、物を斬る為には完全にその部分で捕らえるしかない。刀だけに及ばず、剣という物は最も良く切れる部分は切っ先でも根元でもなく真ん中、真芯の部分が良く斬れる。そこで斬る事が最も効率の良い斬撃になる事は分かっている、その部分で捉ええると言う事は途方も無く難易度の高い事である事は明白。

「斬るという行為はそれだけで……」

「業足りえる、お前が口癖の様に言っていた事だったな」

「む……」

自分の台詞を引き継がれ、押し黙る翔に、ふふつ、と笑いかける千冬。千冬が言っていた様に、翔の持論として、斬るという行為は極める事によって、その行為自体が業となる。というもので、その昇

華の結果が先程の斬鉄であり、セシリアとの戦いで見せたビームを斬るという事なのである。つまり翔の意見としては、物を斬る事に大げさな技名などいらぬ、奥義と呼ばれるものなど斬るという単純な行為を複雑化し、それ自体を弱めるだけ、という意見なのだ。無論翔はこれを誰かに押し付けるつもりなどさらさら無く、誰かに言うつもりも無かった。本当に正しい事は自分で見つけるしかない、と言うのも翔の中にある持論の一つであるからである。結局自らが納得し手に入れた強さならばどのような主張でも構わないと言う事。千冬も翔の掲げるその持論を非難しようとは思わぬ。それ所か、ISと言う規格外の兵器が広まってからも、ただひたすらに剣を振り続け、自分の意志を曲げる事無く前を向いて進んできた翔に憧れている。翔に師事したのは何も剣の腕だけではなかったと言う事だ。

「私がくだらない事で悩んでいるその瞬間にも、お前は剣を振り続けていたのだな」

感慨深そうに翔を評価する千冬の台詞に、否と頭を振る。

「人の悩みにくだらない事などあるまいよ、悩むと言う事は人が成長するための段階に來ていると言う事だと俺は思っている」

ただ俺は思い切りが人よりも良すぎただけだ、とクールに笑う。思い切りが良すぎる、つまり、悩む段階が來ても短い時間で決断してしまうと言う事。その意味に気が付いたとき、千冬も思わず、ククッ、と笑い声が漏れる。

「後悔した事は無いのか？」

千冬のその問いかけに間髪入れずに、無い、と答える。その顔は自信に溢れていた。

「後悔など、する必要が無い、今まで俺は俺自身が選択してきた道、それを後悔する事は自分自身を否定する事に他ならない」

自信に溢れ、そう言い切る翔の言葉は、過去に千冬が同じ質問をした時に返ってきた言葉と同じ言葉だった。結局、どれだけ時を過ごそうとも、翔は柏木翔と言う人間の道を違わずに進んできたと言う事だ。その言葉に、何処か満足した千冬は踵を返し、校舎へと歩き出す。

「久しぶりにいい剣を見せてもらった。さつさと寮に戻れよ、柏木」
「承知」

その後、校舎へ入っていく千冬を見かけた者は、今まで見た事が無いほどに嬉しそうな雰囲気と表情だった、と口を揃えて言っている。寮内、翔が自らの部屋へ向かっていると、目の前から目尻に涙を溜めた鈴音が走ってきた。

「鈴音、どうした？」

無視するわけにもいかず、取り敢えず理由を聞いてみる事にする。どうも、怒りながらも悲しんでいるような器用な表情になっているようだ。肩に掛けているスポーツバックを握り締めている手に、これでもかと言うほど力が込められている。

「い、一夏がね！ほんつともう信じられないのよ！？」

何やら妙に長くなりそうだったので、飲み物を調達して何処か座る

場所がある所へ移動する事を提案し、取り敢えず鈴音もそれに同意する。飲み物が調達できて、座る場所もある所、そう食堂だ。食堂に移動した翔は鈴音の話を聞き、鈴音は先程あった事を翔へぶちまけていた。

「フム、なるほどな、明らかに付き合ってくれと言う意味の台詞を、全然別の意味で捉えた一夏を取り敢えず叩いて飛び出した、と」

「これって絶対一夏が全面的に悪いわよね!？」

鈴音は一夏が全面的に悪いと言う意見を全く持つて疑っていないのか、怒りながらも自信満々にそう言い切る。普段からツリ気味の瞳は現在結構大意変な事になっていたが、翔は全く気にせずに、鈴音の悪かった所を指摘する。

「一夏がそう言う鈍い奴だと言う事はお前も承知だったんじゃないのか？」

「うぐっ……た、確かにそうかも知れないけど……」

「それに普通の奴ならばその台詞でも通じるだろうが、一夏に通じるかは疑問だった筈だ」

「うぐぐっ……」

「つまり、今回の事はお前が一夏と言う人間を、ある意味甘く見ていたと言うのがお前の落ち度だろう」

違うか？ と飽くまでも一夏と言う人間と鈴音という人間をよく知っている第三者としての意見を述べる翔、鈴音は二の句を告げない状態へ追い詰められる。正しいと言えば正しい意見にやり場の無い怒りが鈴音の中で膨らみ爆発しかける。

「でもそれは!」「黙れ」……っ!」

「ここで癇癪を起こすのは器量の小さい人間か、ただの餓鬼だけだ」

膨らんだ怒りの爆発が、起爆する瞬間に叩き潰され、気が抜けてしまふ。立ち上がっていた鈴音は、その言葉と眼光に圧され、席に着く。

「自分の非が大きい小さいに関わらず、受け止め、次へ生かす、一時の感情に身を任せるのもやり方だろう、だが、それを続けていると今に大切なものを失う、そうなりたくなければ気をつける事だ」

15歳の高校生が言う台詞ではないが、説得力があるのは確かだ、言葉を失った鈴音に、アドバイスが欲しいなら相談に乗ってやる、と告げると翔は食堂を出て行く。鈴音は言われた事について考えているのか、目の前に置かれているお茶を見つめたままその場を動こうとしない。考えられるなら問題ないと、翔は歩みを止めずに部屋へ戻っていく。

「これを機に鈴音も成長してくれればいいのだが……」

部屋に戻る途中で呟く台詞もまた、15歳の男子高校生が言う台詞ではなかった。

八斬 漢なら選んだ道を後悔しないもんだ（後書き）

原作沿いでいこうと思っているけど、それだと千冬姉の出番があまりも少なすぎるので、無理矢理詰め込んでみた。

今回も後悔も反省もしていない。

ちなみにクラス対抗戦での主人公の出番は少なそうです。

九斬 漢つてのは覚悟を決めてこそ漢足りえる

激情に駆られ、思わず鈴音が一夏を張り倒した日から、数日、クラス対抗戦の前日。この日この時まで、鈴音と一夏は話し合う事は無く、この日を迎えた。そして現在、一夏と鈴音はアリーナのピット内で顔をつき合わせている。

その様子を、翔、セシリア、箒が見ている……いや、その表現には間違いがあった。セシリアと翔は確かに静観しているが、箒は眉間に皺を刻み、翔が止めていないと今すぐにでも一夏と鈴音に噛み付きに行きそうな勢いだった。嫉妬から来るものと考えれば可愛くも思えるが、中々にアグレッシブである。と、翔は思う。

「えーと、鈴、俺、何か勘違いしてんのかな、そうだったとしたらちゃんと覚えてなかった事謝るよ、ごめんな？」

「べ、別にいいわよ、もう……アタシも叩くのはやりすぎだったと思っただから……」

一夏はそう言うのだから一夏なんだもんね……と少し嬉しそうに言っていたが、一夏には何の事か分からずに頻りに首を捻っていた。特に拘れる事も無く、対抗戦前日になって地固まったようだ。あれから鈴音も一夏も考えに考えて、こう言う話し合いに辿り着いたのだろう、話に一枚噛んだ翔としては、鈴音の一つ成長した姿は感慨深いものである。

互いにしこりの無くなった一夏と鈴音に我慢できず、二人の間に入ろうとした箒だが、それは翔に手首を捕まれ、阻止される。箒を止めた翔を箒は思わず睨みつけ、感情をぶつける。

「師匠！ 師匠は私の味方ではなかったのですか！？」

そう感情をぶつけてくる箒に、少し低めの威圧感のある声と、視線が襲い掛かり、勢いを殺される。

「俺は俺を頼って来た者の味方だ、お前も俺を頼って来た者だが、今のお前は酷く醜い」

「私が？」

「そうだ、お前のやろうとしている事は恋敵の足を引っ張り、レーズから失格させようとしているも同然だ、それは酷く醜い」
「っ!？」

その言葉に頭を殴られたような衝撃を受け、箒は言葉を失う。それを見ても、翔は指摘を止めない。ここで止めるのは箒の為にならない、何事も正々堂々、それが箒にはよく似合っているものが、今の箒では魅力は半減と言うよりもっと悪い。

「相手を蹴落とそうとする前に何故自分を磨かない？ 自信が無いのか？ ならば諦めてしまう方が余程建設的だ」

「諦められるものなら……諦めています！」

「ならば己を磨くべし！ 恋も闘いも正々堂々がよく似合う篠ノ之箒へそろそろ戻る時と知れ」

恋敵が居ない時は長い目で自分を見つめ直す時間があつたからこそ好きにさせていたが、そう言った存在が現れた今、そんな猶予は無いとばかりに、翔は箒へ喝を入れる。

自らの師の言葉、有象無象ではなく、昔色々な事を教えてもらった師の言葉だからこそ、箒は比較적取り乱さず聞けたのやも知れない、箒を包んでいた激情は感じ取れないほどに小さくなっていた。その代わりなのか、今はまだ小さいが、しっかりとした意思の炎が瞳に宿った気がする。箒の瞳は濁ってはいなかった。

「すぐには無理かも知れぬが、少しずつ、戻るといい」

「……っ、はいっ！」

「その一步として、取り敢えず宣戦布告してくるといい」

小さいが確かに意思が籠ったような返答を返す箒に満足したのか、恋敵に開戦の狼煙を上げて来いと課題を出す翔、覚悟を決めたばかりの箒には些かハードルが高いのか、顔を赤くさせる。

「それはっ、その、私にはまだ早いと言っかつ、どうか！　どうか猶予を！」

「否、覚悟を決めたなら前へ進むべし」

情けを掛けてくれと言う箒の言葉を断ち切り、箒の背中を押し、一夏と鈴音の前へ押し出す。

箒の鈴音への宣戦布告を外から見守るように見ている翔の傍らにセシリアが寄ってきて声を掛ける。

「案外と、厳しい事を仰りますのね？」

「誰かが言ってやらねばならなかった事だ」

そう言い切る翔にセシリアは、そうですわね、とクスクス笑った。鈴音へたどたどしくも宣戦布告をした箒。その瞳に確かに宿った意思を見て、鈴音も、負けるつもりは無いとそれを受け入れる。

それを見て何の事か分らず首を傾げつつも、開戦とか言ってるし止めなくてもいいのかと頭を悩ませている一夏。そんな三人を差し置いて、クラス対抗戦の対戦カードが決まる。

一回戦　織斑一夏　対　鳳鈴音

クラス対抗戦当日、今回の対抗戦は一夏が出ると言う事で、会場の

席を取るのに一悶着も二悶着もあつたようだが、一夏と共にアリーナのロッカールーム内に居るセシリアと篤、それに翔には関係の無い話だ。

現在一夏は、試合の開始まで時間があるため、ロッカールームの中で翔達と会話し、緊張を解している所。

「うへえ、観客多いだろ……」

「この学園の二人の男子の内一人が出るのだ、おかしい事はあるまい」

憂鬱そうに言葉を吐き出す一夏に、仕方ない事だと翔が声を掛ける。それに便乗するように、セシリアと篤も一夏を激励する。

「私と篠ノ之さんが訓練を手伝ったのですから、負けは許しません事よ?」

「そつだぞ一夏、やるからには必ず勝て、お前なら出来る!」

意識的なのか無意識的なのか、二人とも激励しつつもプレッシャーを一夏に掛ける。セシリアはむしろプレッシャーしか掛けていないような気がするが、そこは気にしない事にした一夏。そこでロッカーに背を預け、腕を組んで何時もの表情の翔から声が掛かる。

「一夏、時間だ、行つて来い、負けて悔しいと思うなら勝て、それだけだ」

「訓練の成果、見せてくださいな」

「勝つて来い!」

何時もの表情で激励している気がしないが、言葉に込められた意思は本物の翔、訓練を見てくれたセシリアと篤、三人の激励を受けて一夏は何となく、クラス代表でもこう言う事があるなら、なるほど

悪くない、と少し思う。

「おう、行つて来る！」

『一組織斑一夏、二組鳳鈴音、両者、規定の位置まで移動してください』

アリーナの空中に、IS甲龍を纏った鈴音、IS白式を纏った一夏が対峙する。

「ふっふっふ、来たわね、一夏、手加減してあげよつか？」

「いらねえよ、んなもん、全力で来い」

対峙した瞬間に挑発の応酬だが、二人の表情は険悪ではなく、楽しそうなのもつと言つならこれから遊ぶ子供のような表情で向かい合っている。

仲直りした二人には最早、全力でぶつかり合う事しか頭に無いように、試合開始の合図はまだか、というように全身をうずうずさせて待つ。

そして、二人も、そして恐らく会場も待ちに待った試合開始の合図が鳴る。

ロッカールーム内モニター前、翔、セシリア、箒は、一夏と鈴音の試合を見ながら意見を交換し合う。

セシリアと箒はモニターを食い入るように見つめ、翔は一夏を送り出した時と同じようにロッカーに背を預け、腕を組んでモニターを見ている。モニターの中の一夏は鈴音の両腕から繰り出される連撃を雪片一本で捌いているが、それも間に合わなくなってきた。

「一夏には一応私が刀の間合いと特性を教えたが、流石にそれを実行させてくれるほど甘くは無いが……」

「基本動作はもう殆ど問題ないようですけど……」

基本的にISにおける戦闘力はISの操作時間によって決まると言ってもいい、どちらかと言うと、この試合で鈴音に何とか食いついている一夏が奇跡的なのだろう。覚えが早いと言つか、かなり驚異的なスピードで一夏は確かに成長している事が分かる。

雪片一本で捌き切るには厳しいと判断したのか、距離を取ろうと一夏が動くと、鈴音の肩に浮いているパーツから、不可視の何かが一夏の身体を吹き飛ばす。何をしたのか筈には理解出来なかったが、その正体をセシリアは知っていたのか解説を始める。

「衝撃砲ですわ、空間自体に圧を掛け、砲身を生成、その余剰で生じた衝撃を砲弾にして打ち出したのですわ」

「利点としては、砲身と砲弾が見えない事か」

セシリアの解説に、翔が冷静な意見を述べる。筈は心配そうにもニターに映る一夏を見つめるだけだ。その場に刹那の沈黙が流れるが、何時も通り冷静な声音、冷静な表情で、とんでもない意見がこの人物から飛び出すのはいたって普通の事である。

「なら見なければいいだけの事だ」

「は？」

「師匠、何を？」

明らかに今おかしい事を言った翔に、セシリアと筈から何言ってるんだこいつ？的な視線が送られるが、翔は全く気にせず、自分の思った事を並べていく。

「見えないのなら、感じ取ればいい、空間に圧を掛ける、そして撃ち出すのが衝撃ならば大気を感じ取って避ければいい、ある意味実弾を避けるよりも簡単な事だ」

そんな事を事も無げに言い放つ翔に、もういい加減にしてくれ、的な諦めの視線が、翔を見つめる。

「そんな事が出来るのは翔さん位ですわ……」

「そんな事が出来るのは師匠位です……」

セシリアと箒に声を揃えて言われた翔は、そんな事は無い、千冬も可能だろう、などと比較対照にならないような対象を上げてくるが、セシリアと箒は全く取り合わないのと言うまでも無い。

三人がそんな馬鹿なやり取りをしている内に、一夏は立ち上がり、覚悟を決めた瞳を鈴音に向け、もう一度打ち合うために、互いが互いに向かっていくが、接触する直前、二人の間に物理的衝撃を伴う光が落ちる。

立ち上った砂塵の中から現れたのは、全身装甲のIS。それを認識した瞬間、会場へ向けて警報と真耶の放送が流れる。

『か、会場内に所属不明のISが出現！会場にいる生徒さんは直ちに避難を開始してください！』

それを聞いた箒はロッカールームを出て行こうとするが、翔に声を掛けて止められる。

「お前の激励は試合へ向けてだけの筈だ、行つて一夏を激励しても何も変わらん、一夏を危機に晒す可能性が上がるだけだ」

「しかし！ 師匠！」

「納得しろ、出来なくてもしろ、そして今自分が本当に出来る事な

のか、していい事なのか判断しろ」

「……わかり、ました」

ロッカーに背を預けたままそう言う翔の言葉に、拳をきつく握りながら了承する箒。この間にもモニターに変化は無く、所属不明のISに一夏と鈴音が応戦している映像が流れている。あのISが来てから数分、この事態について翔は思考をめぐらせる。

（数分経つが、制圧部隊が突入する気配は無い、生徒の安全確保に手間取っているのか、それとも会場に入れない何かがあったのか……こうしていても埒が明かな、とりあえず動いてみるか？）

予想は幾らか立ててみるがどれも断定するには決定的なピースがないと判断した翔は、未だ心配そうにモニターを見つめるセシリアと箒に声を掛ける。

「セシリア、箒、行くぞ」

「行くって、何処へですの？」

「決まっている、今どいう状況なのか把握するために、モニター室へだ」

それだけ簡潔に言い放つと、ロッカーから背を離し、ロッカールームの出入り口へと歩を進める。後ろから箒とセシリアが着いて来ている事を確認しながら、避難している生徒の波の間を縫うように歩き、セシリアと箒が離れないように速度を調節する。

（山田教諭が放送していた事から、今この事態を完全に把握出来るモニター室に織斑教諭がいる可能性が高い、もし居なかったとしても、モニター室にはほぼ確実に現れる筈だ）

そう断定した為にモニター室へ歩を向ける翔。

モニター室の前に着き、ふと一夏と鈴音の事が心配になったが、今の二人なら恐らく問題ない、と半ば確信しながらモニター室の扉を潜る。そこで一番最初に目に入った大型モニターに映った映像は……。

勿論の事、一夏と鈴音が即席の連携を用いながら闘っている姿だった。

九斬 漢つてのは覚悟を決めてこそ漢足りえる（後書き）

前の話で主人公の出番あんまり無いとか言って置きながら、出来上がってみれば主人公出番だらけじゃんと思った。

先の展開ちゃんと考えておかないからこうなるんだと自分を戒めておこう、うん。

十斬 漢なら人生に一度決め台詞は言いたいもんだ

「失礼します、織斑教諭、現在状況はどうなっていますか」

「柏木か……まあ、良いとは言えないな」

モニター室へ入室してきた三人。翔、セシリア、箒を眺め、そう続ける千冬。翔達に、見ろ、と指を指した先には、遮断シールドレベル4、ステージに通じる扉の全てがロックされたと言う内容の表示がされていた。

それを見たセシリアと箒はあからさまに慌てますが、翔から落ち着け、と声が掛けられる。

「二人とも落ち着け、今はこの通り何も出来んが、その内出来る事がやってくるはずだ……時に、この塩入りのコーヒーを作ったのは誰だ？」

明らかに場違いな発言に、セシリアと箒は動きを止め、山田教諭は必死に発言を抑えている様に全身を震わせている。千冬は一瞬だけピクリと口元を動かしたが、すぐに何時もの表情に戻り、犯人の名前を挙げる。

「山田先生だ」

「ええ！？ 何言ってるんですか！？ それは……」

自分の名前が出て来たのが余程不服だったのか、真耶は抗議の声を上げるが、その途中で千冬に口元を覆うように驚掴みにされる。その瞬間は驚いたような反応をする真耶だが、徐々に握りこまれていく手に恐怖を感じたのか、若干涙目になっている。

「山田先生は少しドジな所があつてな、時々やつてしまつ、そうだな？ ん？」

普段と変わらない抑揚の声でそう告げられている事が、真耶には余程怖く映つたらしく、首を縦に振るしかない。その答えに満足したのか、千冬は満足し、改めて三人へ向き直る。セシリアと篤はこの展開についていけないのか、口を開けて呆けているが、翔は何時も通りの表情で、コーヒ―に塩は入れるものではないな、等と言いながら、それを飲み干していた。

こんな状況ではあるが、その翔を見て千冬は何だか少し嬉しくなつた。

「さて、状況が動くにはもう少し掛かりそうだな、行くぞセシリア」
「えっ？ えっ？ 行くつて、何処へですの？」

急に話し掛けられたセシリアは慌てて反応するが、翔の意図を察せていないのか、疑問を投げかける。それに対して説明を始めるが、どうやらセシリアだけに説明しているわけではなく、千冬達にも聞かせるつもりがあつたようで、改めて千冬達を見渡す。

「この状況で教師達が手をこまねいて見る訳もあるまい、既に突入部隊の編成は終わっているはずだ」

どうだ？ と千冬に問いかけるが、無論返ってくるのは、是。それに翔は一つ頷き、続きを話す。

「だが、シールドとロックが原因で突入させる事が出来ない、それが解決され、突入が出来たとしても、部隊を統率し、突入させるには幾許かの時間が必須、そのタイムラグを俺達が埋める。俺とセシリアならば二人しかいない、フットワークは部隊よりも軽いはずだ、

俺達で済むならそれでもいい、それでダメなら突入までの僅かな時間を稼ぐ、どうだ？」

翔の提案に、千冬は考え込む、部隊を突入させるためには、確かにシールドとロックが解除されても数分は掛かる。人数が少ないほど機動力が高いというのは本当の事だ、翔とセシリアならば、突入までの時間を稼ぐ事など容易な事だろう。そう結論付けた所へ会場へ続く扉のロックが解除されたと報告が入る。

「本当にタイミングが良い事だ、会場へ入る事は出来るぞ、倒せるのなら倒しても構わん、あいつらを頼む」

「承知、織斑教諭も、箒が勝手な行動をしない様に見張っていてください」

千冬の許可に、忍び足でモニター室を出て行こうとしていた箒を指差しながら答える。出て行こうとした箒はあからさまに全身をビクン、と硬直させる。心なしか後頭部にでっかい汗が見えるのも仕方ない事だろう。

その箒の行動にため息を一つ落とすと、箒の首根っこを掴み、行動を制限、後生だ、と駄々をこねる箒を完全にスルーして、セシリアを伴った翔はモニター室を出て行く。

「それで？作戦はどういたしますの？」

「ただ斬り捨てるのみ」

「えーと、搭乗者は……」

「その事だが……恐らくあれに人は乗っていない」

会場へ続く道を歩きながら作戦を話す二人の内、翔から驚愕の言葉が出てくる。その言葉にセシリアは一瞬足を止めそうになるが、何

とか歩みを止めない事に成功する。一夏と鈴音を助けるために歩みを止めないセシリアは、翔の顔を見てみるが、嘘や冗談で言っているようには見えない。だが、ISは原則、人が動かす事が大前提で作られた物、無人機など……。とセシリアが意識を思考に傾け様とした時、翔から言葉が飛んでくる。

「考え事は後にしろ、セシリア、今は動かなければならない」

翔の言葉に、セシリアは意識を切り替える。翔を見てみるが、歩みのリズムに乱れは無く、会場へ向けて歩いている。そんな何時も通りの翔に、ふと、彼が慌てている姿とはどんな姿なのだろう？と微かな好奇心が湧き上がるが、今はそんな時ではない。その根拠として、会場へと続く扉が見え、それを、潜り、見えたのは鈴音が衝撃砲を撃ち、それを追うようなタイミングで凄まじい加速を掛けた一夏が雪片を振りかぶっている様子が飛び込んでくる。

セシリアは頭の何処かで、決まった、と考え翔の方を見てみるが、翔は黒いネクタイピンに触れ、既に黒衣零式を身に纏っていた。翔は厳しい瞳でアリーナの中央当たりを見つめている。と、通信。

「柏木、あのISどのような形で構わん、鹵獲しろ」
「承知」

聞こえて来た千冬の声に短く返した所で、あのISが無人機である確立が、ほぼ確信できる所まで数値が上がる。ならば、遠慮する必要は無し、と空へ飛び上がり、セシリアへと指示を出す。

「セシリア、目的は、敵の鹵獲、両手両足、頭を狙うぞ」
「分かりましたわ」

その指示に異論は無いのか、疑問を挟む事無く、セシリアは是と答

える。そして今、一夏が雪片を振りぬき、後退した敵に避けられ、首を掴まれる。その様子を見た翔は瞬間、景色を置いてけぼりにしながら急降下、一夏を掴んでいる腕目掛けて正宗零式のスラスターを稼動させつつ迫る。

「一刀両断！」

「やっと来たか……」

黒と金の閃光が敵のシールドバリアをガラス細工の如くあっさりと突き破り、腕を文字通り断ち斬る。身体が自由になった一夏は翔へ笑いかけるが、問答無用とばかりに、翔の腕により、鈴音の方へ投げ飛ばされる。投げられてきた一夏を受け止める鈴音。一夏は翔へ抗議しようと身体を起こすが、そこへ通信が入る。

「文句なら後で聞こう、今は休んでいる」

「わかった、後は頼むわ」

「承知」

短くそうやり取りすると、翔は敵へと向き直る。その時にはセシリアによって片足を打ち抜かれている所だった。高所から敵の足を打ち抜いたセシリアへと声を掛ける。

「往くぞセシリア、合わせろ」

「承知しましたわ！　まずは、足を止めさせていただきますわ！」

景色を置いていく速度で敵に向かう翔の邪魔をさせないよう、セシリアがBTで牽制を掛け、足を止める。敵へ向かって降って来る牽制のビームの隙間を縫い、肉薄。敵の腕が残っている側の脇に下から正宗をねじ込む。

「このままもって行く、セシリア！」
「了解ですわ！」

脇に差し込んだ正宗を持ち上げるようにして空中へと上昇し、耐久力の限界を迎えた腕は、肩から両断され、正宗を振り抜いた翔はそのまま上昇。スターライトmk?を構え急下降して来たセシリアとすれ違い、セシリアは敵へ急下降で接近、スターライトmk?から放たれたエネルギーは二発、三発と残った足を打ち抜き、敵機の足を完全に破壊、セシリアを追うように続いて急降下してきた翔の正宗が金色のエネルギーの残滓を撒き散らしながら敵機の首を狙い、寸分変わらず破壊。敵機も稼動を停止したのか、地上へと落下していく。翔は正宗を肩に担ぎ、地上で完全停止したセシリアの左後ろに背を向けて完全停止。

「私達に……」
「断てぬものなし！」

そこで計った様に翔の立っている5mほど前に敵機の残骸が落ちてくる。元々派手好きなセシリアは満足そうな表情。翔も何時もの涼しげな表情の中に満足そうな色があった。その現場を間近で見た一夏と鈴音は口をあんぐりと開けて呆然。

「俺、この二人に喧嘩売るとか馬鹿らしくなってきた」
「奇遇ね、アタシもそう思ってた所よ、セシリア一人だけならまだしも……」

そう固く誓う、一夏と鈴音。翔達の少し先へ視線を移した二人には、機能を完全停止させた無残なISの姿が目に入り、ああなるんだ、と自らに言い聞かせていたとこないとか。
ちなみにこの映像を見ていたIS学園一年一組の担任は、あれぐら

い私でも出来るぞ、と周りに居る人間からずれば、要領の得ない事を呟いていたと言う姿が目撃されている。

完全は無傷とはいかなかった一夏の見舞いを終え、千冬は廊下へ出る。が、その瞬間、携帯から着信を知らせる電子音。誰からの着信か大方の予想はついていたため、警戒せずに着信を受ける。

『織斑先生』

「山田先生か、どうだった？」

『はい……それが』

少し言いよどむ真耶、もし、自分の予想したとおりならば仕方のない事だ、と思いながらも耳に携帯を当てながら廊下を歩き出す千冬。向かう先は翔とセシリアに半壊させられ、鹵獲された所属不明のISの分析を行っている場所。千冬が考えるのも同じISの事だった。

『やはりあのISは無人機でした、コアも調べてみましたが……どの国家にも登録されていないものです』

「やはりな……」

真耶の分析結果を聞いた瞬間に、一人の友人の顔が頭に浮かぶ。どの国家にも登録されていないコア、実際はどうだか知る事は不可能だが、今現在現存するコアは467機でその所属も明らかになっっているものが多い。そしてそのコアは、千冬が頭に思い描いた人物意外に製造はほぼ不可能。そこで一つの答えにたどり着いてしまいそうになるが、千冬はそこで思考を止める。答えを出すにはあらゆるピースが足りない。決定的な何かが無ければ答えを出す事は出来ない。

『何か、心当たりが？』

「いや、ない、今はまだ……な」

そう、今は、いずれ決定的なピースが揃った時、答えは出る。確実に。ならばその時まで生徒に危険が及ばないようにすればいい、ただ、それだけの事だ。これからの方針を再確認した千冬は通話を終了し、真耶と合流するために廊下を歩く。

夕食時、学生食堂。

現在、翔、一夏、箒、セシリア、鈴音の五人は一つのテーブルを囲んでいた。そしてその話題の中心は、専ら無人機のISと、翔とセシリアの事が話題の中心になっていた。

「しかし、凄かったよな、あの時の翔とセシリア」

量の少ない夕食を突付きながら、呟く一夏に、同じく間近で見た鈴音も同意する。モニターで見た箒もその凄さは分かっているのか、頻りに頷いている。

「正に電光石火、って感じだったもんねえ……」

「あれくらい当然ですわ」

一夏と鈴音の言葉に、当事者の一人であるセシリアは胸を張って褒め言葉を受け取っているが、もう一人の当事者である翔は静かに夕食を口に運んでいる。そこで、頷いていた箒が、自らの師匠を差し置いて賞賛を受け取っているセシリアが何となく気に食わなかったのか、それに反論の声を上げる。

「だが、今回は師匠が相方だからこそ出来たのではないのか？ 牽

制のために撃ったビームの雨など師匠くらいでなければ潜り抜けて一撃当てるなど出来まい」

「そ、それを言われてしまうと……」

地味に痛い所を突かれたセシリアは言葉につまり、一夏と鈴音はなるほど、確かに、と頷く。結局翔が居なければ成り立たなかったコンビネーションだと話が落ち着きそうな時に、静かに食事を口に運んでいた翔から声上がる。

「まあ、そう言っただけでやるな、確かに未熟な所はあるが、セシリアは確かに優秀だ、ある程度の優秀さがあって射撃武器が主体のセシリアならば背中を預けても不満は無い、だからこそ、させるに任せただけの事、落ち度は無い」

「あ、ありがとうございます……」

そう言っただけでセシリアを褒める翔に、頬を紅潮させ、どもりながらお礼を言うセシリア。そんなセシリアを鈴音と箒がニヤニヤと笑いながら凝視。一夏はうーんと考え込み、疑問が出て来たのか、翔へと疑問をぶつける。

「俺でも翔達と同じような事が出来るのか？」

「俺と一夏で、と言う事か？」

「そうそう」

「ほぼ確実に無理だ」

翔から即答で帰ってきた答えに、自分が未熟だと判断したのか、あからさまに落ち込む。それを見ても何時もの様に冷静な声音で一夏の考えている事を否定する。ちなみにセシリアは箒と鈴音にからかわれ、赤くなっているが、翔は自分には関係のない事だと判断し、スルーしている。

「勘違いするな一夏、お前が未熟だからと言う事ではない、今の前は普通では考えられない速度で成長している、だが、俺と合わせるのは成長しすぎたと言うだけの事だ」

「どういうことだ？」

翔が言っている事を理解できなかった一夏は翔へと聞き返す。つまりだ……と翔は説明に入る。

「俺も一夏もどちらも接近武器だ、コンビネーションを組むに当たってこれが弊害になっている、接近武器同士のコンビネーションは実力が離れすぎている者達が実力が近いもの同士で行わないと難しいものだ」

「近いもの同士つてのは分かるけど、離れすぎてるつてのは？」

「離れすぎている者同士のコンビネーションが可能なのは、実力の高い者が低い方に合わせるからこそ可能と言う意味だ」

その説明で、なるほど、と一夏は納得する。実力が離れすぎているならば、実力が低い方は実力のある者の胸を借りる事が出来るという事。だが、既に一人でそれなりに実力のある者になると、高い方について行く事は可能かもしれないが、合わせる事までは無理、つまり高い方にとっても何処でフォローを入れるべきなのか判断がつかなくなると言う事になる。

「つまり、お前は俺のフォローが無くとも問題ないレベルまで成長できたと言う事だ、今回セシリアとのコンビネーションが可能だったのはセシリアが射撃主体だったからだ、コンビネーションと言う上では射撃と格闘は相性が良い、ある程度実力の差は無視できると言う訳だ」

「なるほどなあ……」

自分は成長している、と昔師と仰いだ男から言われ、安堵と共に納得する一夏。近接格闘同士ならば実力が近い物同士ならばコンビネーションが可能、と、そこで一夏に純粋な疑問が生まれる。

「千冬姉となら出来るのか？」

「俺と千冬が、か？」

「ああ」

と一夏が疑問を投げかけた所で、一夏の頭に衝撃が走る。その原因は、食堂に遅くまで残っている生徒を寮へ帰すために見回りに来たと思われる千冬の握り締められた拳が原因だった。

「何を当たり前の事を聞いている、馬鹿者、出来るに決まっているだろう、それ以前に、私とコンビネーションが出来る接近格闘専用IS乗りなど、世界を探しても柏木以外にいるわけが無い。それと、学校では織斑先生と呼べ」

「ハイ……オリムラセンセイ……」

千冬の台詞に箒と鈴音にからかわれ、小さくなっていたセシリアには聞き捨てならなかったのか、千冬に厳しい視線を送る。その視線に気が付いたのか、千冬は余裕の笑みで持ってセシリアを見返す。

「何か言いたい事がありそうだな？ 小娘」

「いいえ？ 特に言いたい事ありませんわ？ 織斑先生」

くつくつく、おほほほ、と笑いあう美女と美少女の背中には確かに何か幻影が見えたと箒と鈴音は後に語るが、自分が原因になっているなど微塵も思っていない翔は、食べ終わった食器を片付け、一夏に射撃武器と格闘武器の相性、射撃武器同士の相性、それらの相性

がいい理由について講義していた。無論、冷静にそんな事をしてい
るのは翔だけで、一夏は翔の話を現実逃避の居場所として聞きなが
らも、視線は時たまセシリアと千冬へ向けられ、篝と鈴音に至って
は一夏にしがみつき、震えていた。

（ふむ、篝も鈴音も積極的でなによりだ）

自分の恋愛事など露ほども考えずに、他人の恋愛事情に対して盛大
に勘違いしている翔がこの場では一番幸せな存在なのだろう。

十斬 漢なら人生に一度決め台詞は言いたいもんだ（後書き）

うーむ、ここから先の資料になるはずだった原作を貸してしまっている事に気が付いた俺、アニメ版を参考に書こうかな……
って言っても変わるのシャルロットとラウラの転校タイミング位ですけどね！

十一斬 漢は時に物事を冷静に見なくちゃならない

「一夏のメール見てるけどさ、お前等楽園らしーじゃん？」

「何処がだよ」

「楽園？」

現在一夏と翔は、一夏が実家の様子を見に行くというので、それに着いて行き、一夏の実家を見に行ったついでに中学からの翔と一夏の友達である五反田弾の家へ寄ろうと言う話になり、現在、弾と一夏は格闘ゲーム、翔は自分の番が回ってくるまでの間、短い読書タイムという状況だったが、弾の台詞の意図が読めず、顔を上げる翔と、何となく意図は読めるが自分がその状況に甘んじていないという抗議の声を上げる一夏。

「またこいつらは……まあ、いいや、招待券とかそういうのねーの？」

「ねえよ、馬鹿」

「文化祭でもないのにある訳ないだろう」

弾の言葉に簡潔に返す一夏。全く持つてその通り、正論を返す翔。この辺りは性格だろうか。まあ、いいけどさ、と言いながらゲームへ意識を向ける弾。

「まあ、でも鈴が転入してきてくれてよかったよ、話す奴少なかったしなあ」

「鈴か、鈴ねえ」

「む、この台詞で鈴音がどれだけ喜ぶか……」

何やら意味有り気な笑みを一夏に向ける弾と、この場に鈴音が居な

い不憫さに、少し同情の目をIS学園の方へ向ける翔。二人の態度に疑問を抱きながらも次の戦いの為のキャラクターを選択する一夏。ちなみにさつき勝ったのは弾。

「一夏、次は俺の番だったのだが……」

「あ、悪い、もうキャラ選んじまった」

「まあ、別に構わんが……」

「何やってんだよ一夏あ、せっかくリベンジのチャンスだったのに
よお」

意外な事に、柏木翔、ゲームが案外と好きな人物で、格闘ゲームもそれなりに好んでおり、成績的には弾は翔に負け越している。

相性なのか一夏は翔に勝つ事もあれば、弾に負ける事もある。選手交代がないままに、次のラウンドに入ろうとした時、弾の部屋の扉が蹴り開けられる。そこには、適当に纏め上げられた髪をヘアバンドで固定し、肩紐が片方ずり落ちたキャミソールにホットパンツと言いついかにも部屋着と言う格好の女性、弾の妹、五反田蘭が立っていた。

「お兄い、お昼ご飯出来たよ、早く降りてきてよね」

それだけ言っ立ち去ろうとしたが、弾の奥に誰か居る事に気が付く、その人物が弾を避け、挨拶してくる。

「よお、蘭、お邪魔してる」

「あ、一夏さん、いらっしやい、一夏さんもお昼ご飯食べて行ったら？」

「ああ、ありがたく頂くよ」

それじゃ、と言って蘭が廊下の奥へ消えようとした時、一夏の更に

奥にもう一人居る事に気が付く。

（ああ、もう一人分作らないと……）

等と思いながら、その人物を確認するために数歩戻る。何故か無駄ににやついている兄の顔を蹴り飛ばしたくなったが、客人の前でそんな事をするわけにはいかない。

「おい、蘭来てるぞ？」

その一夏の呼びかけに顔の半分が隠れるくらいまで本を持ち上げ読書に耽っていた翔が本を下ろし、久しぶりに聞く名前に反応する。

「む？　蘭か、邪魔しているぞ、元気にしていたか？」

そう言つて本を置く翔の姿を確認した瞬間、蘭の頬が赤く染まり、自分の格好を見下ろし……

「し、翔さん！　来てたんですか！？」

何やらてんぱりながら、壁の向こうに隠れる蘭。翔の視界から外れた蘭は、急いで肩紐を直し、ホットパンツのボタンを締め、と、今現在蘭自身が出来る最低限の身だしなみを高速で整えていたのだが、そんな事翔は知る由もないので、ふむ……と不思議がっていた。

「一夏が家の様子を見に行くと行ってな、その付き添いで着いてきた」

「そ、そうなんですか……翔さんも、良ければお昼ご飯、食べていってくださいね？」

「うむり、ありがたく馳走になる」

冷静な顔で今明らかにおかしな返事をした翔だが、基本的にプライベートではこんなものと皆分かっているのか、誰もそれについては指摘しない。そしてやっと姿を見せた蘭は最低限身だしなみを整えた美少女となって立っていた。

そして、翔が昼食を食べていく事が決定すると、よしっ！ とガッツポーズと共に気合を入れ、廊下を歩いていった。

「俺は勘弁して欲しい……」

「仕方ないだろ、身内が誰を好きになるかなんてこっちが決められないんだし」

「ふむ……弾、この本は何処の出版社だ？ 気に入った」

「はぁ……」

「これだからなあ」

「む？」

日頃から、あいつが弟とかいやだぜ俺は、と言い続ける弾に一夏が諦めると肩に手を置くが、翔は呑気に気に入った本の出版社を弾に聞いてくると言う、何があつたのか全く気が付いていない態度で二人の頭を悩ませていた。

五反田食堂、店内、一夏と翔は、出された昼食をありがたく頂いていた。弾も同じように食べているが、彼の妹、蘭は何故か翔達が食べているのをじっと見ているだけで、自分は食卓に付く気はないようだ。そしてその服装は、何故か先程の服装とは違って外へ出かける事を意識したような服。と、そうこうしている内に、翔が食べ終わり、手を合わせる。

「馳走になった」

「お、お粗末です……」

「腹が減っていてさつきは言えなかったんだが……着替えたのか？」
「えっ？あ、ああ、まあ、はい」

その翔の台詞に、蘭の頬はさあ、と赤く染まり、台詞もただたどしくなる。一夏と弾からは今更かよ的な視線が送られる。がそれに気付いているのか否か、何時も通りに会話を進める翔。

「ふむ、俺は服と言う物には疎いのだが、よく似合っていると思うぞ」

「えっ！？　ほ、ほほほ、ホントにそう思いますか！？」

身を乗り出してまでそう聞いてくる蘭に、少しも焦る事無く、肯定の意を示すように首を縦に振る。それを見て、いよっし！　と小さくガッツポーズをする蘭。翔に褒められたのが余程嬉しかったのだろう。そして翔は何やら満足そうに一つ頷く。

（うむ、蘭もいつまでも子供ではないという事が……デート為に身だしなみを整える、これが青春と言う奴か……）

（とか考えてんだろっなあ）

（ああ、まず間違いないぞ）

食事を勧めながら目で会話する弾と一夏。実際その通りの事を考えてはいるが、それを口に出さないのは、指摘すれば蘭が恥ずかしがるだろうという翔の配慮である。確かにその心遣いは素晴らしいものだろう、女性にとってそう言う心遣いは高評価だ、しかし、その使い方を根本的に間違えているのがこの柏木翔と言う男である。こうして一見噛み合っている様に見えて致命的なまでに噛み合っていないやり取りは終了する。

「えっと、翔さん……ゆつくり、していつてくださいね？」

「？ああ、時間が許す限り、ここに居よう」

「は、はい！」

翔の何気ない台詞に、蘭の顔は嬉しそうな笑顔だが、これ以上ないほどに赤く染まる。蘭の発言にも疑問を覚えた翔だが、その態度にも更に疑問を深める。翔の言い回しは恋する乙女にとって、曲解するには十分な威力を持つ言い回しが多いのに本人が気が付いていないのが致命的な所でもある。

「おい、蘭の奴ぜってー変な受け取り方したぞ……」

「翔もいい加減気付いてくれ……」

蘭と翔が会話している間に食事を終えた弾と一夏が小声でそうやり取りする。一夏が気付けとっているのは、聞く者が聞けば情熱的とも取れる言い回しを多用する事についてである。箒と鈴音については翔が骨を折っているが、結局持ちつ持たれつ、と言う事だった。

翌日、明らかに箒の雰囲気落ち込んでいる。表面上は何時も通りだが、完全に覇気がない。それを見た翔は一夏へと問いかける。

「一夏、昨日何かあったか？」

「いや？特に……ああ、そう言えば箒が他の部屋に移った」

「そつか、なるほどな」

間違はなく原因はそれだろう、と翔はほぼ確信に近い領域で状況を把握する。だが、これで箒にとっても鈴音にとっても本当の意味で状況はイーブンになったという事、これぐらいでへこたれているなら、箒はそこまでだったという事。そう考えを改め、箒のショック

は一時的なものだろうと、症状を断定する。

「何かあったのか？」

「いや、何でもない、しかし、今日は妙に騒がしいな……」

「だよな、俺もそう思ってた」

二人で何時もと様子の違う朝に、二人は首を傾げる。噂話と言うものに疎い二人に内密で交わされていた話は女子生徒の間だけで広まっ
ていて、二人の耳には一切入ってこない。その入ってこない話と言
うのは、今度の学年別トーナメントで優勝した者は織斑一夏、柏
木翔、このどちらかと付き合う事が出来るというもの。

「まあ、皆楽しそうだ、わざわざ掘り下げる事もあるまい」

「そうだな」

この噂が二人の耳に届く事はこれから先もまずないだろう。と、そ
こで、教室の引き戸が開く独特の音が響き、続いて人の足音が二つ、
具体的に人物名を挙げるならば、一年一組担任、織斑千冬と副担任、
山田真耶のものである。時間は既にS H R開始の時間を指していた。
千冬が教壇から少し離れた入り口側、つまり何時もの位置に立つと、
檄を飛ばす。

「S H Rは始まっているぞ、さつさと席に着け！」

その声と共に生徒達は一斉に席に着く。全員が座り終えた事を見届
け、真耶にS H Rのバトンを渡す。生徒側からの視点で表すならば
教卓の後ろに立った真耶が本日の連絡事項を述べる。筈だが、今日
はどうも通常の連絡事項ではなかったようだ。

「今日は皆さんに嬉しいお知らせがあります」

真耶から告げられた何時もと違う始まりの言葉に教室内の生徒は動揺したであろうが、それを表に出す事はない、理由を挙げるならば、教室内に居るもう一人の教師が原因だと言っておこう。生徒達の動揺など知る由もない真耶は自らの言葉の続きを続ける。

「今日このクラスに新しい転入生が来ました、入ってきてください」

真耶に告げられた言葉に驚愕する暇もなく、一人の生徒が入室を許可され、教室の引き戸が引かれる音が教室内に響く。音と共に教室に足を踏み入れた人物は、予想外中の予想外、金色の髪に、優しい瞳の、IS学園について最近出来た男子学生服を纏った生徒だった。その事実を認識する前に金色の髪と優しい瞳が印象的な男子生徒は自己紹介を始める。

「シャルル・デュノアと言います、フランスから来ました、よろしくお願いします」

「お、男？」

「はい、ここに僕と同じ境遇の方が二人いらつしゃると聞いたので、ここに……」

その事実を認識した一年一組の極一部を除けた大多数の声が爆発。そして千冬に一括され、静まると言うお決まりのパターンを消化していた。ちなみに、極一部とは言ってもないが、箒とセシリアである。そして、三人目の男子生徒に、一夏も驚きと安堵の声を上げる。が、この教室に居る最後の男子、柏木翔だけは、この自体を冷静に見つめ、疑問を抱いていた。

（解せん、時期が遅すぎる……男子でISを起動させられると言う事が分かったのなら何故もっと早くここへ来なかったのか……）

そこまで考えて、考えていても埒が明かないと結論を出し、思考を切り替える。純粹に新しいクラスの間が増える喜びを感じた一人の人間として。そうして思考を切り替える間にも教師、千冬の言った内容を頭に刻んでいく、二組との合同実習、着替えて第二グラウンドに集合。

「柏木、デュノアの面倒を見てやってくれ」

「承知」

大勢の生徒が居る前での、千冬が出来る精一杯の頼みを、躊躇もなく受け入れる翔。それを聞いた千冬は、ほんの一瞬、嬉しそうな笑みを漏らす。次の瞬間、何時もの表情へと戻っている。無論、そのやり取りに気が付いたものは居ない。転入してきた男子生徒、シャルル・デュノアが一夏と翔へ話しかけてくる。その物腰は非常に柔らかく、紳士と言うに値する雰囲気だ。

「えっと、君が柏木君？」

「ああ、そしてこっちが織斑一夏だ、この場合は簡単に済ませればいいだろう」

「そうだな」

「？」

即座に移動を開始しようとする一夏と翔に、二人が何をそんなに急いでいるのか分かっていない様子のシャルル。数秒経っても動こうとしないシャルルに焦れたのか、千冬から面倒を見る事を承諾した翔は無視するわけにもいかず、シャルルを小脇に抱える。

「えっ？」

「スマンが、我慢してくれ」

自分の状況を一瞬で判断したシャルルは、口元を明らかに悲鳴を上げる前の形にしていた為、それを封じるべく、悲鳴が漏れる前に比較的小さい声で、シャルルに謝罪を送る。翔の声にはつとした表情の後に頷いて静かになるシャルル。その頬は気のせいかもしれないが赤に染まっているように見える。

「おい、翔、早く移動しないと」

「む、そうだったな、デユノアよ、しばらく我慢……」

「シャルルでいいよ」

「そうか、ではシャルル、スマンがしばらく我慢してくれ」

翔の言葉に肯定の言葉を返し、翔の小脇でおとなしくなる。そのシャルルの様子に満足したのか、一夏と共に教室を出て行く。そこで何時ものように疾走しつつ意識の少しを思考へと傾ける。器用な人物なら誰しも少なからず持っている並列思考マルチタスクと呼ばれる技能だ。

（男ではどうやっても感じる下心がない事、抱え上げた時の反応、何より標準的な男子では考えられない体重、やはりそう言う事なのか……？）

今日も大多数の女子生徒から追いかけられながら、思考を深めていく翔。だが、それも中断せざるを得ないほどに狭まる女子生徒の包囲網。

「解せんな、日に日に包囲の戦法が柔軟性を増していく……」

「そんなこと言ってる場合か！ こつちだ！」

「何で皆は僕等を追いかけるのかな？」

そのシャルルの純粹な疑問に、一夏はシャルルが自分の置かれてい

る状況を把握できていないだけと判断したようだが、翔は自らが立てた仮説をより信憑性のある仮説へとシフトさせていた。

十一斬 漢は時に物事を冷静に見なくちゃならない（後書き）

女性の服の事はさっぱり分かりません、蘭が話の中でしていた服の名称に自信が無いのでスルーしていただけると幸いです。

と言う訳で、シャルロット登場です。本格的に順番があるのは次の話からなので、シャルロット大好き！と言う方は次の話までお待ちください。

ちなみに作者もシャルロットは好きです。千冬とどっちがと聞かれると死ぬほど悩むぐらいのレベルです。

うん、どうでもいいですね。

十二斬 漢なら許容出来る失敗には寛容であるべき

第二グラウンドの更衣室、そこに、翔、一夏、シャルルは何か女子生徒達の包囲網を突破して到着する事が出来たが、授業開始までに、高速で着替えて何とか間に合うと言う時間。翔と一夏はすぐに着替えに取り掛かろうと、制服の上着を脱ぎ捨てる。

相変わらずの翔の肉体に微妙にげんなりする一夏と、小さく悲鳴を上げて二人に背を向けるシャルル。

「ん？どうしたんだ？ 早く着替えないと時間やばいぜ？」

「う、うん！ 着替えるよ！ えと、ふ、二人とも、あっち向いててね？」

「まあ、人の着替えをじろじろ見ようとは思わないけどさ」

一夏とシャルルのやり取りに、静かに耳を傾けながら、翔は自分の着替えを終えていく、同時に、シャルルが来てから考えていた予測が、ここまでの行動などを総合して考えると、確信のレベルまで達していた。

（ほぼ間違いない、シャルルは女性……だが、その目的が分からん、いくつか予測は立てられるがな……）

そう考え、着替えを終えた頃には、シャルルも着替え終わっていて、一夏に疲れたような笑みを向けていた。

（だが、どの道今の俺のやる事は変わらんか、それを知ったのならフォローするのみだ）

人柄を観察している分には、シャルルは自分達に害をなさないとは

思えるが、世の中には起こると思っていなかった事が起きるなんて事がある事を翔は知っていた。だからこそ、簡単に結論を出す。同じクラスの仲間なら、フォローし、助けてやる。自分達の障害にもしなるならば、その時に考えればいい。

そうこうしている内に事情を知らない一夏が男だと思い、シャルルに話しかけている内容に、シャルルはこれ以上無いほどに顔を赤くさせていた。

「一夏、俺とシャルルは先に行っているぞ」

「え？ 何でだよ、何時もは待っていてくれるじゃん」

「よく見ろ、そんな時間はもう無い、何時もは余裕があったから待っていただけだ」

シャルルの手ではなく手首の少し上辺りを掴み、くいつと軽く引つ張り、丁度シャルルからは一夏の身体が見えない様、さりげなく翔自身の身体で隠す。そして時間が無いと顎で時計を見るよう一夏に促し、グラウンドの方へ向け、翔は歩き出し、シャルルはそれに引きずられるよう歩く。そして、シャルルと翔の背後からは、じ、時間があー！！ と叫ぶ一夏の声が聞こえて来た。

「えーっと、良かったのかな？」

「構わん、時間の管理が出来ないと将来困る、甘やかしてばかりいられん」

「でもそれって、見方によってはすっごく過保護だよ？」

「む……」

普通の人が聞くと、ともすれば薄情とも取れる台詞だが、シャルルはそう取らなかったようで、ふふっ、と微笑みながら好意的な言葉を返す。中々悟られない翔の厳しい言葉の裏にある確かな感情を短い時間でも感じ取ったようなシャルルの言葉に、翔は二の句を継げ

なくなる。その翔の様子に、間違っではないなかったと思ったのか、更に嬉しそうに微笑む。

「ねえ？」

「何だ？」

「名前、翔って呼んで良い？」

「好きにしろ」

簡潔にそう答える翔に、何が嬉しいのか、嬉しそうに微笑み、うんとこれまた嬉しそうに返事を返すシャルル。翔は何時も通りクールな面持ちで、シャルルの腕を引き、グラウンドの入り口が見えたので、腕を放す。が、力強く引っ張られていた力が急になくなったのが悪かったのか、グラウンドへ入った途端、シャルルがよろけ、前方へ転倒しそうになる。

「うわわ！」

地面に打ち付けられる事を回避できないと悟ったのか、無抵抗のまま地面へと吸い込まれていくが、次の瞬間シャルルが感じたのは地面の冷たい固さと痛烈な衝撃ではなく、確かに硬いが、柔軟性と温かみのある硬さと軽い衝撃だった。そして極めて近い位置にある翔の黒い髪と鋭い黒の瞳。自分がどういう状況に置かれているか理解した瞬間、シャルルの顔は一瞬で紅色に染まる。

翔としては、シャルルがこけそうになった為、とつさに手を引きその転倒を止めようとしただけなのだが、思った以上にシャルルが軽く、手を引いた時に翔の方へ引かれてきたので、それを受け止めただけなのだが、シャルルにしてみれば、手を握りこまれ情熱的に抱き寄せられたようにも捉えられる。と言うか、構図だけならば正にそんな感じだ、翔の顔に羞恥心が無い事以外は。

「あつ、あう…」

「問題ないか？」

「う、うううん！　ぜ、全然大丈夫！」

シャルルより少しだけ高い位置から見下ろされた黒の瞳が、シャルルの瞳を見返し、普通の男子よりも少し低めの、ある種の安心感を感じる声で心配するような声が掛かる。何とか、シャルル的にはもういっぱいっぽいので、大丈夫大丈夫と、オウムのように繰り返す事しか出来なくなっている。シャルルの言葉を信じたのか、今度はしっかり立てるよう、足に地面がしっかりついているのを見届け、そつと身体を離す。

見方によつては、離れたくない、と訴えているような離れ方に、何だかシャルルは色々駄目になっている。翔はシャルルがきちんと立っている事を確認し、うむり、と一つ頷き、皆が集まっている場所へとシャルルに声を掛け、足を動かす。

ちなみに、翔がシャルルを助けた辺りから、女子の一部が原因不明の出血を起こし、セシリアと千冬は原因不明の苛立ちを感じていたとか。

「本日から実習を開始する、まずは戦闘を実演してもらつ」

千冬から実習の内容が発表される、そしてあの後結果的に遅れてきた一夏の頭にはしっかりと千冬からの制裁が落ちていた。

「鳳、オルコット」

「はい」

「は、はい！」

「専用機持ちならすぐに準備できるからな」

千冬に呼ばれた二人、鈴音はやや不満そうに、何でアタシが、と呟き、セシリアは特に何か言う事も無く、前へ出る。鈴音は非常に面倒臭そうな表情だが、セシリアはそんな鈴音に苦笑しながらも小声で鈴音に発破を掛ける。

「そう仰らずに、鈴さん、織斑さんにいい所を見せるチャンスではなくて？」

セシリアから告げられた台詞に、はっと瞳を大きく見開く鈴音。先ほどとは違い、やる気が全身に漲っている鈴音の様子に、少しおかしそうにクスクスと笑うセシリア。案外といいコンビなのかもしれない。

「实力を見せるいい機会ね！専用機持ちの！」

そう自信満々に言い切る鈴音に、一組と二組の生徒の大半は呆れながらも苦笑。女子が大勢並ぶ中、3人の男子で固められた一角にもその様子は見えていた。鈴音の様子の変わりようの原因が何となく理解できたのか、少しおかしそうに笑う翔に、珍しそうな顔をする一夏。

「ねえ？オルコットさん、さっき何て言ったの？」

「さあ？」

「ふっ、さあな」

純粹に疑問を翔と一夏にぶつけるシャルルに、一夏は予想もつかないと首を傾げ、翔はほぼ確信しているが言うつもりは無いと言う様に、クールな笑みで惚けてみせる。一夏は本当に予想がつかないようだ、翔のその反応に、知っているが教えないという空気を感じたのか、少しシャルルは頬を膨らませる。

「翔は少し、意地悪だよ」

「そんな事は無いと思うが……？」

「僕には教えられない事なんだ……」

「教える教えないも、俺は知らないと言っている」

シャルルが仕掛けてきた誘導尋問を華麗にかわし、クールに笑みを浮かべる翔に、やっぱり、意地悪だ、と言いながら眉をハの字にしてそっぽを向く、そしてそんなやり取りをしている二人に、呆然とした一夏からもれる眩き。

「何か、俺を置いてけぼりで仲良くなつてないか……？」

何となく友情が育つ速度に差異がある、と思つてしまった一夏の眩きなど関係なく、状況は進み、鈴音が一頻り気合を入れ終わった次は対戦相手が気になったようで、セシリアに視線を送っている。その視線を受けて、苦笑しつつも悠然と受け入れているセシリア。何となく翔や千冬に似て来ている気がする。

「で？対戦相手は誰？アタシはセシリアでも構わないけど？」

「それならそれで私も構いませんが……」

どうなのですか？と問う様に千冬へ視線で問いかける。最近かなり落ち着いてきたセシリアに、千冬は対応のしやすさと同時に、あしらい難いしたたかさを感じてきた。そしてそれは、翔へ近づく可能性のある敵が増えたと言う事。起きた事実を受け入れ、それに対応して動く、つまり、決まった事、過ぎた事に対して一々気にしないと言う態度は翔の中で好感を感じられる態度だと言う事をセシリアは理解してきていると言う事に他ならない。

「慌てるな、対戦相手はもうすぐ来る」

千冬は頭の中でセシリアのプロフィールに要注意人物と赤い判子を大きく押す。と、同時に空から慌てたような声が地上に落ちてくる。空に浮かんでいた一つの点は制御を失ったように落下してくる。そしてその点、いや、人物、山田真耶は何かしら謀ったのかと思えるように翔目掛けて落下してくる。

「あわわわ！ ど、どいてくださーい！」

真耶の警告もむなしく、翔は反応できていないのか、それとも態となのか図る事は出来ないが、真耶の落下地点から退く気配は無い。そして何の問題もなく、衝突。それなりの質量のものが、それなりの速度で落下してきたため、グラウンドに砂塵が立つ。セシリアやシャルル、一夏その他諸々の人物はこれ以上無いほど慌て、顔を青ざめていた。それも当然だろう、ISも展開していない人間が落下してきたISを纏った人間と衝突したのだ、無事で済む訳が無い。

「おい、柏木その助け方はどうかと私は思うんだが……」

千冬だけは何時も通りクールな表情で、立ち上がっている砂塵に向かって話しかける。

砂塵が晴れた瞬間に生徒達が見たのは左手にISを部分展開し、真耶の頭を驚掴みにして持ち上げている翔の姿。それだけ見れば非道極まりない絵だが、今回は真耶にも非があるためか千冬は何も言わない。周りの生徒はあまりにショッキングな絵に驚愕を隠せていない、無論、一夏、シャルル、箒、セシリア、鈴音もそれに漏れていない。

「むう、つい持ちやすいと思ってしまったもので」

「しかし、部分展開か、展開速度もかなり速くなっているな」

「それは良いんですけど、早く降ろしてくれませんか？ 柏木君、不自然なまでに首が痛いんですけど……」

呑気にそう会話する三人にも開いた口が塞がらない生徒達。三人のうち一人がこれまた呑気に、む、すみません、などと謝罪しながら、掴んでいた頭を離す。

「オルコット、鳳、今回の対戦相手だ」

特に何事も無かったように話を進める千冬に、多数の生徒は突っ込みを入れたかっただろうが、怖かったのか、誰も言葉を発する事は無く、模擬戦闘が始まる。二体一では、と鈴音が騒ぎ出すかとも思われたが、衝撃的な映像により、その余裕すらなかったようで、おとなしく指示に従い模擬戦に入る。セシリアは初めから反論など無かったため特に問題なく指示に従っていた。

千冬から切られた開始の合図と共に、三人は空へと上がり、数秒の対峙の後、武装を展開、戦闘へ移行する。

鈴音が衝撃砲を使うのを見て、セシリアもBTを使い、数による射撃戦への援護に回る。

「デユノア、山田先生が使っているISの解説をして見せる」

「えっ？ あ、はい」

三人が戦闘を始めたのを見届け、いいタイミングだと思ったのか、シャルルにISの解説を指示する。それにより、ショッキングな映像から、何事も無かったように始まった模擬戦闘、という一連の流れに着いて行けず、呆然としていたシャルルに意識が戻り、言われた通り解説を始める。一夏、箒、その他の生徒は、翔を除いて聞いているのかどうか怪しい所ではあるが……

「山田先生のISはデュノア社製、ラファール・リヴァイヴです」

セシリアのBTで真耶の行動を制限し、鈴音の衝撃砲でダメージを与えようとする作戦だが、その全ては今の所巧みに回避されている。上下左右、三次元的な空間を把握し、回転、加速、減速、停止、あらゆる手段でもって弾幕の包囲網から抜け出し、ライフルからの一撃で追い詰めていく。

「第二世代開発機の最後期の機体ですが、その性能は初期の第三世代にも劣らないものです」

回避を終えた真耶は機体を反転、ライフルをセシリアへ向けて連射、銃弾はセシリアが回避する方向へ放たれ、セシリアの回避先を誘導させるような射撃。次の弾で回避した先には体勢を立て直した鈴音がそこに存在、そして弾を避けたセシリアが鈴音に激突。

「現在配備されているISの中では、最後発でありながら世界第三位のシェアを持ち、装備によって格闘、射撃、防御と言った全タイプに切り替えが可能です。」

その間に真耶はライフルをしまい、着弾した後の効果範囲が広いグレネードを展開、鈴音とセシリアが固まっている所に撃ち込み、二人は墜落、グラウンドの地面にもみくちやのまま激突。

「あんだねー、何面白いように回避先読まれてんのよ!」

「これが教員の實力と言ったものですか……」

「何悟ってんのよ!？」

二人がもみくちやになっている前に、ISを纏った真耶が降りてく

る。それと共に、千冬もセシリアと鈴音の前に立ち、何のための模擬戦闘だったのかを明らかにする。

「これで諸君らにも教員の实力が分かっただろう、以後は敬意を持って接するように」

千冬の台詞に照れ臭そうに笑う真耶。普段の姿からは推し量れなかった真耶の实力を目の当たりにし、クラス全体が沈黙。約一名は別の理由での沈黙のようで、先程の戦闘の残滓を追うように視線が空中を彷徨っていた。生徒達の反応に満足したのか、一つ頷くと次の実習の指示を告げる。

「次はグループになって実習を行う、リーダーは専用機持ちがやる事、では分かれる」

専用機持ちは一組と二組、合わせて5人、翔、一夏、シャルル、セシリア、鈴音だが、千冬の指示が発せられた瞬間、生徒達は迅速に動き分かれる。分かれた、確かに分かれたのだが、かなり偏りのある分かれ方が実現した。むしろ二分した、と言った方が早いだろう。

「織斑君！ 頑張ろうね！」

「分らない所、教えて！」

「いい！？」

一夏へと集まる大量の女子生徒のグループ。一夏自体は何で俺に？と言った表情。同時に勘弁してくれ、とも思ったのか、口元が引きつつている。

「デユノア君の操縦技術、見たいなあ」

「ねえねえ、私もいいよね？」

「あ、あはは」

シャルルへと殺到するグループ。シャルルもシャルルで、困ったように苦笑を浮かべる。

残ったのは、セシリアと鈴音、そして翔だが、何処も閑古鳥が鳴いているように人がいない。シャルルと一夏に集まったのは珍しい男子生徒だからだと言う理由と二人とも傍目から見te整った容姿をしていると言う事が大半の理由である事は明白。セシリアと鈴音は、確かに容姿は整っているが、同じ女子だからと言う理由だろう。翔に誰もついていない理由……それは……

「ねえ皆、何で誰も翔の所へ行かないの？」

「そうだよなあ、何でなんだ？」

シャルルと一夏の問いかけに、喋りかけられるような雰囲気じゃないから、ちよつと怖い、どう接すればいいのかわからない、遠くから眺めているのが一番いい、などと言った声が上げられた。明らかに避けられている筈の本人は全く気にした様子も無く、腕を組み目を瞑り、そこに立っている。ちなみに言うまでも無いが、筈は一夏のグループだ。

「僕が専用機持ちじゃないなら、真つ先に翔に教えてもらっけど……」

「俺もだ」

一夏とシャルルの言い分に、でも……と女子達は難色を示す。ちなみにセシリアも、教わるなら翔が良いと思っっているし、鈴音は気持的には一夏だが、ISの操縦を教わると言う観点から考えるなら翔に教わるのも思っている。つまり、専用機持ちは、翔の価値を正しく理解しているが、専用機が無く、ISを動かす時間の少ない生

徒達にとつては、教えてもらいやすい人の所へ動くと言う事だ。そして、いつまで経っても状況が動かない事に焦れた千冬からついに雷が落とされる。

「何の為に専用機持ちをリーダーにしたと思っている！ 名前順で分かれる！」

その声には明らかな怒気が混じっていたが、恐らく、このままでは実習が進まないからと言う苛立ちだけではない事が予想される。千冬は自らの師を高く評価しているのだ。そして彼女は馬鹿にされるのが嫌いだ、これだけで怒りの原因は明らかだろう。

そして分かれた結果の翔が率いるグループには、腕を組み、未だに目を瞑っている翔に圧されているのか、誰も言葉を発しようとせず、誰にも乗られていない打鉄が鎮座していた。そして、教える事が決まったのか、目を開き、腕を解く。その瞬間、数名の生徒が身体を震わせたが、翔は気にしないままに口を開く。

「このISについてだが、皆の頭の中に入っているなら説明を省く、説明が要るものは手を上げる」

翔としては普通に喋っているつもりなのだが、生徒にはどうも威圧的に聞こえたらしく、手を上げる者も、声を上げるものもない。その様子に、よし、と一つ頷き、座学面は全て省く、と頭の中にある予定を繰り上げる。

「では、早速だが、打鉄を装着し、歩行、停止をやるぞ、停止して降りる時は、次の人の為にしゃがむ事を忘れるな」

一字一句も聞き逃さないと云うような面持ちで、頷く生徒達。無論その原動力は色っぽい意味など微塵も無く、あるのは怒られない様にする為と言う理由だけだ。だが実際の所、それが妙に作用しているのか、生徒達の動きに乱れは無い。

これを見た他のグループのリーダーは、口々に賞賛を送るが、その中で、教員であるはずの山田真耶が落ち込んでいた。

「うむ、では、出席番号順に乗り込み、課題が終わったものは速やかに順番を回せ」

翔の言葉に、この中で一番出席番号の若い生徒が、翔の前へ出て、簡潔に名前だけを発言する。ゴムと髪留めで纏め上げられた髪型と少しツリ気味の瞳が印象的な女子生徒だった。

「九条峰皐月です」

「うむ、ではISに搭乗し、先程の課題をやってもらう」

翔の雰囲気の前に、些か緊張しているのか、身体が硬い。それに翔の言葉に答える言葉も、はい、と明らかに同年代の男子へ使う言葉遣いではない。が、そんな事を翔が気にするはずも無く、ISに乗り込んでいく皐月を見守る。と、緊張しすぎていた所為か、乗り込む直前に足を滑らし、落下。周りから悲鳴が聞こえるが、本人には関係なく、背中と頭を襲うであろう衝撃に耐えるため、目を瞑り、身体を硬くしていたが、落下の途中にその勢いが完全に停止する。足は着いてないので地面ではない事が分かる。首の後ろと膝の裏に力強くも硬い感触がある。しかし、痛みは無い事から、皐月は、とりあえず、状況を確認するために瞳を開ける。

「大丈夫か？九条峰」

やられた、不意打ちだ、と皐月は思う。瞳を開けた先には、少し心配そうな瞳の色をした翔の黒い瞳があり、翔の口から紡がれる言葉は、低くこの状況で皐月を安心させる役に一役買っていた。地面への激突を免れた皐月はその事実もあってか、思わず身体の力を抜き、翔へ身体を預けてしまふ。それほど安心した。

「立てるか？」

「え、えっと……はい」

頬を紅潮させ、何とか頷く皐月。それを聞いて安心したのか、皐月を下ろし立たせる。夢のような状況から帰ってきた皐月は、安心の次に、搭乗に失敗した事による落ち込みと、何を言われるか分からないと言った恐怖が襲ってきた。が、掛けられた言葉は思っていた事とかなり違った。

「何事も無い様で安心した、少し緊張していたようだからな、見張っていた甲斐があると言うものだ」

その言葉と共に、一度だけ頭を撫でられ、手が遠ざかる。その瞬間に緊張が一気に解けたのか、皐月は座り込んでしまふ。それを見た翔は、ふっと笑い皐月に声を掛ける。

「緊張が解けてしまったようだな、立てるか？」

そう言って手を差し出す翔に、ひゃ、ひゃい！と噛んだ返事と共に差し出された手に自らの手を重ねて握る。握ったその手はごつごつしていて、男らしい、と感じた。皐月を引き上げ、問題無く立っている皐月を見て、うむ、と翔は一つ頷く。

「まあ、気にするな、初めて乗るわけだ、こう言う事もある、気落

ちせずにな、では続きに行こう」

「は、はい……」

何やら頬を紅潮させ、翔を見上げながら返事をする皐月。翔の表情は特に代わりが無く、何時も通りクールな表情だ。

その後、皐月は言われた事を終え、指示通りしゃがんでからISを降りる。問題なく終わった皐月を見届けた翔は、皐月に声を掛ける。

「初めて搭乗すると言っても簡単だっただろう、そう緊張する事は無い」

「ひゃい……」

そう声を掛けてくる翔の声は、皐月には幾分か柔らかく聞こえた。皐月の返事を聞いた翔は満足そうに一つ頷き、次、と声を掛ける。夢見心地にクラスメイト達の所に戻った皐月は、予想通り、クラスメイトに囲まれる。そして口々に聞いてくるのは翔の事ばかり。

「どうだった？ 柏木君、怖くなかった？」

「ううん、全然怖くなかったわ、むしろ優しかったし」

「例えるとどんな感じ？」

「うーん、不器用だけど、優しいお兄ちゃん、って感じかな？」

「お兄ちゃんって…… 同い年だよ？」

「話してみれば分かるわよ、私の言ってる事」

矢継ぎ早に投げかけられる質問に、未だ少し夢見心地な皐月は、それからずっと話してみれば分かるの一点張りで、実際に帰ってきた生徒は、言ってる事、わかったわ、と抱え上げられた皐月ほどではないが足が地に付いて無いようにして帰ってきて口を揃えてそう言っていた。少し厳しい事も言うが、その後に洗練された言葉ではないが、各々がうまくいったと思った所を褒めてくれる。つまり、翔

なりに褒めてくれると言う事。そういう所が、結果として、不器用
だけど優しいお兄ちゃん、と言う評価を翔へ与えていた。

そして実習が終わる時間には、結果としてIS操縦で一番進んでい
たのが翔のグループであり。翔自体もそのグループの人気者へと変
わっていた。時折「おに……じゃなく、柏木君」と何か言い間違え
る生徒が続出したが、何を言いたかったのかは謎に包まれている。

ちなみにセシリアと千冬、後何故かシャルルが実習中頻繁に翔の実
習風景へ目を向けていた事など、グループの中心で、何時もの表情
のまま質問を受けている翔には全く知る由も無かったのは当然の事。

十二斬 漢なら許容出来る失敗には寛容であるべき（後書き）

この話にラウラ出すつもりだったのに…長くなりすぎると思って切っちゃったぜ…

やっぱりシーンカットしなかったら長いね、うん

そして千冬姉の出番が少ない気がする…うん、また何処かにねじ込もう、それがいい！

十三斬 漢には建前つてもんが必要な時がある

IS学園、屋上、現在ここにはこの学園で三人しかいない男子生徒と、三人の女子生徒が集まっている。その中の一人の女子生徒、篠ノ之箒は男子生徒の一人、織斑一夏に微妙に不満そうな半眼を向けていた。この二人がいると言う事は、メンバーは推して量れるだろう男子生徒は言うまでもなく、翔、一夏、シャルル。女子生徒は、箒、鈴音、セシリア、このメンバーだ。

「一夏、これはどういう事だ……？」

「ん？飯は大勢で食った方がうまいだろ」

「それはそうなのだが……」

確かにそうなのだが、自分が望んでいた展開はこれではないと、箒は思うが、既に起こってしまった事、諦めるしかない。翔も何だか済まないと思っているのか、微妙な視線になっている。こうなった原因としては、箒が二人で食事と言わなかった事にも原因があるが、つい最近、覚悟が決まった箒には、流石にまだ恥ずかしいのか、それは言えなかった。食事に誘えただけで万々歳といった所。そしてそれを一夏が鈴音に話し、鈴音もそれを見過ごす事は出来ず、参加その流れで翔も誘われ、断りきれずに参加と相成ったというわけだ。シャルルとセシリアは当然のように翔の後ろへ着いてきた。

そして、この場で弁当を持ってきたのは、箒、セシリア、鈴音、翔の四人、シャルルと一夏は買ってきたパンを持参している。

「おお！ 酢豚だ！」

「そうよ、今朝作ったの」

鈴音が持ってきたタッパの中身に瞳を光らせる一夏。入っている

量はそれなりに多く、一夏がつまんでも、何ら問題ない量はある。

「む？ セシリアはサンドか……」

「そうですね、翔さんお一ついかがですか？」

「ふむ、では、遠慮なく……」

そう言つてセシリアからサンドの一つを受け取り、一口。その瞬間、何時もはクールな表情で、誤解されているが実は怒る事の極端に少ない翔、その翔のあまり使われる事のなかった眉間に皺が寄る。その後、物凄い勢いでサンドを食べ終え。セシリアのサンドをもう一つ掴み取り、それをセシリアの口元へ持つて行く。

「え？ えっと、これは？」

「良いから、食べる、そうすれば俺の言いたい事が分かる」

「は、はい……」

頬を赤らめ、そこはかとなく嬉しそうなセシリアを待っていたものは……果たして地獄だった。一口食べた瞬間に、顔色が青くなり、どうにかして飲み込もうとするが、失敗。結局お茶で流し込む事に成功する。

「料理も、要修業だな」

「はい……申し訳ありません……」

これを翔に食べさせてしまった事に落ち込んでいるのか、気を落とすセシリアのバスケットを奪い取り、自分の持ってきた弁当をセシリアに渡す。

「そう落ち込むな、良ければ時間のある時にでも教えてやる」

「あ、有難うございます！ それでその……これは？」

「俺の作った弁当だ、食べる、お前の物と交換だ」

「ですが、それは……」

良いから食べる、とセシリアを押し切り、サンドにガシガシと手を付け、一気に食べ終える。言葉は少ないが、翔の不器用な優しさに心の奥が何故だかほっこりするセシリア。あたたかい、と心の中で翔の評価を再認識した。

一夏は箸の作ってきた弁当の中から、から揚げを絶賛していた。

「箸も食べてみるって、ほら」

「うっ、で、では……」

一夏の手により差し出されたから揚げ、頬を少し赤く染めながらも何処か嬉しそうに口に入れ、幸せそうに、いいものだ……と呟く。その二人の様子にシャルルが何か思い出したように二人の状況を言葉にする。

「これが日本の恋人同士がする、はい、あーん、ってやつ？ 二人とも仲良いんだね？」

「何でこいつらが仲いいのよ……」

そう言葉にするシャルルの台詞に、思わず鈴音は齒軋りしつつ納得の行かない顔。それも仕方のない事といえばそうなる。一夏と箸が何となくいい雰囲気に見えるのだ、少なくとも鈴音には。自分が作ってきた酢豚を何とか我慢しているように口元へ運ぶ、と、何か良い事でも思いついたのか、へにやりと、だらしない表情へ変化し、酢豚を、自分の使った箸で、一つまみ、それを一夏の口元へ持つて行き、食べるように急かす。

「ほら、食べなさいよ、アンタ、食べたいって言ってたでしょ？」

「ん？ ああ、サンキュー」

何も疑う事無く、鈴音の酢豚を口に入れ、うまいな、と素直に感想を言ってくる一夏に、頬を赤くさせる鈴音。その顔はやはり締りがなく、嬉しそう。鈴音の行動の一部始終を見ていた篤は、中々に厳しい目で鈴音を見ている。

ちなみに鈴音、シャルルの言葉が鈴音に発破を掛けるための台詞だと気が付いていない。何となく三人を微笑ましそうに見ているシャルルに、翔から感謝の声が掛かる。

「うむ、鈴音に発破を掛けてくれて助かった」

「いいよ、別に、あの三人何となく見てて微笑ましいから」

「そうか、では、ささやかではあるが、礼として俺の弁当をセシリアと分けて食べてくれ」

「いいの？」

構わん、と簡潔に答えると、屋上に来る前にも買ったのか、缶コーヒーを開け、簡単な食後のティータイムを始める。翔ってコーヒー飲んだ、などと心の中で思いつつも、翔の弁当の包みを持っているセシリアの方へ寄り、翔から言われた事の旨を伝える。セシリアはまだ翔の弁当を開けていなかった。

「ええ、翔さんがそうしろと仰られたのなら私に拒む権利などありませんわ」

「そっか、有難う」

そう言つて包みを開け、弁当箱の蓋を外し、中身が見える。そこには……日本人ならば誰しもが食べてみたい、そう思える料理が所狭しと並んでいた。弁当箱の約半分を占めるご飯は、筍を使った炊き込みご飯、隅々まで味がよく染みていそうな色付き、菜の花のひた

しには丁寧に鰹節が振られ、煮物はそら豆、里芋、いか、が使われている。メインには、しょうが焼きだが、使われている肉は鶏肉と言ふ中々に珍しいしょうが焼きである。シャルルとセシリアは日本の料理に、それほど詳しいと言ふ訳ではないのだが、この弁当にはそれ相応の時間が掛かっていると言ふ事だけは分かった。

「こ、これは……」

「何だか凄いな……本当に食べちゃっていいのかな？」

思わず食べるのを躊躇してしまうセシリアとシャルル、セシリアは自分の弁当と交換と言ふ話になっているため、その気持ちが余程強いのだろう、本当に申し訳なさそうな表情だ。そんな思いを抱きながら、二人は翔の方を見てみるが、全く気にした風もなく、胡坐をかいて、ぼうつと空を見上げ、時折思い出したように手に持つ缶コーヒーを啜る。その姿に何かしらの感情が騒いだのか、頬を少し赤く染め、翔を見つめるセシリア。そして何故か、シャルルも、しかしそれも一瞬の事で、照れを隠すように、セシリアとシャルルは翔の弁当に手をつけていく。

「おー、相変わらず翔の弁当はうまそうだな……少しだけくれないか？」

「駄目ですわ」

「駄目だよ」

翔の弁当に釣られ、ひよっこり一夏が翔の弁当を要求するが、セシリアとシャルルに間髪入れず却下された挙句に、あの二人の弁当で満足しないとは何事か、と何故か説教を受けた一夏。その後、翔の弁当を二人で分けたシャルルとセシリアで分けたが、その際、シャルルは箸がうまく使えず、セシリアに食べさせてもらっていたのは翔には内緒の話である。

夜、学生寮、千冬から面倒を頼まれた翔と、翔に面倒を見てもらう事になっていたシャルルは、その言葉通り、寮の部屋も同じ部屋に入れられていた。シャルルの荷造りを二人で終えたシャルルと翔は、現在、部屋に備え付けられているデスクに着き、二人でコーヒを啜っている所。シャルルはミルクと砂糖入り、翔はブラック。

「何だか、高校1年生でブラックコーヒがそこまで様になってる人も中々いないよ？」

「む？ 俺がブラックの方がコーヒの味がよく分かったのは中学2年からだが……」

内心、お茶でもコーヒでも違和感がないと思っていたシャルルだが、そんな渋い中学生がいた事にまず驚きを隠せない。現在のシャルルもコーヒを砂糖とミルクなしで飲めるほど舌が育っていない。

「でもよく持ってたね？ ドリツパーなんて」

「ああ、数ある趣味の内の一つだからな、これは」

と、コーヒの入っているカップを掲げてドリツパーを所持していたわけを話す。その言葉に苦笑しつつも翔の淹れたコーヒを啜り、翔の様子をチラリと盗み見る。表情自体はあまり変わりが無いが、非常に満足そうな雰囲気を感じる。うむ、うまい、と呟いている翔に何だか少し微笑ましく見える。

「そういえば、一夏って今放課後訓練してるんだよね？」

「ああ、セシリアと鈴音、それから箒を付けている」

御蔭で急速成長している、あの三人には感謝だな、そう言って、ふ

つと笑う翔を見て、シャルルからも提案が入る。

「よければ僕も手伝おうか？」

「いいのか？」

「別に良いよー、それぐらいならお安い御用だよ」

そう言つてほにやり、と笑うシャルル。その意見に、一瞬考える翔だが、すぐさま結論が出たのか、シャルルの提案を飲む。

「ならば頼まれてもらおう、シャルルには一夏に射撃武器の特性を教えてやってくれ」

わかったよ、と翔に頼られるのが嬉しいのか、少し嬉しそうに頷くシャルル。その様子に、満足そうに一つ頷く。と、そこで、翔の持つ特殊な通信機器から通信通知音が流れる、特殊な通信機器と言っても見た目は普通の携帯だが、特殊なのはその中身、その通信機器へ連絡を取れるのはこの世界で一人しかないと言う事だ、その人物とは

「束か、どうした？」

『やつほー しょーくん 愛しの束さんだよ』

そう、篠ノ之束、その人である。束は翔のISを持って来た時に言っていた連絡手段を翔に送っていた。束にとって独立した回線をつくり、それを相互に繋げるだけの通信機器など作るのは容易い事である。

「うむ、挨拶は良いとして、用件があるんだろう？」

『おお 相変わらず察しが良いねえ しょーくんは』

心底嬉しそうにコロコロと笑う束の声に、翔もふつと笑う。シャルルは翔の表情と通信機器から聞こえてくる声に、何故か面白くないような表情。

「僕は先に寝るね？」

「む？了解した、お休み、シャルル」

「……うん、おやすみ」

わざわざ通信機器から耳を離し、そう言ってくる翔に、何となく嬉しさを覚えたのか、シャルルは機嫌を直し、自らの布団に潜り込む。その様子を確認した翔は束との会話に戻る。

『誰？』

そう問うて来る束の声は、幾分か温度が下がっているように感じた翔だが、それも何時もの事なので気にしない。束が特定少数の人間以外には全くといって愛想がないのも理解している。

「俺のルームメイトだ、それより用件は何だ？」

『もう、せっかちななあ、しょーくんは』

「俺の予想ならば、今回の用件は俺に必要なものだ」

『ほんつとに察しが良いよね 時々読みとか勘とかじゃなくて超能力だと思っ時があるよ』

科学の域での天才と呼ばれた束が、超能力などと言うあやふやなものに例えるほどの翔は、それだけでも普通としてはおかしい人間なのだろう。その評価を粛々と受け止める翔としては、特に否定する理由もない為、受け入れる。が、それよりも気になったのは察しが良いという台詞、それが意味する所はつまり……

「では、出来上がったのか？」

『そうだよ 正宗零式にも勝るとも劣らない、しょーくんの、きり・ふ・だ』

その後、翔の切り札なる物の解説と近況報告に雑談で時間を使ってしまった、翔の就寝時間は日付が変わる手前になっていた。

朝、一年一組SHR、クラスでは見慣れない人物が、山田真耶と共に教壇へ上がっていた。比較的小柄な身体に銀色の髪、何より鋭い瞳の片方にされた眼帯の特徴的な人物。疑うまでもなく転入生である。教卓に手を着いてSHRを始める真耶の表情は何とも微妙な表情を浮かべている。

「え、えーと、今日も嬉しいお知らせがあります……」

真耶はそう言ってチラチラと銀色の髪を持つ少女へと何度か視線を向けるが、黙して語らず、といえは良いのか、それとも単に不機嫌なだけかは定かではないが、目を閉じ何も語ろうとしない少女。その様子を千冬は何時も通り静かに静観。

「また一人、クラスに新しいお友達が増えました、ドイツから来た、ラウラ・ボーデヴィツヒさんです」

真耶の声に、クラスの女子生徒達が疑問の声を上げる。無論、クラス的女子生徒から出る疑問は最もで、この男も当然疑問を持っていた。

（どういう事だ？ 二日連続で転入？ 無いと言わんが、あまりにも確立が天文学的な数字だ……何か裏があるのか？ 見た所それ

なりの使い手の様だ……戦力を集中させている？ いや、本当にそんな単純なものか？ 判断するにしてもカードが足りない現状では何とも言えんか……）

翔が思考に沈んでいる間に、自己紹介も終わっており、翔の耳には少女、ラウラ・ボーデヴィツヒが千冬の事を教官と呼んだ事実が残っていた。と、そこで、ラウラがこちらを、正確に言うならば、翔と一夏を睨みつけている事に気が付く。

「貴様らが……」

翔と一夏を厳しい瞳で注視しつつ、一夏の前に立つと、厳しい瞳はそのままに、問うて来る。

「織斑一夏と柏木翔だな？」

特に間違っではないので、その問いに首肯する翔と一夏。ラウラの厳しい視線にうろたえる一夏に、特に何も感じていないように受け流す翔。その反応に何を思ったのか、ラウラの方に動きがあった。その動きを見た翔が、一夏の肩を少し後ろに引き、一夏は上半身を少し後ろに逸らす形になる。

「未熟……」

その翔の一言が放たれた瞬間、一夏の目の前を、ラウラの右手が中々の速度で通過する。その事を認識したラウラは、次に翔を睨みつける、同時に一夏へ向けて呪詛の如き言葉を落とす。

「私は認めない、貴様があの人弟であるなど……私は認めない……」

その言葉に呆然としている一夏に気にする事無く、翔へも同じように認めない、と言いつつ、内容は一夏とはまた違っていたが。

「貴様もだ、柏木翔、貴様が最強であるなど……私は認めない」

「……何の事を言っているのか分からんが、最強かどうかなど、どうでもいい事だ」

心底どうでも良さそうに放たれた言葉に我慢がならなかったのか、ラウラは感情を爆発させたかのように、翔へ拳を放つ。が、変わらず席に着いている翔に放った拳は、相変わらず黒板の方へ向いている顔をそのままに、翔の右腕一本で流される。

「貴様等など……私は絶対に認めない……」

怒りの感情そのままに呟かれた言葉を、全く気にもしていないように受け止める翔。対面と同時に一夏と翔、ラウラの間に確執が生まれたSHRはラウラが引き下がり、幕を閉じる。翔に済まなさそうな表情を向けている千冬に、気にするなと言つように静かに手を振ると、少し安心したように授業開始を告げ、今日も一日が始まる。

十三斬 漢には建前ってもんが必要な時がある（後書き）

やっとラウラ出せたよ…そしてやっと五人出たよ…長かった、いや、ほんと。

そして、千冬さんの出番が少ないので、次の話ぐらいにねじ込もうかと思っています。はい。

十四斬 漢なら切り札を持っているもんだ

ラウラ・ボーデヴィツヒがIS学園にきた同日の放課後。一夏は訓練の為、箒、セシリア、鈴音、シャルルと共にグラウンドに向かい、翔はそれとは別行動、用事があると言って一人抜け出し、ISの設定などを行うための設備が整ったモニター室へ向かっていた。翔だけが別行動だと伝えた時、セシリアと、何故かシャルルが寂しそうにしていたが、特に異論を出す事もなく従って、一夏の訓練へ行った。

（今頃は、シャルルに射撃武器の特性を教わっている頃か）

そこまで考えて、モニター室に着いた事に気が付き、躊躇なくモニター室の扉を潜る。そして、中には翔を呼び出した本人、千冬が一人でモニター室のキーボードを叩いている。

「来たか、柏木、こちらも丁度調整が済んだ所だ」

「それで、織斑教諭、俺の頼んでいたものは？」

そこだ、と指を指された方向には一本の刀が台座に寝かせてある。いや、刀と言うには少し変だろう、まず、刀身の形が、普通の刀の様に反りがなく、刃の背が棒か何かが入っているかのように丸い、大ききこそ、ISが使う標準の接近用ブレードよりも少し大きいぐらいで、正宗零式よりは常識的な大きさだ。次に明らかにおかしいのは、本来鍔があるべき場所に、比較的大き目の回転式弾倉が存在し、合わせて、柄にはご丁寧にとりガーまで存在している。その武器を見た時、翔は一つ頷き、千冬は武器の説明を始める。

「名は虚鉄^{こうつ}、武器の種別的にはブレードと言うよりも、パイルバン

カーに近い、弾は5発で刃の背に仕込まれたパイルを打ち出す仕様だ」

これが、翔が束に頼んでいた切り札の追加武装である。この追加武装を受け取る事、それが翔の言う用事だった。説明を終えると、千冬は黒衣零式の拡張領域へ虚鉄をしまい込む為にキーボードへ向き直る。

「柏木、各センサーと虚鉄へつながれている線を待機状態の零式へ繋げ」

「承知」

千冬に言われた通り、零式を虚鉄に繋ぎ終え、後は零式の中へ虚鉄の登録が完了するまで待つのみ、特にやる事もなく千冬の隣で静かに待機していた翔に、突然千冬から謝罪が掛かる。

「済まないな」

「ボーデヴィツヒの事ですか」

それ以外に千冬が翔自身に謝罪する事などないと考えたのか、間を置かずに翔から確信的な言葉が出る。その翔の確信を窺めた予想に、そうだと千冬は頷く。

「気に病む必要はありません、立ち塞がるのなら斬って捨てるのみ、闘う事でしか分からない事もあります」

「私とお前がそうであったように、か？」

「織斑教諭は俺に立ち塞がったわけではありませんが、まあ、そう言う事です」

相変わらずの物言いに千冬は苦笑。翔の表情に変化はないが、昔に

あつた事を懐かしむような色が瞳に浮かんでいた。そこで、千冬が思い出したように翔へ問いかける。

「そう言えばお前は相変わらずコーヒーを淹れるのが趣味なのか？」

「今でも趣味ですが、それが何か？」

「いや、ただそう、暇のある時で良いんだが、淹れてもらえないかと思つてな」

少し齒切れの悪そうに言う千冬の顔は、心持ち赤くなり、落ち着かないように視線を彷徨わせていた。無論、その提案を断る翔ではない、何も今すぐと言うわけではなく、時間のある時で良いと言っているのだ、断る理由はない。その提案に了承の返事を返す翔。

「そうか、ならば、その時はお前も一緒にどうだ？」

「承知、ご一緒させてもらいます」

千冬の提案を次々に了承していく翔に、普通の人なら分からないが見る人が見ればよく分かるほど浮かれている千冬。制御しようとしてもどうにもならない感情と言うのは人にはあるという事であろう。そして、そこで、零式の中へ虚鉄の登録が完了したのか、虚鉄が粒子となって消える。それを見届けた翔は、零式をポケットに挟み込むようにして取り付け、千冬へ挨拶し、モニター室を出て行こうとした所で千冬から念を押される。

「今の約束、忘れるなよ？」

「承知」

それに対して肯定の返事を返した翔がモニター室の扉を潜り姿が見えなくなると、千冬は無言で腰ためにガッツポーズ、ここだけの話千冬は翔の淹れるコーヒーや翔の作る料理が好物だったりするので

ある。

千冬から虚鉄を受け取り、自室に帰ってきた翔が聞いたのは、水音が流れる音、正確に言うならば誰かがシャワーを使用している音。翔以外にシャワーを使う可能性のある人物は9割方一人しか居ない。

「シャルルが帰ってきているのか……」

その事実だけを認識し、自らの荷物の中から本を取り、部屋に添え付けられているデスクに着き、読書を始めようとした時、突然シャワー室の扉の開く音。

「む？ 上がったのか……迂闊だぞ、シャルル？」

シャワーから上がったのかと本に向けようとした目をシャワー室の扉の方へ視線を向けた翔の視界に飛び込んできたのは、まだろくに身体を拭き終えず、バスタオルを身体に巻きつけたシャルルの姿。その姿は正しく女性としての身体。男にはないふくらみがはつきりと見える。

「え？ あ、何で？」

「そう言われてもな、今さっき帰ってきた所だ」

「そ、そうなんだ？」

「ああ、で？ 何か忘れ物か？」

「う、うん、ボディーソープが切れてて……」

「そうか」

完全に何時も通りに対応する翔に、シャルルは慌ててはいるが、何となく面白くなさそうな表情。翔はすたすたと部屋の中を歩き、ボ

ディーソープが仕舞われている棚からボディーソープを取り出し、シャルルに渡す。最早その対応は、シャルルを見て、女である事が知られていないようなそんな対応の仕方。が、それは、翔の一言で否定される。

「しかし、迂闊だな、バレたく無いのなら、細かい所まで気を使う事だ」

「あ、ちゃんとわかってたんだ」

「無論だ、取り敢えずシャワー室に戻れ」

その言葉に、シャルルは今自らがどんな姿だったのかを思い出し、これ以上無いほどに顔を赤く染め上げる。恥ずかしそうに肯定の返事を返し、シャワー室に戻るシャルル。シャワーの音が聞こえて来た事から、取り敢えずシャワーは浴び終える事にしたようだ。翔は、仕方ないと言ったように肩をすくめ、読書をしようとしていたため、それに戻る事にする。

翔が読書を始めて15分から20分ほど、再びシャワー室の扉が開く音。今度はきちんとジャージを着込んだシャルル。だが、今までと明らかに違う事が一点、今までは胸を押さえつけるためにコルセットか何かを巻いていたようで、今はそれを外しているのか、女性であるとはつきりと分かる様になっていた。シャルルは、口元を隠すようにタオルをきゅっと握り締め、無言で自分のベッドに腰掛ける。その顔は言わずもがな、かなり赤い。そんなシャルルに躊躇なく声を掛ける翔。こう言う時は遠慮していても話が進まない事を知っているのだ。

「迂闊だな、バレてしまったのなら俺も聞かざるをえない」

「うん……ていうか、もう少し反応してくれてもいいと思うんだけ

ど……」

「何のことだ？」

「いや、はは、良いよ……はあ、女として自信なくしそう……」

顔は赤く恥ずかしそうなのに、声は落ち込んだような声を出すと言う器用な真似をしたシャルルに若干驚きつつも話を続ける。

「お前が男の真似をしなければならなかった原因は知らないが、その目的は大体は理解している、元々女だと言う事も分かっていた」

翔の台詞に素直に驚くシャルル。それも当然だろう、シャルルは徹底的に男の仕草などを叩き込まれたのだ、現に一夏はシャルルが男である事を疑っていた様子もなかった。シャルルからしてみれば翔もそんな様子はなかった。

「い、いつから？」

「お前がクラスに来た時から疑っていた、ほぼ確信に至ったのは昨日の実習前のロッカールームだ」

「そんな時から……」

シャルルがこれ以上無いほどに驚いている様子を見ながら、翔も自分のベッドに腰掛け、シャルルと話をする体勢に身体を向けていく。そこで何かに気が付いたように翔の顔を見るシャルル。

「合わせてくれてた、の？」

「バレたくないようだったからな」

「ロッカーで一夏の着替え中に、僕の視線遮ったのは……僕が女の子だって分かってたから？」

「ああ、お前があからさまに視線を逸らしたら一夏が疑問を抱く可能性があった」

「僕の、ため？」

「さつきも言ったが、知られたくないようだったからな」

「やっぱり、翔は優しいね？」

「さて、な、取り敢えずお前の事情、聞かせてもらおう」

シャルルの褒め言葉を濁し、話の本題に入ろうとする翔が何だか可愛く見えたシャルルはくすくすと笑いながらも、その意見を了承、ここに来る事になった経緯を話し始める。その話を静かに聞いていく翔に、シャルルは何だか嬉しくなった。

話を聞き、シャルルの置かれる現状を把握した翔にとって、最早、シャルルの目的がどうかとは、どうでもいい事になっていた。が、翔にとって気に入らなかつた事がたった一つだけあった。

「お前は、何をしている？」

「うん……翔と一夏を……」

「そんな事はどうでもいい」

「え？」

「俺にとって自分が調査されたなど、些細な事だ、そう言う事があるだろうとも予測していた」

そう言い切る翔に驚き、視線を上げ、翔の瞳に視線を合わせるシャルル。翔の瞳には嘘をついているような色はない、では翔はシャルルの何に怒っているのか？

「俺が気に入らないのはここまで来て、何故自分の道を歩かないかと言う事だ」

翔の言葉に感情が爆発したのか、カツと来たようで、思わずシャル

ルは翔に飛び掛り、翔に馬乗りになり、自分の感情を吐露していく。

「何が分かるんだよ！ 仕方なかったんだ！ どうしようもなかったんだ！」

「分からないさ、人の感情なんて他人が理解出来ない、だからこそ、俺達は自ら前へ進むしかない」

「僕はちつぱけだったんだ……どうやっても前へ進めなかったんだ……」

「そうだったのかもしれん、だがそれでも他人に自分の人生の手綱を握らせる理由にはならん」

「じゃあ……僕はどうすればいいの？」

翔の服の胸倉を弱々しく掴み、瞳に涙を溜めたシャルルは切なげに、翔に疑問を投げかける。それを見上げる翔に迷いは一切ない。身動き一つせず、シャルルの好きにさせながらも真っ直ぐにシャルルを見返す。そして紡がれる言葉にも迷いはない。

「知らん、俺に聞くな、自分で決めろ、自分の人生は自分が主役だ」

「厳しいんだね……」

「当たり前だ、決めるのはお前自身の仕事だ、俺達はそれを手伝っただけだ」

「手伝って、くれるの？」

「お前の人生の手綱を握るのはお前だ、俺は俺の人生の手綱を握っている、お前がそう望むなら、俺は俺の手綱をお前に寄せて行く、それだけの事だ」

手伝って欲しいなら、そう言えばいつでも手伝ってやる、訳すると翔がそう言っているのは理解できるシャルルだが、どうも変な意味にも取れたのか、顔を真っ赤にして、あからさまに慌てだす。翔の上に乗っているこの状況も何かしら手伝ったのであろう。そんなシ

ヤルルの様子を疑問を抱いたが、取り敢えず落ち着かせようと、シャルルの頬に右手を当て、親指で目元をゆつくりと撫でる。

「ふぁ……」

突然の翔の行動に思わずため息なのか何なのか分からない変な声が出るシャルル。だが、これ以上無いほどの安心感に、翔の手を感じるために目を瞑り、その安心感に身を委ねる。

「もうそろそろ、前へ進む時だ、シャルル・デュノア」

「はい……」

力強く、優しく背を押してくれるようなその声に答えながら、シャルルは自分の頬に触れている手に、自らの手を重ねる。あったかい、そう思う。翔も翔の手も、あったかい。

「まずは何処にも干渉されないこの学園で、前へ進む為の手段を探す事から始めるといい」

取り敢えずの指針を翔がシャルルへ送った所に、ノックの音。翔の上に乗る、翔の言葉と手の安心感に身を委ねていたシャルルは一瞬反応出来なかったが、その間にもこの男が電光石火の早業で、シャルルの頬から手を抜き、上半身を起こし、シャルルを抱き上げる。シャルルが気が付いた時には既に翔の腕の中だった。

「はわ……」

「静かにしている、お前は現在体調が優れない、そう言う事にする」
「ひゃ、ひゃい……」

抱き上げられている事で伝わってくる翔の力強い腕の感触と言葉に、

シャルルの返事があやふやな上に顔が赤い。そのシャルルの様子に既に演技を開始していると勘違いした翔は、内心で感心しつつ、シャルルをベッドへ寝かせ、客人を部屋に招く。果たして客人とはセシリアだった。

「あら？ デュノアさん、どうかなさったんですの？」

「ああ、体調が優れないらしい」

「う、うん、ちょっとね……」こ、こほこほ

部屋に入ってきたセシリアは真っ先にシャルルの様子がおかしい事に気が付いたのか、シャルルについて聞いてくる。翔はいたって何時も通りのトーンで平然と嘘を突き通す。シャルルは慌てているのか、それとも先程の事が尾を引いているのか、若干どもっている。

「そうなんですか？ ご無理はいけませんわよ？」

「う、うん、気をつけるよ」

「それで？ セシリア、用はなんだ？」

あまり突っ込まれると面倒な事になると判断したのか、セシリアがこの部屋に来た理由を問う。その瞬間、この部屋に来た理由を思い出したのか、セシリアの視線が落ち着かないように泳ぎ、頬もうつすらと赤くなる。

「そ、それはその……翔さん、お食事はもう御済になりましたの？」

「いや、まだだ、これからシャルルの分も受け取りに行こうと思っていた所だが……」

翔の返答に、セシリアの表情が明るく彩られる。

「で、でしたら、私と一緒に、どうでしょう？」

「俺は別に構わんが」

「で、では！ デュノアさん、翔さんをお借りしていきますわね？」
「ど、どうぞ！」

セシリアからの食事の誘いを了承し、これ以上無いほど嬉しそうに、ふわりと柔らかく微笑むセシリアは控えめに見ても魅力的な女性である事がよく分かる。視界の端にそんなセシリアを捉えたシャルルは、少し不機嫌そうに語尾を荒く答えてしまうが、セシリアは特に気にした様子はなく、機嫌が良さそうに歩き出す、が、何か思い出したように翔の所まで戻ってくると、翔の腕に自らの腕を絡める。そのセシリアの顔はこれ以上無いほどに恥ずかしそうに、真っ赤に染まっている。

「む？ 何だ？」

「と、とと殿方は、女性をエスコートするものですわ！」

「そう言うものなのか？」

「え、ええ、そう言うものなのですわ！」

疑問を抱くが最終的に納得し、セシリアの歩調に合わせて歩く翔に顔を赤くしながらも幸せそうに微笑むセシリア。そして二人がそのまま部屋を出て行くと、シャルルは勢いよくベッドから身を起こし、不満をぶつけるように両手で掛け布団を叩く。

「むう~~~~！ 翔ってばあんなにデレデレして！ さっきまではあんなに僕に優しく……優しく……はふん……」

最初は不満をぶつけるように掛け布団を叩いていたシャルルだったが、何かを思い出したのか、頬が紅潮し、へにや、と幸せそうな笑みに彩られていく。翔が食事を持って帰ってくるまで、何かを思い出して恥ずかしそうにしているシャルルだけが部屋に残されていた。

ちなみに言っておくならば、翔は全くデレデレなどしていない。

食事を済ませ、部屋に帰ってきた翔が見たのは、何か幸せそうに笑っているシャルルの姿。幸せそうなシャルルに水を差すのは気が引けたが、食事を食べさせないワケにもいけないので、仕方なく声を掛ける。

「シャルル、食事を持ってきたぞ」

「へあ！？ あ、ありがとう！ ありがたくいただくよ！」

声を掛けられ、翔を視界に捕らえると、あからさまに慌てるが、それでも表情は嬉しそうに笑顔を浮かべている。それも、翔が持つて来た食事のあるものを視界に入れた瞬間に引きつる事になったが……。

「む？ どうかしたか？」

「い、いやいや、何でもないよ、うん、いただきます」

問いかけてくる翔に慌てて取り繕い、箸を持って食事をしようとするが……

「あれ？ あれ？ あわわ……」

「箸をまだうまく使えないのか」

そう結論付け、声に出すと、練習してるんだけどね、とシャルルから苦笑が返ってくる。ふむ、と一つ頷くと、翔は席を立ち上がり、部屋を出て行くように歩き出す。

「え？ えっと、何処に？」

「む？ フォークとナイフを貰ってこようと思ってな」

「い、いいよ、そこまでしてもらわなくても」

「言った筈だ、望むなら手伝うと」

そう言ってくる翔に、少し、考え込み、結論が出たのか、顔を上げたシャルルは、少し恥ずかしそうに翔にして欲しい事を告げる。

「じゃ、じゃあ、食べさせて欲しいなー、なんて……」

恥ずかしそうに要求してくるシャルルに、次は翔が考え込む、腕を組み、目を瞑る翔におそろおそろ、駄目？ と聞いてくるシャルルに首を振る翔。

「駄目と言っわけではないが…… どうせならば箸を使う練習した方が俺が食べさせるよりも後々効率的だな」

「そ、そっか、分かったよ、じゃあ、頑張るね……」

翔の言葉に少し気落ちしたように箸を持ち直すシャルル。それを見た翔は、シャルルの後ろに周り、後ろからシャルルの身体に手を回す。正確に言うならば、シャルルの箸を持つ手に手を重ねている。

「へ？」

何が起ったのか理解できなかったシャルルだが、理解した瞬間、これ以上無いほどに頬が赤に染まり、慌てながらも何とか翔に問いかける。翔は何時も通りの表情のまま、シャルルの手に自らの手を重ねている。

「な、なな何を！？」

「む？ いや、こっやって持ち方と使い方を俺の手でシャルルの手

を動かした方が効率よく覚えられると思ったのだが、要らぬ世話だったか？」

「い、いやいや！ 助かるよ！ うん！ 凄く助かる！」

気合が入ったように返事をするシャルルに、満足したのか、一つ頷くと、自らの手でシャルルの手を動かし、箸の使い方を教えながら、シャルルの食事は進む。

（こ、これって、ただ食べさせてもらうよりも、いい……かも……翔に抱きすくめられてみたい……役得だね）

恥ずかしそうに、しかし、嬉しそうに箸の使い方を教えてもらいながら終えた夕食は、シャルルにとって思わぬほど幸せの時間だった。

電気の消えた翔とシャルルの部屋、翔の寝ている傍に立っている人影。この距離で翔が起きないと言う事は、翔が警戒しなくてもいい人物と言う事。翔の傍に立っている人物、シャルルから独り言が漏れ出す。

「寝顔まで男らしいんだね……」

そう言っただけで優しく微笑むシャルルは、少しずつ翔の寝顔へ顔を寄せて行く。

「真っ直ぐで、頼もしくて、優しくて、あったかい……そんな翔だから、僕は……」

熱が籠ったような声音で独白しながら翔の額に唇を落とす直前になって、シャルルは、はっとしたように顔を上げ、翔の寝顔を見つめ

直す。

「寝てる翔にこんな事しても、意味無いよね……」

でも、いつか……と覚悟を決めたような瞳と言葉を呟いて、シャルルは自らの寢床へ戻る。

後には何処となく満足そうな寝顔の翔とシャルルがいた。

十四斬 漢なら切り札を持っているもんだ（後書き）

はい、切り札が発覚しました、ただの追加武装です、少し特殊ではありますが…。

同時にシャルルにフラグが立ちました。もう皆予想済みだったと思います。

そして武器がパイルバンカーに近いと言う事は…？

その辺りもご想像にお任せ、先の展開をお楽しみにと言うことで！

十五斬 漢は本当に必要な時に力を使うもんだ

今現在、篠ノ之箒は自らの席で、何でもなような表情と姿勢のまま全力で今飛び交っている噂について考えていた。箒が現在全力で頭を悩ませている噂、それは、現在教室の真ん中辺りに円の隊形で話し合っている女子生徒が話している噂にあった。その中には鈴音とセシリアまで入っている。

「それは本当ですか？」

少し疑心を抱えたようなセシリアの瞳が一人の女子生徒に突き刺さる。セシリアは両手を腰に手を当て、微妙に呆れた様な目、そんなセシリアにうぐつとたじろぐ女子生徒だが、勢いのまま噂の内容をぶちまける。

「ホントだって、今度の学年別トーナメントで優勝したら織斑君と付き合える事になってるんだって！」

「その話、本人は知ってますの？」

セシリアの疑問に、その女子生徒は何故かセシリアの耳元に口を寄せ、小声でセシリアの疑問に答える。

「それだけど、どうも本人は知らないらしくて、女子の間だけの取り決めみたいなもの」

「なるほど、そうですね、鈴さん、頑張ってくださいな」

「も、勿論やってやるわよ！」

顔を赤く染めながらも気合を入れる鈴音に、少し楽しそうに微笑むセシリア、随分と余裕そうなセシリアに女子生徒から疑問が掛かる。

「セシリアはあんまり興味なさそうだね？」

「実際余り興味ありませんから……織斑さんってそんなに人気なんですか？」

「そりゃそうだよ、顔良し、性格良し、運動神経悪くない、これだけ揃ってるんだよ？ 人気に決まってるって」

「それは知りませんでしたわ……」

力説するクラスメイトに若干引き気味に口元を引きつらせるセシリア。

「皆、何の話してるの？」

そこでひょっこり入ってきたこのクラス三人目の男子生徒、シャルルの声に各々解散の理由を誰ともなく呟きながら解散していく、無論鈴音も一夏の顔を見て顔を赤くしながら、言い訳を始める。

「あ、アタシも自分のクラス戻らなきゃ……」

そう言っただけで自分のクラスへと帰っていった、その様子に一夏とシャルルは首を傾げるが、既に自分の席に着いていた翔は特に何の反応もなく、授業開始を待っていたが、そこへセシリアから声が掛けられ、一夏、シャルル、セシリア、翔で雑談が授業開始5分前まで続けられる事になる。

以上の話の流れで分かっていただけだと思っただけで、つまりはそう言う事。第は一夏と部屋が分かれた日の夜、自分が学年別トーナメントで優勝したら付き合っただけで欲しいと一夏に言った。それがいつの間にか、学年別トーナメントで優勝すれば、一夏と付き合えるという噂に早変わりしていた。翔達と楽しそうに話す一夏を見て、第は人知れずため息を吐くが、次の瞬間には気合を入れたように気を取り直

す。

（私がトーナメントで優勝すれば何の問題もない事だ……）

そこで一抹の不安が過ぎる。それは箒自身の過去の事、箒が引越した後に起こった、出来事。これは己の師匠も知らず、師匠が知つたならば、叱責は免れない程のものだ。

（私が過去振るつた剣は暴力以外の何者でもなかった、信念無き力は只の暴力、それは力ある者がしてはいけない義務であり責任、私はこの言葉を最初に師匠から教わったはずだ……）

なのに……と拳を握り締める箒、クラスに溢れる喧騒など耳にも入って来ないほど自らが過去に犯してしまった罪を繰り返さないかどうかの不安、それが箒の不安だった。

そんな箒の不安をよそに、千冬から授業開始の号令が放たれ、今日も一日が始まる。

本日の授業が終わり、放課後、セシリアはトーナメントに向けて鈴音と模擬戦闘による特訓をすると第三アリーナへと向かい、そうやってしまうと一夏の教官が少なくなってしまうため、シャルルも一夏の特訓に付き合うようにお願いしておいた。そして全員と別行動を取った翔が向かった先、それは、事務室、この間の千冬との約束を果たすために、一度部屋へ戻り、翔自身が買い集めたドリップコーヒーの為の機器を持ち、それを事務室へもって行き、千冬に振舞う。何故事務室なのかと言うと、千冬がそこを指定してきたからだ。そして、翔が事務室の扉を潜るとまだ千冬は来ておらず、無音の空間と、幾つかの事務机、ここで息抜きの為にコーヒーを飲む者もいるのか、インスタントのコーヒーと電気ポットが翔を出迎えた。

「ふむ、丁度いい、今の内に準備を済ませてしまおう」

そう考え、翔は持って来た機器を広げる。機器、と言っても大したものはない、湯を沸かすための電気ケトル、コーヒーを抽出するためのペーパードリップの道具一式に、コーヒー豆。言ってしまうばこんな物である。まずは、と翔はコーヒーを入れるための道具を入れてきたバッグから、天然水を取り出す、無論、翔は軟水で淹れたコーヒーが好きなので、水は日本の水である。その水を電気ケトルへ注ぎ、それを電気ケトルの台座にセットし、スイッチを入れる。もう後は湯が沸くのを待つしかないのだが、他にも準備しておく事がある。

とそこで、事務室の扉が開く。勿論入ってきたのは千冬である。先に来て準備をしていた翔に少し驚きながらも声を掛ける。

「待たせてしまったようだな」

「いえ、今湯を沸かそうとしていた所です」

そうか、と短く返し、事務机の一つにお茶請けなのか、それなりに値段の張りそうなクッキーが入った箱が置かれる。目線で、これは？ と千冬に問いかける翔、何を問われているのか千冬も理解したのか、それに対しての答えを翔へ開示する。

「これはな、たまたま偶然、山田先生が持っているのを見かけたわけだ、それはどうしたのかと聞くと、どうも少し奮発しようと思ったらしくそれなりの店で買ったと言っていてな、そこでたまたま私は山田先生がダイエット中だと思い出した私はそれを山田先生に告げた、そうしたら、快く私に譲ってくれてな、いや、私もいい後輩を持ったものだな」

中々裏の見える答えが返ってきたが、そんな事翔は気にしちゃいない、と言うより、山田教諭はダイエツト中か……体重の話はタブーだな、覚えておかねば山田教諭を知らぬ内に傷付けてしまいかもしれん、などと妙な所で気遣いを発揮していた。

「柏木、湯が沸いているようだが？」

千冬の言葉に、翔がケトルの方に視線を向けると、確かに沸騰したのか、スイッチが切れていた。それを確認した翔は、ケトルを放置し、ドリツパーの準備に取り掛かる。千冬は翔の様子を見ながら、翔がよく観察できる事務机の椅子に腰掛け、翔の手際を見る。見られている事も気にせず、翔はろ過機に置くペーパーを取り出し、底の部分折り、底を折った方向とは反対方向に側面の片側を折る、そしてペーパーを広げ、ろ過機にセット。そこでコーヒー豆を取り出す。

「キリマンジャロか……」

コーヒー豆の袋に張られているラベルを見て、確認するような千冬の声に頷く翔。そのドリツプ用に細挽きされたキリマンジャロの豆を1カップ、ペーパーの中へ入れ、それを耐熱ガラスのピーカーへ乗せる。

「キリマンジャロならば無難かと思い、もって来たのですが？」

「いや、嫌いなわけではないから、気にするな」

「承知」

「所で、ISの操縦には慣れたか？」

コーヒーを抽出するのに丁度いい温度になったと判断したのか、電気ケトルを台座から持ち上げ、注ぎ口から線のように細いお湯をコ

「ビー豆の中心に少し注ぐ、ビーカーへコーヒーが落ちない程度に湿らされたコーヒー豆を見ながら千冬の質問に回答する。」

「そうですね、完璧とはいいたいですが、基本操作は8割方問題ないかと」

「そうか、わからない所があるなら遠慮なく私に聞け」

「承知、聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥と言います」

30秒ほど置き、またコーヒー豆の中心へとお湯を注ぎ、次はの字を書くように外側へお湯を注ぎ、ペーパーにお湯が触れない内にお湯を注ぐのをやめ、コーヒー豆の中心が窪まない程度にお湯が落ちた所で同じようにもう一度。

「そうだな、いい心がけだ、いつか私も置いていくのだろうな」

「だとしても、今はまだあなたに教えを請います、それに、俺が織斑教諭の前からいなくなる事など、まずない事です」

「そ、そうか……」

後はビーカーに目的の量のコーヒーが落ちるまで同じ作業を続けるだけ、そして、それが終わったのか、翔の発言で少し頬が赤くなつた千冬を見つつ、今しがた注いだお湯が落ちきる前に、ろ過機をビーカーから外し、受け皿へろ過機を置く。そして、出来上がったコーヒーを二つのカップに注いでいく。

「それに、ここで教鞭を振るう事は結果的に多くの人を守る事に繋がる、ならばその守る術を与えてもらった織斑教諭の前から居なくなるほど不良生徒では無いと自負しています」

「う、うむ、ならばいいんだ……」

出されたコーヒーに少し砂糖を入れつつ、落ち着こうとしているが、

頬の赤みが全く取れていない千冬。翔は特にその様子を気にした気配は無く、自らが淹れたコーヒーに舌鼓を打っている。翔のその反応に若干憚然とした表情になりつつもすっかりコーヒーは飲んでいる千冬。

（私だけ慌てているなど……こいつはいつもそうだ）

自分を時折慌てさせるくせに、本人は冷静に事を進めている。いつものパターンに何故か悔しくなる。そして魔が差した、いや、後の事を考えると差してしまったというべきか……

「相変わらずうまい、お前の淹れるコーヒーが私は好きだぞ」
「それは良かった、俺も好きですから」

千冬が自分の発言に失態を覚えた時には既に遅く、翔の発言に目を丸くし、みるみるうちに首から頭まで赤く染まる。食べかけていたクッキーも落としてしまいそうなほどに唇が震えているのが千冬自身でも分かる。千冬をその状況に追い込んだ張本人は千冬が先に食べたので翔もクッキーを静かに口へ運んでいる。先程の発言がその口から放たれたものだと思うと、自然と視線はそこへと集中してしまいが、それを振り払うように、口にあったクッキーを噛み砕き、コーヒーを啜る。

（お、落ち着け、あいつが言ったのはコーヒーの事だ、そう、分かっているんだ、分かっている……よし、私は正常だ、今は少し油断しただけだ）

そう心の中で結論付けた時にはコーヒーが無くなっていた。翔はまだ涼しい顔で自らの淹れたコーヒーの批評をしている。次はどんな作戦でいくか……と検討していた千冬だが、そこで千冬の携帯が鳴

る。そこには千冬のクラスの副担任、山田真耶の名前、その着信に無言で通話ボタンを押す。

『あ、織斑先生ですか！？ 大変なんです！ 今第三アリーナで……』

「山田先生……グラウンド10周だ」

『何ですか！？』

「で？ 何でしょう？」

『あ、あれ？ 撤回してくれないし私の疑問はスルーですか！？』

「で？ 何でしょう？」

『……い、今第三アリーナでバリアが破られました』

「そつか……ではすぐに向かう」

それだけ言い、すぐさま通話を切る。千冬の話していた内容を聞いて大体の話は把握したのか、千冬と共に席を立つ。

「どこかの馬鹿がアリーナのバリアを破ったらしい、手伝ってくれ」
「承知」

簡潔にやり取りを済ませ、事務室を出る千冬と翔。

（何処の馬鹿者共だ、この私の、私の……）

言葉にならないほどの憤りを押さえ込み第三アリーナへ向かう、翔は千冬の怒気を受け流しながら、千冬の怒りの原因を考えていたが、答えまで到達しなかったのは当然である。翔との約束を途中で邪魔されたのが原因などと言う答えにたどり着けるほど翔は自意識過剰ではなかった。

ちなみに、携帯から聞こえて来た恐ろしい千冬の声と、千冬に泣く泣く差し上げたクッキーの事もあって、真耶は地味に涙目になりな

がら、事務作業をこなしていたのは誰にも知られない事実だったりする。

第三アリーナ、ここでは先程までセシリアと鈴音の二人と新しく一年一組に来たラウラ・ボーデヴィツヒが模擬戦闘をしており、勝負はほぼ決まっていたが、追撃を止めないラウラを止めるために、一夏が止めに入り、一夏がラウラのISのレールカノンに狙われた瞬間、シャルルがラウラの足止めに入り、その隙にセシリアと鈴音を安全な場所へ避難させ、ラウラが接近戦をシャルルに仕掛けようとした瞬間、一つの声が響き、黒の影がシャルルの目の前に飛び出す。いや、現われる。

「一意専心！」

周りの景色が追いついた瞬間、シャルルの視界に誰が居るのかようやく理解する。黒い装甲に数多く存在するスラスター、ラウラのプラズマ手刀を止める長大で重厚な刀を持つ人物。

「翔！？」

そこに居るのが柏木翔だと言う事を認めた瞬間、思わずシャルルの口からその名前が口をつく。そしてシャルルの呼びかけに答えず、状況を確認するため、翔は視線を巡らせる。目の前には憎々しそうに翔を睨みつけるラウラ、そして翔自身の少し右に離れた所に一夏。その後ろにはアリーナの壁に座らされたセシリアと鈴音。二人はそれなりの怪我をしているのか、動きたくても動けない。セシリアは翔が来た事を認識した瞬間、安心したような表情を浮かべ、意識を失う。

「問おう、あの二人をあそこまでしたのはお前か？」
「何か問題があるのか？」

悪びれも無く是と答えるラウラにも、翔の表情は揺らがない。

「問題は無い、二人がお前よりも弱かった、ただそれだけの事だろ
う……」

「翔！ お前、何を言って……ッ!？」

翔の冷酷とも取れる言葉にラウラは笑い、一夏は翔へ抗議の言葉を
投げかけそうになるが、何かを感じ取ったのか、ビクリと身体を震
わせ、後ずさる。

「ならば貴様が口を出す事ではない、違うか？」

「そうか、所でお前は軍人だな？」

「それがどうかしたのか？」

翔の質問の意図が全く持つて分からないと言う様に聞き返すラウラ。

「この国では郷に入らば郷に従えと言う言葉がある、ここはIS学
園だ、お前が居た軍ではない」

「……」

「強い力を持つ物が振るう力は暴力であってはならない、当然の事
だ、感情に振り回され力を振るうとは、未熟以外の何者でもない」

「わ、私が未熟だと!? この私が……」

翔の言葉にカツとなったのか声を荒げるラウラだが、その隙を付か
れて翔の正宗に身体を押し返される。

「黙れ!! 感情に振り回され力を振るうなど、言語道断!! 言

い訳の余地もありはしない！」

「そこまでにしておけ、柏木、小娘の相手は疲れるだろう？」

「きよ、教官……」

翔の気迫に圧されるラウラだったが、翔の気迫を心地良さそうに受け流しながら近づいてきた千冬に目を見開く。そしてその場は千冬が仕切る。

「模擬戦をやるのは構わん、だが、アリーナのバリアまで破るような自体となれば、教員として、教員として！！ 見逃すわけにはいかん！」

何故か教員である事を強調しながら一夏の方を睨みつける千冬。その視線を受けて、一夏は身を縮こまらせる。内心はそんなに怒らなくても、と思っているが、それを態度に出すと後でひどい事が分かっているので恐縮するだけだ。ちなみに千冬はバリアを破っただけならば嚴重注意で済むはずだった事を明記しておこう。

「この決着はトーナメントでつけてもらう」

「教官がそう仰るなら……」

千冬から告げられた決定に異を唱える事無く従い、ラウラはISを待機状態に戻す。続いて、千冬は一夏とシャルル、そして翔に確認を取る。

「柏木、織斑、デユノアも、いいな？」

「承知」

「はい」

「はい」

全員の了解が取れた所で、その場は解散となり、翔と一夏はセシリアと鈴音を保健室へ運ぶ事となり、一夏が鈴音を背負い、翔がセシリアを横抱きにして保健室へ向かう。それに付き添っているシャルと、トーナメントまで私闘を禁じる事を宣言している千冬に、翔がセシリアを抱き上げた時にこれ以上無いほど不満そうで羨ましそうな目線を向けていたが、翔は全く気にしていなかった。

保健室に着く直前に目を覚ましたセシリアが、状況を把握し、顔を真っ赤にして身体を小さくするような姿勢を取ったり、シャルルが目を覚ましたなら降りたらどうか、などと言って怪我人だからとの理由でシャルルの意見を翔が却下するなどと言った事はあったものの、現在は二人の手当ても済み、二人はいたる所に包帯を巻いていた。

「完敗でしたわ」

「そんな事無いって、助けてもらわなくても勝てたもん……」

素直に負けを認めるセシリアとはつが悪そうに視線を逸らすが強がる鈴音。対照的な二人にシャルルが苦笑しつつも、二人に飲み物を渡す。

「何で鈴はそう強がるんだよ」

「……っ!？」

そう言つて一夏に肩を叩かれた鈴音は声にならない声を上げる。その鈴音の様子に面白そうにクスクス笑うシャルルは鈴音に近づき、鈴音にしか聞こえないような音量でその核心を突く。

「好きな人にかっこ悪い姿見せたくないもんね？」

「ななな、べ、別にアタシはそんなんじゃない？」

シャルルの言葉に顔を赤くさせながら否定する鈴音に、何を言ったのか聞き取れなかった一夏は疑問に首を傾げている。

「はあ……」

「何を落ち込んでいる？」

セシリアのため息に気が付いた翔が、鈴音と一夏の様子を見ながら声を掛ける。

「いえ、翔さんに格好悪い所を見せてしまいましたわ……」

「何を言う、これでお前はまた一つ成長する、それを格好悪いなどと笑うものか」

「成長、ですか？」

「ああ、今回新しい物を知っただろう？ それを分析し対抗策を考え、実行する、それにより成長できるはずだ」

負ける事も生きているのならば勉強、そう言うような翔に、最初に翔と戦ったときの事を思い出し、少しおかしそくに笑い、そうすわね、と翔の意見を受け入れるセシリア。それを見て翔も満足そうに頷く。

「まあ、今日の所は、ゆっくり休め、それと、よく頑張ったな」

「はい……」

そう言ってセシリアの頬を一つ撫で、いつもよりは柔らかい声音でセシリアを労う、そんな翔にセシリアは、やはり、翔はとてもあたたかい、と再認識していた。と、そこで、保健室に押しかけて来る

大量の女子生徒、その手には一枚の紙が握られている。
いかにも必死、と言った女子生徒達を押し止めながら、事情を聞く
事にする。

「皆落ち着け、これは何の騒ぎだ？」

「これ見て、柏木君」

一人の女子生徒から差し出された紙をざっと読んでみると、トーナメントは二人一組となつてのタッグバトルで、当日までに決まらなかったものは学園側が抽選に基づいて決められると言つたような事が書かれている。

「と言う訳で……柏木君私と組も！」

「デュノア君！ 私と組んで！」

「織斑君！ 一緒に組んで頑張ろう！」

その騒ぎの中、一夏とシャルルは困つたように苦笑し、どうしようか考えているが、翔は一人冷静に今の状況を考え、自分がどういう行動を起こすのがベストなのか、高速で巡らせていた。

（今、シャルルが女性だと知っているのは俺のみ、ならばシャルルが他の誰かと組むよりも俺と組んだ方がバレル確立は極端に低いか……）

そう結論を出した時、既に翔の口は動いていた。

「すまないな、皆、俺は既にシャルルとペアを組む事が決まっているのだ」

それを聞いた女子生徒達は、三人の内二人の男子が候補から消えた

事を認識すると、あからさまに肩を落とす。

「そうよね……寮も同じ部屋だしね……」

「でもまだよ！」

「そうよ！ まだ織斑君が居るわ！」

それぐらいではへこたれない女子生徒達は一夏に詰め寄る。一夏はその勢いに明らかに圧されつつある。

「翔！ た、助けてくれ！」

助けを求めてくる一夏に、翔は慈悲溢れる一言を一夏へ送る。

「未熟……」

「こ、このやろー！！」

その後一夏は一人の女子生徒、名を小波夏乃ささなみかのに名前を書かされ、勝利者となった夏乃は嬉しそうに一夏へ、頑張ろうね！ などと声を掛けていた。

そうして、事態も自然に収集し、元の静かな保健室が戻ってくる。その静かな保健室に鈴音の一夏を怒鳴る声が響く。

「ちょっと一夏！ 何名前書かされてんのよ！」

「仕方ないだろ……あれをやり過ぎせなんて俺にはまだ無理だ……」

心持ちぐったりした様子の一夏は反論する言葉にも元気が無い。セシリアは、タッグバトルだと知っていれば……と妙に悔しそうにシャルルを見ていた。シャルルに話しかけている翔は現在セシリアに背を向けているが、シャルルとの話が一段落すると、セシリアへ言葉を投稿る。

「セシリア、お前はISが手酷く破壊されている故、試合に出る事は出来ないが、見ている、本当に前に進む為の力は他人をも前に進ませる事が出来る、お前の手に入りたい強さを、見ている」

力強くセシリアにそう言う翔の背中に、自然と是とセシリアは翔へ向けて答えを返すが、翔の言葉には続きがあつた。

「それに、流石にお前等が怪我をしているのを見て、少し頭に来たのも事実だ」

珍しく真に感情の籠っていない冷たい言葉を吐き出す翔の言葉にセシリアは背筋が凍る感覚に一瞬動きを止めるが、その原因が、セシリアや鈴音にあるとわかつた瞬間、セシリアは自分の状況を棚に上げて嬉しそうに笑みを浮かべる。

「そうですか……次は無茶しないようにしますわ」
「そうしてくれ」

嬉しそうな声音でそう答えるセシリアに、簡潔に答える翔は、シャルルと共に寮へと帰っていった。
ちなみに鈴音と一夏は未だに一方的な言い合いを続けていた。

「大体一夏はさあ！」

「勘弁してくれよ……」

「勘弁して欲しいのはこちらの方ですわ……ここは保健室ですよ？」

疲れたようにそう呟くセシリアが結局二人を落ち着かせ、一夏を寮へ帰す事になったのは言うまでも無い。

保健室から、寮の部屋へ戻る道中、シャルルは翔へ言葉を投げかけ、歩みを止めさせる。

「翔、えっと、言い忘れてたけど、さつきは有難う」

さつき？ と首を捻っていた翔だが、しばらくすると思い当たる節があつたのか、肩をすくめる。

「気にするな、シャルルが女性だと言う事を隠すには俺と組むのが一番安全だろう」

「そうだけど、でも有難う」

そう言うてほにや、と微笑み、礼を言ってくるシャルルに、ふつ、と笑みを浮かべ、シャルルの礼を受け取る。シャルルにとっては珍しいその笑みに少し見とれながらも、歩き出した翔の後をついていく。

寮の部屋へ帰ってきた翔とシャルルだったが、問題が一つ浮き上がってきた。最近は意図的に寮の部屋へ帰ってくる時間をずらしていたので発生しなかった問題、着替えと言う問題が発生した。互いに着替えを出したはいいが、その問題に気が付き、どうしようかと頭を悩ませていた。

「ふむ、やはり俺が外に出ていよう、その間に着替えるといい」

「で、でも、それだと、男同士なのに部屋の外で着替えを待つてるなんて疑われない？」

着替える時に翔が部屋に居ると困るのは自分の方だが、何故か翔の意見に反論するシャルル、その意見に翔も押し黙り、ぬう、と唸っている。

「この際だ、仕方が無い、お互いに後ろを向いて着替える、妥協案だが、どうだ？」

「う、うん、それで良いよ！」

何故かその妥協案に力強く頷くシャルルに首を傾げる翔だが、特に気にする事も無く、妥協案に従いシャルルに背を向けて着替え始める。制服の上着を脱ぎ捨て、カッターを脱ぎ終えた所で、背中に視線を感じる翔。

「シャルル、着替えないのか？」

「ひゃわわ、いや、えっと、すごいなあって、翔の身体、凄く鍛えてるんだね？」

「鍛える事が目的だったわけではなく、刀を振り続けていたらこうなっただけだ」

「へえ、でも何となく分かる、無駄な筋肉なさそうだもんね、その為に絞り込まれてる肉体って感じ……」

「うむ、それはいいのだが、着替えないのか？ このままだと俺が着替え終わった時自由に動けんのだが……」

「うわわ、ごめん！」

そう言うて慌てたようにシャルルも着替え始めた事を音で認識した翔はそのまま着替えを再開する。

（もう、翔ってば女の子が自分の後ろで着替えてるんだよ？ もうちょっとこう、反応があっても良いんじゃないのかな？）

翔に自らの性別がばれた時に翔が見たシャルルの格好に反応が薄い事に不満があつたのもそれに拍車を掛けているのか、今回の状況にも反応が無い翔に心の中で不満を呟くシャルル。と、考え事をしていたのがいけなかったのか、脱ごうとしていたズボンに足が引っ掛かり、そのまま身体が倒れていくシャルル。

「あわわわわ！」

思わず目を閉じるシャルルだったが、前のめりに倒れていたのが、急に止まったので、目を開いてみると、翔がシャルルを受け止めていた。そして、すぐさまシャルルをしっかりと立たせ。シャルルの目の前で正座。

「翔？」

「事故とはいえ見てしまった事は事実だ、煮るなり焼くなり好きにしろ」

黒のジャージを身に纏い、まるで介錯を待つ武士のようにそこに正座している翔を見て、慌てて、気にしてないと伝えようとするが、翔の台詞の内容を思い出す。

（少しずるいかも知れないけど、いいよね？ 何か罰を与えないと翔は自分を許さないと思う……いや、許さないよ！ だからこれは仕方がないんだ！ うん、仕方がない！）

心の中でそう結論付けると取り敢えず着替えを終える事にしたのか、しばらく待つように翔へ声を掛ける。

「じゃあ、少し待ってて」

「承知」

シャルルの言葉に素直に応じる翔を見て、着替えを始めるが、翔に一切動く気配は無く、身動き一つしない。そんな翔に、若干の不満を覚えつつも、早々に着替えを終えるシャルル。ジャージに身を包み、翔へと近づく。

「翔、今から僕がする事を止めちゃ駄目だよ？」

「承知」

そう言われても揺らがない翔は既に覚悟を決めているのか、シャルルの言葉に対する返答も一切の迷いが無く早い。その翔の反応に満足そうに頷くと、シャルルは翔の後ろに膝立ちになり、そのまま両腕を翔の身体の前でクロスさせて、翔を抱きすくめる、と言うより、翔の背中に抱きつき、自分の体重を翔の背中へ預ける。

「シャルル？」

「しばらく、こうさせて？　それが罰、それにこうしてると安心するんだ……」

「承知」

これが罰だと言われれば翔は受け入れるまで、と了承すると、シャルルは嬉しそうに抱きつく力を少し強め、翔の背中との密着度が更に増すが、翔は内心がどうかは分からないが表情は変わらない。そんな翔に少し不満を感じつつも、翔の背中の安心感にその感情も押し流されていく。

（思った通り、翔は、あつたかくて安心するなあ……）

未だに表情を変えない翔の頬にシャルル自身の頬をぺったりとくっつけ、心の底からそう思う。

最終的にその罰は、シャルルの方が何だか色々我慢できなくなる直前まで続けられ、頬を紅潮させて、もう寝よう、と力強くそう言い、ベッドへと勢いよく入るシャルルに一つの疑問が浮かんだ翔がぼつりと呟いた言葉がこの日の最後だった。

「シャルル、寝るのはそんなに気合を入れるものではないと思うが……」

十五斬 漢は本当に必要な時に力を使うもんだ（後書き）

何か、妙に詰め込みすぎた感じが…まあ、いいか。

しかし、本当にうちのセシリアはおとなしいな、何故か暴走してくれない、段々セシリアすらも15歳に見えなくなってきた俺の目はおかしいのか？

まあ、それも良いか、こう言うセシリアが書きたかったという事にしておこう、うん。

十六斬 漢なら黙って真っ向勝負

学年別トーナメント当日、宣言通り、シャルルとペアを組んだ翔は、パートナーであるシャルルと共にロツカールームのモニターにて対戦相手の決定を待っていた。その間、翔は何時も通りの表情でモニターの前に仁王立ちで腕を組み、静かにモニターを見ており、シャルルもその隣でモニターを見つめながら翔へ声を掛ける。

「翔、緊張してない？」

「特には、既に始まった事に対して緊張しても意味はあるまい」

堂々とした表情でそう言い切る翔の表情には、確かに緊張も気負いも無い、何時も通りそこに居るだけだ。あまりにも何時も通りな翔にシャルルは苦笑。

「翔って恐ろしいほど肝が据わってるって言うのかな？ 揺らがないよね」

「起こった事は受け入れ、その上で動く、そうすれば慌てる事など無い」

相変わらずの物言いに、シャルルはますます苦笑するしかない。ISの操縦時間がここまで短い人物がISを使つての戦闘を前にここまで緊張しないのは普通ならありえない、基本的にISの操縦技術はISを稼動させた時間に比例すると言う説は一般的に常識の説なのである。そこへ来て、翔はIS学園に来るまでISなど触った事も無かった。その翔がISを使い尚且つ大勢の前で闘う、普通ならば緊張で身体が硬くなる位が丁度いいのが普通だ。シャルルは翔の闘う所をまともに見た事が無い、そのため、翔の緊張の無さは不自然に見えた。

と、そこで、対戦の組み合わせが決まったのかモニターにその結果が映し出される。と、同じロッカールームに居た一夏が翔の肩を叩く。

「あのラウラって奴も災難だな、箒もだけど、一回戦から翔とシャルルのペアに当たるなんてなあ」

「これも、ある種の縁と言う事か、一夏今回は貰ったぞ」

「いいさ、ばつちり決めてやれ」

「承知」

「？」

決まった対戦相手を見て、軽く言い合う翔と一夏に、そこまでの勝算があるのかと首を捻るシャルルだけが、何故か置いてけぼりの雰囲気を感じていた。

「では、行つて来る、行くぞ、シャルル」

「あ、うん」

「ガッンとかましてきてくれ」

一夏の激励に、悠然と頷く翔に促され、翔の後をちょこちょこ着いて行くシャルル。決まった対戦カードは、翔&シャルル対ラウラ&箒の対戦カード。

試合開始直前、ISを纏った翔、シャルル、ラウラ、箒がアリーナの中央にて試合開始の合図を静かに待っていた。

「翔、作戦は？」

「基本的には各個撃破が基本主軸だが、先にラウラだ、それが困難な場合は、俺がラウラを引き付け、その間にお前が箒を撃破。その

後、改めてラウラを撃破する」

「作戦、つていっかなあ？」

シャルルの疑問をよそに、試合開始の合図が宣言され、試合が始まる。その瞬間に翔は既に正宗零式を展開し、肩に担ぐようにして構え、相手へ踏み込む体勢が完了していた。

「各自突貫」

「え？ ちよつと、翔！？」

「最早問答無用！」

「もう！ 仕方ないなあ……」

ぶつくさ言いながら、シャルルも武装を展開、その時には既に翔は自らの間合いにラウラを捕らえていた。その速度とタイミングに思わずシャルルは驚愕と共に、決まったと思うが、それはラウラが手をかざした時、何かしらの力で翔の振り下ろしが止められる。

「それは既に見た」

「成る程、これがA I Cと言うやつか」

「私の停止結果の前にはお前の踏み込みなど無意味だ」

「果たしてそううまくいくか？」

その時、ラウラの視線が上へ移動し、舌打ち、翔から後ろへ距離を取る、その瞬間上空から雨のように降り注ぐ銃弾。銃弾の雨が止んだ後、間髪入れずに、打鉄を纏い、接近用ブレードを展開している筈が翔へ切り掛かってくる。上段からの振り下ろし。重力も味方につけた振り下ろしは鋭く早い、だが……。

「未熟！」

「ぐう！」

大質量の正宗と翔の振り払いによる、圧倒的な重さの斬撃の前に、
箒のブレードは軽く打ち払われ、腕が上へと上がり、完全な死に体
となり、隙だらけ、そこを狙い上空のシャルルから銃弾の嵐が箒へ
と降り注ぐが、着弾一步手前に黒く長い紐のような物が箒の身体に
巻きつき、そのまま後ろへと投げ飛ばされる。

「邪魔だ」

それと入れ替わるようにして前へ出てきたラウラから、箒の剣を打
ち払った状態の翔へ向けて大型レールカノンが、照準を合わせられ、
それを阻止しようとシャルルも武器をラウラへ向けるが、一足遅く、
レールカノンは翔へ向けて発射される。このままだと確実に直撃コ
ース。

「翔……！」

特に意味はないと分かりつつも翔へ声を掛けるシャルル。ラウラの
口元は釣り上がり、その瞳はレールカノンの弾の行く先、つまり翔
を捉えていた。そして着弾の直前、ようやく翔が動く。

「めうん！ 一刀両断！」

箒の剣を振り払った直後には既に剣を戻し、正眼へ構えられていた
正宗が迫り来るレールカノンの弾に向かって振り下ろされる。その
瞬間、高速など生温い速度で撃ち出された弾は、上から落ちてきた
圧倒的な質量の下、斬り落とされ、そこには正宗を振り下ろしたと
きのまま、無傷の翔が存在。その映像に、アリーナの中は思わず沈
黙。セシリアとの試合を見た者は何やら騒いでいるが……。

「俺の剣に、断てぬ物などない」

そう静かに言い切り、ラウラを睨みつける翔に、相方であるはずのシャルルまで、思わず武器を下ろし翔を驚愕の目で呆然と見ていた。それはラウラも同じ心境のようで、驚愕に目を見開いている。

「あ、あはは、無茶苦茶だね、翔ってば……」

一方、観客席の方では、翔の行動を見たセシリアは、懐かしそうに目を細めて翔を見つめ、鈴音は開いた口が塞がらないと言うように驚き、その後、セシリアへ詰め寄る。

「な、なな何なのあれ！？ 今明らかに翔の奴おかしな事したわよね！？」

「落ち着いてくださいな、鈴さん、確かにあれを見た時私も驚きましたわ」

その台詞を聞いた鈴音はセシリアが驚いていないような態度の疑問が解けるが、それでもおかしいと騒ぎ始める。

「何もおかしい事はありませんわ、私の攻撃もあやって無効化したんですもの、不思議ではありませんわ」

「えっ、ていうか、アンタの武装って殆どエネルギー兵装よね？」

「ええ、そうですわ」

「……信じられない、何処まで無茶苦茶なのアイツ」

確かにビームを斬れるならば、レールカノンも斬れるだろうが、明らかにおかしい事には違いない。そうして翔の常軌を逸脱した剣はようやくほぼ全校生徒に知れ渡る事になる。

ちなみに、この様子を見ていた来賓などはすぐさまスカウトの体勢を取ろうとしていたが、結局後になって教員によって潰される事は目に見えていた。正確に言うならば、千冬に潰される事がほぼ確定していた。

静まり返った会場を無視して、翔はシャルルへと作戦の変更を伝える。

「作戦変更だ、俺がラウラの足止めをする、頼んだぞ」

「え？ ああ！ うん、わかったよ！」

簡潔にそれだけやり取りし、正宗を右肩に担ぐ様にしてラウラを見据える。その翔を見て、ラウラは自分を取り戻す、動揺は隠せたように見えて隠せておらず、少し肩が震える。だがそれも、遠目では見えない程度だ、敵に動揺を悟られればそこを突かれる。それぐらいの事ラウラにも分かっていた。

「どうした？ 震えているようだが？」

「ぐっ……貴様……」

だが、ISを装備したこの男にはそんなもの分かっているても何の役にも立たなかった、動揺は見抜かれ、悠然と立つこの男に自分の全てが劣っているような考えに襲われる。それほどまでに翔は今現在、この会場内において、絶対者の様にそこに立っていた。

「ではいくぞ、再び柏木翔、推して参る！」

「くっ！」

ラウラのIS、シュヴァルツェア・レーゲンの主武装の一つ、ワイ

ヤーブレードは、常人ならば軌道を見抜く事無くその餌食となりえるほどの武装だ、ワイヤーの軌道と言うのは扱いづらい反面、相手から見ればその軌道は読みづらく、かわし難い武装。だが、そんな常識を覆すような機体の軌道でワイヤーブレードを掻い潜る翔。ワイヤーで動きを止めようにも、ワイヤーが触れる数瞬間に急制動の後に正宗の間合いにブレード部分が入る程度まで後退、正宗の切っ先が届く間合いギリギリの所でブレードを弾き、軌道を変える。その後もう一度接近。この繰り返しだが、こと戦闘においてここまで精密な間合いの読みで仕掛けてくるような人物は居ない。と言うより実行できる人物がまず居ないと言った方が正確だろう。

そうやって確実に近づいてくる翔の姿に驚愕と同時に恐怖を感じていた。だが、自分の所まで来る事が出来てもその刃は自分に届く事は無い、そう考えるとラウラの頭の中は自然と落ち着いた。

と、正宗の間合いにラウラが入る数十歩手前で、翔は正宗を振りかぶる。

「そんな所から、何を……」

「むうん！」

長大で重厚な正宗、それを何の躊躇も無く、ラウラに向かって投げた。その行動に驚愕、正宗自身がスラスターを稼働させているのかそのスピードは凄まじく速い、が、速いだけの直線軌道などISにとって避ける事はたやすく、ラウラは飛んできた正宗を右方向に回避、その後翔を見据える、その時には既に翔はもう一本接近武器と思わしき武器を展開していた。先程まで持っていた正宗よりもかなり小さい、標準の接近ブレードよりも若干大きいくらいであろうか？

「予備の武器か、だが、それで何が……」

「こちらを気にするのは良いが、後ろにも気を配るべきだな」

「何を……っ!？」

翔からそう言い放たれ、後ろに意識を向けると、そこにはラウラの左を通過して行った筈の正宗零式がラウラへ向けて迫っていた。回避、無理だ、そのタイミングは逃した。

（スラスターで軌道を変えたのか！？ A I Cで慣性停止後、目標を撃破する！）

そう結論付けると、正宗零式へ向かって手をかざし、A I C発動、正宗は勢いを失い、地面へ落下、一つの目的を終えたラウラは翔へと視線を向けるが、その時既に翔はラウラの目の前。

「その隙が命取りだ」

「この……！」

「遅い！ シャルル！」

「分かってるよ！」

筈を撃破したのか、シャルルは丁度ラウラを翔と挟み込むように銃弾の嵐をラウラに見舞う。憎々しげな表情と共に銃弾の雨を停止結界で止める。正宗の様に大質量を伴わない今の翔の武器よりも銃弾を止めることが優先と判断したのだろう。が、そのラウラの判断に、翔が失敗を告げる。

「俺を止めなかった事、後悔する事になる」

握っている武器、虚鉄を右の顔の横に構え、そのまま突く、がそれはシールドバリアによって阻まれる。

「このまま撃ち抜く！ 出し惜しみはしない、持って行け！」

台詞と共にスラストを全開、と共に柄に存在しているトリガーを連続で引く、火薬によって撃ち出されたパイルが、一発二発と撃ち込まれ、三発目でシールドを貫通、そのまま前進しラウラへ虚鉄が接触、トリガーを引きもう一発撃ち込む。

「かふっ！」

ラウラの口から息が漏れた瞬間、絶対防御が作動、AICで止めた銃弾は地に落ちたが、銃弾の雨が飛んできた方向からシャルルがシールドを構え、迫る、そのシールドの裏に覗く物、それは、灰色の鱗殻と呼ばれるラファール・リヴァイヴ・カスタム？の切り札で、第二世代で最高クラスの威力を持つ69口径のパイルバンカー。

「シャルル！」

「うん！」

「撃ち抜く！」

シャルルはそのままラウラへ灰色の鱗殻を突き刺すように押し付ける。そしてそのまま翔とシャルルのバンカーはラウラを撃ち抜き、その勢いのまま翔とシャルルは交差、互いに逆方向へ抜け急制動。翔は虚鉄を左へ振り、回転式弾倉を露出。

「僕らの前に立つ壁は……」

「ただ撃ち貫くのみ」

台詞と共に、シャルルは灰色の鱗殻を収納し、翔は虚鉄の刃を上に向け、空になった五発の薬莢を地面に落とし、もう一度虚鉄の刃を下に向け、虚鉄を右に振って、回転式弾倉を収納。これでほぼ勝負は決まったと見える。セシリアと翔が組んで無人ISを倒し、鈴音と一夏がそう思ったように、この試合を見ていた一部、セシリアと

千冬以外の人物はシャルルと翔を同時に相手取るのはやめようと心に決めていたのは実にどうでもいい事である。

地に倒れる事だけは何とか避けてはいるが、ダメージレベルがDを超えていると警告している自らのISのモニター表示を前にラウラ・ボーデヴィッツは思う。

（私は、負けるのか？ いや、私は負ける訳にはいかないのだ！）

闘う為に生み出されたラウラは、訓練の日々を思い出し、自らが優秀だった時を思い出す、その時の自分は最強だった。だが、ISと言う兵器が出来てからの自分、そこからは地獄の始まりだった。ISに適応するためナノマシンを投与されたが、適応せず、結果的に落ちこぼれの烙印を押された自分。そんな時に現われたあの人、織斑教官は優秀な教官だった、落ちこぼれの烙印を押された自分がISだけで構成された部隊の中で再び最強の称号を得た。そこで思い出されるのは、あの時交わした言葉……

「何故教官はそこまで強いのですか？ どうしたら強くなれますか？」

ラウラ自身にとっては純粋な疑問だった。だが、そこで帰ってきた千冬表情と言葉はラウラの憧れた千冬の姿ではなかった。

「私には弟と……その、何だ……好いている奴がいる」

（違う……）

ラウラはそう思う、自分の知っている千冬と言う人間は強く、凛々しく、堂々とした女性のはずだ、この様に優しい顔をして、尚且つ

少し嬉しそうに頬を染める千冬は、ラウラの憧れた千冬ではなかった。

（だから、認めるわけにはいかない、教官にあんな表情をさせる織斑一夏と柏木翔を認めるわけにはいかない）

力が欲しい、ラウラはそう思う、強くそう思う。目の前の千冬を惑わせる男を打ち砕く力が欲しい。そう願った所で、声が聞こえる。

（願うか？ 汝、より強い力を欲するか？）

今の自分の力では目の前の男を打ち砕く事が出来ない、それを認めた上で、考えるべくも無く、藁にもすがる思いで、その声に答える。

（寄越せ、力を……比類なき最強を！）

ラウラがその声に答えた瞬間、今にも倒れそうだったラウラの足はしっかりと立ち上がり、苦しそうに声を上げる。

「ううううああああ！！！」

そして衝撃、アリーナに一瞬砂塵が散るが、すぐに収まる。その苦しそうな声を上げるラウラの様子を、翔は目を細め、厳しい視線で睨みつけている。その瞳の色は警戒。ただの学年別トーナメントで終わらない事がこの時点で確定した。そして、翔の瞳に映るラウラの体が、取り込まれる。黒く、グネグネとしたスライムのように変質したラウラ自身のISによって。

「翔……これって？」

「わからん、だが、ただ事でない事だけは分かった、俺達の戦いが

未だ終わっていない事もな……」

いつの間にか翔の隣に来ていたシャルルに問いかけられるが、翔には現在目の前に起こっている事だけしか分かる事は無い。それを伝えると、シャルルは警戒のレベルを引き上げるように身構える。が、翔はシャルルに別の指示を出す。

「取り敢えず何が起こっても俺は問題ない、現在ISが使えない筈の安全確保を頼む」

「……でも」

「頼む」

「分かったよ……でも、無茶しちゃ駄目だよ！」

「承知」

シャルルが翔から離れるのを見て、翔は黒いスライム状の物と化したシュヴァルツエア・レーゲンに包み込まれているラウラに向き直る。虚鉄から弾倉を排出し、予備の弾丸カートリッジを装填、弾倉を虚鉄へ戻し、それを構える。

「予備の弾はこのワンセットで終了、俺のカードは虚鉄と正宗の二枚、この賭け、勝てるか？」

ラウラを包み込み、未だ変質を続けるシュヴァルツエア・レーゲンの周りには衝撃と雷撃が振り、迂闊に近づける状態ではない、変質が終わる前に仕掛ける事も視野に入れていた翔は、未だに途切れない衝撃と雷撃に舌打ちを一つ。

「だが、構わん、何であろうと撃ち貫き、斬り捨てるまで！」

十六斬 漢なら黙って真っ向勝負（後書き）

まだ続きます、何か戦闘になると終わるまでが長いような気がする
… まあ、いつか。

一体家の主人公は瞬間加速やら単一仕様能力無しで何処まで行く気
なのか、あった方が面白いですかねえ？この二つ

十七斬 漢なら背中でものを語るもんだ（前書き）

今回の話はちょっといや〜んな感じかも

十七斬 漢なら背中でものを語るもんだ

織斑一夏はロッカールームにあるモニターで、今起こっている異常事態と、それに相對する翔の姿を厳しい目で見ていた。ラウラを包み込んだ物体は未だに変化を続けるが、それとはまるで正反對のよう、翔は表情を変化させず、虚鉄を正眼に構え、その状況を冷静に觀察し、攻撃の機会をうかがっている。

そしてついに変化が終わり、その姿を見た瞬間、一夏の頭の中は怒りで白くなったように感じた。一夏自身でも気が付かないほどに握った拳に力を入れ、モニターを睨む。そこに映っていたのは……

（千冬姉と同じ構え……それにあれば……雪片）

その事が一夏には何よりも許せなかった。自分が姉や翔から昔、皆を守るために教えられた剣、そんな気持ちで込められた剣、それを相手を倒すために使おうとしている事が許せなかった。あれは一夏自身の師匠達の作り上げた剣、それがあんな物に成り果てた事が何よりも悲しかった。

「あれは、千冬姉と翔の剣だ、それが、借り物の剣とはいえ、翔に……」

思わず感情を押し出すように一人呟く一夏だが、そこでハツとした様にモニターを見る。そこには千冬の偽者にならず相對する翔の姿があった。

（あー、あのラウラって奴、本当に災難だな、借り物の力を使って事を成そうとする事が俺よりも許せない奴と戦うなんてな……）

そこで妙に気の抜けた表情になる。あの剣を完成させた内の一人が偽者と対峙しているのだから、自分の出る幕ではないと思ったのか、そこから先は特に気にしないように、学年別トーナメントうやむやのまま終わりかー、などと呟きながら、ロッカールームのベンチに寝転び、一夏はそのまま目を閉じる。

「普通の奴ならともかく、対峙してるのは翔だ、心配なんて無駄以外の何でもないな」

どうせすぐ終わる、などと思いながら、一夏は昼寝を決め込むことにした。

変化が終わり、明らかに千冬の姿と分かる物に変化したラウラを厳しい瞳で睨みつけながら虚鉄を構える翔。そこで、千冬から通信が入ってくる。

『柏木、今事態を沈静化するために部隊を編成中だ、その間の時間稼ぎを頼む、出来るなら終わらせても構わん』

「承知」

『と言っても終わらせるのだろうか？ああ言う事は嫌いだろっからな』

「無論です、部隊が編成される前に終わらせるつもりです」

『そうか、では頼んだ』

「承知」

そこで通信を切ると、もう一度その千冬の偽者を見据える。構え、姿勢、確かによく真似られている。だがそれは所詮真似事、借り物の剣。

「そんな借り物の力で倒せるほど俺は甘くはないぞ」

そう呟くと、景色を置いていく速度で接近、それに反応した偽者は剣を抜くが、その一瞬前に踏み込み、虚鉄を横一閃。偽者はそれに対し後退、少し距離を取り、虚鉄の間合いから逃れるが、その瞬間には既に後退した偽者に追撃を加えるように加速。今度は目にも留まらぬ速さ、鋭さを兼ね備えた突き。が、それも最小限の動きで右へ避けられる。

と、偽者の体が右へ傾き転倒、偽者の避けた方向には地を這うような翔の足払いが仕掛けられており、体が右方向へ動いていた事もあり、それなりの勢いで体が傾いていく、姿勢を制御するのに数瞬掛かるが、その数瞬が翔の前では命取り。

「そのタイミングでは避けられん！ 撃ち抜く！」

姿勢を制御し、立て直しを図ろうとした瞬間、偽者の身体は地面へとかなりの勢いで押し付けられる。偽者の腹部辺りに逆手で持たれた虚鉄が押し付けられ、そのまま躊躇なく翔はトリガーを引く。

「全弾撃ち込む！」

言葉と共に地面に押し付けられた千冬の偽者は数回跳ね上がり、宣言通り全弾打ちつくした翔は急速離脱、距離を取り、様子を伺う。そこで、筈を安全な場所へ避難させたシャルルが翔へ近づき、声を掛けてくる。

「はえ、翔って凄いだねー」

「いや、まだ完全に沈黙したわけではない、一枚目のカードは破られたようだ」

感心する様に言うシャルルに、未だ油断しない翔。実際にゆっくり

とはあるが、偽者は起き上がってきている。ダメージが通っていないわけではないようだ。

『柏木』

「織斑教諭」

千冬から二度目の通信が入る。

『部隊編成が出来たが、どうする？』

「あと少し、一合だけで構いません、時間を頂きます」

『……わかった、あいつの事、よろしく頼んだぞ』

「承知」

千冬からの通信を切り、虚鉄をしまつと、最後のカード、正宗零式を展開。長大で重厚なその刀を質感のある音と共に正眼でぴたりと止める。

「やはり俺は、最後にはこれと言うわけだ」

「でも凄いやね、その刀、重くないの？」

「重くないわけではないが、問題なく振れる」

「振れるとかそう言うレベルの速度じゃなかった気がするんだけど……」

シャルルと翔が呑気に会話している間に、偽者が起き上がり、何とか構えを取った。

「では、これで決める、少し離れて見ている、シャルル」

「うん、分かった」

一時も偽者から目を離さず、シャルルへ離れる事を促し、それに従

つたシャルルが離れていく気配を感じ取った翔は、正宗を肩に担ぐように構える。

「借り物の力で前に進む事には、何の意味も無いと言う事を教えてやる」

そして、疾走。数秒も掛からぬうちに一筋の黒と金の閃光は千冬の偽者へ迫り、正宗と相手の雪片の間合いに入る。その瞬間、雪片が横一閃。が、剣閃が煌く瞬間に、黒と金色の閃光は急制動後、急速上昇、数瞬後に急速降下、黒と金の閃光は確かに千冬の偽者へと吸い込まれる。

「チエストオオオオ！！！」

掛け声と共に千冬の偽者の目の前に落ちてきた黒と金色の一撃は、確かに偽者を捕らえていた。動かなくなった偽者を目の前に、しゃがんでいた翔は立ち上がり、正宗を自分の右側の地面へと突き刺し、腕を組む。

「俺の剣に、断てぬもの無し」

そう告げた瞬間、偽者に切れ目が入りその中からラウラが排出され、纏っていた黒色はスライム状の形無き物へと戻る。出てきたラウラを受け止め抱え上げた瞬間にラウラの瞳が開かれ、翔と視線が重なる。その瞬間、翔の意識は何かにつっ張られるような感覚に襲われる。

「何故お前はそこまで強い……？」

「俺が強いかどうかなど、どうでも良い事だ」

「どうでも良い事？」

「そうだ、大事なものは何の為に強くなりたいかと言う事、もしお前が俺の事を強いと思っているならそれは……」

「それは？」

「俺の力が前へ進む為の力だからだ」

「前へ進む？」

「そうだ、そしてお前も、自分が強くなる理由を見つけて、前へ進め、ラウラ・ボーデヴィツヒ」

聞こえた台詞と共に、ラウラの視界に残るのは翔の背中だった。

最後に聞こえた翔の声と、見えた背中を最後に、ラウラの意識は浮上し、ラウラが目を開けた視界では、天井が見えた。つまり、今ラウラは寝かされている事になる。視界の端に千冬を捉えたラウラは今の自分の状況を聞いてみる事にする。

「私は……？ 何が、起きたのですか？」

声を出すのも億劫だと感じる。外傷はないが、体全体がだるく、千冬へ視線を向けるので精一杯だった。ラウラの寝ているベッドの横にある椅子に腰掛ける千冬は何時も通り、クールな表情でラウラを見ている。ラウラの問うて来た事に少しばかり眉を動かしたが、結局口を開く。

「一応これは機密事項だ、VTシステムは知っているな？」

千冬から放たれたワードに反応し、何とか首だけを少し動かし、目を見開く。VTシステム、その正式な名称は……

「Valkyrie Trase System……」

呆然とラウラの口から紡がれる正式名称に、そうだ、と千冬は表情を崩さず頷き、淡々と何故その名称が今ここで出てきたのか説明を続けていく。

「IS条約でその研究はおろか、開発、使用、その全てが禁止されている、それがお前のISに積まれていた、精神状態、機体のダメージ、そして何より、操縦者の意思、いや願望と言った方が正しい、それら全てが揃った時発動するようになっていたらしい」

千冬の淡々とした説明に、ラウラは掛けてある布団を握り締め、ばつが悪そうな声を上げる。

「私が、望んだから、ですネ……」

だが、その望んだはずの最強の力を一人の男に打ち砕かれ、自分の信じていたものが崩れ、途方に暮れた様な表情のラウラに、千冬は呼びかけ、問いかける。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ」

「は、はい！」

千冬の呼びかけに、窓の方へ向けていた顔を再び千冬の方へ向け、赤と金色の瞳でもって、千冬の言葉を待つ。

「お前は誰だ？」

「え？」

意図の分からない質問に不思議そうに声を上げるラウラ。そこまで言った所で、千冬は立ち上がりながら、取り敢えずやってみればい

い事をラウラへ提示する。

「誰でもないなら丁度いい、お前はこれからラウラ・ボーデヴィツヒだ」

それだけ言い残すと、カーテンの向こうへと姿を消そうとするが、そこで一旦立ち止まり、ラウラの方へ肩越しに振り返った表情は確かに笑っていた。

「それと、お前は私にはなれんぞ」

一夏の姉と柏木の弟子は何かと気苦労が多いからな……特に最近は……と前半は少し楽しげに、後半は何処か疲れたように台詞を残しながら保健室を出て行く千冬。その声に、ラウラはいつか聞いた千冬への質問の返答の続きとある男の台詞と背中を思い出していた。

「弟は一夏、その、私の思い人は……柏木翔と言つてな……弟からは強さを、翔からは何の為に強くなるのかを教えられる」

そう言い切った千冬表情は柔らかく、優しく、そして嬉しげで、穏やかだった。そしてこちらを振り向いてにやりと笑う。

「あいつらに一度会ってみると良いが、もし会う時になったら心を常に強く持て、弟はあれで女の心をくすぐるのがうまい、翔は……アイツの背中を見たなら、もう魅入られるしかないぞ」

その千冬の台詞の後に浮かんできたのは、自分の思っていた最強を電光石火の速さで真つ二つに切り裂いた男の台詞と背中。

「そしてお前も、自分の強くなりたい理由を見つけて、前へ進め、

ラウラ・ボーデヴィツヒ」

力強く背中を押すような言葉と共に見た背中とは、確かに力強く、絶大なほどの安心感を感じさせる背中だった。その背中を思い出した時、ラウラは楽しそうに笑い、思う。

（確かに気を強く持たないといけなかった……その背中を見てしまった私は、もう魅入られてしまったようだ）

学年別トーナメントがうやむやのまま終了し、一夏とシャルル、翔は食堂にて、夕食を取っていた。一夏はラーメン、シャルルはパスタ、翔は昆布うどん。一人だけ異常に渋い。その食事の中で話題の中心はうやむやのままに終わった学年別トーナメントの扱いだった。

「結局トーナメントは中止だった」

「だろうな、あのような事があったのだ、それ所ではあるまい」

シャルルの得た情報に翔が同意を示しつつ、昆布うどんを啜る。翔はとろろ昆布の入った出汁のからまる麺に舌鼓を打ちながらシャルルに続きを促す。

「ただ、個人データは取りたいから、一回戦は全部やるみたいだよ」「ふーん、ん？」

続きを話すシャルルに、今度は一夏が相槌を打ち、ラーメンのスープを啜る、が、そこで何かに気が付く。一夏の視界の向こうには女子生徒三人組が一夏の方を見ている。それにシャルルは視線を向け、翔は大して興味がないのか、とろろ昆布の入ったうどんの出汁に夢中だ。出汁を一啜り、その後、むう、と一心不乱にとろろ昆布を探

し求め箸を忙しく動かしている。シャルルは三人の女子生徒から翔へと視線を移し、パスタを食べるのを止めて翔の方を見ている。

（な、何か、可愛い、かも……）

それからしばらく、むう、と唸りながら箸を動かしていたが、もう無いと分かると少し残念そうにうどんの出汁を片付けに掛かる。シャルルはそんな様子の翔をジーツと見つめていた。夢中で。そのシャルルの耳に入ってくる三人の女子生徒の会話。

「優勝、チャンス、消えた……」

「交際、無効……」

「うわーん！」

一夏の方を見ながらそう言って、うわーん、と去って行く三人の女子生徒、一夏はそこから、つい、っと視線を左へ動かすと、特徴的なポニーテールが目に入る。勿論知り合いだった。その知り合い、篠ノ之箒が若干顔を赤らめて一夏を見ている。そんな様子の箒を見て、一夏は何か思い出したかのように立ち上がる。その音で何やらほんわかしていたシャルルは、はっとなり、一夏の視線の先を辿る。無論、翔は既にうどんをやっつけており、これからの経過をじっと見守る態勢に入っていた。

立ち上がった一夏は、箒の方へ近づき、話しかける。

「箒、先月の話だけど、付き合ってもいいぞ」
「えっ？」

何も気負っていないかのように台詞を吐く一夏に、箒は信じられない、と言うように驚き、翔はため息を一つ、シャルルは、一夏って結構大胆なんだね、と微笑ましそうに見ている。

「何？」

「だから、付き合ってもいいって、うぉぁ！」

嬉しそうに聞き返す箒に、さつきと同じ調子で言葉を返す一夏。一夏の発言の途中に、あまりにも信じられなかったのか、一夏の胸倉を掴み、前後に揺さぶりながら、本当か！？と何度も繰り返すが、それにも肯定の言葉を返す。一夏の肯定の言葉に、次は疑問が沸き立ったのか、掴んでいた胸倉を離し、咳払いを一つ。

「な、何故だ、理由を聞こう！」

「幼馴染の頼みだし、付き合うさ」

「そうか！」

箒が嬉しそうだ、と感じ取ったのか、満面の笑みで答える一夏に箒も、段々とテンションが上がってくる。その二人を見ながら翔は顔を片手の掌で覆い、シャルルはそれを見て首を傾げている。

「買い物くらい……ぐへぁ!？」

見え透いた落ちを披露した一夏の右頬に箒の左ストレートが突き刺さる。翔は、自業自得だな……等と言いながら肩を竦め、シャルルは最後についた落ちにどう反応すればいいのか分からずに苦笑。

「そんな事だろうと思ったわ!! ふん!!」

頬を押さえて崩れ落ちた一夏に怒り心頭と言った声音で台詞を投げつけ、止めに一夏の腹部へ右足での蹴り上げをお見舞いし、大股気味にその場を後にする箒。箒に蹴られた腹を押さえながら膝立ちのまま上半身を倒す一夏。翔とシャルルは一夏へと近寄り、呆れたよ

うな表情を向けている。

「お、俺が何をしたんだ？」

「一夏つて時々、態とやってるように思えるよね」

「自業自得だ、正当な痛みだと思っておけ」

痛みに悶える一夏と、呆れたような表情のシャルルと翔に、声が掛かる。

「織斑君、柏木君、デュノア君、今日は大変でしたね、特に柏木君にデュノア君」

嬉しそうに声を掛けてきたのは、一年一組副担任、山田真耶、その人だった。

「そんな柏木君達の労を労う素晴らしい場所がついに解禁しましたよ！」

「へ？」

「場所？」

「まさか……」

嬉しそうな真耶、疑問を浮かべるシャルルと一夏に、何やら難しい表情の翔。

「男子の、大浴場なんです！」

男子の大浴場が解禁になったとの宣言で、飛び上がるのではないかと言うほど喜んだのは一夏。風呂自体は好きなのだが素直に喜べない事情があるシャルルに、これからどうするか作戦を張り巡らせる翔。男子の大浴場が解禁したと言う情報への反応は三者三様だった。

た。

大浴場への道すがら、シャルルは風呂へ入る準備だけはしているが、その足取りは重い、それとは逆に一夏は意気揚々と足を動かしている、翔は未だ難しい表情で歩いているが、突然翔が足を止め、口を開く。

「一夏、少し提案がある」

「何だよ？」

「男子の入浴時間の半分を俺とシャルルに使わせてくれ」

「何で態々そんな事するんだよ？」

翔に釣られて足を止めたシャルルと一夏、そしてその発言に一夏は疑問を覚え、首を傾げ、シャルルは翔が何を言おうとしているのが分かったのか、一夏の見えない所で祈るように手を組んでいる。

「別に他意はない、風呂が好きなお前の為に大浴場を独占させてやろうと言うわけだ」

「皆で入っても俺は何ともないぜ？楽しいと思うし」

「仕方ない、本当は言いたくなかったが、こう言おう、頑張った俺達の為に先に使わせてくれ」

「うっ、まあ、そこ言われちゃ、あれだけどさ、何で皆じゃ駄目なんだ？」

「お前が一々俺の身体を見て凹むからだ、お昼寝君」

「……ど、何処でそれを？」

「ちよつと、織斑教諭からな」

にやりと笑う翔の表情を見て、千冬姉……あんたって人は……と呟いている一夏の肩に手を置いて追い討ちを掛ける翔。

「友が頑張っている間、昼寝とはな……いいご身分だな？」

「わかった！ わかったって！ 部屋にいるから、上がったら呼んでくれ！」

「スマンな恩に着る、後で何か奢ろう」

やけくそ気味に了承する一夏に礼を述べる翔、約束だからな、と念を押しながら一夏は来た道を戻っていく。一夏が見えなくなると、シャルルが翔へ飛びつく。半分涙を流している。

「あ、ありがとー！ 翔、どうしようかと思ってたんだよー！」

翔の制服を引っ張りながら半分涙目で礼を言ってくるシャルルに、気にするなと言うように手を振る。そして大浴場の脱衣場まで来ると、翔は一人脱衣場を出ようとする。

「ど、何処行くの？」

少し不安そうなシャルルの声に、翔は振り向かずには答える。

「風呂にはお前が入ると良い、俺はここで誰か来ないか見張っておこう、風呂に入るまでは外にしよう」

伝える事だけ最低限伝えたと、また脱衣場を出ようと翔が動くが、今度は声でなく、物理的に止められる。進行方向とは逆の方へ力が働いた原因究明のため、翔は後ろを振り向く、すると案の定、シャルルが翔の制服の裾を握り締めて止めていた。

「ぼ、僕はいいから、翔が入って？ 今日頑張ったのは翔なんだから、僕はシャワーでいいよ」

「しかし……」

「いいから、ね？」

ほにゃ、とした笑顔でそう言ってくるシャルルに、むう……と押し黙る翔。まだシャルルを説得する方法を考えている翔へ向かって、笑顔から一転、少し残念そうな表情へと変わる。

「僕からの……友達からの気遣い、受け取れない？」

「ぬう……承知した、その心遣い、有難く頂戴する」
「よかったあ」

翔がシャルルの案を了承した瞬間、また、ほにゃ、とした笑顔に戻る。この時点でシャルルは既に、翔が友や身内と言う存在にめっばう甘いと言う事を見抜いていた。一夏に対して少し厳しい訓練を課すのも、IS学園の中で皆に着いていけないと言う状況を回避するためにやっている事だとシャルルは理解していた。立ち塞がる壁は問答無用で正面から粉碎する性格の反面、こうなったのかは分からないが、先程の台詞はそんな翔の性質をうまく突いた台詞だった。

そうして風呂へ入った翔は、現在、身体を洗い、掛け湯をしてから、持って来たタオルを折りたたみ頭に載せ、目を閉じて静かに湯船に浸かっている所。風呂の間は一言も喋らない翔、そんな彼にとつて、大浴場の中に入ってきた存在を察知する事は造作も無かった。そして大浴場に侵入してきた人物がそのまま湯船に浸かろうとした所で、翔は目を閉じたまま声を掛ける。

「シャルル」

「ひゃわわわ！ き、気がついてたの！？」

「当たり前だ、所で、どういっつもりかは知らんが、湯船に浸かる

のなら掛け湯ぐらいはしておけ」

「う、うん……」

冷静にそう告げる翔に多少不満を抱きつつも、言われた通り、掛け湯をして、失礼しまーす、と湯船に浸かる。そして、じりじりと翔へ近づいていく。が、その動きもばれていた様で、翔から声が入る。

「目を閉じているから近づくのは構わんが、恐る恐る動いた所で湯船の湯は動くぞ？」

「そうだよー……はあ」

相変わらず冷静そのものの翔にため息をつきながら、今度は遠慮なく翔へ近づき、背中合わせに座る。ちなみにシャルルのタオルは湯船の縁に畳んで置いてある。湯船にタオルを浸けるのはマナー違反と言いつのを律儀に守っているらしい。数秒沈黙が舞い降りるが、恥ずかしそうに身を動かしているシャルルに対して全く動じない翔がシャルルへ声を掛ける。

「それで？ どうした？」

「へあ？ ああ！えっと、僕もお風呂入ってみようかなって……駄目かな？」

「それは別に構わんが、話があるのではないか？」

「……凄いね、翔は、もうそれ勘とかじゃないよ」

核心を突くような翔の言葉にしばし呆然としたように呆けていたシャルルだったが、はっと我を取り戻すと、その翔の予測に苦笑していた。

「簡単な事だ、女性が男の入っている風呂に入ってくるなど相応の

覚悟があつての事だ、そこから導き出せる事、それは、俺にどうしても話しておきたい事があつた、違うか？」

自信を持つてそう言い切る翔の言葉に、違わないよ、と少し嬉しそうに声を上げるシャルル。大事な話だ、と聞いても動揺もせず受け止めてくれているように感じた翔の背中にあたかさが、シャルルには嬉しかった。

（大事な話があつた、って事しか入ってきた理由が浮かばないのも翔らしいけど……もつと他の理由も……って駄目駄目！）

「とりあえずここから始めるといいって言ってくれたでしょ？」

「ああ」

何やら妙な方向へ流れそうになる思考を無理矢理押さえつけ、本題の話始めるシャルル。シャルルの考えている事を露ほども想像できず、冷静に返答を返す翔。

「僕そうする事にしたよ、そう決められたのは翔の御蔭」

「俺は背中を押したただけだ」

「だとしても、僕は凄く嬉しかった。翔が背中を押してくれたから、一步を踏み出せたんだ」

「そうか」

シャルルの嬉しそうな声音に、冷静に、そして簡潔に相槌を打つ翔。そこでシャルルは自らの身体を反転させ、翔の背中を見ながら言葉を続ける。

「僕にはその一步は凄く大きい事だったんだよ？」

「そうか」

「そうやって歩み出せた最初の一步、これを止めたくない、そう思

「つたんだ」

「そうか」

言葉と共に白魚のように白く細長いシャルルの指が自然と翔の背中へ伸び、指先が翔の背中に触れると、何かを感じ取ったのか、シャルルの方が身体を少し震わせる。

「だから、僕は前へ進むよ、一步を踏み出す切っ掛けをくれた翔がいるIS学園で、誰よりもあつたかい翔の傍で……」

「そうか」

翔の背中に触れたシャルルの指は一本二本と増え、最終的に掌全部を翔の背中に触れさせ、背中 of 広さを確かめるようにシャルルの掌が翔の背中を滑る。鍛錬の時に付いたのか、小さな傷跡がそこかしこにあり、それを一つ一つ確かめるようにシャルルの掌が翔の背中を這う。

「前へ進む事を決めた僕が、シャルル……いや、シャルロット・デユノアが……」

背中 of 広さを確かめ、満足したのか、翔の背中に触れているシャルルの掌は両手の掌に増え、そのまま翔の背中の上方へ這うようにして上がっていき、程よく筋肉の付いた肩の上を這い、そのまま前まで回された掌は、次に翔の胸板を這い、シャルロットはそのまま翔を抱きしめるようにして、きゅっと腕に力を籠め翔と自らの体の密着度を高め、顔を翔の肩口に埋める。翔の背中で何やら柔らかいものが潰れる感触がしているはずだが、翔の表情に動揺を読み取る事は出来ない。

「あなたの傍にいる事を、あなたに見てもらおう事を、許してくれま

すか？」

「承知した、お前が、シャルロット・デュノアが望む限り、お前の傍で、お前が前へ進む所を見ていてやる、困った時は手伝ってやる、助けて欲しければすぐに呼べ、心配を、掛けさせるなよ？」

「ふふつ、はい……やっぱり、翔の背中、あつたかいね」

嬉しそうに笑いながら返事をするシャルロットは肩口に埋めていた顔を上げ、翔を更にぎゅっと抱きしめながら、自らの少し赤くなつた頬を、未だ目を閉じ、動揺の読み取れない彼の頬にぺったりとくつつけ嬉しそうに笑う。

が、そこで、何故かシャルロットの視線は下がっていき、急に顔が真っ赤に染まる。トマトなど生温いと言つたような染まり方だ。

（うえええ！？ み、見ちゃつた！ 不可抗力だよ！うん、不可抗力！）

テンパつたシャルロットの視界に未だ涼しげな表情をしている翔の顔が目に入り、何だか面白くない気分になる。今現在の自分達の状態を考えてみればもつと面白くない。

（当ててるんだよ！？ ちゃんと当ててるんだよ！？ 小さいわけじゃないんだよ！？ なんにその反応はおかしい！？）

何を当てて何が小さくないのかは想像にお任せするが、シャルロットはこれ以上無いほどに憤慨しているようだ。ついにそれは頂点を迎えたのか、シャルロットの口が開かれる。

「見てくれる事を了承してくれたんだから、今僕を見てみようよ」

「お前は一体何を言っている……」

「不公平だよ！ 何で僕ばかり慌てて翔は慌てないのさ！」

「明鏡止水、心頭滅却、確乎不動の心ここに在り」

何やら変なテンションに入ってしまったシャルロットの暴走を止めつつ、風呂を翔は先に取り、脱衣場の外で待っているとシャルロットも着替え終わったのか脱衣場から出てきた。心持ち沈んでいるように思う。翔を視界に入れた途端、今は押さえつけている胸に手を当てる。

「僕の、小さい？」

「何故俺に聞く……」

翌朝のSHR、教壇に立つ山田真耶は何とも微妙な表情。定位置に立つ千冬は何処か不機嫌そうな表情を隠そうともしていない。セシリアは口をポカンと開け、淑女にあるまじき表情を晒し、一夏は心底驚いたような表情で視線を前方と翔を行き来している。箒も一夏と同じく瞳を丸くして驚きの表情。翔は特に変わりなく前方を向いている。全員共通しているのは、現在前に立っている金色の髪と紫の瞳が特徴的なIS学園女子制服に身を包んだ女子生徒に目を向けているという事。

「と言う訳で、デュノア君はデュノアさん、と言う事でした……」

「改めまして、皆さん、自己紹介は済んでいます、シャルロット・デュノアです」

そう言うって明らかに翔へ向けてにつこりと微笑むシャルロット。翔はわかっている、とでも言うように、ふい、と一回だけ手を振る。周りのクラスメイト達はその事実さまざまな会話を交わす。

「つまりデュノア君って女？」

「おかしいと思った、美少年じゃなくて、美少女だったってわけね？」

「って、柏木君！ 同室なら知らないって事は、ないんじゃない……」

その中で、決定的にクラスの空気を凍らせる一言がクラスメイトの口から投下される。

「ちよつと待って？ 昨日って確か、男子が大浴場使ったわよね？」

その台詞が言い終わるか終わらないかの時に、一年一組の壁が突然破壊される。そこから姿を現したのは鈴音、怒り心頭と言った表情で一夏を睨みつける。

「いちかああああ……！！！」

「ちよ、ちよつと待て、お前完全に誤解してるぞ！？」

一夏の弁解も空しく、鈴音の甲龍の肩に存在する衝撃砲、龍咆が起動し、発射される。一夏が狙われていると言う事は当然その後ろの席にいる翔も巻き込まれると言うことだが、本人は何処吹く風と言ったように涼しげでクールないつもの表情。

「死ぬ！ 確実に死ぬううう！」

「未熟……」

「何でお前はそんな冷静なんだ！？ もう駄目だ！」

台詞の通り、駄目だと思った一夏は目を閉じ、衝撃に備える。が、いつまで経っても衝撃は来ず、痛みも無い。

「って、俺死んでない……？」

「当たり前だ、目を開けて前を見る」

翔からそう言われ、目を開けた目の前には、ISを纏い、AICを展開しているラウラ・ボーデヴィツヒの後姿が見えた。

「ラウラ！ 助かったぜ！」

ラウラに礼を述べる一夏だが、ラウラはその礼には取り合わず、無言で目標、翔を掴み、引き寄せる。ラウラが何をしようとしているのかを察知し、両手を確認、壁となるものは生憎持ち合わせておらず、苦肉の策としてラウラの狙っている着弾点を顔を横に向けてずらす。その瞬間……ちゅ、と軽い音を立てて、ラウラの唇が翔の頬に当たる。その光景にセシリアは何かのオーラを纏うように長い金色の髪が逆立ったような気配、シャルロットは笑顔のまま額に青筋、千冬に至っては、額に青筋を浮かべ、いつも持っている出席簿を握りつぶしている。一夏、箒、鈴音、クラスメイトは全員展開に着いて行けずあんぐりと口をあけている。そして少し残念そうに身を引くラウラはそのままの状態で口を開く。

「あなたの……お傍に置いて下さい、ボス」

頬を染め少し潤んだ瞳を翔へ向けながらそう言うラウラ、言われた方の翔は完全に今の台詞と先程の行動が結びつかないのか、首を捻っている。

「傍にいるぐらいの事、好きにすれば良いと思うが……」

「ほ、本当ですか!？」

「何だと!？」

「何ですって!？」

「どう言う事!？ 翔!」

「何を怒るんだ？ 一夏も箒も鈴音もシャルロットもセシリアも織

斑教諭も俺の近くにいるではないか？ 先程のボーデヴィツヒの…

…」

「ラウラとお呼び下さい、ボス」

「承知した、ラウラの行動には疑問が残るが……」

心底疑問だ、と言うような表情で、言い切る翔に、セシリア、シャルロット、千冬、今度は一夏、箒、鈴音まで一緒になってため息をつく。全員の思っている事は一致している。

（そう言えばこう言う男だった……）

ため息を吐き終えた千冬はシャルロットとラウラを睨みつけ、再び青筋を浮かべながら声を掛ける。

「さて、デュノア、ボーデヴィツヒ、個人的に話があるんだが、放課後アリーナに来い」

千冬の告げたその言葉にシャルロットも笑顔を浮かべる。ラウラは何かしらの雰囲気を感じ取ったのか、ぶるりと身体を振るわせつつも千冬の前に堂々と立つ。

「構いませんよ？ 織斑先生とは一度じっくり話し合う必要があると思いますから」

「教官が相手でも手は抜きません！」

「よく吼えたな、小娘共……」

その三人の話に我慢ならなかったのか、もう一人、金色の髪が特徴的な生徒が勢いよく立ち上がる。その表情はとても綺麗な笑顔を浮かべているが、隠し切れない青筋が額に浮かんでいる上に、口元がひくついている。

「この私を抜きにして何やら楽しそうなお話です事、おほほほ」

「オルコットか……丁度いい、貴様ともそろそろ話をつけなければならんと思っていた所だ」

「望む所でしてよ？ 織斑先生？」

千冬、セシリア、シャルロット、ラウラが笑いあう一年一組は朝の時間帯でありながら、何やら暗い雰囲気纏わり付く場所と化していた。その四人の様子に怯えながらも慌てている真耶。こう言う事を鎮圧させるための最終兵器、織斑千冬がこの騒動の中心の一つなのだから仕方のない事とも言える。

そしてこの騒動の真の中心にいるこの男。

「む？ S H R 終了の時間だな、1 限目が始まるぞ、自分の教室に戻ったかどうか？ 鈴音」

「アンタってホント、揺れないわよね……」

「ふむ……」

やはり何処吹く風と言うように鈴音に忠告などをしていた。

ちなみに、放課後本当に4人がアリーナへ集合し、あわや四つ巴の戦闘になる所だったのだが、そこに翔と一夏が通りかかり、良い訓練になると、打鉄、ブルー・ティーズ、ラファール・リヴァイヴ・カスタム？、シュヴァルツェア・レーゲン対黒衣零式、白式と言うカードになり、本当にギリギリだが、翔&一夏の勝利となり、女性陣はまずこの二人の友情に勝つ事が最優先と一致団結する事になるのは全くの余談である。

十七斬 漢なら背中でものを語るもんだ（後書き）

はい、と言う訳で、ラウラの翔への呼称はボスで決定。
地味に作者は満足、誰かに呼ばせたかったんだよねーw
なーんか、最近執筆速度下がってるような…？
不甲斐ない作者をお許しください、読者の皆様方…orz

十八斬 漢なら教わった事は黙って実行するもんだ

西日の差し込むES学園の夕方。もう目の前に来た臨海学校、その為のパンフレットを指定の場所へ運ぶ様、教師から言い渡されたシャルロットは、大量のパンフレットを抱え夕日の差す廊下を歩く。だが、その足取りは果てしなく危うい。シャルロットの腕力とパンフレットの重量が釣り合っていないのだろう。

「ん、よっ、っと……」

何とかバランスを取るようにして歩いているが、非常に危なっかし、一杯一杯の雰囲気を感じられる。もしその様子を誰かが見ていたのなら、そう長くこのバランスが続くとは思えないだろう、その証拠に……

「あわわわ……」

大量に積まれたパンフレットが右側へ傾き、それを止めようとシャルロットも右へ移動しようとするが、一足遅く、パンフレットのタワーは右へ倒れていく。シャルロットの奮闘空しく、パンフレットは廊下の床に散らばると言う結果に終わる。

「はあ、拾わなきゃ……」

ため息を一つ落とし、パンフレットを一枚一枚拾っていくシャルロットの視界に、シャルロット自身のもではない靴のつま先が視界に入る。誰？　と思う前に、シャルロットへ声が落ちてくる。それはシャルロットが好きな声で、その声は少し機嫌が悪そうだった。

「何をしている？」

「翔……」

呆然としながら、少し怒った様に眉間に皺を刻みそこに立つ翔をシャルロットは見上げる。そんなシャルロットに落ちてきた次の台詞も先程と全く同じものだった。

「何をしている？」

「えーっと、先生に頼まれたから、パンフレットを運んでるんだけど……」

「何故俺に言わなかった？」

「え？」

シャルロットの正面に座り込み、パンフレットを拾いながら問いかけてくる翔に、少し戸惑うシャルロット。廊下の窓から差し込む赤色の夕日が翔を包み込んでいて、少し綺麗、とシャルロットは特に今の会話には関係のない事が思い浮かんだ。

「えっと、この位で頼っちゃ迷惑かなって……」

「俺は言った筈だ、助けて欲しい時はそう言え、と」

「うん……でも……」

「言った筈だな？」

目を逸らそうとするシャルロットの頬を手で触れ、自らの方向へシャルロットの視線と顔を固定する翔。シャルロットから見た翔の顔は何時も通りにクールで凛々しくて、堂々として、少しだけ心配そうな、あつたかい表情をしていた。

「翔？」

「もっ見ているだけでは、俺は我慢できないらしい……」

「え？」

「前へ進むお前を見ていて、俺は……」

シャルロットから見たあったかい表情をした翔の顔が少しずつ近づく。そんな翔に、自らの頬は思わずとも赤く染まっていくながらシャルロット自身自覚できていた。

「前へ、進みたいと思った、お前の隣で、お前と共に……」

「翔……うん……」

「許してくれるか？　俺が、ずっとお前の隣でお前と共に前へ進む事を……」

いつも強い意志が宿った黒い瞳の瞼が閉じられ、そのままシャルロットの唇へ近づく翔の唇をシャルロットは拒む気はなく、頬は赤いが嬉しそうに笑顔を浮かべる。そして、翔の唇がシャルロットの唇を塞いでしまう前に、翔の言葉への返事を口にしようと、唇を開く。

「は……」

「いいいいー！」

意味がないような叫び声を上げ、ベッドの上で勢いよく起き上がるのは、金色の髪と、今は大きく見開かれた紫の瞳が印象的な美少女、名をシャルロット・デュノアと言う。シャルロットはベッドから上半身を起き上がらせ、今現在の状況を把握するため、首を動かし、辺りを見回す。現在時間は早朝6時半。それを裏付けるように、朝日が下ろされているブラインドの隙間から微かに差し込んでいる。状況的には、早朝、現在寮の自室にて起床。その事実を把握したシャルロットは、起きた瞬間には不自然な位に赤くなっていた頬の赤

みが抜け、下の白い肌が戻ってくる。同時に落胆したように肩を落とし、明らかに落ち込んでいる表情。そしてそのままもう一度ベッドへ倒れる。

「はぁ……夢かぁ……それもそうだね、あんな情熱的な翔見た事ないし……」

現在6時半と言う事と先程見た夢の所為で、普段はしない二度寝を敢行する事を決めるシャルロット。その決め手は

（さっきの夢の続きが見れますように……後30秒でいいから！）

と言うこと、その希望は叶うかどうかは定かではないが、睡魔はすぐにシャルロットへ訪れる。二度目の眠りに落ちる寸前、シャルロットが考えたのは、シャルロットの隣のベッドの住人が本来いるはずのそのベッドに存在していなかった事だった。

（ラウラ、何処いったんだろ？）

シャルロットが女性だと発覚し、急遽変更になったシャルロットの新しいルームメイトは、ラウラ・ボーデヴィツヒだった。その同居人の所在に疑問を覚えつつも、シャルロットの意識は睡魔に引かれ、深く沈んでいった。

丁度シャルロットが起きた時間、翔の寮自室にて、現在の部屋主である翔は起きた瞬間に違和感を察知した。と言うより、察知せざるをえなかった。自分の身体に何かが纏わり付いている感覚。不快な感覚ではなく、あたたかく柔らかい感触のものが自分に纏わり付いている。その感触を察知した瞬間に、何の躊躇もなく掛け布団を剥

ぎ取る。そこには現在シャルロットとラウラの自室で行方不明であった筈のラウラが翔の身体にぴったりと抱きつき、眠っていた、待機状態のシュヴァルツェア・レーゲン以外何も付けていない状態で

「ふむ……」

翔は一つ首を傾げると、特に気にした風もなく、ラウラを引き剥がし、起き上がる。その拍子にラウラは目を覚まし、眼帯で隠されていない赤い寝ぼけ眼をこすりながらも、翔を見つめる。

「どうしたのですか？ボス」

「いや、起床時間でな、所で、何故ここに居る？」

「お傍に置いていただけのを了承してくれたではありませんか」

「ふむ、そうだったか……シャルロットには伝えてここに居るのだろうな？」

「いいえ」

会話を交わしている内に目が覚めてきたのか、今はしっかりとした表情で翔の質問に答えていくラウラ。

「ふむ、それは駄目だな、せめて自分の近しい者には許可を取ってから行動を起こせ」

「……了解しました」

不服そうな表情ながらも、翔の言う事に頷くラウラに満足したのか、一つ頷くと、衣服が仕舞われている場所を探し始める翔。その行動に、勿論ラウラは疑問を持つ。

「ボス、何を？」

「俺は朝にシャワーを浴びる、その為の着替えと、お前の着れる物

はないかと探している」

その文脈の件ではラウラにとんでもない誤解を与えてしまう文脈だと全くもって気付く気配のない翔は、そのままクローゼットを漁る。そんな翔を見つめながら、先程の翔の言葉にこれ以上無いほどに頬を赤くするラウラ。

（ま、まさか……ボスが私とシャワーを……？）

等とラウラが一人で掛け布団に身体を包み、悶々としている間に、自分の着替えと、予備のジャージを取り出し、予備のジャージをラウラの方へと投げる。

「とりあえず、それでも着ている」

「はい……」

「？何を呆けている、それを着て部屋へ戻れ、シャルロットが心配しているかも知れんぞ？」

「……了解しました」

翔が何の為にジャージを出してきたのかを教えるとラウラはこれ以上無いほどに肩を落としながらも、翔に答え、渡されたジャージを着込んでいく。ジャージを着終えたラウラは翔へ声を掛ける。

「では、私は戻ります」

「ああ、教室で会おう」

「はい……」

肩を落としつつとぼとぼと翔の部屋を出て、しばらく部屋へ向かって歩いてしたが、自分の体の丈にあっていないジャージの腕の裾を見て、今更何かに気が付いたかのように、はっとした表情の後、頬

を紅潮させ妙に嬉しそうに笑い、先程までとは大違いの意気揚々さで部屋へと歩くラウラ。

（よくよく考えれば、これはボスの持っていたジャージ……今私はそれに身を包まれているのだな……）

妙に恍惚とした表情でもあった。

午前7時、寮の廊下を優雅さを持って歩く金色の長い髪が特徴的な美少女。セシリア・オルコットは現在、朝食へ翔を誘うために翔の部屋を目指していた。優雅に歩くその表情は、何処となく幸せそうな表情である。翔はああ言う性格のため、この時間には既に起きているだろうとの予測を立て、翔の部屋を目指している。

目的の部屋の前に付いたセシリアは、人の部屋に入る前の最低限の礼儀、ノックをしてから声を掛ける。

「翔さん、起きていらつしやいますか？」

そう声を掛けてしばらく待ってみるが、中からは返事が返ってこない、30秒ほど待機してみたが、応答はない。セシリアは失礼かとも思ったが、もう一度だけノックして、ドアノブに手を掛け、扉を開く。

「失礼致しますわ……？　なるほど」

そう言いながら翔の部屋へ入ったセシリアの耳に飛び込んできた音は、水音、その水音はシャワー室から聞こえている事から、翔がシャワーを浴びているのは明白。ここでセシリアは悩むが、結局翔の部屋で、シャワーが終わるのを待たせてもらう事にする。

いつも翔が使っているデスクに着き、翔の部屋をじっくり見回す。セシリアが来た時はシャルロットがまだこの部屋に居る時に来たあの一度だけなので、じっくり見た事がない。朝のこの明るい時間、部屋はよく見える。まず目に入るのは本、読書が趣味で読む本は種類が決まっていないう言っていただけあって、漫画雑誌からミステリー物の小説まで読んでいると言う雑食性。セシリアにとっては意外性があったのが携帯ゲーム機があったという事、ベッド脇に放置されていたため、それなりに起動する頻度は多いのだろう。

他には通学用の鞆に、何故か刀がクローゼットの横に立て掛けてあった。思わずスルーしそうになったが、もう一度よく刀を見つめてみる。

「何故、こんな所に刀が？しかも本物のようですわ……」

椅子から腰を上げ、刀の前まで歩いていき、刀をじっくり見るために、座り込んでじっと見つめていると、後ろから声が掛かる。

「俺の刀が気になるか？」

「ひゃ……あ、上がっていらしたんでしたら、そうとおっしゃって……っ！？」

セシリアへ掛けられた声に、少し非難の台詞を吐きながら振り返ったセシリアの目に、上半身に何も着ていない翔の姿が映り、その瞬間、顔全体が赤く染まり、また刀の方を向くために全力で向きを反転させる。だが、慌てていたのがよくなかったのか、セシリアの体が傾く。

「あっ……」

このままいくと倒れるのはベッドの上なので特に危険はなかったの

だが、思わず目を閉じるセシリア。そして、セシリアの身体を包むのはベッドの少し反発のある感触……ではなく、何か堅い板のようなものがセシリアの頬に当たり、身体は力強く温かい何かによって支えられていた。その感触にセシリアが目を開けると、そこは翔の腕の中だった。

「迂闊だぞ」

「も、もも申し訳ありませんわ!」

またセシリアの顔がぱつと赤くなり、翔の腕の中でもぞもぞと動く。シャワーを浴びた後の清潔感溢れる翔の匂いに少し安心するが、目の前に翔の顔、胸板に押し付けられている耳には規則正しく聞こえる翔の心音。直接肌に触れている事から、心音が一定でも安心せず、何も纏っていない翔の胸板に触れている頬が熱くなるのを感じる。セシリアが大人しくなったのを確認して、しっかりとセシリアを立たせ、身体を離し、上半身に制服を着込んでいく翔。下は最初から制服を着ていた。そんな翔の着替え中の背中に少し残念そうな表情ながらも見とれているセシリアに翔から声が掛かる。

「で？ 刀がどうかしたのか？」

「え？ あ、それは……本物のようですけど……どうしたのかと思います」

「携帯許可は取っている、使用目的は主に鍛錬に使っている」

そういつつ、制服を着終わり、刀を手取る翔。

「最も、この刀は有名なものではなく普通の刀で、普通ならまともに物など斬れん」

そう言って、セシリアの目の前で抜かれた刀は、刀身の真ん中15

cmほどの部分以外は全て刃が潰されていると言つ鈍らよりもひどい刀だった。その珍妙な刀に疑問の表情を浮かべるセシリア。これでは武器としては殆ど機能していない。

「刀と言うものは今刃を残している所が最もよく斬れる、そしてこの部分が当たる間合い、角度が最も斬撃の効果が最大になる場所だ、どんな状況でもここで相手を捕らえる事が出来れば、大抵の物は斬る事が出来る、そうして俺は斬ると言う行為を昇華してきた」

セシリアはなるほどと思わず納得する。戦闘においての翔の強さの本質は攻撃力でも機動力の高さでもない、それを可能とする強靱な肉体と異常なまでの動体視力。そして強さの最大の要因は、尋常ではないほどに間合いの読み方が絶妙であると言う事。日本刀で鍛え上げてきた間合いの感覚を生かし、武器が大きくなるうともその間合いを瞬時に把握し、その武器の間合いを最大限に使う。翔の持つ剣はそれだけで結界のようなものだ。

「これで翔さんの強さの片鱗が分かった気がしますわ」

「大げさだな、世界は広い、俺よりも強者など、そこいらに居るかも知れんぞ？」

「それでも、私にとって今は翔さんが最強ですわ」

そう言つて微笑むセシリアに、ふつ、と翔は笑みを返す。抜いた日本刀を鞘に収め、それをセシリアに差し出す。

「持ってみろ」

「良いんですの？」

「ああ」

片手で差し出してきたそれをセシリアは両手で受け取るが、あまり

の重さに少し両腕が下がる。刀をしっかりと受け取ったセシリアは腕を震わせながらも何とか落とさずに持ちこたえる。

「こんなにも重たいものなんですね」

「驚いただろう、鋼というのはそう簡単に振れる物ではない」

「篠ノ之さんや織斑先生はこれを振っているのですか？」

「いや、あの二人はもう少し振りやすい物を使っている、柔軟性の高い日本刀だ」

そう言う意味では俺の日本刀は特別製だ、と言いながら、セシリアから日本刀を返してもらい、また元の位置へ戻す。

「何故そこまで絞り込まれた肉体なのか理解しましたわ」

「まあ、そう言う事だ、で？ 今更だが、俺に何か用か？」

翔の問いかけに本題を思い出したのか、ハツとした表情を浮かべ、すぐ後、少し頬を染めつつも期待を込めた表情で身を少しよじり始めるセシリア。そんなセシリアの様子に首を傾げる翔だが、セシリアの話が邪魔するつもりはないようだ。

「そ、その、朝食をご一緒していただけないか、と………思いまして………」

段々と尻すばみになっていくセシリアの言葉だが、肝心な所は聞き取れていたのも、考えるまでもなく翔は返答を返す。

「ああ、別に構わん、俺もシャワーを浴びたら行くつもりだった」

「ほ、本当ですか？」

「ああ」

「で、では早速参りましょう？」

翔の肯定の返答に、花が咲いたような笑みを浮かべ、翔を急かすセシリアに疑問を投げかける。

「今日は腕はいいのか？」

「い、良いんですの？」

「む？ 女をエスコートするのは男の役目、ではなかったのか？」

「も、ももも勿論そうですね！」

確かそう教わった記憶が……と純粹に疑問を浮かべている翔の腕をこれ以上無いほど嬉しそうに取り、自分の腕を絡ませるセシリア。教わった事を忘れない男、柏木翔である。無論、セシリアがこれを翔に教えた事で自分が後で後悔する事になるとは、この時微塵も思っていないかったのは当然の事だ。

この後、セシリアと翔は共に朝食を取り、問題なく教室へ向かうのだが、二度寝で遅刻したシャルロットと言う珍しいものを目撃するのはもう少し後だった。

十八斬 漢なら教わった事は黙って実行するもんだ（後書き）

勿論これからの本番はこの話ではなく、この後のシャルロットとのデート&千冬さんにプライベート遭遇の話が本番です！

ようやく原作の話で千冬さんとうれしはずかしな展開が所まで着ましたよ！

みなぎってきたー！

十九斬 漢なら黙って相手に合わせる器量が必要だ

夕日の差し込むIS学園一年一組の教室。今現在、ここにはシャルロットと翔が教室の掃除を行っていた。IS学園は、普通なら生徒に掃除をさせないため、何かしらのペナルティを負った時は、罰として掃除と言うものが使われる時がある。今現在そのペナルティを受けているのがシャルロット。今朝の遅刻の罰だそうだ。そして翔は何故ここにいるのかと言えば

「ごめんね？ 翔、手伝ってもらっちゃって」

「気にするな」

と言うわけだ、授業が全て終わっても帰ろうとしないシャルロットへ翔が声を掛け、教室の掃除をする事を聞き、手伝いを申し出た。まず最初に分担をきっちり決めておいたため、効率的に進む掃除は早いもので、翔が机を移動させ、シャルロットが床を掃き、必要以上に話をしない翔や、話しかけたいが、夢で見た状況とよく似た今の状況に少し気恥ずかしさを覚え翔へ話しかけられないシャルロットの二人では嫌でも掃除に集中するしかない。その事実からこれ以上無いほど効率的な掃除となり、もう終わりを迎える。

「ふむ、終わったか」

「うん……そうだね」

特にこれと言って特別な感情が込められているわけではない平坦な声音の翔に、己の罰が終わったと言うのに何処か落胆したような声音のシャルロット。シャルロットは声音だけでなく、僅かに肩を落としているように思える。無論、そんなシャルロットを見て放っておける翔ではない。

「どうかしたのか？」

「え？ いや、何でもないよ！ うん」

少し慌てたようにそう言うシャルロットに、そうか、と簡潔に言う
と、教科書などを入れ、帰る用意を終えている鞆を掴む。

「では帰るぞ、シャルロット」

「ああ！ 待ってよう！」

シャルロットも急いで鞆を掴み、歩き出す翔の後姿を追いかけて、翔
の左横に並んだ時、何か思い出した様に声をあげ、シャルロットの
少し上にある翔の顔を見上げ、問いかける。

「もうすぐ臨海学校だけど、水着とかがって持ってるの？」

「水着？ 服で泳ぐのは思いの他鍛錬になるからな、問題ない」

「問題アリアリだよ！？ 誰が態々海まで行って服のまま泳ぐのさ
！？」

「誰も泳がないのか？」

「誰も泳がないよ！」

何も問題はないと言うように発言する翔の言葉にすかさずシャルロ
ットからのツツコミが入る。一組の兄貴的立場の翔が、態としか
思えないような発言に、普段は真面目なシャルロットがツツコミを
入れる光景は、ある意味かなりシュールな光景であると言える。そ
のシャルロットのツツコミに、翔は少し考え込むように、腕を組み
片手で口元を隠し、微かに眉根を寄せる。

（わわっ、こう言う仕草と表情も、良いなあ……）

翔の何気ない仕草に、少し心臓の音が跳ね上がるシャルロットだが、そんな事はおくびにも出さず、続いて出てきた翔の少し困ったような発言に反応するシャルロット。

「ふむ、そうなると少し困った、水着は昔の学校指定の水着しかない……」

「な、なら！」

「む？」

気合を入れた様に声を上げるシャルロットに反応し、組んでいた腕を解き、視線を向ける。翔の視線に捕らえられたシャルロットは何処か緊張したように、体の前で持っている鞆の取っ手をきゅっと握り締め、視線の位置も一定せず、翔の顔を見られないように彷徨っていた。

「に、日曜日、僕と水着、買いに、行かない……？」

「む？ 別に俺は指定水着でも一向に構わんが……」

「だ、駄目だよ！ いくら水着とはいえ、翔は外見整ってる方なんだから、身なりにも気を使わないと！」

「？ よく分からん、水着や服など着れば良いのではないか？」

そう力説しているシャルロットに首を捻る翔。買い物に誘いたかったと言うのもあるが、服装に全く気を使わない翔に服を見繕ってあげたかったと言うのもシャルロットの本音。実際、翔は外見が悪いと言うわけではなく、普通よりは上のレベルで纏まっている。一夏のような爽やかな美男子と並んでいるからあまり目立ってはいないだけ、と言うより、評価の方向性が違う、一夏がどちらかと言えばイケメンと呼ばれるジャンルならば、翔は男前と言うジャンルに分けられる。そう言う意味での方向の違いがある。普通にしているもつり上がった様な形の存在感を感じさせる眉、瞳は鋭いが釣り上がった

てはおらず、いつも冷静に物事を見る落ち着きを感じさせる黒色が印象的である。主張しすぎないほどに高い鼻に、軽々しく開かない薄めの唇。そのパーツを囲う輪郭はシャープな部類に入るが、男性だと断言出来るほどには無骨さを感じさせる。それに短すぎず長すぎない黒髪。身長はそれほど高くはないはずだが、顔が小さいため、実際の身長以上に高く見えると言うマジック。

この様に、全体的に見れば整っている容姿をしている翔が着飾らないと言うのはシャルロットの中では出来れば許容したくない事であったと言う事だ。

「よくないよ、外見を整えるのも重要な事だよ？ でないと、対面した相手に不快感を与える事だってあるかもしれないよ？」

「ふむ、まあ、そこまで言うなら、水着は新しいのを買いに行く事にしよう」

「も、勿論僕と一緒にしてくれるんだよね？」

「む？ そう言う話だったのではないのか？」

「う、うん！ そう言う話だよ！ じゃあ、日曜一緒に行くかね？」
「承知」

シャルロットの念を押すような誘いに、いつと変わらぬ声で応じた翔に向けたシャルロットの表情は、これ以上に無いほど嬉しそうで可憐な、満面の笑顔だった。

翔がシャルロットに誘いを掛けられたしばし後、いつもの訓練を終え、シャワーを浴びて自らの部屋のベッドに倒れこんでいる一夏。その表情は当然、訓練後の疲労が浮かび上がっている。疲れ切った一夏の表情から、今日も相当にしごかれた事が予想できるが、一夏の口から不平不満が出て来る事はなく、ベッドに身体を預けている一夏の表情は少しばかり笑っていた。

「辛いけど、無駄じゃない……」

力を抜いてベッドに沈んでいた腕を持ち上げ、空中で何かを掴むように拳を握り、一夏自身が思っていた事をぼそりと呟く。その声音は確かな実感が込められているような力のある声。握りこんだ一夏の拳には、目に見えない何かを掴んだという確信が一夏の中にあつた。

と、一夏がISにおいての自らの成長を静かに噛み締めていると、何やら部屋の入り口付近で言い争うような声が一夏の耳に届く、一夏自身と翔以外は全員女子生徒と言うこのIS学園の中で一夏の交友関係はそう広くない。つまりは一夏の部屋の前で言い争っている人物が誰なのか、ある程度は予想をつける事が出来る。

その人物達を予想しながら、疲れ切った身体に鞭を打ち、部屋の入りに口へと向かい、ドアを開ける。

「アタシは一夏に大事な！ 大事な用があるの！」

「それはこちらとて同じだ！」

ドアを開けた一夏の耳に飛び込んできたのは、予想していた人物達と寸分違わぬ声の持ち主達の怒声。と言うより、互いの主張を折る気の無い言い争いの声だった。あまりにも予想通りの人物である二人に、ドアを開け、その光景を見た一夏は、ため息を一つ。その後、一夏自身にも気が付かず、ヒートアップしていく二人を止める為、仕方なく声を掛ける。

「箒、鈴」

「へ？ い、一夏！」

「む？ い、居たのなら早く言え！」

一夏が声を掛け、その声を聞き取った瞬間に、二人の意識は互いから一夏へと移される。醜態を見せた事が少しばかり恥ずかしいのか鈴音と箒の頬は少しばかり赤く色付いている。強い調子で箒と鈴音に詰め寄られた一夏は少しばかりたじろぐが、そこで翔の様子が思い浮かび、表情を引き締める。そして勢いに圧されぬ様、二人をしつかりと見据える。

（翔ならこんな事で一々慌てないんだ……）

「そ、それで？ どうしたんだよ？ 二人して」

長年に渡って、柏木翔という男を見てきた成果なのか、こうして意識していればそれなりに屹然とした態度を取れるようになった一夏、それもつい最近からと言うオチがつくが……。おまけに少し台詞に動揺が見て取れる。それなりと言う評価はつまり、そう言う事である。

いつもと違い、少し引き締まったような態度を取る一夏に、鈴音と箒の二人は何かしらの感情を感じたのか、見惚れるように一夏の顔を凝視する。が、それも少しの事、すぐ我に返り己の用件を一夏に伝えようとするが、互いに互いの事が気になったのか、また睨み合う様な態勢へと戻りかける。

「はい、ストップな、このままじゃ話進まねーし、取り敢えず部屋入ってくれよ」

またもや不毛な睨み合いへ突入する前に、呆れたような声で、一夏から箒と鈴音へ取り敢えずの妥協案と言うか提案が入る。事が起こる前に叩き潰し、妥協案を提示する事で興奮した二人に幾許かの時間を与える。そうする事によって多少なりとも頭は冷える。単純に問題を先延ばししただけに見えるが、この場面でこの先延ばしは最善の行動であるとも言える。どちらも部屋の前での言い合いが尾を

引いており、冷静ではなかった。その事を踏まえての先延ばしは結果が最終的に出る事が分かっている上での、言うなれば冷静になる為の時間的クッションと言う役割を果たしている。

何気ない一夏の行動ではあるが、提案の内容、言い出すタイミング、己の声音と雰囲気の使用方、どれを取っても錬度の違いこそあれ、翔が会話において場を掌握する時に使う戦法とよく似ていた。

少しずつではあるが、一夏も精神的に成長していると言う事である。その証拠に、互いに爆発しかけていた鈴音と箒は己の激情が暴れる寸前に抑え付けられた事でやり場のない感情を互いに持ち、素直に一夏の言う通り無言のまま部屋へ入っていく。

翔だったならば抑え付けるなどと生温い事はせず、感情が爆発する寸前で叩き潰していた事だろう、その辺りが翔と一夏の違いだと言える。

「二人同時に聞くとまた拗れそうだから、箒からな？」

各部屋に標準で存在している二つの椅子に二人を座らせ、自らはベッドに腰掛けた一夏は掌を組み、両肘を両膝に置き、話す順番を決定する。この順番の決定に一夏としては他意を含んだつもりはないのだが、箒の表情は喜色に彩られ、逆に鈴音の表情は苦虫を噛み潰したような表情へと歪む。

二人の表情の差異に疑問が湧くが、理由のわからない疑問を考えるのは無駄だと判断し、まずは箒の話聞く態勢に入る。

「そ、その、だな……んっ！ 日曜日に、わ、私の買い物に付き合え！」

「別にいいぜ？」

頬を紅潮させ、言葉に詰まりながらも一生懸命に誘いをかけた箒に対し、一夏の返事は即答、何も考えてないようなあっけらかんとし

た態度で箒の意見を了承する。

無論、そのやり取りに黙っていないのは鈴音である事は明白、一夏が了承した瞬間に目尻を吊り上げ、一夏の胸倉を掴み前後に揺さぶる。

「アタシだって同じ事言うつもりだったのに、何さっさと了承してんのよ！ あんたはあー！」

「うおおお！？ お、同じ事なら、三人で行けばいいだけの話だろ！」

揺さぶられつつも声を張り上げ焦ったような声色で鈴音にそう告げると、鈴音は何処か諦めたように一夏の胸倉から手を離し、箒と視線を合わせ、二人して同時にため息を着く、先ほどまでいがみ合っていた二人とは思えないほどにタイミングが合っているその様子は、開放された一夏にはとても不思議な光景に見えていた。

「まあ、一夏だもんね……」

「ああ、この際仕方ないな……」

「な、何の話だ？」

妙に通じ合っている箒と鈴音の会話に疑問を差し込む一夏だったが、椅子から徐に立ち上がって一夏を見つめる箒と鈴音の視線は驚くほど冷めた様な、何かを諦めたような視線。思わずたじろぐ一夏だったが、箒と鈴音は特に何をするでもなく、結局一夏の出した提案を採用する事にしたようで、一夏の提案を念を押すようにして繰り返す。

「では一夏、忘れるな、日曜日に……」

「アタシ達と買い物だからね？」

「お、おう……」

それだけ念押しと共に確認すると、箒と鈴音は少し機嫌が悪そうに足音を立てて一夏の部屋から退室し、後に残ったのは何が起こったのかよく分からないような表情をしてベッドに座り込む一夏だけが残された。

「な、何だったんだ？」

どうやら翔のように、と考える本人にとってそれはまだ実現出来そうになかった……。

そして日曜、互いに約束していた翔とシャルロットは共に寮を出て、ショッピングモールまで足を伸ばしていた。休日と言うこともあり、多くの人々が行き交っており、その表情の中に負の感情は少ない。それと共に男女のペアが多い事が見受けられる。休日に男女のペアで外へ遊びに来て幸せそうに浮かべる笑顔、それはつまり、デートと言う行為である事は明白。

そんな男女が多く行き交う中で時折女子のみのグループや男子のみのグループも見受けられることから、娯楽施設としても優秀なものが揃っていると見て良いだろう。その様な分析をしつつ辺りを見渡す翔は間接に少しばかり余力があるゆったり目の黒いGパンに黒のTシャツ、どちらももごてごてした装飾はなく簡素なもので身を包んでいる。

そんな翔の様子を見ながら何が楽しいのかニコニコと笑顔を浮かべるシャルロット。翔と出かけるという事を意識した女性らしい服装をした彼女もまた、翔とはそう言う関係ではないが、非常に嬉しそうな笑みを浮かべている。

「さて、と、翔？ そろそろ行かない？」

「む？ 承知した」

冷静沈着な翔にしては珍しく辺りをキョロキョロと見渡し、思考に耽っていた様子の翔へシャルロットから声が掛かる。無論、何故男で出かけていてその目的が何なのか察せないほどに鈍いというわけではない翔は、青春だ、と頭の中で結論を弾き出し、シャルロットへ反応する。と、彼女は既に目的の場所へ足を向けようと歩き出していた。

そんな彼女を疑問に思ったのか、翔は声を掛ける。

「シャルロット」

「ん？ 何かな？」

無論、そんな翔の呼びかけを無視する彼女ではない。目的の場所へ向かって歩き出そうとしていた足を止めて、翔へ向き直り、掛けられた声へ反応を示す。

「腕は良いのか？」

「へ？」

シャルロットには端的にそう問われた翔の質問を理解する事が出来ず、間抜けな声が口から漏れる。当然だ、先ほどの台詞だと普通ならば腕の調子を聞かれたのかと判断するような台詞に聞こえる。その例に漏れず、シャルロットもそう受け取っていた。が、彼女は腕に怪我などしていない、調子がどうかと聞かれれば良いに決まっている。

「えっ、と、良いよ？」

意図がよく理解できていないが、取り合えずシャルロットはそう答

える。と、翔は疑問を抱くように眉根に皺を寄せ、考え込む。そして、女性にも色々あるという事が、と勝手に一人で納得し、歩き出そうとする翔だが、何の事を言っているのか分からないシャルロットは翔へ疑問を投げかける。

「えーと、何だったのかな？」

「女性をエスコートするのは男の嗜みでその際には腕を組むとセシリアに教わったのだが……どうも俺の知識に穴があったようだ」

その言葉で、翔が投げかけていた質問の意図を理解し、数秒前のやり取りをしていた自分を猛烈に蜂の巣へと変えてやりたい衝動に駆られるシャルロット。つまり、腕を組まなくて良いのか？ と言う意味があった翔の言葉に数秒前のシャルロットはこう答えた、良いよ、とつまり翔はこう受け取ったのだ、別に気にしなくても良いよ？ と、それを理解したからこそ、数秒前の自分が許せなかった。全てを理解したシャルロットの思考は高速で回転する。つい最近まで男子の格好をしていたとはいえ彼女は青春真っ只中の女の子、休日に思い人と腕を組んでショッピングなど、夢見るシユチュエーシヨンであるのは間違いないのだ。それを取り戻す為に彼女の思考は高速で回転しているのだ。

「翔は勘違いしてるよ？」

「む？」

この状況を打開する為の策が思いついたのか、シャルロットは翔に言葉を投げかけていく。シャルロットに勘違いだと言われた翔は不思議そうな雰囲気。無論、表情などそう変わっておらず、相も変わらず感情を悟らせない表情。しかしその分彼のまとう雰囲気が翔自身今の感情を如実に語っていた。

無論そこまで分かりやすいのも警戒する必要がない人物が対象だから

らと言う理由が大きい、翔は身内には以外に甘いのだ。

「僕が良いよ、って言ったのは腕を組んでも良いよ？　って意味だったんだよ？」

非常に焦ったように翔へと説明するシャルロット、自分でも苦しい言い訳に思えたのか、彼女の額に汗が浮かぶ。そんな彼女の様子に少し疑問を感じる翔だったが、特に気にするほどでもない判断したのか理解したように頷く。

「なるほど、どうやら俺の理解が甘かったようだな、すまない、では改めて行くか」

そう言葉少なく腕を差し出した翔の表情はやはり変わらなかったが、雰囲気は柔らかくなった様に感じるシャルロット。差し出された腕に頬を紅潮させつつも嬉しそうにそっと自らの腕を絡ませその力強さを感じる。無論の事ながらシャルロットの表情は満面の笑みに彩られている。紅潮した頬は彼女の感情を如実に表したサインとなつて現れる。腕の力強さに安心しつつも恥じらいを浮かべたその表情は美しく可憐、恋をしている女性だけが見せる特権のような表情だった。無論その様な表情をしているシャルロットに視線が集まらない訳がなく、女性も男性もシャルロットの幸せそうな表情に注目している。

シャルロットに視線が集まるという事は、同時に翔へも視線が投げかけられているという事だが、その翔は気にする事無く堂々と、しかし、歩調はさりげなくシャルロットに合わせる形で歩を進めている。

羨望や嫉妬といった感情の籠った視線にも動じず、堂々と歩を進める翔と、そんな翔の腕に自らの腕を巻きつかせ、安心しきったような表情で頭を翔の肩へもたれ掛けるシャルロット。傍目からみても

堂に入っただような二人にため息がいくつも漏れる。

（有難うセシリア！今だけは感謝するよ！）

「ねえ、翔、僕の水着も選んでくれる？」

「む？ 水着と言うものは詳しくはない、俺は役に立たないと思うが？」

「いいの、翔は僕が着て良いと思うか悪いと思うか、それだけ言うてくれれば十分だよ？」

「そうか、ならば承知した」

「うん！ お願いね？」

「うむ」

片や嬉しそうに、片や声の調子を崩さず冷静に言葉を交わしていきながら、二人の姿はショッピングモールの人込みに消えていく。後に残ったのは先ほどの二人の姿にため息をつくカップルと男性のみ女性のみのグループだけだった。

容姿のレベルとしてはシャルロットは言うまでもなく美少女と呼ばれるレベルの女性、対して翔は、確かに顔の造形としては整っている部類に入るが、目を引くほどの、と言うわけではない。が、しかし、纏う雰囲気、堂々とした態度、さりげない気遣い、それらを総合して二人を見ていたギャラリーの感想は言うまでもない。

「今の二人お似合いだったわよね？」

「ああ、カップルかな？」

「わかんないけど、女の子の方、いい表情だったわあ」

「男の子の方も良かったわよ？ 余計な事は言わずに受け止めてくれそうな感じ」

「あれが……漢ってやつだろ」

「ああ、恐れ入ったぜ……」

「あんな男に、俺はなる！」

「無理だろ」

「ああ」

つまりはそういう事である。その場の話題を搔っ攫って行った二人の姿は既にシヨッピングモールの中へ消え、もう見えることはない、が、話題だけがこの後先行していくのは仕方のない事だったのかもしれない。

十九斬 漢なら黙って相手に合わせる器量が必要だ（後書き）

二ヶ月、二ヶ月も連載を止めてしまった作者はもはや言い訳の余地
すらないと思います。

最初のハイペースの反動なのか、執筆速度が尋常ではないほどに落
ちております、はい。

資料が戻ってきて書ける状態にあるので、またここからペースを取
り戻す努力をしようと思ってますので、よろしくお願いします！

二十斬 漢ならさりげなく誰かを気遣ってやるもんだ

夏、うだるような暑さにも拘らず、ショッピングモールに居る大勢の男女が、腕を組み、手を繋ぎ、違いの身を寄せ合っていた。

それもその筈、今は夏、つまりは開放的になり、現在の二人の関係を一步進める大きなきっかけとなるイベントが盛りだくさんの季節。そんな季節をこのショッピングモールに来ている大勢のカップルと呼ばれる男女のペア達が見逃すわけがない。

その証拠に、人が集まりすぎて蒸し風呂のようになっていいるショッピングモールの通りには、カップルと思われるペアが嫌でも目に付く。時折そんなペアを見ながら、羨望の声や、血涙でも流しそうな勢いの、男子のみ、女子のみのグループを見かけるが、それは比率から言っても少数派で、このショッピングモールは、現在、この夏に勝負をかけるカップルや、相手のいる女性が多くひしめく戦場なのだ。

そんな肉の壁、と言ってもいいような人波の中に、一際美しい金色の髪と紫紺の瞳、陶器のように白い肌を持った、所謂美少女と、黒髪にどちらかと言えば鋭いと言える黒い瞳の、感情を悟らせないような落ち着いた表情をしている男女が、周りと同じ様に腕を組んで歩いていた。

少女の方は、頬を赤くしながらも、瞳は嬉しそうに細められ、その口元も、嬉しさを隠せないように笑みの形をとっている。胸元に抱えた男の腕に時折嬉しそうに頬を擦り付ける仕草は見る者によっては微笑ましさを感じ、羨望の視線を向け、嫉妬に身を焦がすだろう。

男の方は、変わらず表情を変化させないが、自らの腕を、少女の好きにさせ、さり気無く歩調をあわせながら人の波を抜けやすい方へ少女を誘導すると言う荒業をやっている。そんな男の誘導に、少女は気がついた様子もなく、男の腕の感触を堪能している。

人が多く集まり、声や足音など雑音が多く混雑し、視界は人の波しか見えない状況の中でも、黒の男と金色の髪を持つ美少女の歩調は、一つも揺るがない。障害など無いように歩みのリズムが乱れない二人組みは目的地へ向かって悠々と歩を進める。

「シャルロット」

「なあに？ 翔」

シャルロットと男に呼ばれた少女は、自身の少し上から落ちてきた低めの声に、いかにも自分は機嫌がいいという事をアピールしているような弾んだ声を返す。

黒の男 翔の問い掛けに、シャルロットは翔へ視線を寄越すように少し上目に翔を見上げるが、翔の視線は進行方向へ向けられたまま、人の波の隙間に視線を投じている。

そんないつもと変わらぬ、感情を悟らせない表情で、前だけを見ている翔に、少しばかり頬を膨らませるシャルロットだったが、今の状況から考えて、翔とシャルロットの両方がよそ見できるような状況ではないと悟ったのか、その可愛らしい頬の膨らみはすぐに沈静化する。

「目的地はこの方向で合っているのか？」

「合ってるよ、ここを真っ直ぐ行って左手にあるこの辺りで一番大きなビルが目的地だよ」

「承知した」

シャルロットの答えに、翔は、そう簡潔に応え、会話が終了。

今の今まで雰囲気や、翔の腕の感触を楽しんでいたシャルロットだったが、こうして会話が始まり、すぐに終わると、雰囲気や感触だけではなく、もっと翔とコミュニケーションが取りたい。そう思ってしまうのも仕方ない事。

今まで普通の生活で満足していたが、数日間だけ贅沢な生活をしてしまった。それ故に、今までの生活では我慢できなくなった。この様な事は良くある話。つまりそれと同じ事が、シャルロットの中で起こっている。

もっともっと、そう思うのは、人間の性であり、人がひしめき合うこのモール街は、ある意味その象徴であると言えなくも無い。

「ねえ？ 翔」

「何だ？」

「翔ってさ、休みの日とかって、何してるの？」

IS学園に在籍している生徒は、その全てがある一定ラインよりも優秀な生徒であるため、休日全てを自らの趣味に費やす生徒と言うのは、実はそう多くない。居たとしても極僅か、シャルロットやセシリア、ラウラ、鈴音の様に、破格の優秀さを持ち、知識や技術面において他の生徒よりも余裕がある代表候補生達がそれに当てはまる。

多くの者は、通常授業やIS関連の授業の予習や復習、ISの縦技術向上の為に自主練習をしている者が大多数。ISと言う物に関連する学園は伊達や酔狂でどうにかなるレベルではないと言う事。そんな中、IS学園において、一般生徒よりも優秀で、幾らか余裕のあるシャルロットが気になったのは、翔の休日風景。

シャルロットは休日の度に、翔の姿を探すのだが、未だにその姿を休日見た事が無いのが現状だった。部屋に行けばもぬけの殻、朝早く行ってもそれは変わらず、学園内を探してみれば何処に居るかわからず、そうしている内に一日が終わる。

彼女が聞いた所、セシリアもラウラも翔の姿を休日に見た事はそう多くは無いらしい。シャルロットと同じ様な時期に来たラウラに至ってはシャルロットと同じく一度も翔を休日に捕まえられた事が無いと、シャルロットはラウラ自身から聞いている。

シャルロット達よりも、少しだけ翔と付き合いの長いセシリアは、数回だけ、一夏と一緒に居る所を見かけたらしい。

IS学園の中で二人だけの男子学生として人目を引く二人の内一人だと言うのに、その動向が掴めない翔の休日が、シャルロットには気になった。

「む？ 朝の鍛錬をした後は外で本を読んだり、そのまま外で鍛錬をして一日を潰す事もある」

「部屋に居る事は無いの？」

「いや、勿論部屋に居る事はあるが」

多くの人とすれ違う中で、言葉を交わす翔とシャルロットだが、不思議と互いの声ははっきりと聞き取れていた。

その中で、シャルロットの問いに、翔は簡潔に答えていく。

「僕、部屋まで行ってノックした事あるんだけど、返事も無かったから居ないのかと思ってたんだけど……」

シャルロットとしては、翔に居留守を使われたような気分になり、先程の上機嫌は何処へ行ったのか、その気分は下降していくように、発言の調子もそれに比例するように落ちていく。

少し見上げるように翔を見ていたシャルロットの視線が俯きかけた時、不意に翔の顔がシャルロットの方を向き、その瞳は珍しく驚きと少し苦虫を噛み潰したような色を浮かべていた。

「そうだったのか……スマンな、座禅を組んだり、何か一つの事に集中すると周りの音が聞こえなくなる様で……決して意図的ではなかったのだが……」

本当に悪いと思っている様な声と表情で謝ってくる翔の雰囲気、

思わずシャルロットは安心する。態ではないと言う事が翔の雰囲気
気で理解出来たから。

それによくよく考えれば、翔はそんな事が出来るほど曲がって
はいないし、いつも前を見ている翔がそんな事をするとも思えない。
その考えに至り、謝ってくる翔に、シャルロットは、気にしない
で、と笑顔を浮かべ、横に首を振る。

「良いよ、翔らしい理由だしね」

そう言っただけで勝手に笑顔を浮かべるシャルロットに、許しても
らえたと思ったのか、翔の雰囲気も幾分か柔らくなる。

「今度から俺に用事がある時は勝手に部屋に入ってきてくれて構わ
ん、部屋に居る時は鍵を開けているからな、すぐにわかるはずだ」

「え？ いいの？」

「うむ」

そう言っただけで頷く翔。思わぬ所で翔から、部屋へ入る権利を貰
ったシャルロットは、更に笑顔を輝かせ、自身の腕は翔の腕を掴む
ので忙しかったため動かす事は無いが、心の中で小さくガッツポーズを
決めていた。

誤解も解けた所で、意気揚々と歩を進めようとするシャルロット
だが、彼女の視界に目的の建物が入る。

「あ、翔、あそこだよ」

「む？ 承知」

そして改めて、シャルロットの歩調は意気揚々とした歩調を取り
戻し、翔は黙ってそれに合わせるようにして、目的地の中へと入っ
ていた。

湿気と熱気が充満していたモール街の通りとは違い、建物内は空調が効き、この季節には過ごしやすい環境が整っていた。

今建物に入ってきた翔とシャルロットだが、シャルロットの方は流石に外は暑かったのか、持って来たハンカチで額を拭っている。

対して、今までシャルロットと外を歩いていたはずの翔には汗の気配があまり感じられず、本人も涼しい顔をしている。

「翔ってば凄いな、暑くないの？」

「暑くないとは言わないが、慣れだろう、外で鍛錬をする事など日常茶飯事だ」

涼しい顔をしてそう返す翔に、シャルロットは思わず苦笑を浮かべる。この年齢で自分の身体をそこまで苛め抜いている人物もそう居ない。

事実、IS学園で比較的優良な生徒であるシャルロットもそこまです訓練したかと言われると、勿論NOだ、ISの適正者と言うものは、大体がISを纏つての訓練であるため、大きな怪我をするという事はあまり無い。

肉体を鍛える訓練も勿論あるが、そこまで無茶苦茶なものはないのが事実である。何故なら、ISの操縦者がその訓練で怪我をしてしまつては元も子もないから、と言う理由が大きい。

故に、ISを纏つて訓練をした方が、データも取れ、操縦者のIS運用の技術も上がり、安全性もそれなりには考慮されているなど、色々効率がいいのだ。

少なくともシャルロットやセシリア、鈴音もそうだったに違いはない、ラウラは軍人上がりの為、シャルロット達のような訓練ばかりではなかったのだろうが……。

そう言う意味では、ラウラが翔の訓練体系と一番近いのかも知れない。

だが、そんなラウラすらも軽く受け流す翔の訓練の密度や時間、内容は、それこそ類を見ないほどの内容なのだろう。

「凄いよね、僕なんかもう汗が止まらないよ」

「まあ、鍛錬中に暑さなど気にしていられん、最低限の水分補給さえ行っていれば問題ない」

「へえ」……」

「？ どうした？」

翔の言葉に相槌を打ちながら、シャルロットが不意に、翔の腕を離し、すすつと翔から少し距離をとる。そんなシャルロットの行動に、翔は疑問を浮かべるが。問われたシャルロットは少し恥ずかしそうに何かを気にしている様に、ぽそつと小さな声で呟く。

「僕、汗臭く……ないかな？ って」

「む？ いや、そんな事は無いが」

「そ、そう？」

「ああ、シャルロットの匂いしかしい」

「っ！？」 翔って、時々凄いよね……」

「む？」

翔自身は何の事だかよく分かっておらず、本人は汗の臭いはせず、普段のシャルロットと変わらないと純粋にそれだけを言っただけだったのだが、言われたシャルロット本人はその事が分かっているが、それだけでは無いように聞こえたのだが、頬を赤く染め、何の事が分かっていない翔に、うゝ、うゝ、と声を上げながら、翔の腕をもう一度掴み、行き場の無い感情をぶつけるかのように身体全体で翔の身体を押しながら、顔を隠すように翔の肩辺りへ自らの

顔を押し付ける。

そんなシャルロットの金色の髪から覗く耳はこれ以上無いほどに赤く染まっていた。

勿論、シャルロットの力では翔の身体はびくともせず、翔は、ふむ……と呟き、彼女の行動が理解出来ずとも、シャルロットの落ちてくまで好きにさせる事にしたのか、身体を無意味に押されながらも、それを阻害する事なくそこに立っている。

そんな二人だが、ここはデパート内、当然そんなやり取りを行っていたれば注目を浴びるのは避けられず、当然のように視線を集めているのだが、シャルロットは自分のやり場の無い感情を翔にぶつけるのに忙しく、翔自体は元々そのような事を気にする事の無い性格である為、現在の二人に他人の視線を気にすると言う考えは無い。

注目を集めてから暫くして、シャルロットの方から、うゝうゝ、と唸る声が聞こえなくなり、その様子を理解した翔は、シャルロットへ声を投げかける。

「落ち着いたか？」

「うん……なんとかね」

まだ赤みの抜けきらない頬をしているが、言葉の雰囲気としては、動揺の色は無く、落ち着いたと判断した翔は軽くシャルロットを促す。

「ならば行くぞ」

「あ、うん」

翔にしては珍しく、シャルロットを急かす様に、つかまれた右腕を軽く動かす。

基本的に翔が誰かを急かすと言うのは滅多に無く、特に問題が無い場合、文句も無く他人の好きにさせて、問題があった場合のみそ

のペースを握ると言うスタンスを取っている。

そんなスタンスの翔が、シャルロットを急かすような行動を取ったのが珍しく、シャルロットは翔をチラリチラリと見つつも、デパート内を歩く。

（失態に注目を浴びていた、と言うのは誰しも恥ずかしいものだ）

翔はシャルロットを急かしながらもそう思う。

人の視線に晒される事に、翔自身は何も思っていないくとも、シャルロットがその事実を知った時、どう思つかはわからない、故に、この場から早く離れた方がシャルロットの為。

そう思つての行動だった。翔の思惑は成功し、シャルロットは周りの視線に気がつく事無く、二人はその場を後にして目的の水着を販売している場所へと足を向ける。

シャルロットの水着を選ぶ為に、女性用に水着売り場へ、翔とシャルロットの二人が到着した時、翔は既に自らの水着を購入した後だった。

男性用の水着の売つてあるエリアに着き、そこでさまざまシャルロットの視線を釘付けにし、自信満々の表情でシャルロットが翔に差し出した水着は、黒地のバミューダで、左下の裾辺りに金字で、極、と書かれたシンプルな水着だった。

シャルロットが選んだ水着ならば、間違いはあるまい、と試着せずにサイズだけざっと確認し、即購入、と言う流れを経てここまで来ていた。

そして現在、翔は、水着を選んでくると言つてその場を離れたシャルロットを、試着室の傍で待っている所だ。

女性用の水着売り場で、男が一人突っ立っていると言う構図は、

かなりの違和感で、女性客からかなりの注目を集めているが、翔本人は気にした様子もなく、腕を組み、指定された試着室の傍で静かに佇んでいる。

「ちよつと貴方」

「俺の事か？」

「そうよ、これ、なおしておいて貰える？」

明らかに高圧的と取れる態度で、翔に話し掛けてきた女性は、ハングーに掛けられた水着を翔に突きつけながら、命令をする様に言葉投げかける。

軽くウェーブが掛かった長めの髪を揺らしながら、少しつり気味の目で、翔を見下したような視線を向けながら命令する女性。女尊男卑の風潮が広がっている近年、こう言う態度をあからさまに出してくる女性も、多いというわけではないが、少ないとも言えない数が存在している。

ISを使えるのが女性のみ、そして今や権力者も女性が多く居るこの社会では、女性の方が有能で男性よりも優れていると考える者も多い。女性を優遇するような国の体制、制度、その全てが、こう言う態度を助長させる原因とも言えるが、男性の方にも問題が無いわけではない、この風潮が広まった辺りから、女性に対してへりくだった態度で接する男性も増えたのも事実だ。

そう言う事が重なり、男性を奴隷の様に扱う女性も少なからず居るのが現状で、その立場に対して文句の一つも言えないような男性が増えているのも確かな事実。

翔の目の前にいる女性は、まさにその風潮の体言と言ったような女性で、美人ではある様だが、人を見下したようなその視線から、どうしてもいい女性とは思えない。

その様な女性を目の前にしても、感情を悟らせないようないつもの静かな表情を崩さない翔。腕を組んだまま、静かに女性を見返す。

「聞こえなかったのかしら、なおしておいて貰える？」

「聞こえてはいるが、貴女の命令を聴く気は無い」

プレッシャーを掛けるように、更に高圧的に翔へ言葉を投げかける女性に、翔は何の気負いも無く、さらりと拒否の声を上げる。

そんな翔の態度に、女性の眉根は寄せられ、不機嫌そうに歪んでいく。

「警備員を呼ぶわよ？」

「どうぞ御自由に」

脅しとも取れる女性の言葉に、さらりと受け流すように、ポーズを崩さないままクールな態度を崩さない翔。

「私が警備員を呼べば男である貴方なんか終わりよ？ それでもいいわけ？」

「何と言われようと、貴方の命令には従わない、男だからと相手を見下すような未熟者に従う義理など無い」

「未熟者ですって？」

更に不機嫌そうに表情を歪めていく女性に、周りの雰囲気も悪くなつていくが、そんな事気にした事ではないと言う様に、翔は淡々と言葉を続ける。

「未熟者だ、男だ女だとそう言う前に、一人の存在すら確かなものとして扱う事が出来ないような人間は大事な何かが掛けている証拠」

「言つわね、今や男と女は対等ではないのよ？」

「だからと言って見下す理由にはならない、人の価値は対等かどうかどう

かなどではない、前へ進む人間は例外なく素晴らしい人間だ」
「……」

恥ずかしげもなく、自信満々にそう言い切る翔に、女性は機嫌が悪そうな表情を直す事は無かったが、何かを思つように瞳を細めて、翔を見返す。

「何が貴女の歩みを止める事になったのか、知ろつとも思わないが、もし、貴女が前へ進むならその姿は美しいと思わせるはずだと言うのに……残念だ」

「っ！？ 変な男ね……新手の口説き文句なの？」

「何の話だ？」

翔の言葉に、さつと頬を朱に染めて、憎々しげに翔を少し睨みつけるような視線は、少しばかり険が和らいだような雰囲気を感じる。そんな女性の口から発せられた台詞に、翔は何もわかっていない様に疑問を浮かべるが、そんな翔の姿に、女性は、染まった頬の赤みを誤魔化す様に、舌打ちを一つ鳴らす。

そして、付き合いきれないと思ったのか、くるりと踵を返し、数歩進み、立ち止まる。

「……貴方、名前は？」

「柏木翔」

「そう、私は桐谷風音……さっきの話、考えてみるわ」

「縁あれば、美しい姿が見れる事を期待している」

「っ！？ 一々恥ずかしい奴ね……」

背中に流れる、ふわりとした長い髪を靡かせながら、桐谷風音と名乗った女性は、翔の前から姿を消し、一人その場に残った翔は満足そうに一つ頷き、そこで、翔へ近付いてくる足音。

その足音に視線を向けてみれば、シャルロットが一つの水着を手
に、翔へ近付いてきていた。

「中々、決められなくて、ごめんね？ 待たせちゃって」

「いや、構わない」

「何かいい事あった？」

「少し、な」

シャルロットの問いに、満足そうに、だが短く簡潔に言葉を返す
翔に、そっか、と何やら嬉しそうにシャルロットは笑顔を返す。

（翔が嬉しそうで、何か僕も嬉しいな）

満足げな雰囲気翔と、可憐な笑みを浮かべるシャルロット。

傍目から見れば、仲睦まじい様子に見える二人。その内に目的を
思い出したシャルロットが声を上げる。

「あ、そだ、水着選んできたんだ、着てみるから感想が欲しいな？」

「承知した。だが、まともな感想など言えんが……」

「いいよー、似合ってるかそうじゃないか、翔にはそれだけ言っ
て貰えればいいから」

「承知」

短くそうやり取りして、嬉しそうに試着室に入る、その直前、何
かに気がついたように、翔の傍に戻ってくると、何を思ったのか、
翔の手を掴み、試着室に向けて翔を引っ張るが、翔自身がその力の
ベクトルに抵抗した為、シャルロットの行動は失敗に終わる。

「いきなり何をする」

「い、いいから！」

「いや、良くは無いだろう」

何か焦っているように翔の腕を必死に引っ張るシャルロットだが、当然翔の身体は動く事は無い。

シャルロットの突然の暴拳に疑問を浮かべる翔だが、その翔の肩眉が、ぴくりと動いた瞬間、シャルロットと翔の二人に声が掛かった。

「ボス……」

「む、ラウラか、ようやく声を掛けたか、何をしているのかと思ったが」

二人に声を掛けてきた人物、それは、銀髪に赤い瞳、眼帯が特徴的な少女、ラウラ・ボーデヴィツヒだった。

デパートに入ってから暫くして、ラウラの尾行に気がついていたら翔とシャルロットだが、翔はそのラウラの行動に疑問を浮かべ、シャルロットは邪魔されなければ気にしないと思っていたのだが、ラウラが動いた事で、シャルロットは暴拳を起こした。

それに翔が逆らっている内に、ラウラが到着。

そうして二人に声を、正確には翔に声を掛けたラウラだったが、何やら少し呆然とした様子。

「私は……か、可愛い水着を着た方が良いのでしょうか!？」

「いや……知らんが、着ればいいのではないか？」

突如そう問われた言葉に、疑問符を浮かべ、簡潔にそう返した翔の言葉に、何を勘違いしたのか、あわあわと慌て、頬を少し赤く染めながら、ラウラの瞳は翔の手を引いているシャルロットを捉えて、シャルロットへ詰め寄る。

「シャルロット！ わ、私の水着を選んでくれ！」

少し涙目になりながら、頬を赤く染めて詰め寄ってきたラウラにシャルロットはたじろぐ。

僕の邪魔をしないで！ と突き放せるほどシャルロットは厳しくも無いし、自分の事を考えているわけでもない。それになにより…。

（ラウラってば、可愛い……）

そう言う事、小柄で、赤い瞳に涙を溜め、恥ずかしそうだが、頼るものが少ないラウラはルームメイトであるシャルロットに頼るしかない、そんな彼女がシャルロットへ必死に頼み込む姿は、シャルロットから見て、非常に可愛らしく映った。

そんな愛らしい彼女を突き放す事など、シャルロットには出来なかった。

それに、好いている男の目に可愛らしく映りたい、そう見られたい、そう願うラウラの気持ちは、同じ男に惹かれているシャルロットにも痛いほどわかった。

そう言う事もあり、ラウラを突き放す事など出来ないシャルロットだが、翔とのデートを中断させられたのも事実、それはシャルロットとしても残念な事だ、なので、折半案を出す。

「わかったよ、だけど、僕が翔に水着の感想聞いてからでも良い？」
「わかった！」

思い人とのデート、せめてこれ位の特典が無いと、シャルロットとしては、何となく納得がいかない。

シャルロットの出した案に、うんうん、と頷き、ラウラは力強くその案を呑む。そんな必死な姿も非常に可愛らしい、と思いつつも、

翔に水着を見てもらう為に、シャルロットは試着室に足を向ける。

「ふむ、上手く纏まったようで安心したぞ」

「と、取り乱して済みませんでした、ボス」

「気にしなくて良い」

「はい」

試着室に向かったシャルロットを見送りながら、翔とラウラはそんな会話を交わす。

身長之差もありその会話内容も相まって、横並びに試着室へ視線を送るラウラと翔はまるで、上官と下士官の様に映る。

翔はゆったりと腕を組み、静かに佇み、そんな翔の横で、ラウラは、所謂、休め、の体勢で立ち、翔と同じく、試着室の方を見つめる。

異様な光景である事は確かだが、態々それに突っ込みを入れる人など居るわけも無く、試着室の中から聞こえる布擦れの音が聞こえ、暫くしてそれが止まった所で、試着室のカーテンがしゃっと開き、中から水着に着替えたシャルロットが姿を見せる。

彼女の性格にしては、少し大胆なセパレートの黄色を基調とした色の水着。その水着は、金色の髪を持つシャルロットによく似合い、彼女の可憐さを更に引き上げていた。

そんな彼女が、ビーチに立つ事を思うだけで、大抵の男は幸せな表情を見せるだろう。

「ど、どう、かな？」

試着室のカーテンの裾を握り締め、頬を赤く染め、もじもじと身体を擦りながら、チラチラと翔へ視線を送るシャルロット。

スタイルの良い身体を露出面の多い水着に身を包み、身体を擦るその姿は、可憐さを感じつつも、柔らかそうな彼女の白い肌が艶か

しい雰囲気を出しており、男性ならば、視線を釘付けにするほどの破壊力があつた。

そんな彼女の水着姿に、ラウラは同じ女性なので、冷静に見る事が出来るのは当然だが、同じくシャルロットの水着姿を視界に納めている翔の表情にも動揺は見られず、冷静に、ふむ、と声を漏らし、組んだ腕の右手で顎を擦り、冷静に言葉を返す。

「水着の事はよく分かんが、シャルロットによく似合っていると思うが」

「ほ、ホント!？」

「ああ、よく似合っている」

念を押すようなシャルロットの言葉に、翔は短く返答を返し、その翔の言葉に、シャルロットは嬉しそうに笑顔を浮かべる。

嬉しそうに、そして幸せそうに笑顔を浮かべるシャルロットを、ラウラは羨ましそうに見つめる。

「じゃ、じゃあ、これにするね!」

「ああ」

嬉しそうに満面の笑みを翔に向けながら、シャルロットはもう一度試着室のカーテンを引き、着替えに入り、またもや布擦れの音が聞こえてくる。

シャルロットの着替えが終わるまで、待つ態勢に入った翔とラウラだが、そんな二人に、またもや声が掛けられる。

「翔とラウラじゃねえか」

「む?」

後ろから掛けられた声に聞き覚えがあつた翔は、振り向き、その

人物の姿を脳裏に描きながらも確認する。

黒髪に整った顔立ち、高めの身長に長い手足、その整った顔立ちには少し疲れが見えるが、間違いなく翔が脳裏に描いた人物。

「一夏か」

「何だ、織斑弟か……」

翔とラウラは一夏の姿を確認すると、それぞれに一夏の名前を呼ぶ。

一夏の姿をまず認め、翔はそのまま一夏の後方へ視線を向けると、ため息をついている箒と鈴音の姿も同じく認め、事情を察した翔は、珍しくその表情に苦笑を浮かべていた。

（苦労しているな、箒も鈴音も）

事情を察し、箒と鈴音に同情の念を抱くも、一夏に伝えてしまったからには対応しないわけにもいかない。

笑みを浮かべて近付いてくる一夏は、そんな箒と鈴音に気がついた様子はない。

「何やってんだ？ 二人してこんな所で」

そう問うて来る一夏に応えようと、翔が口を開いた所で、翔の後ろで試着室のカーテンが開く音がする。

「どうしたの？ 翔……って、何か増えてない？」

試着室から出てきたシャルロットは笑顔を浮かべていたが、何やら人数が増えている現状を見て、その笑顔も口元がひくつと引きつり、増えた人を見回す。

そして、シャルロットは悟る。

（ああ……僕の翔とのデート、短かったなあ……）

人知れず心で涙するシャルロットは、まさに、顔で笑い心で泣くを地で行っていた。

そうして半分諦めの境地に達したシャルロットは、水着を手に持ち、翔へ近付き、ラウラとは逆の場所へと収まる。

試着室から出てきたシャルロットと、先程からいたラウラが、翔を挟むようにして立ち、そんな二人を交互に見つめる一夏。

「どういう状況だ？」

「それはな……」

疑問を浮かべる一夏に、翔は今までに至る経緯を説明する。

「じゃあ、これから皆で何かするか？」

翔から状況を聞き、納得した一夏から、遊びの提案が出た瞬間に、箒、鈴音、シャルロットの三人は、何かを諦めたようにため息を吐き、ラウラは

「ボスがいるなら、何処でもいい」

と、自らの水着を購入するのは後日でも構わないと思ったのか、一夏の誘いに否定はしない。

翔としても特に異存は無い様で、特に否定する雰囲気も無く、話が纏まりそうになった六人だが、そこでまた、六人に声が掛かる。

「お前達、こんな所で何をやっている？」

掛けられたのは低めの女性の声で、その声に反応して、六人全員がそちらの方へ視線を向けると、全員が脳裏に描いていた人物がそこに立っていた。

「ちふ……織斑先生」

一夏がポツリとその人物の名前を呟いたその人物は、間違いなく織斑一夏の実姉、織斑千冬の姿であり、彼女は学校で見るスーツ姿とは少し違うが、それでもかつちりとしたサマースーツを着こなし、胸の下で軽く手を組み、一夏達を見据えながら立っていた。

そんな千冬の姿がある後方から、ぱたぱたと掛けてくる人影が見え、緑のショートカットと丸めがねが特徴的な人物が全員の目に入り、その人物が誰なのか、千冬の姿とセットで、全員の脳裏に浮かんでいた。

「早いですよおゝ織斑先生……って、あら？ 皆さん偶然ですねえ」

そう言つて、ほやあ、と笑顔を浮かべる人物は、当然の事ながら、山田真耶、IS学園一年一組副担任の姿であった。

何をしていると千冬は六人に問いかけたが、箒と鈴音、それに、翔からすれば、千冬がこんな所にいる事の方が余程疑問だった。

一夏は何の為に千冬がここにいるかなど、ある程度予測できているし、ラウラとシャルロットもある種の予感で千冬が何の用事があるのか察していた。

「織斑教諭」

「今は学園内ではないからな、普通に呼んでくれないか？」

翔が千冬に話し掛けた所で、千冬から静止が入り、同時に提案も入る。

千冬からの提案に一つ頷き、翔は千冬への接し方をプライベートへ戻す。

「千冬こそ、こんな所で何をしている」

「それは、だな……み、水着を、買いに来たに決まっているだろう……」

翔の問い掛けに、頬を薄く朱に染め、尻すばみになりながらも千冬は答える。

普段クールな彼女が頬を染めるのは普段とは違い、ギャップがあるが、その姿は違和感が無く、可憐とも言える雰囲気であった。

そんな雰囲気で、チラチラと翔を見る彼女に、箒と鈴音は何となく事情を察し、翔は、それもそうか……と普通に納得しながら一つ頷いていた。

頬を薄く朱に染め、意味ありげに翔へ視線を寄越す千冬に対する翔の様子を見た箒と鈴音は小声で一夏へ話し掛ける。

「ちょっと一夏、翔つてもしかして、鈍い？」

「アレだけアピールされれば嫌でも気がつくと思うのだが……」

箒と鈴音から小声で問われた内容に、一夏は簡潔に、且つ小声で答える。

「鈍いとかそう言うもんじゃねえ……翔は恋愛情緒が小学生よりも幼いんだよ、異性として女性を好きになった事が無いから、その好きって違いがわからないんだ、これは本人から聞いたから間違いない、だから女性からの好意に鈍い様に見えるんだ、実際はそれ所じ

やない」

一夏から言われた、箒と鈴音からすれば驚くべき新事実に、二人は顔を見合わせて驚き、少し同情的な視線を、ラウラとシャルロット、そして千冬へ向ける。

「大変つてもんじゃないわね……」

「ああ、同じ女として、応援する気持ちしかない……」

今ここに居る、シャルロット、ラウラ、千冬、そしてここに居ないセシリア、鈴音は更に、一夏と翔の共通の友人である弾の妹である蘭、翔に惹かれている代表的な四人あるいは五人を思うと、箒と鈴音は同じ女性として、ほろりと涙を零しそうな気分襲われ、一夏からもたらされた事実を知らない四人を全力で応援したい衝動にも駆られた。

さしづめ、箒と鈴音の気分は、一大ドキュメントを見ているような気分だった。

恐らく一夏も同じ様な気持ちで、箒、一夏、鈴音の三人は、自分達以外の四人を暖かい目線で見守る事を決めた。

そして、人知れず、今回の翔とのデートで主役だったはずのシャルロットは一人心中で泣いていた。

(うう……僕と翔のデートだったのに……僕って運無いのかなあ)

人知れず、今日のヒロインであった筈のシャルロットは、小さくため息を吐いていた。

二十斬 漢ならさりげなく誰かを気遣ってやるもんだ（後書き）

こつちにはお久しぶりです。あつくすぼんばーです。

本当に久しぶりの投稿、お待ち頂いていた方、本当に申し訳ありませんorz

中々先の展開が思い浮かばず、こんなに長く更新を止めてしまいました。

これからも書いていきますが、最近妙にスランプ気味ですので、更新は不定期になるかもしれませんが、ご容赦ください。

完全停止と言う事は、無いと思うので一応ご安心を。

さて次回ですが、千冬のデートパート（捏造）を予定しております。

いつになるか分かりませんが、ご期待ください。

頑張れ、俺。

では、今回はこの辺りで。

二十一斬 漢ってのは行きつけの隠れ名店を知ってるもんだ(前書き)

あー、どうしよう、本当にスランプっぽい

二十一斬 漢ってのは行きつけの隠れ名店を知ってるもんだ

夏と言う季節、開放感溢れるこの季節において、水着と言う比較
的露出面積が広い物が多い衣服は、女性にとって武器ともいえる存
在。

翔達が今居るこの場所、モール街に多数存在するデパートの内の
一つでも、多数の女性を見かける事が出来る。その殆どは、よりよ
い水着、つまりよりよい武器を手に入れる事が目的の女性だろう。

そして、普段は凜としていて、クールな態度を崩さない、黒のサ
マースーツがよく似合い、学園では見せる事の無い、頬を赤く染め
上げるという表情を、柏木翔と言う一人の男の前で前面に押し出し
ているIS学園一年一組担任、織斑千冬もその例外ではなく、いつ
もの様子からは想像も出来ない様な恥らった態度を見せる千冬の両
手には、それぞれ、白い水着と黒い水着が握られていた。

「あ、あー、その、だな……」

頬を赤く染めたまま、千冬は何やら言葉を濁しながら、その視線
は真耶に向かつて、チラチラと何か意図を送るように送られている。
千冬の送る視線に気が付いた真耶は、少しわざとらしく大きく声
を上げながら、自らの胸の前でパンツと手を合わせて、今この場に
居る数人のメンバーに声をかける。

「あー！そうです、デュノアさん、ボーデヴィツヒさん、篠ノ之さ
んに鳳さん、少し用事があるので、こっちに來てください、それか
らついでに買い物も一緒にしちゃいましょう！ 女の子同士の買い
物もいいものですよ？」

「え？ あ、ちょっと、僕は……」

「いいから、來てください」

次々に不平不満の声が上がるも、その全てを黙殺、と言うか、聞いていないように四人を連れて行き、去り際に、これ以上無いほどにいい仕事をしたと言うような笑みを千冬に向けた。

が、真耶の捉えた千冬の表情は、完全に無表情で、どう見てもよくやったと言うような雰囲気ではない。

真耶の顔がこちらへ向いている事に気が付いた千冬は、声を出さずに、唇だけ動かし、真耶にそれを読み取らせる。

（山田先生、校庭30週だ）

（ひーん、何ですかあ？）

千冬の口の動きを読み取った真耶は、泣き言を上げるが、その泣き言に千冬が付き合うわけも無く、その視線は既に、この場に残った翔と一夏を捉えている。

一夏は突然の真耶の行動に、何なんだ？ と疑問を浮かべ、翔は千冬の口の動きを見ていたのか、教員であれど鍛錬を忘れるなど言う事が……等と感心している。

「気を使わせたか……」

一夏には千冬が真耶に何を言ったのか理解できていない為、千冬はそんな一夏に対して、真耶が気を使ったと言いつつも、額に少し小さな青筋が浮かんでいる。

千冬がそう発言した事で、一夏も今起こったやり取りの意味を理解したのか、額に少し、汗が滲んでくる。無論、暑いわけではなく、千冬から言われた言葉の裏に隠されたプレッシャーを感じ取ったからこそその冷や汗と言うものである。

それを感じ取った一夏は、かなり慌てたように、わざとらしく声を上げる。

「あ、あー！　そう言えば俺、山田先生に聞きたい事があつたんだつた！　ちよつと追いかけてくる！　箒と鈴との買物も途中だったしな！　じゃ、俺はこれで」

少し早口でまくし立て、翔が不思議そうに見てくるのも構わず、一夏は颯爽と身を翻し、真耶達の消えた方向へ走っていく。

慌てた様に、バタバタと走り去っていく一夏を見送り、そんなに急がなくても良いと思うが……等と首を捻っている翔の後ろで、千冬はぐつと、ガッツポーズをかまし、心の中で一夏に賞賛を送っていた。

（よく空気を読んだな、一夏、山田先生は空気を読みきれていなかったからな）

一頻り一夏に賞賛を送り終えた時、タイミングよく翔が千冬へ向き直ったので、これ以上無いほどに力強く握りこみ、腰ために構えていた腕を戻し、千冬も翔へと向き直る。

「それが選んだ水着か？」

「あ、ああ、そうだ」

誰かの意図で男女二人きりにされると、微妙な空気になり、互いに話し掛けづらい妙な雰囲気になる事が多々あるが、柏木翔と言う男には、そう言う空気は無縁の物らしく、千冬の手持っていた二着の水着について問う。

そんな翔の態度に、忘れていた羞恥が戻ってきたのか、少し頬に赤みが差し、言葉も少しぎこちない。

勿論、千冬もいつもこうと言うわけではない、ただ、今は水着を買いに来ていると言う事実と、その場面を思い人に見られたと言う

妙な気恥ずかしさを伴う状況に、恥じらいを感じているだけ。

そうなるかわかっていても、千冬には思い人と二人きりと言う状況に喜んでいいる。意図的に二人きりにされる事が恥ずかしくもあり、だが、嬉しくもある。

女性の心とは複雑なものである。

そして現在、千冬が望んだ状況が出来上がっている。

思い人の居る女性は、その思い人に良い様に見られたい、美しく見られたい、そう思うもの。それは普段凜としていて、クールな態度の千冬も変わらない。

「翔は……どちらの水着がいいと思う？」

故に、思わず千冬が自分に似合う水着を翔に聞いてしまったとしても、何ら不思議ではないという事だ。

いつも胸を張り、堂々とした態度を崩さない千冬が、おずおずと翔に意見を求める姿は、違和感がありつつも、決して悪い印象を抱くような姿ではない。それ所か、この場面を学園の生徒が見ていたならば、いつもは隙の無い千冬も、自分たちと同じく、好きな人物の前では、その人がどう思っているのか不安なものだと親近感を抱かせる事になるような、そんな姿だった。

千冬におずおずと問われた質問に対して、翔は考える素振りを見せず、すぐさま千冬に回答を寄越す。

「無論黒だろう、千冬には黒が良く似合う、と俺は思っているが？」

「そ、そそそうか！」

考える事無く、そう断言する翔に、まるで、水着を来た自分を褒められたような気がして、千冬の頬は一気に赤く染まり、慌てた様に言葉を震わせ、躓きながらも、力強く頷く。率直な意見を寄越した翔の言葉が余程嬉しかったのだろう。

だらしく緩みそうになる頬を必死で取り繕いながら、視線を彷徨わせ、真っ直ぐに翔を見る事が出来ない千冬の姿は、普段の千冬を知っている者が見れば、迷い無く可愛いという評価を寄越すだろう。

「で、ではこちらにするか」

「簡単に決めてしまつてよかったのか？」

「あ、ああ、丁度私もこちらがいいと思つていた所だ！」

翔の問い掛けに、翔が黒の方が似合うと言つたから黒にする、とは言えず、慌てた様に出した声は不自然なまでに語尾が強く出てしまう。

千冬の不自然さに気が付いた翔だが、慌てるという事は、何か知られたくない事があるという事、そう判断した翔は、態々知られたくないと思つている事を聞くほど野暮ではなく、追求する事は無かつた。

そして、それからは何事も無く、千冬が黒の水着にすると決めたので、レジへ移動、水着を購入している千冬を翔はレジの外で待ち、千冬は特に待つ事も無く会計を終え、待つていた翔に合流する。

「これからどうする？　一夏達が行ってしまった様だからな、このまま帰つても構わんが」

千冬が翔の傍に寄つてきた事を確認し、荷物を持っている千冬を見て、帰る事を提案する翔に、千冬から静止が掛かる。

「待て、時間があるなら、その、何処かでコーヒーでも飲まないか？」

翔の出した、このまま帰ると言う意見をすぐさま却下し、千冬から提案された案に、少し考えるように、顎を右手で撫でるいつもの仕草。

とは言っても、考えるような素振りを見せたのも数秒で、自分も千冬も荷物を持った状態で行けて、それによって煩わしさを感じるような案ではないと判断し、千冬の案に一つ頷く。

「承知、では行くか」

「ん？ どうした？」

千冬の案を、いつもの様に感情を読ませないような表情で了承し、徐に千冬へ近付く翔に、疑問を投げかける千冬だが、翔はそれに反応する事無く、千冬の左腕を自らの右腕に巻き込む。

無論、翔に予告もなしにそんな事をされた千冬はたまった物ではなく、翔夜に捉えられた左腕と翔の顔を、驚いた表情で交互に見つとも慌てるという器用な行動を披露していた。

千冬の口は、言葉を発しようと色々な形を作るが、それも言葉にならず、結局何も言えない。そんな千冬の様子に、取り敢えず翔は彼女が落ち着くまでその場にじっとしている事にした様で、千冬の様子を確かめながらも動く気配は無い。

「翔、何故いきなりこんな事を？」

いつもクールな千冬は、当然の事ながら慌てても自らを取り戻すのは早い、数秒待った所で落ち着きを取り戻したのか、冷静な様子で翔に問いかける。内心は未だ混乱しつつも歓喜しているのだが、それを表に出す事は無い。

冷静な表情でそう問われた翔は、怪訝そうに眉を顰める。

「ふむ、腕を組んで女性をエスコートするのが男としての嗜みだと

セシリアに教わったのだが……やはり違うのか？」

そう疑問を持つ翔の台詞に、千冬は内心、翔にそう教えたセシリアを高く評価していた。寧ろ拍手喝采と言わんばかりに褒めていた。

（良くやった、オルコット、今ばかりはお前のしてきた行動に目を瞑ろう）

「いや、違わないが、女性によってエスコートの仕方が違うと言うのが普通でな、それで少し驚いてしまった」

千冬のエスコートの仕方はその女性によって合わせなければなら
ないと言う、翔にとって新しい知識を脳内に刻み込むと、なるほど、
そう言うものか……と納得したように大きく頷く。

デパート内のレジ近くで、まるでバカッブルの様なズレた会話を
繰り広げている翔と千冬は、当然の如く注目の的と化しているが、
二人とも性格上そのような事を気にする性格ではない。無論、注目
を集めている要因としては、千冬が傍目から見て明らかな美人だか
ら、と言う理由も無くは無い……。

「ふむ、では千冬はどうエスコートすればいい？」

いつもの表情で千冬の瞳を覗き込みながらそう問うて来る翔の姿
に、千冬は、純白、いや、翔のイメージカラーから考えて、純粋な
黒を自分の色に染め上げている様な気がして、妙な高揚を覚える。

その様な何か後ろめたい気持ちになり、翔からチラチラと時折視
線を外しながらも、ほんのり頬を赤く染めて、千冬は翔に指示を投
げかける。

「では、その、て、てて手を……繋いでくれないか？」

何年も一緒に居るはずなのに、いざこう言う状況になると、千冬はまるで、初心な少女の様な女性へと早変わりしてしまう、それ故押しが足りない、と何時も自分の弟から言われ、わかっているのだが、ついこうなってしまふ千冬だった。

ドラマなどで、女性がスマートに、または勢い良く、好きだと言いながら男性の胸に飛び込んだり、腕に抱きついたりしているシーンを良く見かけるが、あんな物は嘘だと千冬は思う。

（現実には、こんなにも難しい……）

自分の気持ちとは違う事をつい口走る口に、自らの行動を邪魔する羞恥心。例えば好きだと言った後の結果を考えると首を擡げる不安感と恐怖心。ドラマの様に綺麗でスマートに進む恋等あるわけが無い、そんな恋ばかりなら、今の自分は明らかに不公平ではないか、千冬はそう考える。

そんな少し後ろ向きな思考に入ってしまった千冬の手には何かが当たり、その何かは、そのまま自然と千冬の手を包み込み、緩やかに包み込まれているはずなのに、力強さと暖かさを感じる。

その原因は、果たして自らのものではない手が、千冬の手を包み込んでいた。その手の持ち主を目線で辿ると、当然の事ながら、いつもの感情を読ませない表情で千冬を覗き込むように見る形になった翔の顔。

「どうした？ 千冬」

静かにそう問われた翔の声に、何故か猛烈に湧き上がってくる羞恥心。と言うよりは、まるで余裕のある大人の男に甘やかされているように感じる安心感と、そう感じてしまった事による少しの恥じらいが、千冬を包んだと言った方が正しい。悪い意味ではなく、何となく心地の良い恥ずかしさ、それが、今の千冬を包んでいた。

そんな包み込むような視線と声から急いで意識を逸らし、自分の手を緩やかに、されど力強く包み込んでいる少しごっこつした男の手を、きゅっと握り、焦ったように千冬は声を上げる。

「な、なんでもない……行くぞ」

「承知」

千冬の声に軽く頷き、取り敢えずデパートの外へ出るべく、千冬の歩調に合わせながら歩く翔と、まだ頬の赤みが少しばかり残っている千冬は、互いに行動を開始した。

千冬は今自らの手を握っている男、柏木翔と、昔から一緒に過ごしてきた。そんな長い時間過ごしてきた二人だが、こうして手を繋いで歩くと言う状況は、これまで一度も無く、千冬にとって、思い人と手を繋いで歩くと言う事は、真正銘初めての出来事で、始めはこれ以上無いほどに緊張していたのだが、流石に、デパートを出て、電車に乗る頃にはその緊張も解けていた。

目的の駅に着き、降りる頃にはもう言葉を交わせるほどに緊張は無くなり、こうしている事が自然であるかのように振舞う余裕も出ていた。

そして現在、千冬と翔は、人が大勢居る所から少し離れた場所にある小さな喫茶店へと足を運んでいた。

時間は夕方に入るかは入らないかと言った所、整備はされているとは言っても、ここは中心街の外れ、都会と言う街並みから見れば、田舎と言うカテゴリに分類される方であろう、ビル群は無く、家や商店街と言った方がしっくり来る通りがある。そんな所。

そんな中、翔と千冬の前にある喫茶店はこじんまりしていて、目立った看板も無く、外装も喫茶店を髣髴とさせるお洒落な作りでは

なく、普通の家のような外装。入り口の上に申し訳程度に『メソッド』と書かれた木の看板がある程度で、あまり目立たないが、昼時や三時のティータイムには客で一杯になる地元の人間が知る隠れた名店である事を、翔と千冬は知っていた。

この店は、翔がロードワークで足を伸ばした時に見つけた店で、たまたま入り、気に入った翔は、暇さえあれば足を運ぶ、所謂常連客となっていた。

その際、翔がよく姿を消すのを心配した千冬が問いただした所、ここに釣れて来られ、千冬も気に入り、翔と同じ道を辿ったのが二度二年程前。当然千冬も時折足を運ぶのだが、最近足が遠ざかっていた為、千冬にとっては懐かしい店でもあった。

今現在、幼馴染グループでこの店を知っているのは、翔と千冬のみ、無論、翔は一夏にも教えようとしたのだが、その時の千冬の言った

「一夏にはあの店のコーヒーの味はまだ早い」

そう言っただけ押し切られたので、未だにこの店は千冬と翔しか知らない。その事が密かに嬉しい千冬だが、その様な彼女の心の機敏など、当然翔は知る由も無い。

少し懐かしそうに目を細め、店の看板を見る千冬。そんな彼女が店の前で止まったのに合わせ、翔も歩みを止め、千冬の行動に付き合う。

一通り、店の外装を眺め、満足したように、よし、と頷いた千冬は、翔に声を掛け、二人で店に入っていく。

木で出来た軽い扉を翔が押し、からんと呼び鈴が鳴ると、外装通り、少し狭い店内が翔と千冬を迎える。店内に置いてある椅子とテーブルは、年代を感じさせるような作りで出来た木造の椅子とテーブル。

呼び鈴が鳴った事でカウンターでグラスを拭いていた白髪の優し

そんな男性が翔と千冬に視線を向け、その視線が二人を捕らえると穏やかに笑みを浮かべ、二人に話し掛けてくる。

「おや、柏木君に織斑さん、二人揃ってとは珍しいですね」

「お久し振りです、マスター、買い物の時に偶然翔と一緒にになりましたね」

「そうですか、柏木君、何時もの席は空いていますよ？」

「む？ かたじけない、マスター」

白髪の喫茶店のマスターが言っていたいつもの席とは、窓際の小さな机とそれを挟んで存在する二脚の椅子が存在する小さなスペース。そこがいつもここへ来た時翔がいつも座る席でもあり、千冬が来た時に座る席でもあった。

翔と千冬が手を繋いで入って来た所は見ているはずだが、その事に一々突っ込むほどのこのマスターは野暮ではなく、ただいつもの席が空いていると言う事だけを翔達に伝える。

その情報を聞いた翔は、軽くマスターに礼を言い、千冬と共に、いつも座る窓際の席へ移動し、そこで繋がれていた手は自然と離れ、向かい合って席に座るのだが、手を離す際、千冬の表情に少し寂しそうな色が混じったが、翔はそれに気が付くことは無く、千冬もすぐに表情を直した為、その事実是谁にも知られる事も無く闇へ葬り去られる。

気分を入れ換え、千冬が懐かしそうに目を細め店内に視線を移す。

「来ていなかったのは少しだけだが、昔から変わらないな、この店も」

昔から見ている店内も変わらず、マスターの人柄も変わっていない、その事が何故か妙に嬉しく、千冬の紡いだ台詞は嬉しそうな響きを伴い、それを裏付けるように、口元も柔らかく笑みの形を作っ

ていた。

そんな嬉しそうな千冬の前でも、翔の表情は変わらないが、雰囲気は普段と違い、柔らかく黙って包み込むような雰囲気になっている。その事を千冬は自覚し、口元はますます嬉しそうに笑みを深くする。

「周りや自分が変わっていく中で、こうして変わらぬ物がある、それは幸せな事。俺はそう思う」

「ああ、本当に、幸せな事だ……」

しみじみとそう呟く翔に、千冬は気持ちを共有したような気分になり、その気持ちを噛み締めるように、幸せだと、本当に心の底からそう思う。

「ご注文はお決まりですか？」

先程の白髪のマスターがタイミングよくオーダーを取りに近付き、同時にお冷の入ったグラスを音も立てず翔と千冬の前に置く。

翔と千冬はマスターの手際に感心しつつ、オーダーを聞くマスターの言葉に対して、同時に口を開く。

「「ブルーマウンテン」」

二人でここに来た時の決まり文句のような注文に、マスターも嬉しそうに笑みを浮かべ、オーダーを受けたマスターはカウンターへと帰っていく。

店内の客はまばらで、静かな店内に響いた二人の声。それは昔から変わらない、千冬が翔に提案した事が今も生きている証拠。

「覚えていたのか」

「無論だ」

「『二人で来た時は、少し贅沢にブルーマウンテンを頼む事にしよう』今思えば、ただの口約束だったが、そんな事も律儀に覚えているなんてな」

そう言つて少し嬉しそうに千冬は笑い、両肘をテーブルに着き、手を組み、その上に顎を乗せ、細めた瞳で翔を見据える。

如何にも大人の女性であるような、そんな仕草の千冬を前にして、翔は腕を組み、いつもの表情で千冬を静かに見返す。

「変わらない物があるなら、変わらない事があつても問題はあるまい」

その翔の言葉に、千冬の瞳は一瞬大きく見開かれ、その後、千冬 of 表情はこれ以上無いほどに嬉しそうな微笑を浮かべる。

そして、そんな嬉しそうな微笑を浮かべた千冬の口から紡がれる言葉もまた、嬉しそうな声。

「お前も、変わらないな、あの時のままだ。私の背中を押した、あの時のまま」

「だが、今の千冬があるのは間違いなくお前自身の力だ、まずそんな自分を誇れ」

眩しそうに目を細めて翔を見つめる千冬、その視線を受け止めるように千冬を見返す翔、二人の間には、いつの間にか置かれたブルーマウンテンの湯気がゆらりと揺れ、その湯気を挟んで互いを見ながらも、その意識は昔の光景を見ていた。

ブルーマウンテンの上品な香りと共に思い出されるのは、今から約五年前、千冬が剣を握ってから初めて敗北を味わったあの冬の日が、二人の脳裏には浮かび上がっていた。

二十一斬 漢ってのは行きつけの隠れ名店を知ってるもんだ（後書き）

どうも、あつくすばんばーです。

どうやら本当にスランプらしく、書いてみたは良いものの、本当に書き殴ったという表現がぴったりの様な感じになってしまいました。じゃあ上げるなよって話なんですが、まあ、スランプ時の自分の文を忘れないと言うような意味合いで上げる事にしました。

もしかしたら、かなり駄目な物に仕上がっているかもしれませんが、どうかご容赦をorz

さて、ここからは関係ない話ですが、実は作者、ついったなるものをやっております。

もし、やっている方で、仕方ねえ、フォローしてやんよ、と言う方や、純粹に作者の事が知りたい方などは、ご要望あればこっそりユーザー名教えちゃいます。

ではでは、今回はこの辺りで、次こそもっと良い文章を書けるように頑張りたいと思います。

あ、そうだ、今回は完全オリジナルです。

千冬と翔の過去話、一体何があったのか、この展開には賛否両論だと思いますが、どうか暖かい目で見守ってやってください。

今度こそ、ではでは……。

二十二斬 漢でも過去を振り返る事ぐらいある

織斑千冬には両親がいなかった。

不幸があつたとかではなく、母親と父親、二人揃って蒸発した。簡潔に一言で言うならば捨てられたと言えば話は通じる。

織斑千冬には弟がいた。

それも小さな、まだ小学校に通っている小さな弟がいた。

両親の愛を注がれ、一人立ちするまで親に守られるはずだった弟の未来は、両親の蒸発によって、必然的に千冬の双肩に掛かってくる事になる。

その事自体は、千冬にとっても嫌ではなかった。

弟は可愛かつたし、家族だから大切だと思っていた。

だからこそ、千冬は思うのだ、家族を裏切り、子供を捨てるような自分勝手な両親のようにには絶対にならない、なつてはいけな

い。その苦く辛い思い出からなのか、千冬は進んで友達を作ろうとしない。

人をあまり信じる気にはなれないのだ。最も、自らの友人である真正正銘の天才ほどに人間不信ではないと声を大にして言い切れるのだが……。

少しばかり人間不信気味な千冬とは対照的に、その弟、織斑一夏は違つた。

すぐに人を信じるし、信頼する。誰とでも仲良くなつてすぐに友達になる。

そのおかげで、将来女性関係には頭を悩ませそうだが……。

そこまで考えて、家の前へ到着した千冬は、家の鍵を開け、扉を開く、この時間ならば弟はもう帰っているだろう。

「ん？」

千冬が扉を開けた玄関には、弟の靴、これはあつて当然。

その他にもう一足、黒を基調とした靴が置かれており、その靴のサイズは弟の靴とそう変わりが無い大きさからして、弟の友達が来ていると察する。

弟である一夏が赤や青と言った歳相応の色を好みのは対照的なまでに黒と言つて色を好む一夏の友達。

千冬の頭の中では一人しか該当しなかった。

「あいつか……」

頭の中でその姿を思い浮かべた千冬は右手で右目を覆うように手を翳し、溜め息を一つ落す。

最近やけに一夏が気に入っているその人物。

一夏曰く『すっげえ強くて、すっげえ怖くて、すっげえ面白い奴』と言つゝすっげえを弟の口からほしいままにしているその人物が、千冬は苦手だった。

小学生とは思えない振る舞いに、その振る舞いが妙に板になつていて生意気な感じがしないその雰囲気。

何より全てを見透かされそうな黒い瞳、その瞳が千冬が一番苦手とする要因だった。

その瞳で見られると、自らの心の中が全て覗かれ、黒い感情の部分すら気付かれていそうな気がして、千冬はそれが苦手……いや、ハッキリ言つてしまえば、怖かったのだ。

そんな人物が今一夏が連れてきている事実、ふと今から踵を返して玄関の扉を開け、猛烈に外へ散歩に行きたくなる衝動に駆られた。

しかし、玄関の開閉の音を聞きつけたのか、家の奥から軽い足音がパタパタと駆けて来る音が聞えて、その衝動は諦める事にする。

「おかえり！ 千冬姉！」

「ああ、ただいま、一夏」

白のＴシャツに、青い半ズボンと言う服装で満面の笑顔を浮かべ、千冬を迎える一夏に、ふつと千冬の頬が緩むが、そのすぐ後に一夏の後ろから音も無く現れた、黒の長袖長ズボンのジャージに身を包む人物に、千冬表情も少しばかり硬くなる。

「お邪魔してます。千冬さん」

「ああ、ゆつくりしていけ、と言いたい所だが、そろそろ良い時間だぞ？」

一夏の友達には、それなりに普通の対応を心掛けている千冬だが、どうしてもこの黒を好み、全てを見透かされそうな鋭く黒い瞳を持った、柏木翔と言う名前の男の子には、苦手意識が先行してしまうのか、ぶつきらばうに帰宅の意を促すような台詞が出てしまう。

そんな千冬の物言いに、特に気分を害した様子も、年上の女性から少し硬い声で言われた事による恐縮なども感じられず、ただいつもの感情を読ませないような無表情に近い表情で、千冬の言葉に一つ頷く。

「心配しなくとも、もうそろそろ帰ります。ロードワークの時間ですから」

静かにそう千冬に言い返す翔の言葉に、一夏があからさまに残念そうな声を上げる。

「えー！ もうかえるの？ まだもう少しいいじゃん！」

「む、スマンな、一夏、俺にもやる事があってな、また誘ってくれ」「じゃあ、あした！ あしたは！？」

小学生ながらも、用事があると言う翔を強く引き止める事は出来ないと思つたのか、明日の用事を翔に間髪入れず聞いてくる一夏。そんな一夏の様子に、翔は少しだけ眉を顰めるが、それも一瞬の事。

次の瞬間にはいつもの感情を読ませない表情へと戻っていた。

「大丈夫だ」

「じゃあじゃあ、あしたやくそくな！」

「ああ……では、千冬さん、お邪魔しました」

元気良く翔に明日の約束を取り付ける一夏に翔は、仕方のない奴だ、と言うように、明らかに小学生が浮かべるとは思えない苦笑を一つ浮かべて、一夏に応える。

その後、千冬に向かつて、軽く頭を下げ、靴を履いて玄関を開けて呼吸を整えると、軽い足取りで走り出し、吸って吸って吐く、と言うリズムの呼吸音と共に、織斑家から姿を消した。

どうやらロードワークと言うのは本当の事らしい。

一夏は気がつかなかった様だが、長袖のジャージに隠されていた手首には軽いウェイトリストを巻き、ロードワークに行った翔が家から去った事で、少し安堵の息を吐いていた。

軽いウェイトリストだったのは、身体が出来上がっていない時期に筋肉を鍛えすぎるのは良くないと知っているからだろう。

そんな歳不相応な知識を使いながら肉体を着実に鍛え上げる柏木翔と言う少年が、千冬はやはり苦手だった。

既に閉まっている玄関を一瞥し、すぐに一夏に向き直る。

「今日も学校は楽しかったか？」

「うん！ 翔がさ……」

学校での様子を聞くと開口一番に先程帰って行った少年の事が一

夏の口から飛び出し、その勢いのよさに、またあの少年の話をたんまりと聞かされてしまう様だ、と内心そんな一夏の様子に苦笑しつつ、一夏と連れ立って家の奥へと千冬は姿を消した。

早朝、まだ日が完全に昇る少し前の薄暗い時間、刺すような冷たさを含む乾いた空気の中、篠ノ之家にある道場で、空気を切り裂く音が木霊している。

道場、空気を切り裂かんばかりに鋭い音、この二つから導き出されるものは無論、素振りと言うものだが、先程から途切れる事無く続いているこの音は、木刀と言う木製の物を振るよりも、数段鋭い音。

まだ薄暗い道場の中を煌く白銀の剣閃、果たして振られているのは木製の刀ではなく、真剣と呼ばれる刃物だった。そしてそれを厳しい表情で振るっているのは、織斑千冬、その人物だった。

普段の表情よりも、更に険しい顔をしている千冬の脳裏に浮かぶのは、昨日の一夏の……いや、ここ最近の一夏の話だった。

「……………」

ここ最近一夏の口からは、柏木翔と言う、かなり変わっている少年の話しか聞かない。

やれ翔がテストで良い点を取った。やれ翔が学校にある遊具を回したらそれに掴まっていた友人が50m程宙に投げ出され吹き飛んだ。それを翔がキャッチした。翔が上級生に絡まれていた子を助けた。翔の事が好きな女の子が一杯いる。翔と一緒に鬼ごっこをしたがすぐに掴まった。翔が難しそうな本を読んでいた。翔がよく分からない事を時々口走る。翔が、翔が、翔が……etc.

お前は恋する乙女か！ と激しく突っ込みたくなるような衝動に駆られた千冬だが、まだ小学生の可愛い弟にそんな事をする千冬ではなかった。

だが、最近の一夏の話にもややと嫌な感情を覚えている事は確かだった。

徐々に、だが確実に、柏木翔と言う少年は、一夏にとって無二の親友になりつつある。

その事態は、千冬にとっては見逃せない事だった。

そこまで一夏が心を許している友人に、もし何かのきっかけで裏切られたら？ そうなれば一夏は心に消えない傷を負うだろう。

そんな事は千冬にとって見逃す事の出来ない事態だった。

悪い可能性のある芽は早めに摘み取らなければならぬ……。

「そうだ……摘み取らねばな」

すう……と鋭い瞳を細め、刀を鞘に納めたまま腰の横まで持ち、自然体に構える。

途切れる事無く動き回っていた先程の動きとは打って変わって、空気すら停滞したように静まり返る道場の雰囲気。

千冬の細められた鋭い瞳には何かが見えているのか、実際には居ない何かを、もしくは誰かを睨み付けている様にも見える。

その状態でどれだけ居たのか分からないほどに集中している千冬の右足が、ずっと動いた瞬間。

白銀の一閃と空気を文字通り切り裂く音が『二つ』道場内に木霊し、千冬は振り抜いた刀を鞘へ納め、カチンと言う金属がぶつかる軽い音を響かせ、残心。

「良い時間だな……ロードワークに行くか」

残心を終えた千冬は、道場から差し込む日の光を目に入れ、そう

眩く。

日の光に照らされた千冬の姿は、黒の袴に白の胴着、所謂剣道着と呼ばれるものに酷似している服装に、長細い黒い棒のような物、先程振られていた日本刀が片手に持たれている。

凛々しい表情の千冬は、道場の端に置かれていた自らのスポーツバックへ歩み寄り、中からスポーツタオルを取り出し、刺すような冷たい空気にも拘らず汗ばんでいる額や頬、首から鎖骨と簡単に拭いていく。

その姿は凛々しいと同時に、男性から見れば、非常に魅力的な姿に映るであろう事が良く分かる。

最近成長が著しい身体を、凛とした佇まいを感じさせる剣道着に包まれ、その成長度合いを明らかに隠せていない胸元、逆に成長しているのかどうか分からない細く括れのある腰つきは、絞られている袴を見ればすぐにわかる。

そして顔の造形は、美女と言う評価を付ける以外に選択肢が見当たらない。

今の時間帯は千冬しか道場に居ない為、どうともないが、門下生の男性が居たならば、鍛錬の集中力を大きく削ぐ要因になっていたであろう事は容易に想像がつく。

剣道着を身に纏ったまま拭ける箇所の汗は一通り拭き終わったのを確認して、千冬は息を吐き出し、更衣室へ足を向ける。

「今日は何処を通るか……」

静かに考えにふける一言を呟きつつ、日が差し込む道場の中を一人歩き、千冬は更衣室の中へ消えた。

「はっ、はっ、はっ、はっ……」

道場の更衣室で黒に白のラインがズボンの裾の側面と、上着の袖に一本ずつ通っている簡素なジャージに着替えた千冬は、一旦家へ帰宅し、一夏を起こし、スポーツバックを置いて、家を出てロードワークに向かった。

日が出る前の暗い道でのロードワークが千冬はあまり好きでは無い為、道場で型の確認や素振り等と言った刀を使う鍛錬を先にこなしてから、ロードワークと言う流れが千冬の昔から変わらぬ鍛錬の流れだった。

柔軟を含めたロードワークを先に行い、身体を温めてから、実際の鍛錬に入ると言うのが普通合理的である事はわかつているのだが、朝日を浴びながら、澄んだ空気を己の身体に吸い込み、ただ無心で走る。

これが千冬はたまらなく好きだった。

だから日が昇る時間の遅い冬は、効率的ではないと理解しつつも、この流れを維持しているのだ。

「やはり、朝日の見える、時間の、はっ、ロードワークは、気分が
いい……」

朝靄と朝日でいつもより少しばかり白く映る辺りの景色に、千冬はふっと笑みを浮かべ、己の身体で朝靄を切る様に変わらぬリズムで走り続け、少し小高い丘に差し掛かる。

ここを上りきれば、一旦休憩。

上りきった先で、暫く街を眺めてから、家へと帰る。

千冬はこの丘の上から眺める街並みが好きだった。

その為、この丘へ至る道筋が違えども、最終的にはこの丘に着く様に、千冬のロードワークのコースは組まれていた。

丘へと上る坂に差し掛かって、一定のリズムからその速度を落す事無く走り続ける千冬にとって、丘の頂上へ続く坂を走破する事

など容易い事。

5分と掛からず丘の頂上が視界に入り、笑みを浮かべようとする千冬の頬が停止し、代わりに眉が怪訝さを表す様に顰められる。

千冬の視界に入ったのは、誰も居ない丘ではなく、朝靄の中に浮かぶ先客の影だった。

その人影が誰か分からず、眉を顰めていた千冬だったが、段々と近付き、その人影の正体が分かれると千冬の眉は益々歪み、苦虫を噛み潰したような表情が出てくる。

この時点で、千冬は踵を返して来た道を引き返そうとも思ったが、いつも見ている景色が見たかったのもあるし、何より、ここで踵を返しては、何となくその人物から逃げた様に思えて癢だったと言うのも大きい。

（そうだ、何故私が逃げなければならないんだ）

そう強く思うと、苦虫を噛み潰したような表情を消し、その人物へと近付き、あえて隣に並んで街並みを共に見下ろす。

「おはようございます。千冬さん」

「ああ、おはよう」

今日の先客……昨日と同じ黒のジャージに身を包んだ鋭い瞳の少年、柏木翔は千冬が隣に並んだ瞬間に、軽く頭を下げて挨拶はしてきたが、それ以降は何も話そうとはせず、ただいつもの感情を悟らせない表情で街を静かに見下ろしているだけ。

正直な話、千冬は言葉に表せぬ程に落ち着かなさを感じていた。無論表情には出てないが、何も語ろうとせず、じっとそこに居るだけの翔に、拒絶されているように感じていた。

それほどまでに柏木翔と言う少年の纏う雰囲気は、弟である一夏と同じ年だとは思えなかった。

勿論、翔としては拒絶しているわけではなく、千冬が居る事を認めながらも、これが自分達の今の関係だと受け入れているだけなのだ。千冬にはそんな事分かるわけが無い。

自分でも鋭いと自覚している瞳だけを動かし、自らの左側に立つ翔をチラリと見やるが、何か居心地の悪さを感じている様子は無い。そこに小さくはあるが、妙な敗北感を千冬は感じる。

だが、今のこの状況は、千冬にとって、それほど悪いわけではない。

剣を振っている最中に考えていた事を警告する良い機会、幸いにも一夏がいない子の状況は、千冬にとって都合が良かった。

「柏木」

「何でしょう？」

静かな千冬の問い掛けに、静かな翔の応答。

二人の視線は未だに、少しの朝靄と溢れんばかりの朝日の光が包み込む街並みへと注がれている。

「単刀直入に言おう、一夏ともう少し距離を取れ」

「……説明をしてもらっても？」

千冬を力強い黒の瞳で見上げてくる翔を、千冬は睨みつけるようにして見下ろすが、翔に怯んだ様子は無く、千冬の眼光をしっかりと受け止めている。

明らかに小学生らしくない翔の振る舞いに、つい流されてしまいそうになるが、正真正銘、柏木翔は弟と同じ小学生。

その事を感じて、千冬は一瞬、大人げないという感情に捕らわれるが、それを振り払い、翔と相対する。

「私達は両親に裏切られた。これ以上大切な者から裏切られれば、

「一夏の心には消えない傷がつく、お前なら分かるだろう?」

「その可能性のある俺から潰していく、と言う事ですか」

「そうだ、話は分かったな?」

「理解はしました。が、それに従う事は出来ません」

ほぼ予想通りの台詞が翔から返って来た事で、千冬は眉を顰めながら、小さく舌を打つ。

「何故だ? 一夏が傷ついても良いのか?」

「俺は裏切るつもりなど毛頭ありません」

「だが、お前にその気が無くとも、状況が許さない事もある」

「ならばその状況を断ち斬って裏切らないようにするだけ」

自信満々にそう言い切る翔に、訳のわからない苛立ちを覚え、千冬の眉根は更に釣り上がっていくが、翔の表情に波紋は立たず、冷静そのもの。

「一夏は私が守らなければならない……その為には少々痛い目を見てもらうこともあるが?」

「千冬さん、貴方のその考えは、『守る』ではない、ただ檻の中に閉じ込め、誰からも触れられないようにしているだけ」

「触れられなければ、心を許す事も無い、裏切られる事も無い、傷つく事も無い」

「だが、そうして一夏は喜びますか? 駄目だと押さえつけて、一

夏がどう思っているか、貴女はそれを知らない」

「知った風な口を!」

一夏の事を理解しているという口ぶりの翔の発言に、思わず千冬は声を荒げて怒鳴るが、それでも翔の表情は崩れる事は無い。

それ所か、千冬の発言を肯定するように静かに頷く。

「勿論、貴女だけが知っている一夏もあるでしょう。ですが、俺達友達に見せる一夏と言うのも確かに存在します」

「お前が、一夏の何を知っていると……」

「知っています。だからこそ、一夏と貴女の間にある差異を埋めなければならぬ」

千冬の台詞に被せる様にして静かに言い放った翔夜の鋭い眼光に、千冬は思わず怯む。

そんな千冬の様子など知った事ではないと言う様に、翔は静かに言葉を続ける。

「その為にも、一夏から離れる訳にもいかない。そして、貴女にも知ってもらわなければならない。その為に……一度貴女には膝を折ってもらわないとならない」

腕を組みながら、威風堂々、目上であるはずの千冬に臆した様子も無くそう言い放つ翔の姿に、思わず千冬は、はっと空気の抜けるような音と共に笑い声が漏れる。

今日の前の少年は何と言った？ 千冬の膝を折る、それはつまり、千冬に対して堂々と勝利宣言をしたと言ってもいいだろう。

その事を理解した千冬は、笑っていた声を止め、底冷えのするような視線で、腕を組んで威風堂々と立つ翔夜を捕らえる。

「あまり調子に乗るなよ？ ガキが」

ハードボイルドな台詞を恥ずかしげも無く小学生に言い切る千冬だが、無論その表情はこれ以上無いほどに真剣、と言うよりも、完全に翔を睨んでいる。

その言葉を悠然と受け入れる様にして仁王立ちの翔も、明らかに

普通の小学生では無いほどに、表情が引き締まり、その鋭い瞳で、千冬を見上げている。

「やってみなければわかりませんよ、もし俺が勝ったら、しっかりと一夏の言葉を聞いてあげてください」

「私は普段から一夏の言葉を真摯に受け止めているが……まあ、いいだろう」

釈然としない表情を浮かべる千冬だが、翔の出した条件に悠然と頷く。

勿論、千冬は一夏が自分に隠している気持ちが無いと思っているからこそその表情であるが、翔はどうもそう思っていないらしく、決闘の提案を取り下げるつもりが無いようだ。

「俺が負けた時は千冬さんの言葉を受け入れます」

「わかった、それで良い、勝負方法は？」

「無論、剣で」

「無謀と言わざるを得ないと思うが？」

千冬の忠告とも取れる言葉に、翔は軽く首を横に振る。

「心配ありません、俺も剣を嗜んでいます」

「……いいだろう、では得物は木刀、場所は篠ノ之道場、時間は明日の夕刻。これでどうだ？」

「承知」

千冬からの条件にゆったりと頷く翔を確認した瞬間。

一夏の姉と、一夏の親友による、一夏の為の決闘がここに決定された。

お前の姉と決着をつける事になった。と静かに言われた翔の言葉に、学校が終わった後の夕刻、一夏は、千冬と翔が木刀を持って互いに向き合う篠ノ之道場に居た。

一夏の様子は尋常ではない翔と千冬の様子にオロオロと慌てるばかり、この二人を止めようと思っていないわけではなく、止めても止まらない二人だと臆気ながら理解しているからこそ、どうしてもいのかわからないのだ。

「千冬姉も翔も、や、やめよ？ なっ？」

「否、どうせいつか通る道だった」

小学生とは思えないほどに引き締まった顔つきで千冬を見据える翔に、緊張と言うものは無かった。

ただ、右手に木刀の刃の部分を下にするように持ち、そこに佇んでいる。

「柏木の言う通り、いつかは通る道だった。お前は黙ってみている」
「うっ……わ、わかったよ」

少々高圧的な物言いで、鋭い視線に捕らえられた一夏は、しゅんとしたように顔をうつむかせ、肩を落す。

そんな一夏の様子を横目で見ていた翔は、珍しい事に溜め息を一つ吐き出し、剣を正眼に構えると同時に誰にも聞えぬ声でそつと呟く。

「誰かが、断ち斬るしかない……」

翔が木刀を正眼に構えるのを見て、千冬も正眼へ、ひゅっと互い

の木刀が軽く空気を裂く音が聞え、互いにぴたりと正眼の位置で止められる。

互いに戦う者として、合図などいらない事を理解している。

剣を向け合ったその瞬間から、戦いは既に始まっているのだ。

身の引き締まるような寒さと張り詰めた空気が支配する静かな道場の中心で、互いに視線を交わしあいながら、読み合う千冬と翔の静かな攻防戦は、まず翔から破られる事になる。

翔の構える木刀の切っ先が、よくよく見てみれば分からない程度にだが、ゆらりゆらりと揺れている。

（小細工を……）

集中力が限界まで高まり、相手の動作の一挙一動を見逃さないような状況の場合、相手の行動と言うのは、どれ程小さな動きでも察知してしまう。

そんな状況において、自らの動体視力を頼りに相手の動きを追う様な人物には、今翔が行っているような切っ先を揺らすという小さな行動がどうしても相手の目を引き付ける。

だが、相手の全体を満遍なく見渡し、色々な場所の身体の動きから、相手の行動を予測すると言う技術を持った相手には、この技術は所詮は小手先の技術でしかない。

そんなものを今のこの状況で使ってくる翔に、少しばかり落胆の感情を感じる千冬だったが、その状況はすぐさま破られる事になる。

「な……に？　ぐっ！」

千冬が翔に落胆を感じた瞬間に、軽く道場の床が軋みを上げる音が聞えた刹那の後、木を踏み抜くような大きな音が響き、その音が道場に響くと同時に言っても良いような時間で、千冬の視界には木刀を振り上げている翔の姿が映る。

その信じられない光景に、呆然とした声を上げる千冬だが、身体が勝手に反応し、翔の真っ直ぐ振り下ろされる木刀を、自らの木刀の腹で逸らす様にしていなし、すぐさま距離を取る。

翔にも追撃するつもりは無いらしく、後方へ跳んだ千冬を追う事無く、その場で千冬を見据え、正眼の構えを解いていない。

油断無く千冬を見る翔を見据えながらも、千冬は、先程の上段振り下ろしを木刀を横にして上段に掲げる等と言った愚考で受けなかった事に対して自ら賞賛していた。

もしあの振り下ろしを上段に木刀を掲げて受けていれば、わき腹に痛烈な蹴りが入っていただろう。

千冬の目を持ってしても一瞬姿を見失うほどの踏み込みが可能な脚力を保有する足からの蹴りなど、当たった時の事を考えると想像したくない事態が待っているのは間違いない。

「とんだペテン師だな、小細工を仕掛けたのはブラフか？」

相変わらず睨みつけるような眼光ではあるが、声の色は少し翔を見直した様な感情が見て取れる。

それに対し、翔は正眼を解かず、注意深く千冬の全体の動きに気を配りながら、千冬の見直したような声の疑問に、静かに答える。

「そう言う意図が無いとは言いませんが、自分はまだ未熟、0から1に移る瞬間の予備動作がまだ消せていないというだけです」

「なるほど……自分の欠点すら相手を惑わす為の手段に使うか……」

「未熟ゆえに……」

静かにそう応える翔に、千冬は、この戦いが始まる前にはまだ少しばかり残っていた翔に対しての侮りや油断、そう言ったものを完全に捨て去る。

油断して良い相手ではない……千冬自身の勘がそう伝えていた。

そして、そんな千冬の雰囲気や眼光の色の移り変わりを見て、翔は少しばかり眉を動かすが、その瞳の色は少し安堵したような色が浮かんでいた。

「では次はこちらからだ」

油断の消えた千冬が静かに呟いた瞬間。

彼女の利き足が床を擦る翔にして滑り、翔へと一歩静かに踏み込む。

翔の脚力から繰り出される神速の踏み込みとは違い派手さは無いが、洗練された流れを感じる動き、決して速くは無いのに、気がつけば間合いを詰められているような歩法。

人間の目を錯覚させる為の足取りで、普通のものであれば……いや、それなりの剣の使い手ですら、千冬の歩法に気がついた時にはその間合いの詰め方に対処する間も無く斬り捨てられているであろう。

そして、その動きで今着実に翔との距離を詰め、完全に千冬の間合いに入った翔。

瞬間、千冬の手首が翻り、翔の右肩口に袈裟懸けが吸い込まれる、無論、翔の鋭い瞳はその斬撃を捉えていた。

千冬のコンパクトな振りからの袈裟懸けを、千冬の木刀にクロスする形で当てて、防ごうと手を動かす……。

「がつ!？」

だが、その袈裟懸けは受ける事は叶わず、いや、受けようと思った瞬間には剣は振り切られ、何故か翔の身体はわき腹に衝撃を受け、そのまま道場の中を右に吹き飛び、床に身体がついた後は勢い良く床の上を転がり、その反動でくると身体を転がし、足を突いて回転の勢いを止める。

そんな事になっても手放してはいない木刀を千冬へ向き直りながら構える。

が、その時には千冬は翔の目の前に居り、右からの胴をなぎ払う様な鋭い一撃、それを上から打ち落とす為、右から胴を狙った水平軌道の斬撃に対してコンパクトに木刀を振り下ろす。

しかし、気がつけば、翔の身体はまたもや吹き飛んでいる。

方向としては右に、これは非常におかしな話だ、右から確かに斬撃が来たのに、気がつけば右に吹き飛ばされていた。

その答えは単純にして明快、左から斬撃が迫り、それに当たっただけの事。

受身を取って一回転、床に膝をついて、立ち上がりながら、千冬を見据える。

「素晴らしい返し手の速度ですね」

「二断一閃と言う、もうこれで二回私の斬撃を受けたわけだが、真剣だったならもうお前の身体は二つに分かれているぞ？」

「だとしても、持っているのは真剣ではなく木刀。それに何より俺はまだ剣を手放してはいません」

「そうか……」

暗に実践ならば既に死んでいると言っている千冬に対して、翔が言ったのは勝負続行の意思。

左のわき腹と左腕の上から痛烈な斬撃を貰った翔だが、その表情は相変わらず感情を悟らせない表情のまま、すくつと立ち上がり、足元もしっかりとしている。

その様子からして、内臓を揺さぶられたような様子も無い。

そんな様子の翔を目の当たりにして、千冬は瞳を細めて油断していない表情をしながらも、呆れたように溜め息を一つ吐き出す。

「呆れるほどに頑丈だな」

「取り柄の一つですから」

静かに言葉を重ねあう翔と千冬。

冷静なのはその二人だけで、道場の端に座っていた一夏はその限りではなく、親友が打ちのめされる姿を見て、驚愕の表情を浮かべていた。

一夏にとって、勿論最強の像は自らの姉だったのだが、柏木翔と言う男が目の前に現れてから、姉にも勝るとも劣らない人物が出てきて、一夏の憧れを千冬が独占していた状況から、翔も憧れの対象として見つめ、いつしか、姉と同等の憧れを抱くようになっていた。そんな憧れの極みの片方が、もう一方の憧れによって打ちのめされつつある。

その現実には、一夏は内心、これ以上無いほどに慌てていた。一夏自身も幼馴染の筈がいた時に剣を嗜んでいたが、それも二人の腕に割って入れるほどでは無い事も自覚していた。

だからこそ、今の自分が無力だと、どうにかしたいと思いながらも、道場の端でじっとしているしかなかった。

悔しさに震える一夏を横目で見ながら、翔はほんの一瞬の間、ふっと笑みを浮かべるが、それはすぐに消え、またしても真剣な眼差しで、千冬を見据える。

（そうだ、悔しさを感じる、そうして何も出来なかった自分を終わらせろ、一夏）

瞳と意識の大半を目の前に立つ千冬に向けながらも、翔は一夏に對してそう思う。

そうしている間にも、千冬はじりじりと間合いを詰め、またしても翔が千冬の間合いに入った。

先程と同じ様に千冬の手首が翻り、翔の身体を完全に捉える。

次は翔の左肩口を狙う袈裟懸けが吸い込まれる、しかし、今度は

翔は木刀を動かす気配は無く、そのままずっと左足を後ろに大きく引き、身体を半身にずらす。

その瞬間、翔の身体にギリギリ当たらない程度の斬撃が、一閃、だが空気を切り裂く音は二度発生している。

振り下ろされた袈裟懸けの軌道をぴたりとなぞる形で切り上げた逆袈裟は、まさしく神速の斬り返しと言える。

二断一閃、とはよく言ったものだ、翔は冷静な頭の片隅で考えるが、身体はその間も勝手に動き始めている。

翔の瞳が捕らえている千冬の動きは、避けられた斬撃を更に斬り返す為に手首を捻っている瞬間を取れえており、その刹那の瞬間に、引いていた左足を一步千冬へと踏み込ませ、千冬の手首が完全に返り、柄尻が振り下ろす腕の内側に隠れる瞬間、翔は木刀を跳ね上げ、その刀身を的確に柄尻へ吸い込ませる。

翔の剣の軌道を鋭い瞳で捉えていた千冬表情が驚愕の色を浮かべるが、もう既に腕の力は千冬から見て左斜め下へとベクトルを向けており、もう止める事は出来ない。

振り上げた翔の木刀の刀身と、振り下ろした千冬の木刀の柄尻が触れ合った瞬間。

道場の中に硬い木と木が反発しあう音が響き、千冬の手から木刀は離れ、道場の宙を舞う、それでも翔の動きは止まらず、もう一步、次は右足を千冬の軽く開かれている足の間に割り込ませるように踏み込み、振り上げていた腕をすぐさま折りたたみ、そのまま柄尻を前へ押し出すようにしてコンパクトに腕を押し出す。

押し出された柄尻は、寸分変わらず、千冬の水月へと吸い込まれ、千冬の口から息が強制的に吐き出される音が聞える。

「かはっ……」

その瞬間、千冬の意識は遠のき、目の前を闇が支配する寸前に見たのは、相変わらず、全てを見透かしそんな黒い瞳を持つ弟と同じ

年代の男の子の姿だった。

黒の少年の持つ瞳は、全てを見透かされそうだと思いつつも、何故か、その瞳を見ていると、肩の荷が下りたように感じられる。

そんな感情と共に、千冬の意識は闇へと沈んだ。

千冬が瞳を開けた瞬間、飛び込んできたのは人口の光だと分かる眩しい蛍光灯の光。

意識があつた時はまだ、夕日が道場の中を照らしていた為、つけなかったのだが、これが点いているという事は、もう既に辺りは闇に包まれているのだろう。

締め切られた道場の扉を見やりながらそう考え、千冬はゆっくりと辺りへ視線を配る。

するとすぐに見つかったのが、心配そうに見つめて千冬の傍に座り込む一夏の姿だ、千冬はどうやら現在、壁際に寝かされているようで、瞳を動かすだけではもう一人の黒の少年の姿を見つける事は出来なかったが、上体を起こすと、その姿はすぐに視界へ入ってきた。

翔は千冬が寝かされていた壁際の壁に腕を組みながら背をもたれさせて立っていた。

その瞳は静かに閉じられ、何を考えているのか分からないが、相変わらず小学生らしくない表情と雰囲気である。

そんな翔をぼうつと、見詰めていると、一夏から声が掛かる。

「千冬姉、だ、だいじょうぶなの？」

「ああ、大丈夫だ」

「そっか、良かった……」

かなり心配していたのだろう、千冬が軽く笑みを浮かべて、問題

ないと言つまで一夏の表情の強張りは解けなかった。

が、今は心底安心したように笑顔を浮かべている。

千冬は穏やかな目で思わず一夏の頭を撫でる。

一夏はそんな千冬の様子を不思議そうに首を捻っている。

軽く一夏の頭を撫で終わると、千冬は視線を翔へと向ける。

翔の方も、話を進めようと思っていたのか、壁から背を離し、瞳を閉じる事で隠されていた鋭い瞳を開き、一夏の隣に座り込む。

「で？ お前が勝つたら一夏の気持ちを聞くと云う事だが、何かあるのか？」

翔が勝った時の条件を確認しながら、翔から一夏へと視線を移すが、一夏は怯んだように、視線をついつと横にずらし、翔へとするような視線を向ける。

そんな一夏に、困った奴だと言つように苦笑を浮かべながら、一夏の後頭部を軽くはたく。

「千冬さんが気持ちを聞いてくれると言っている。それに今なら大丈夫だ、千冬さんも、そしてお前も」

そつだな？ と念を押すように言葉を投げる翔の声に、一夏は先程の気持ちを思い出す。

（そつだ、何も出来ないのはいやなんだ、千冬姉にこれぐらい言えなかったら、俺はこれからも何も出来ない）

意を決したように翔は顔を上げ、千冬の顔を見つめ、静かに自分の心情を吐露する為に口を開く。

「千冬姉、俺、翔やみんなともつとなかよくなりたい、楽しくあそ

びたい。千冬姉が俺を守るために色々言ってくれるのは嬉しいけど、でも、俺はみんなをもっと信じてみたいんだ、うらぎられるのが怖くても、でもみんなを信じて仲良くなりたいたんだ」

信じたい、力強くそう千冬に言い放った一夏の姿に、千冬は軽く目を見開き、そして自嘲するようにして声を吐き出す。

「一夏は、強いんだな？」

「ちがうよ、強くなる事を決めたんだ」

そう言って笑いながら翔を見る一夏に釣られて、千冬も翔へと視線を動かし、相変わらず小学生だと思えないような少年を見据える。一夏の素直な心情を聞いた千冬は、ふと、翔の考えていた事を悟る。

今まで千冬は誰にも負けた事が無かった。

それは無論男も女も関係なくと言う意味で、そして、強さを手に入れた千冬にとって、一夏はまだ守らなければならない弱者だった。両親に守ってもらえなかった千冬は、両親に代わって一夏を守らなければならぬ、その義務感に囚われ、気がつけば、外へ出たい、遊びたい、そんな一夏の自由な意思を押さえつけ、誰の手も届かない檻の中へ閉じ込めるという状況になっていた。

それは男にも負けなかった自分への過剰な自信と、信じたものからの裏切りへの恐怖、そして自分は一夏を裏切らないと言う、絶対の自信等が重なり起こった事だった。

翔はそれを理解しながら、一つ一つ解いていったのではないのか？

自身の強さに対する過剰な自信を断ち切り、外へ出たいと手を伸ばす一夏の意味を知り、千冬の恐怖を知り、最終的にはその全てを斬り払う為のきっかけを、視野狭窄に陥っていた千冬と、檻から出たくとも、自分を守ろうとする千冬を理解していたからこそ言い出せなかった一夏に与えたのかもしれない。

「そうか、ならばお前の好きにしろ。私はそれを見守るさ」
「うん！」

眩しいまでの一夏の笑顔を見た千冬の耳には、一夏の元気な返事
の他に、翔の小さな呟きも聞き取っていた。

「二人とも、前へ進んだか……」

その一言で、千冬は自分が感じた翔に対する考えが間違っていないと益々確信を高めていた。

同時に、やはり千冬は思ってしまう事がある。

（こいつ、本当に小学生なのか？）

今ここで翔が、実は発育が異常に悪い28歳だと言われても、多
分何の違和感も無く受け入れるであろう自信が、千冬にはあった。
気がつけば、千冬の中にあつた翔に対する苦手意識は、綺麗さつ
ぱりとなくなっていた。

それすらも、柏木翔と言う少年は断ち斬ったのかもしれない、そ
う考えた千冬は、根拠は無いが、あながち否定できない考えに、笑
みを浮かべながら口を開く。

「翔、今日は遅い、家に泊まっていくか？」

「えっ！？ いいの！？」

「ああ、私は構わん」

「では、お邪魔する事にします」

驚きつつも嬉しそうに笑顔を浮かべる一夏と、静かに千冬の提案
に同意の意を示す翔。

二人の温度差に何処がおかしさを覚えながらも、千冬は立ち上がり、一夏とその親友、柏木翔と共に篠ノ之道場の戸締りをし、剣道着の上から、持ってきていたジャンバーを羽織り、道場を後にして、岐路へとつく。

何をしようかと嬉しそうに翔へ相談を持ちかける一夏と、それに静かに相槌を打ちながら話を聞いている剣道着姿の翔に向かって、千冬は声を掛ける。

「翔、家には連絡を入れるんだぞ？」
「承知」

この冬の寒い夜空の下、寒そうな態度を欠片も見せない剣道着姿の少年と、千冬の関係は、刺すような寒い空気が当たり前の季節に始まったのだ。

目の前に置かれていたコーヒークップの中にはもう既に入っていたブルーマウンテンはなくなっており、あの冬の日はまだ少年だった柏木翔は、今青年となって、こうして静かに千冬の前に座っている。

その事実になんか嬉しくなった千冬は笑みを浮かべ、翔に話し掛ける。

「あの冬の日、私はお前に負けた」
「今思えば俺もあの時はまだ未熟だったな……」

過去を反復するように瞳を閉じて、一つ頷く翔。
そんな翔に、楽しそうに、だがクールに笑う千冬。
今の千冬なら、あの時の翔には恐らく勝てる。が、今の性別の違

いから来る能力差が決定的に開いてしまった今は、逆立ちしても千冬が翔に勝てる事は無い。

柔よく剛を制す。それは両者が拮抗している場合か、柔が剛より強かったただけだ。

今の翔は、強靱すぎる剛、それを制する事の出来る柔など、それは既に柔ではない。

「次の日のロードワークで私が翔に弟子入りしたいと言った時の、お前の顔は傑作だった」

「む…… やはりあの時はまだまだ未熟だったと言っ事か」

そう静かに、そしてしみじみそう語る翔の様子は、過去より洗練されてはいるが、その根本が変わっているわけではなく、千冬と一夏を前に進ませたあの頃と同じ。

そのことを察した千冬は益々嬉しそうに笑みを深め、満足したように一つ頷くと、席を立ち、翔の隣へと立ち、あの頃から比べると成長して、大きく、更に皮膚が硬くなった翔の手をそっと握る。

「未熟だったとしても、お前はあの頃から変わっていない、手もその瞳も、その魅力はあの頃から何も変わっていない」

熱の籠った様な千冬の台詞にも、やはり翔は表情を動かさず、ふむ？ と呑気に首を捻っている。

千冬からの褒め言葉の意図を察する事の無いまま、褒め言葉は素直に受け取っておこうと考えを一区切りした翔は千冬の手を握り返し、翔自身も立ち上がり、伝票を持つ。

「そろそろ帰るか、千冬」

あの時とは違い、低くなった声で千冬の事を軽く呼び捨てる翔の

姿に、無性に嬉しさのこみ上げてきた千冬は、珍しく柔らかい微笑を浮かべ、静かに翔の言葉に応える。

「ああ……」

過去も振り返るが、それでも現在を、前を見続ける翔の姿に頬を綻ばせながら、千冬は内心、翔のその姿勢に同意を示す。

（あの頃もよかったが、今のお前はもっと魅力的だ）

妙に陶醉した様な表情のIS学園1年1組担任の織斑千冬は、クール、厳しい教官、等と言われており誰にも知られていないが、実はかなりの乙女である。

そんな乙女な彼女の心を魅了し続けているのは、昔も今も、そして恐らくこれからも、柏木翔と言う千冬の隣を静かに歩く黒の男だけである。

二十二斬 漢でも過去を振り返る事ぐらいある（後書き）

どうも、あつくすばんばーです。

長らくお待たせしました。

待ってくれていた方、本当に有難うございます。

さて、メインとなったのは千冬と翔の過去。

の筈なんですが、何故か一夏がヒロインの様な位置に……。

どうしてこうなったorz

そして、翔が明らかに小学生ではない風格。

そこはまあ、ずっと剣を振り続けて、あらゆる事を悟る事が必要だった事で精神が研ぎ澄まされた。

と言っ裏設定臭いものがあります。

私の頭の中で、ですが。

では、今回の話で満足していただけるかどうか分かりませんが。

これからもよろしく願います。

あつくすばんばーでした。

二十三斬 漢たる者何時如何なる時にも冷静に振舞え

臨海学校、学校行事として存在するその行事は学校によって呼び名が自然学校だったり、向かう場所が違ったりするが、結局どの学校にも臨海学校、自然学校、若しくはそれらに内容がよく似た行事が大体存在する。

そして海の傍を走る何台かのバス、それらはIS学園と呼ばれるエリート校のバスであり、向かっている先は当然海。どうやらIS学園の校外行事は臨海学校らしい。

目的地が目の前に迫ってきたバス内、当然バス内のテンションは否応無く上がっていく訳で、クラス的には一年一組とクラス分けされているクラスが乗ったこのバスも例外ではない。

バス内にはクラスのほぼ9割を占める女子生徒達の黄色い歓声が飛び交っている。

その中で、一年一組の例外 いや、IS学園と言う学校の中で
の例外である男子学生二人で固められた席、具体的に言うならば、
クラス担任である千冬と副担任である真耶が座るバスの左側最前列
のすぐ後ろの席。

IS学園の例外、織斑一夏と柏木翔が座るその席は、周りのテン
ションに流される事無く静かな物だった。

とは言っても、一夏の方はつられない様に我慢しているのか少し
ばかりそわそわしているのが見て取れる。その証拠に、一夏の手は
しきりに開閉を繰り返している。

翔の方は特に変化を見せず、腕を組んで廊下側の席にどっかりと
腰を下ろし、鋭い瞳は現在軽く伏せられており、全体の雰囲気とし
ては浮かれたような雰囲気は感じられず、全くもっていつも通り。

そんないつも通りな翔の先の後ろから、にゅっと腕が伸び、その
まま翔の首の前へ回り、がっちりホールド。

後ろの席から伸びてきた腕は、制服の丈があっていないのか、袖

から手が出ていない。

「海だよー？ おりむー、しわぎん、きれーだねー！」

「うお！ のほほんさんか……」

「む？ 確かに海が綺麗なのは認めるが……動けん」

突如翔を椅子に貼り付けにした腕の持ち主は、布仏本音。

一年一組に所属する女子生徒の一人で、いつも丈の合わない服を着ているのが特徴的。彼女の二つに括られ、ぴよこつとその存在を左右の側頭部に主張している二本の触覚は、彼女の感情に合わせて時折ぴくりと動いたりするが、それは何故なのか未だに誰も知らない。

そんな個性的な彼女だが、どうやら話題性の多い一夏と翔が気に入っているようで、度々こうして話し掛けて来る事が多い。

何かと鈍そうな彼女がIS学園でやっていけるのか甚だ不安ではあるが、今の所目立った問題も無い為大丈夫なのだろう。

入学して暫くしてから彼女との交流が始まり、直ぐに、彼女自身から、名前は好きに呼んでくれと言われたため、一夏は、彼女に対する印象と名前から、のほほんさんと愛称をつけている。

のほほんさんと愛称をつけられる彼女だが、特に翔が気に入っているようで、時折動くのが億劫な時は知らない間に翔の背中に張り付いていたりするのだが、それに対して翔も特に気にする素振りは見せていない。

「まあまあ、いーからいーから」

「だが本音、どうせもう直ぐ降りる事になるが」

「それでもだよー、しわぎんずっと難しい顔してるからねー」

「む？ そうだったか、俺としては普通にしていたつもりなんだが……」

「普通が既に難しい顔してる様に見られてんだよ……」

翔の席のヘッドレストの横からひょっこり顔を出し、ほにやりと笑う本音に、首を捻って、ぬう……と唸る翔。

何故なのか分からないと首を捻る翔に、一夏は呆れたような表情でツツコミを入れる。

どうやらいつもの感情を悟らせない無表情に近い翔の表情は、他人には難しい表情のように見えるらしい。

「それより、しわぎん！ おりむー！ 海に着いたら何するー？」

「そうだなあ、やっぱ取り合えず泳ぐだろ！」

「ふむ……俺は釣りをするつもりだが……」

「私はねーかき氷でしょーイカ焼きに、焼きそばに、浜焼き……楽しみだねえー！」

「全部食い物ばかりじゃねーか……」

各々海に着いたらしたい事を上げていくが、本音があまりにも食べ物の事ばかり言う為、着く前から既に一夏は胸焼けを起こしたように顔を顰めながら、本音の意見にストップを掛けるように突っ込む。

一夏の表情と言葉に、本音は、誠に遺憾である。とても言うように小さな頬を目一杯膨らませる。

「むうー、おりむーこそ、てんぷれ？ みたいな意見で面白くないよー」

「失礼な、海に着いたら泳ぐ、当たり前だろ？」

「当たり前的事をしても面白くないよー」

翔を挟んで一夏と本音が、むむう、と睨み合うが、間に挟まれている筈の翔は、特に気にした風もなく、前の席から眉間に皺を寄せて覗き込んでくる千冬に向かって、気にするなと言う様に、苦笑を

投げかける。

それに対して、千冬は、一夏は後で説教だ……などと呟きながら、
気にするなという風な態度の翔に従い、席に戻る。

「浜焼きだよー」

「水泳に決まってるだろ？」

翔が本音と一夏に意識を戻した時には、何故か多く上がっていた
箸の食べ物が浜焼きのみに集約された本音と、海で泳ぐというのが
面倒になったのか水泳と言う意見をこり押しする一夏と言う構図に
なっていた。

あまりに低レベルな言い争いをしている二人に、翔はいつもの如
く、保護者のような気持ちにさせられ、苦笑を浮かべるしかない。

ここで言い争いを止める事も考えたが、せつかくの臨海学校、あ
まり押え付け過ぎるのもよくないし、この言い争いは一過性の物だ
と判断した翔は、一夏と本音を意識の外に置き、辺りを見渡す。

バスの真ん中の通路を挟んで右側の席には、セシリアと箒が座つ
ており、二人とも一夏と翔と言う接点があるため、話題には事欠か
ないようで、話し声が途切れる様子は無い。

しかし、時折セシリアが楽しそうに笑いながら箒に何か言う度に、
箒の頬が紅く染まり、動揺したように慌て出す。

その様子を見て、セシリアが何を言ったのが、大体の予想がつく
翔。

タイミングよくセシリアが翔のほうへ視線を寄越し、翔に対して
ふわりと笑いかける。

セシリアの上品な微笑みに対し、苦笑と共に、程々にしておいて
やれという意味を込めて、頬の赤みを隠す為に窓の方を向いている
箒の方を指差す。

翔の言いたい事が伝わったのか、セシリアは一つ静かに頷いて苦
笑を浮かべ、箒のフォローの為に箒へと向き直る。

その時には既に翔の視線はまたバス内へと向けられていた為、気が付く事は無かったが、筈の方へ向き直る寸前、セシリアの青い瞳は、スウ、と細められ、その瞳は翔の首に未だに巻きついている本音の腕へと向けられていた。

その瞬間のセシリアの瞳に浮かぶ感情は、ご想像にお任せしよう。セシリアとのやり取りを終えて、翔が次に向けた視線の先には、金色と銀色が特徴的な二人、シャルロットとラウラの座る、少し後方の席。

翔の位置からでは、二人の話し声は聞えないが、シャルロットが楽しそうにラウラに話し掛けるたびに、ラウラは何やら身体を硬直させている。

何を話しているのか想像もつかない翔は、二人の観察をすぐさま切り上げ、千冬が座る席のヘッドレストへ視線を直し、考える。

（もうそろそろ止めねば、千冬が出てくるか……）

千冬が介入してこようとして数分、未だに睨み合っている一夏と本音の様子に、翔は冷静にそう考える。

「浜焼き！」

「水泳！」

もう互いに、浜焼きと水泳しか言えない様な短絡的な思考へと落ち着いてしまったらしく、息も荒く互いの意見に被せる形で言い合う姿は高校生として考えると涙が出て来そうなほど情けない光景である。

「その辺りにしておけ、一夏、本音、そろそろ織斑教諭の我慢も限界だ」

「はまっ……っっ！」

「すいえっ……がっ！ 舌噛んだ……」

再び小学生レベルの発言を互いにしようとした途中に翔からの意見が混ざりこみ、それを理解した本音と一夏は、それぞれ発言を途中で切っていたが、一夏に至っては千冬の怖さを人一倍理解している為か動揺し、舌まで噛んでいた。

痛そうに舌を出して涙目になっている一夏を放って置いて、海は近付き目的の旅館は直ぐそこである。

（うむ、青春のページと言うやつがまた刻まれるか、よい事だ）

満足そうに海を見ながら笑みを浮かべる翔は、これからの臨海学校で皆と刻む思い出に思いを馳せていた。

最も、その視点はどちらかと言うと保護者の様な思いの馳せ方であつたのは言うまでも無い。

知らず知らずの内に、保護者視点で翔が臨海学校に思いを馳せてから数分して、バスは目的の旅館の前へ到着する。

四台のバスから降りてくるのは当然の事ながらIS学園の一年生の者たちばかり。

千冬から、ここが世話になる旅館だと軽く説明を受けて、揃った一年生達は、態々出迎えに来ていた女将らしき人物に、よろしくお願ひします。と声を揃えて挨拶。

花月荘と呼ばれるこの旅館は、どうやら臨海学校の際にIS学園は毎年世話になっている旅館のようで、学生達の受け入れにも、女将らしき人物の態度にも随分と余裕がある。

他の生徒達と同じタイミングで頭を下げた翔がそう考えている間に、女将らしき人物の視線が、翔と一夏に固定され、珍しそうに近

付いてくる。

「あらあら、貴方達が噂の男子生徒さん達かしら？」

「はい、柏木翔と申します。三日間世話になります、御迷惑にならないよう心掛けます」

「あら……これはどうもご丁寧、清洲景子と申します。この旅館の女将を勤めさせてもらっております」

旅館の女将である女性が話し掛けてきたため、改めて翔は女将に頭を下げて挨拶し、それに驚きながらも、景子と名乗った女将の女性も頭を下げる。

翔と景子が頭を下げあっている所に、千冬が近付き、そのまま展開についていけない一夏の頭を軽くはたく。

「どうも、今年は男子が二人増えたおかげで浴場分けが難しくなつて、申し訳ありません」

千冬が軽く頭を下げると、景子は穏やかな笑顔を見せる。

「いえいえ、お二人共しっかりしていて良い男の子じゃありませんか」

「こっちの、柏木は確かにしっかりしていますが、こっちの方はしっかりしている感じですよ、挨拶をしる、馬鹿者が」

「お、織斑一夏です。よろしくお願いします」

「うふふ、どうもご丁寧に。こちらこそよろしくお願いします」

そう言つて上品に笑う景子は、やはり、旅館の女将を任されるだけの気品を感じられる。

一夏は如何にも大人の女性と言った雰囲気的女性に耐性が無いのか、多少慌てた感じで挨拶をするが、翔は既に挨拶を済ませたので

事の成り行きを見守る。

「不出来な弟でご迷惑をお掛けするやもしれませんが……」

「あらあら、うふふ、弟さんには厳しいのね」

「手を焼かされる弟と手を焼かされない弟の親友が並んでいますので、差を考えるとどうにも……」

如何にも困ったと言うような千冬の表情に、景子は更に楽しそうに、あらあら、と笑顔を深める。

あまりといえばあまりな千冬の言葉に、一夏は僅かに肩を落とすが、翔の方へ視線を送ると、臨海学校の予定などが書かれた資料を片手に、ふむ、と静かに思案している翔の姿が目に入る。

浮かれる事無く冷静に資料を閲覧する翔と大人の女性と言った雰囲気の様子に挨拶するだけで慌てる自分を比べて、一夏は千冬の言葉にも、思わず納得してしまう。

（遠いなあ……）

立ち振る舞い一つ取っても、翔と自らを比較し、やはり遠い、一夏は素直にそう思う。

一夏の目指す男の背中とは、そう簡単には見えて来ないという事である。

それから景子の部屋へ案内すると言う言葉と共に、IS学園一年生の生徒達は、揃って大移動を始めようとするが、そこで、先程バスの中で絡んできた本音から、一夏と翔に声が掛かる。

「ね、ねー、おりむーとしわぎんの部屋って何処ー？」

「む？ 本音が、今俺もそれを確かめていたのだが、名前が見当たらなくてな……」

「え？ マジか、と言う事は廊下でも寝るのか？」

「それは楽しそうだねー」

一夏の言った可能性の一つを聞き、本音は特に何も考えていないように声を上げる。

きっと彼女は廊下で寝るのは本当に楽しいのだと思っているのだろっ、こう言う人物をどういうか、決まっている。

「愛すべき何とやら、と言うのは本音の様な人物の事を言うのだろっ」

「えー？ 何ー？」

「いや、何でもない」

ぼそりと失礼な事を呟いた翔の言葉に反応する本音だが、内容は聞えていなかった様で、いつものぼやぼやしたような態度を崩さない。

例え聞えていたとしてもその態度を崩したかどうかは不明だが……。

と、そこで三人の会話を千冬から発せられた声が中断する。

「織斑、柏木、お前達の部屋はこっちだ。ついてこい」

「承知。ではな、本音」

「またあとで」

「うん、後でね」

翔と一夏の言葉に本音は腕と共に髪もぴこぴこ動かしながら翔と一夏を見送る。

やはり、彼女の髪の構造は謎に包まれたままだ。

ずんずんと翔と一夏の前を歩く千冬に着いて行き、その際、翔と一夏は辺りの設備に目を配り、旅館としてのクラスはかなり良いクラスの旅館であると言う結果に二人揃ってたどり着く、無論言葉には出していない。

やはり長い年月を共に過ごしてきただけあって、目の付け所は何処か似た所がある翔と一夏。

と、今回の臨海学校の間、翔と一夏が世話になる部屋に着いたのか、千冬の歩みが止まる。

ここだ、と言う千冬の言葉に、翔と一夏が視線を向けたドアには、しっかりと『教員室』と書かれた紙が貼り付けられていた。

隣の部屋にも同じく『教員室』と書かれた張り紙がしてあり、その部屋からひよつこりと顔を出したのは、緑のショートカットに丸めがねを装備済みの山田真耶、その人物である。

「ここがお前達の部屋だ」

「えーっと……」

「俺はどちらに？」

未だに要領を掴めていない一夏の言葉と、状況を正確に理解した翔から出た言葉。

二人の言葉には理解度に深い差異があつたが、翔の言葉に反応した千冬は、真耶をじろりと睨みつける様に見やる。

「山田先生の！ 提案でな……織斑は私と同じ部屋だ……言っておくが、私は教員だという事を忘れるなよ？」

不本意極まりないと言う事がよく分かる千冬の眼光と言葉に、真耶から、ひい！ と裏返った声上がり、同じ部屋になる一夏に向けて言われた言葉には、底冷えのする程に冷たい感情が含まれていた。

詰まる所、簡単に言ってしまうならば、八つ当たりである。

そんな謂れの無い、一夏自身には何の非も無い結果に対してとばかりを喰らったが、その一夏の体は、千冬の声聞いた瞬間、一も二もなく敬礼で千冬の言葉に応える。

「イエッサー！ 織斑先生！」

「よし、良いだろう……」

千冬の意図を反論なく受け入れた一夏に対して、千冬は満足そうに一つ頷く。

真耶はそんな千冬を見て、未だに何故睨まれたのかよく分かっていないのか、半分涙目である。

無論、真耶としては、姉弟水入らずの時間を作れば……とつまり、良かれと思って出した提案だったのだが……。

千冬としては、どうせ同じ部屋になるならば、実家で同じ家に住んでいた一夏ではなく。

一夏に誘われて極偶に泊まりに来るような機会しかなかった翔と同じ部屋が良かったと思う千冬の乙女心が理解出来なかった真耶は、やはり千冬に睨まれるしかないであろう。

「取り合えず、今日一日は自由行動だ。羽目は外し過ぎん様にな」

「承知」

「わかりました」

気を取り直したように、教師として釘を刺す千冬に、翔と一夏はそれぞれ了解の声を上げる。

二人の了解を聞いた千冬は、そこで何を思ったか、うつすらと頬を赤く染め、コホン、とわざとらしく一つ咳払いを入れ、翔の方をチラチラと見る。

「あ、あー、何だ、その、わ、私も一応水着を選んでもらったわけだしな、少しは泳ぎに出ようと思う……」

「む、教員と言えども羽を伸ばす時間は必要です。織斑教諭はこの機会に少し羽を伸ばすのもよろしいかと」

「う、うむ、そうだな、そうさせてもらう」

「ごによごによと何時もの声量からは考えられ無い程にもによもと頬を染めて小さく喋る千冬の言葉を聞き取った翔は、千冬の意見に賛成の声を上げる。

翔からの賛成に勢いづいて、翔に選んでもらった水着を見て欲しいと言いたい所ではあったが、結局、先程一夏に教員だと言ってしまった事や、羞恥心が邪魔をして、それを言う事は出来ず、翔の言葉を額面通りに受け取る事しか出来なかった。

その事に少し意気消沈しながらも、その場で話す事がそれ以上浮かばなかったのか、千冬は一夏を促し、部屋へと入る。

一夏はそんな自分の姉を不憫な目で見つめながらも千冬の後続き、結局部屋の中でフオーを入れる事になるのは言うまでも無い。織斑姉弟が部屋の中へと消えた瞬間、真耶は腰が抜けたように、へなへなと床に尻をつく。

「こ、怖かった……」

「ふむ、山田教諭、疲れたのは分かりますが、我々も部屋に入りましょう。荷物も整理したいですから」

「あ、はいはい、すみません」

呆けたように尻餅をついている真耶に手を貸して立ち上がらせながら、部屋への入室を促し、翔も漸く部屋に荷物を置き一心地つく。この部屋はどうも和室であるらしく、ごてごてとした大きな物が置かれておらず、部屋の真ん中に大きな机が一つ置かれているだけ。家具などの少なさからか、二人部屋の間取りにしては随分広く見

える。

部屋にある大きな窓からは海が一望出来、東向きの部屋である事から考えて、海と日の出のコントラストが感動を誘う光景が見られる事が予想される。

お世辞抜きに良い部屋なのだろう、と荷物を置いて窓際に立つて風景を眺める翔は思う。

「これは、良い部屋ですね、山田教諭」

「ええ、毎年教員はこの並びの部屋を使うんですけど、この風景は絶景ですからねー」

「俺もそう思います」

風景を堪能した翔は窓際から離れ、急須に茶葉を入れて、部屋に置いてある電気ポットから湯を注ぎ、少し時間を置いてから洗面所に注いだ湯を捨てに行き、もう一度湯を注いで、二つの湯飲みに茶を注ぐ。

出来上がったお茶を、部屋の真ん中の机に両手を置いて、外を眺めている真耶の前にそっと置き、自らも机を挟んで真耶の正面に正座で座る。

差し出されたお茶に気がついたのか、真耶はニツコリと笑顔を浮かべる。

「ありがとうございます。柏木君」

「いえ、ついですので気になさらず」

「本当に柏木君はしっかりしていますねえ……」

翔の言動に感心するばかりの真耶。

自分のついでに淹れたという翔の言動は、一見失礼に値すると思われるが、これが実はそうでもなく、自分のついでに淹れたと言えば、相手も特に気にせず、自らの厚意を受け入れる事が出来ると言

う効果がある。

特に相手が年上の場合、若い者は自らの事を優先して動くという欲求を理解している為、自らの用事を優先させたついでと言えば、相手の若さを理由に、厚意からの施しをプライドに傷をつける事無く受け取りやすくなる。

と言うように、一見自分の存在を一段上げた様に見えるが、結局相手の尊厳を気遣った言動と言う事。

無論、その結果に至る為には、ある程度の聡明さが必要になってくるのだが、真耶はどうやらそのカテゴリに入っているらしく、翔の言動の意図を正しく理解していた。それ故の感心なのである。

「柏木君は海に行かないんですか？」

真耶のその疑問は最もである。

先程から茶を啜るだけで動く気配を見せない翔。

窓から覗く海には、既にIS学園の生徒と思わしき女子達が海に溢れかえっており、IS学園に二人しか存在しない男子である翔と一夏の登場を今か今かと待ちわびている。

その証拠に、窓から覗く女子生徒達の動きは、何時もより慌しい、それも当然の話で、今ここにはクラスの垣根が存在しない。

つまり、何時もなら各組が教室と言う檻に区切られているのが、今はそれが存在せず、噂の男子学生二名を間近で見る事が出来て、更にあわよくば会話も、触れる事さえ出来るかもしれないのだ。

それを考えると、彼女達の様子も納得できる。

実際、翔もその事はよく分かっていた。

「俺は静かに釣りがしたいだけなのですが……」

「貸し竿あるみたいですよ？」

「承知しています。ですが、出て行くと明らかに静かと言う選択

肢はなくなりそうです」

翔の発言に、真耶は思わず苦笑を浮かべる。

恐らく真耶も翔と同じ事を思ったのだろう。

IS学園と言う一つの学校に、どの学年通しても存在する男子学生は翔と一夏の二人だけ、それ故に注目を浴びるのは仕方がなく、それなりの話題性があり、興味も抱かれているのを翔は理解していた。

その中には、一夏や翔自身に好意を抱く女子生徒も居るかもしれない、そう言う感情を込みでの興味だと言う事もきちんと理解している。

だからこそ、出て行くのが億劫になる部分もある。

翔にとって、愛とは友愛、それしか分からない。それは何故か？結論は簡単、翔は恋と言うものを経験した事が無い。

どんな気持ちになって、どんな事をして、相手をどう思うのか、その全てが翔にとって想像の向こう側の感情なのである。

だからこそ、誰かから想いを打ち明けられてもそれに応える事が出来ない。

その相手に恋をしていないのに応えるなど、翔の中にある誠実さが許さないのだ。

自らが恋をした事が無いから、誰かが自分に恋をしていても、判断する事が出来ない。どんな風になっていれば自分に恋をしていると判断すれば良いのかが分からない。

デートに誘われる？手を繋ごうと言われる？腕を組みたいと言われる？キスをしたいと言われる？結局翔の中でどれもが判断基準に満たないもの。

事实は小説より奇なり、想っていないくともそう言う事をしたいと言って来る人物は存在するかもしれない。

やはり、相手の想いを知るには、自らが同じ想いを経験するしかないのだ。

そこまで考えて、湯飲みに残っている少しのお茶をぐいっと飲み干し、だが……、と翔は考える。

（俺に恋と言う感情を理解する日は来るのだろうか……）

実に怪しい所だ……そこまで考え、窓の外を見てみると、IS学園の女子達に囲まれる一人の男が遠めに見える。

一夏だと判断した瞬間、翔の表情に苦笑が浮かぶ。

（どの道、一夏の事が片付かない限り、ゆっくり考える事も出来ないか）

結局、何だかんだ言っても、翔の親友である一夏を想っている幼馴染二人に頼られた翔としては、自らの恋がどうかなど、親友と幼馴染達の恋に決着がついてからだと言う事は間違いないようだ。

「では山田教諭、俺も海に行くとします」

「はい、行つてらっしゃい」

「そう言えば……」

「はい？」

すくつと立ち上がり、水着とタオル、黒のパーカー、サンダル等を持ち立ち上がった所で、何かを思い出したのか翔は真耶に向かって口を開く。

「ここは、厨房の一角は貸して貰えるのでしょうか？」

「え？ うーん、どうでしょう……ここの料理人さん達はプライド高いみたいですからねえ……」

うーん、と声を上げて、左斜め上辺りに視線をやりながら、顎に

右人差し指を当てて悩む真耶。

その様は成人しているとは思え無い程に幼く、そして可愛らしく映るが、やはり翔には関係ない事である。

真耶からの返答を受けて、翔は口を開く。

「ふむ……では、柏木源次郎の孫が厨房に立ちたいと言っている。と言ってもらえませんか？　それで駄目なら釣った魚は放す事にしましょう」

「？　はあ、分かりました」

翔から告げられた言葉に、真耶はフロントへ内線を掛ける為に受話器をとる。

その時既に、翔は部屋から出て、水着へ着替える為に、別館へ足を向けていたのだが、この数分後、厨房の使用許可があつさりと取れ、その理由を説明された真耶が人知れず叫び声を上げる事など、誰にも予測が出来なかった。

釣りをしたい旨を、女将である景子に話し、撒き餌であるアミエビを2パックと石ゴカイを100gに貸し竿を2本、仕掛けであるサビキを2セットと大きめのウキを一つ、スズキ用の仕掛けを2セット、キス用の仕掛けを2セット、アミエビを詰める籠を3つ程購入し、クーラーボックスも貸してもらい、荷物を背負って砂浜へ出る。

そこには当然、水着に着替えた一夏が鈴に絡まれながらも他の生徒に追い回されている姿があつた。

あまりにも予想通りといえば予想通りの光景に思わず苦笑が浮かぶ。

「あ！ 柏木君！」

「えっ！？ 嘘！？ 何処何処？」

「うわあ、パーカー着てるけど、間から見える体、すっごいかも…」

「あんな肉体に抱かれたら……私壊れちゃう！」

翔が一夏の様子に苦笑を浮かべている間にも、翔の姿は目敏く生徒達に補足され、瞬く間に囲まれる。

現在翔は、黒のパーカーを羽織り、裾を肘まで捲くり上げ、水着は当然シャルロットが選んだ黒地に金糸で、極と書かれた水着。

サンダルも色を合わせて簡素な形のビーチサンダルと言う格好。それにプラス として釣りの道具一式とクーラーボックス。

別に海に立つ分には何ら可笑しくない格好ではあるが、尋常では無い程に鍛え上げられた肉体は、どうやっても人目を引く。

一般客の男性は、非の打ち所の無い程に鍛え上げられたその肉体に、羨望の眼差しを、女性は力強さを感じさせる肉体に視線が引き寄せられる。

この一瞬に関して言えば、この砂浜の視線は、完全に翔が独占していた。

勿論、そんな事を一々気にする翔ではなく、迫ってくる女子生徒達の隙間を涼しい顔ですり抜けていき、一夏の元へたどり着く。

「えっ？ あれ？ いつの間に？」

「ちよつと誰！？ 柏木君逃がしたの！」

「ちよつ、ちよつ！ 私じゃないから！ 水着の紐引っ張らないでつてば！」

翔が大荷物を抱えながらもするりと抜けてきた女子生徒達の団体が、翔の後ろで大変な事になっているが、翔にとっては特に気になる事ではない。

多くの女子生徒をあしらう様にしたのは確かに悪いとは思うが、一人一人相手をしていたら、自らが釣りをする時間がなくなってしまう。

「はあ、はあ、やっと来たか、翔。つか鈴、いい加減降りろって」

「良いじゃない、これぐらい」

「その位置はよく見えるか？ 鈴音」

「ええ、よつく見えるわ！ いいわねー、一夏管理塔」

自分そっちのけで、上に乗る鈴音と何事も無かったかの様に会話する翔に、一夏はげんなりとした表情。

想い人と触れ合っている鈴音は、この上なく良い笑顔である事は言うまでも無いし、翔も翔で、青春だな……などと歳に似合わぬような事を思いながらも表情は何時もの感情を悟らせないような表情。取り合えず荷物を一夏達の近くに置いた所で、翔に声が掛かる。

「翔さん」

「む？ セシリアか」

翔が反応したその声は、間違いなくセシリアの物で、声のした方へと視線を向けてみると、青のビキニと言う露出度の高い水着。

腰にパレオを巻いているおかげで、その露出面積の広さは、何となく誤魔化せているような気がするが、それでも露出面積が広いのに変わりが無い。

だが、水着と言う物の露出面積が広いのは今に始まった事ではないので、特に問題は無い。

問題は、翔の前に出てきてから、少し恥ずかしそうに身を振るセシリアにある。

シンプルな青色のビキニに優雅さを感じさせるパレオ、彼女は元々、輝くような金色の髪を持っていて、瞳は綺麗な青い瞳。

そんな彼女が、太陽の下で恥かしそうに、だが、想い人にこそ見て欲しいと砂浜に立つ姿はとても可憐で、美を感じさせるには容易かった。

「ど、どうでしょうか？」

「む？ ああ、ブルー・ティアーズと同じ青色なのだな」

頬を少し赤く染めて、胸の下で軽く腕を組みながら身を少し擦るセシリアからの疑問の意図を正確に把握した翔は、セシリアの水着姿をよく見る。

そんな無遠慮と言えば無遠慮な翔の視線だが、よくよくセシリアを見つめるその視線に、恥かしさを感じながらも、セシリアは何処か嬉しそうだった。

「は、はい……」

「ふむ、セシリアには青がよく似合うな。その水着はよく似合っている俺は思う」

「あ、ありがとうございます……な、何だか少し恥かしいですわ」

率直な翔の褒め言葉に、セシリアは恥かしそうに頬を赤く色付かせながらも、嬉しそうに笑顔を浮かべる。

「翔って、相手の意図を読み取るの上手いわよねー、相変わらず」

「その割に恋愛感情を判断できないから読み取れないってのはどうかと思うけどな……」

「それは言わないお約束って奴よ。ともかく、一夏はもっと翔のあ言っ所を見習うべきね」

「つまり？」

「相手の意図を汲んで、褒めて欲しい所を率直に褒めてあげる、って事」

「一応これでも努力はしてる」

セシリアと翔のやり取りを見ながら、鈴音は、セシリアの欲しい言葉をすぐさま察して言葉を投げる翔に感心し、一夏は肝心な所が読み取れていないと突っ込む。

だが結局、それを置いておくとしても、女性にとって、褒めて欲しい言葉をくれると言うのは、かなりの好感触である事は間違いない、一夏にもそれを見習う様にと鈴音は一夏に念を押す。

一夏の肩の上で、一夏の額をぺちぺちと叩きながら、ではあるが……。

だが、いい加減、鈴音曰く管理塔ごっこにもいい加減辟易してきたのか、段々と一夏の肩が下がってきたのを見計らい、鈴音は一夏の上から飛び降りる。

「翔、アタシちょっと泳いでくるわ」

「む？ ああ、行って来い、気をつけてな」

「心配無用よ、アタシ泳ぎで溺れた事無いし」

きつと前世は人魚か何かね、などと意気込んで海へ向かう鈴音。そんな鈴音を一夏は目で追い、最終的には海へ視線が固定され、一夏の手が開閉を繰り返す。

セシリアと翔を放って、海に繰り出すのはどうも気が引けるが、海が目の前にあるのに泳ぎたくないと言うわけではない。

まだ一夏は海に浸かっていないのだ。

そんなそわそわした様子の一夏を見て、翔は、ふっ、とクールな笑みを浮かべる。

「一夏も行つてくると良い」

「え？ ああ、良いのか？」

「こっちは気にするな。それより、鈴音が少し浮かれすぎている。」

様子を見てやってくれ」

「あ、ああ、わかった」

「頼むぞ」

海へ向かいたそうにそわそわとしている一夏に海で泳ぐ理由を軽く投げてやり、海へ向かう口実を作ってやる。

それに乗っかり、海へ向かいつつも翔達を気にするように振り返った一夏に翔は、気にするな、とでも言うように、ふいっと軽く手を振ってやる。

翔からの、行くならさっさと行く事だ、と言うような仕草に、漸く一夏は振り返る事無く海へ突撃していく。

その様子は、鈴音が少し心配だから、仕方なく見に行くという足取りではなく、太陽の光に暖められた熱い砂粒を完全に蹴り散らしているような足取りである事を明記しておく。

「困った奴だ……」

「ふふっ、その台詞、父親みたいですよ？」

「む？ そんなつもりは無いのだが……」

明らかに海を満喫するつもりの足取りで海へ向かう一夏の後姿を見守りつつも、溜め息を一つ吐いて苦笑を浮かべる翔の姿はまさしく保護者のような態度。

口元を軽く手で隠しながら上品に笑うセシリアに、その事を指摘された翔は、困った様に後頭部を右手で軽く搔く。

「それで……翔さん、少しお願いが……」

「む？ 何だ？」

保護者のような翔を堪能したセシリアは、上品にこころと鈴の鳴るような声で笑っていた表情を、うつすらと頬が赤くなっている

ような表情へと変化させ、もじもじと身を振りながら、翔にお願いがあると進言。

それに対し翔は、苦笑を戻し、いつもの感情を悟らせないような表情が表に出てくる。

何をお願いされるのか嫌な予感がした……と言っわけではなく、単にセシリアからのお願いの内容に予想がつかないだけである。

ふむ？ と頭を捻っている翔を、チラチラと見ながら、セシリアは、パラソルとビニールシート、その上に大きなバスタオルの引いてある場所を軽く指差す。

「せ、背中にサンオイルが塗れませんの、手伝ってもらえますか？」

「ふむ？ その位別に構わんが……俺もこの後予定があるのでな、簡単になるが、構わないだろうか？」

「え、ええ！ 勿論ですわ！」

セシリアからのお願いを軽く了承しつつも、自らの予定を通す翔の発言に、セシリアは力強く頷き、翔の右手を取る。

そして、翔を急かすように握った右手をぐいぐいとパラソルの方に引っ張る。

「む？ ちょっと待て、荷物をついでに持って行く」

「わ、わかりましたわ、申し訳ありません」

「別に構わんさ、それぐらい」

言いながら、砂浜へ下ろしていた荷物を背負う翔の姿に、少し浮かれすぎたと思い直したセシリアは、少し肩を下げながら翔に謝罪。最も、そんな事を一々気にする性格でもない翔は、ふつ、とクールに笑いながら、気にするな、と手を軽く振る。

海に多く居るIS学園女子生徒達も、合宿の自由時間を満喫する為に、少しばかり浮かれ気味で砂浜を駆け回ったり、海へ泳ぎに行

ったりしている者ばかり。

そんな海を全力で満喫している生徒達に比べると、セシリアの浮かれ方など、翔にとっては可愛いもの。

「それ所か、セシリアは自分を律しすぎだな、こう言う場ではもう少し羽を伸ばした方がいい」

「え？ あ、そ、そう、ですの？」

もって来ていた荷物を全て背負った翔は、セシリアを伴ってパラソルへ向かいながらセシリアにそうアドバイスを送る。

数々の肩書きを持つセシリアは、それで良いのかと板挟みになりながら疑問を持っているが、そんなセシリアに、翔は力強く、うむ、と一つ大きく頷く。

そして、パラソルの下に出来た影の端に荷物を降ろし、セシリアに向かって、ふっ、とクールに笑みを向ける。

「合宿と言っても、今日一日は休日のような物だ、私的な時間に精神を休ませなければ潰れてしまうぞ？」

「そう、ですわね……」

「それでもお前は型に囚われ過ぎる傾向がある。もう少し自分の好きに生きて罰は当たらんさ」

さらりと日常パートで、軽い口調ながら、セシリア自身も感じている己の欠点を翔は突いて来る。

セシリアは、優等生であり、出される課題も難なくこなす。そんな生徒ではあるが、悪い言い方をするならば、教科書通りで言われた事しか出来ない。

つまりは、応用力に乏しい、と言う評価がつく。

教科書通りなのは何も悪い事ではない。基本を疎かにする者に、成長の余地は無い。

しかし、翔や一夏を見ているセシリアは、それだけではその先には行けないと思い始めている。

基本の事が出来て、更にプラスの応用力。それがあって初めてセシリアは自らの想い人と肩を並べる事が出来る。

そう感じていた。

「型に囚われ過ぎている。ですか……最近私もそう感じていますわ」「良い傾向だ。だが、その先を目指すにもしつかりと休み、英気を養う事は重要な事だ」

「言っている事は、とても理解出来るのですが……」

難しい顔をしながらも、セシリアはビニールシートに敷かれた大きなバスタオルの上に、うつ伏せで寝転がり、組んだ手の上に、軽く顎を乗せる。

そして、背中で括られている水着の紐を解き、背中を完全に晒す。透き通るほどに白い肌の背中中は、やはり女性である事を感じられる程に狭いが、その分、男のように筋肉の筋で直線的なラインをしておらず、ある種の色気を感じるラインを保っている。

無防備に背中からお尻にかけて色気のあるラインを、異性に晒しながらも、警戒や動揺が無いのは、翔がセシリアにとっての想い人であるからである事は明白。

思春期の異性に、そんな危険な物を見せられても、当然の如く、翔は意識した素振りもなく、セシリアから手渡されたサンオイルを両手に出し、それを手の中で引き伸ばしている。

「まずはこの休日で型を破ってみると良い。普段自分がしないような事をして楽しむ事だ」

「普段しないような事……」

そこでセシリアの視線はチラリと動き、翔の持ってきた釣りの道

具一式を捉える。

「そつだ、そして精神に余裕を作れ、その上で自らの目指すものを
目指すと良い」

「ですが……情け無い話になりますが、正直私、目指したいものが
分からないんですの」

少し弱々しく、そして、疲れている様に言葉を吐き出すセシリア
に、翔は、ふむ、と一言発しながら、考える素振りを見せつつ、セ
シリアの寝ている左側に両膝を着き、セシリアの背中に両手を置く。
サンオイルを塗る際、相手を気遣うならば、手の温度でオイルを
温めてから塗るのが普通であるが、当然、そんな事をするのが初め
てな翔がそんな事を知っている訳が無い。

だが、会話の間に暖められていたのか、翔が背中に触っても、セ
シリアが冷たがった様子は無い。

んっ……と妙な色気を感じる密かな声がセシリアから上がるが、
翔は特に気にした素振りはなく、オイルを塗り広げる為に掌をピタ
リとセシリアの背中にくっつけ、そのまま滑らせていく。

「そつだな……では一つ目指す先を示そう。『nobless o
blige』取り合えずこれを目指してみると良い」

「高貴なる者の義務……ですか」

「確かにそう言う意味だが、一般的な意味合いではなく、お前自身
が思う高貴なる者の振る舞い。それを考えて目指せ」

「私が思う、高貴なる者の振る舞い……」

「そつだ、見付けてみると良い、お前なりの『nobless o
blige』をな」

「難しい物ですわね……」

「人が成長するとはそんなものだ」

何かを悟りきったような翔の台詞を言い切り、セシリアの背中に満遍なく塗り広がったオイルを見て、満足そうに一つ頷き、セシリアの水着の紐に手を伸ばし、丁寧に結んでいく。

結び終わり、水着がきちんと固定された事を感じたセシリアは、上体を起こし、続きは自分でやると良い、と言うように、翔から差し出されたサンオイルの瓶を受け取る。

感情を悟らせないような何時もの表情の翔、そんな翔の鋭く、強い意志の灯った瞳と、セシリアの持つ揺れる青い瞳が交差し、刹那のやり取りを終えたセシリアが口を開きかけた瞬間。

ドスの効いたような低い女性の声がそれを遮る。

「あの……面白い事をしていたな……」ちっ……ですわ」
「む？ 千冬か」

明らかにセシリアの発言に被せつつ言葉を重ねた人物は、織斑千冬その人であり、千冬によって発言を遮られたセシリアは、自らの見極めた押し所を潰された状況に、思わず舌打ちを打つ。

全く高貴な人物だとは思えない。

ドスの効いた低い声を出した千冬は、翔の選んだ黒のビキニを身に纏っており、多くの視線が千冬に釘付けとなる。

いつもは一つに纏めている豊かな黒髪を解き、陽光に反射する艶やかで豊かな黒い髪は美しいの一言に尽きる。

顔立ちも、鋭さを感じるが、クールな美人と捉えるしか無い程に美しい顔立ち。

体のラインも、豊かに隆起する胸元に括れのある細い腰。手足は細くしなやか、そんな女性が、鋭い雰囲気によく似合う黒のビキニを着て、砂浜に立っている。

これで視線を集めない訳がなかった。

主にその視線の持ち主は男性が多かったが、そんな有象無象の視線を気にする千冬ではなく、いつも以上の鋭さを感じさせるその瞳

は、想い人である翔と、恋敵であるセシリアの二人を、がっちりと捉えていた。

「何？ 何？ どしたの？」

「何かね、オルコットさんが柏木君にサンオイル塗って貰ったらしいよ？」

「えっ……なにそれずるい」

「私、サンオイル取ってくる！」

「アンタもうがつつり小麦色じゃん！」

「私、サンオイルになってくる！」

「ちよつと待つて！ その意見は落ち着いて！ 私達人間だから！」

翔とセシリアの行動に、先程から注目していた女子生徒達が、千冬の登場を切欠に集まってきたのか、何やらおかしいな発言を交わしながらも、翔とセシリア、そして千冬の周りに、女子の集団が出来上がる。

そんな肩身の狭い状況に何も思う所は無いのか、翔はいつも通り、感情を悟らせない表情で、手に付着したオイルを持ってきていた小さめのタオルで拭き取っている。

千冬とセシリアは、してやった者としてやられた者の視線を交し合っていたが、その視線の交わり合いから、先に視線を外したのは千冬。

外したその視線は、タオルで手を拭っている翔へと向けられ、その視線に翔も気が付き、千冬へと視線を向ける。

翔と視線がぶつかった千冬は、うつすらと頬を紅く染めながらも、堂々とそこに立ち、惜しげもなく女性としての魅力に溢れたその身体を、翔の視線に晒す。

「そ、その……どう、だ？」

「む？ ……ああ、よく似合っている。やはり千冬には黒だな、俺

の眼は間違っていなかった」

だとたとしくも、そう聞いて来る千冬の言葉に、一瞬何を指しているのか疑問符を浮かべた翔だが、考えれば簡単な事。

この状況で、どうだ？ と聞いて来る内容など、水着の事位しかないと思うに思いついた翔は、すぐさま感じた感想を千冬に告げる。

率直な翔の感想に、千冬は、そ、そうか……と恥かしそうにしながらも、安堵したのか、嬉しそうに小さく笑みを浮かべていた。

「柏木く〜ん！ 私もサンオイル塗ってー！」

翔とセシリア、そして千冬を囲む女子生徒達の集団の中から、サンオイルの瓶を持って、ひょっこりと出てくる一人の女子生徒。

豊かな茶色の髪の毛を、一本の長いサイドテールにし、大きな目のパッチリした瞳が印象的で、低い身長とは裏腹の豊満な身体は、青のストライプ柄のビキニに包まれ、下には水着の上からホットパンツと言う、可愛い感じの女の子が翔へと近付き、持っていたサンオイルの瓶をぐいっと翔へと突き出す。

「む？ 宮嶋か」

翔の口から、その女子生徒の苗字が出てくる。

フルネーム宮嶋沙耶香、一年二組所属の可愛い女の子で、いつかの実習の時に翔の担当するチームに割り振られ、それが切欠で翔と打ち解けた女の子の一人である。

実習の時にはいつもの元気が隠れていたが、翔が悪い人物ではない事が既に分かっている今では、可愛いその顔立ちに満面の笑顔を惜しげもなく晒し、それを翔へと向けている。

「わっ！ 名前覚えてくれてたんだ、嬉しいなっ！」

「自己紹介してくれた者は出来る限り覚えていようになっている」

「そっかそっかぁ、そう言う所、素敵だと思うよ」

「む？ そうか」

「うんうん！」

いつも通り、クールな態度で接する翔と、嬉しそうに翔に満面の笑顔を向ける沙耶香に視線が集まるが、二人ともそれに気にした様子は無い。

向けられる視線の中で、沙耶香に向けられた視線の内、二つほど視線で人が殺せるなら、百回は死んでそうな視線が混じっているのだが、沙耶香は気が付いた様子も無い。

勿論その視線は、千冬とセシリアなのは明白。

特に千冬は、自らの水着が褒められ、何となく良い気分になっていた時の乱入なので、相当視線が強い。と言うより、最早睨んでいると言ってもいいほどの視線の強さ。

そんな視線の嵐の中、翔の視線は、差し出されたサンオイルの瓶に向けられ、困ったように眉を顰める。

「それで、サンオイルの件だが、済まないな。俺も自分の時間が欲しくてな」

「そっかぁ、残念」

「スマンな、セシリア一人位ならそう時間も掛からないと思って了承したのだ」

「いいいいいよ！ いいなぁって思ってたちょっと言ってみただけだから、気にしないで！」

眉を顰めて沙耶香に謝る翔だが、そんな翔に、沙耶香は全く気にしていないと言う様に、ただ笑顔を浮かべるだけ。

翔のその言葉を聞いていた女子生徒達は、落胆したのか、一斉に

肩を落とす。が、夏と言うこの季節、何かが一つ駄目になった所で、若いバイタリティーが消えるわけではない。

翔達を囲む女子生徒達は、サンオイル塗りが駄目と見るや、その興味は既に別の方向へ向けられる。

「それもそうだよねえ……仕方ない」

「じゃあビーチバレーでもしようよ!」

「良いわねそれ」

「よーし! 織斑先生も巻き込んでえ!」

段々とビーチバレーと言う案に、周りの女子生徒達はヒートアップしていき、その情熱の飛び火は、何故か千冬の身にまで及ぶ。

突然矛先を自らに向けられた千冬は、当然の事ながら慌てだす。

「い、いや、私は……」

「よーし! いくわよー!」

想い人を目の前にして、別行動など苦痛だと思ったのか、女子生徒達の誘いを断ろうと口を開く千冬だが、夏と言う季節に、海と言う大きなファクターの揃った学生のパワーは並ではない。

千冬の言葉など全く聞いていないと言う様に、着々と準備は整っていき、千冬はそのバイタリティーに押される形で参加を余儀なくされていった。

その際、これ以上無い程に口惜しそうな視線で、翔を見ていたが、既に決まってしまった事はどうしようもない。

あれよあれよと言う間に舞台が整った状況を見て、沙耶香はセシリアに視線を向ける。

「オルコットさんは如何する?」

「私は……サンオイルを塗ってゆっくりしておくとしますわ」

「そっか、分かった。じゃあ柏木君、私は行くね！」

「承知。頑張つて来い」

「うん！」

沙耶香の誘いを断つたセシリアにも嫌な顔を見せず、翔の激励に嬉しそうな笑顔を見せて、沙耶香は翔とセシリアから離れ、砂浜の砂を元氣よく蹴散らしながらビーチバレー部隊へと突撃して行った。後には、サンオイルを塗る続きを始めたセシリアと、千冬が連れて行かれ、沙耶香が駆けて行った方を、いつもの表情でじっと見ている翔だけが残される。

「皆楽しそうだな。とてもよい事だ」

「ふふっ……その言葉、学生とは思えない言葉ですわよ？」

豊かな金色の髪と、同学年の中でも大きめである青のビキニに包まれた豊かな女性の象徴を悩ましげに揺らして、クスクスと笑いながら言われたセシリアの言葉に翔は、む……と短い言葉を紡ぐ。

その表情は変わっていないが、セシリアには何処となく不服そうな雰囲気を感じているように見えた。

翔のそんな姿を見つつ、まだ縫っていない足にサンオイルを伸ばしていく。

（ふふっ、こんな翔さんも少し可愛いですわ……）

そんな事を思いながら楽しそうに笑うセシリア、そしてそんなセシリアに、少し不服そうな雰囲気の翔。

何処となく穏やかな雰囲気の二人に、またしても近づく人物が二人。

……いや、二人と形容するのは少しおかしいかも知れない。

しかし、明らかに人である事はわかるのだが、どうしても一人と

数えるには問題のある格好で現れた人物。

その人物の身体は、余す事無く白いバスタオルで覆われ、頭部と思われる部分から、銀色の髪の毛が左右に一房ずつ見られる。

一見ミイラと間違われそうなほどに、白いバスタオルで覆われた人物の横に立っているのは、金色の髪を一本の三つ編みにして、黄色を基調としたビキニタイプの水着に身体を包み、優しそうな色をした紫紺の瞳が印象的な女の子。

間違いなくシャルロット・デュノアである。

シャルロットは間違えようも無いのだが、その隣に居る人物は、相変わらず白いバスタオルに全身を包まれ、誰だか特定しづらいものだが、銀色の髪に、小柄な体。

当然そんな特徴を持った人物など、翔の知り合いには一人しか居ない為、特定する事はそう難しくない。

相変わらず白いバスタオルに全身を包まれながら、ぷるぷると震えるように動くその人物の名前を躊躇なく呼ぶ。

「ラウラか」

翔が特定したその人物の名前を口にした瞬間。

白いバスタオルの塊は、明らかに動揺していますとでも言うように、全身を大きく、ビクン！と震わせる。

そんな分かりやすい反応をするバスタオルの塊 ラウラに、隣でシャルロットは苦笑を浮かべる。

「そうなんだよー、でも、今着てる水着が恥かしいって聞かないんだ。可愛いのに」

「し、しかしシャルロット、こ、こんな姿をボスの前で晒すのは…」

「いいから、もう見つかつちゃってるんだから諦めなよ」

「い、いや、待て！ 落ち着け！」

懇願するようにシャルロットへ叫ぶラウラのバスタオルの端を、
がっしと掴むシャルロット。

しっかりと握りこんだバスタオルを、シャルロットは勢いよく引
っ張る。

引っ張られたバスタオルは当然の如く剥がれ落ち、それを切欠に、
他のバスタオルも次々と剥がれていき、最後には少し涙目のラウラ
が残された。

まるで何かの皮を剥く様にして現れたラウラは、長く艶やかで豊
か、そして真っ直ぐな銀色の髪を二つに括る、所謂ツインテールに
変えており、小柄な身体ながら、その肉体を包むのは、フリルのつ
いた黒色のビキニタイプの水着。

既に剥がれ落ちてしまった筈のバスタオル達を求めて手を動かし
ながら涙目になっている姿も相まって、その姿は非常に可愛らしい。
小柄な身体ながら、ビキニと言うチョイスも、男性としては、そ
のギャップに思わずぐっと来そうなポイントである。

全て地に落ちたバスタオルの姿を見て、漸く諦めたのか、ラウラ
は大人しくなる。

しかし、最後の抵抗をするように、右手で左手の肘辺りを掴み、
何とか体を小さく見せようと無駄な努力をしている。

そんなラウラの姿に、思わず可愛さを感じながらも、シャルロッ
トはラウラを翔の前へと押し出す。

否応なく翔の前へ出されたラウラは、もじもじと身を振り、頬を
紅く色付かせながらも、何とか言葉を紡ぐ。

「そ、その、どうでしょうか？ ボス……」

「む、よく似合っていると思うが……ラウラはもっと自分に自信を
持つべきだな」

「わ、私は身体も小さいですから……こう言うタイプの水着は、少
し……」

「気にするな、よく似合っているのだ、堂々としていればいい」
「そ、そうですか、ありがとうございます……」

翔が褒める事で、それなりに自信が持てたのか、恥かしそうにしていた表情は消え、その代わりに、嬉しそうに小さく笑うラウラの表情がそこにあった。

ラウラのその表情に、翔も満足そうに目を瞑り、一つ大きく頷く。想い人に褒めてもらうと言う一つの大きな目標を達成したラウラは、きよろきよろと視線を動かしながら、辺りを見渡す。

先程と同じ様に、シャルロットがラウラの横に並んだ時には、何か憂さを晴らす様に、柔らかいボールを全力で打っている千冬の姿を、ラウラはその赤い瞳に捉えていた。

「シャルロットもよく似合っているな」

「あ、あはは、僕はいいのに、これ買いに行った時に買って貰ったしさ」

「い、一緒に買いに行ったんですの？」

「うん、そうだよ……あ、そだ、ありがとね？ セシリア」

「？ 何の事が分かりませんが、どういたしまして、ですわ」

ラウラが千冬の姿を捉えてじっと見据える姿に、翔は注目し、海でも水着を褒めてもらって満足なシャルロットは、女性をエスコートするのは男性の役目であり、その時には腕を組むのが通例と翔に教えたセシリアにお礼を言っていた。

勿論、セシリアは何の事なのか分からない故に、頭の中は疑問符ばかりではあったが……。

「ボス、あれは何をしているのですか？」

「ビーチバレーだ、気になるのか？」

「はい、少し……織斑教官が全力で動いているので、何かの訓練か

「と思いましたか……」

翔達に背を向けて、ビーチバレーを全力でプレーしている千冬に視線を向けていたラウラの後ろに立った翔に、ラウラは顔だけを翔へと振り返りながら、ビーチバレーをしている辺りに右手で指を指して翔へと尋ねる。

その姿は、何となく愛らしさを感じる姿だったが、当然の如く、そんなラウラに反応したような素振りは見せずに、翔はラウラの疑問に答える。

ラウラと翔のやり取りに、セシリアへお礼を言い終えたシャルロットがラウラの横に並び、ラウラと同じものを見る。

セシリアは、シャルロットとラウラの登場で止まっていたサンオイルを塗る作業に戻る。

「ふむ、確かにあれはいい訓練になる。足場が悪い所で動き回らねばならんからな」

「なるほど……ではボスも過去あのような訓練を？」

「む？　した事がない訳ではないな」

「では私も……」

「って言うか二人とも、あれ、訓練じゃないよね」

ビーチバレーを冷静に訓練と言い切るラウラに、訓練にもなると冷静に判断する翔。

シャルロットはそんな二人に思わず呆れた顔をするが、その視線はビーチバレーをプレイし、楽しそうな笑顔を浮かべる生徒達に向けられていた。

「ふむ、気になるのなら行つて来ればいい」

「ボスは……？」

翔の言葉に、またしても顔だけ翔の方へ向け、その赤い瞳で翔の瞳を見上げながら、そう問う。

ラウラのその仕草は、普通の感性を持った男性ならば、途端に抱きしめたくなるような衝動に駆られる様な、そんな姿だったが、残念な事に、普通では考えられ無い程に固い自制心を持つ翔の精神は揺らぐ事が無い。

上目遣いで翔を見上げてくるラウラの視線にもぐらついた様子の無い翔の視線は、持ってきていた釣り道具へと投げられる。

「俺はあれだ」

「あ、釣り？　じゃあ僕達も……」
「確保お！」

着いていくよ、とシャルロットが言いかけた瞬間、狙ったかのように突撃してきた女子生徒達に、ラウラとシャルロットの身体は抱え上げられる。

突然自らの身体を抱え上げられたシャルロットは当然焦る。

如何なる時も冷静な判断を求められる軍人であるラウラは、突発的に起こる事には慣れているのか、冷静な様子。

しかし、抵抗しても無駄な様子に、ラウラの視線は縋る様に翔を捉える。

「ちょ、ちよつと待って！　僕は翔と……」

「いいからいいから！　デュノアさんもボーデヴィツヒさんも、一緒にビーチバレーやろっ！」

「ボス……」

縋る様な赤い瞳が翔を捉えるも、翔の表情は特に変化を見せず、抵抗らしい抵抗も出来ないまま連れ去られようとしているラウラとシャルロットに、小さく一言。

「スマンな」

「と言うわけで、二名様ごあんな〜い！」

無慈悲な翔の言葉に、女子生徒達はシャルロットとラウラを抱えてビーチバレーが開催されている場所へと、一斉に駆けて行った。後に残された翔は、黙ったままに、太陽を眩しそうに見上げながら、海から風に乗ってやってくる波の音、潮の匂い、そして、夏を満喫する多くの人の楽しそうな声を聞く。

見上げた太陽の眩しさに、思わず手を翳すが、それでもぎらついた陽光の眩しさに瞳を細めながら、今が夏真っ盛りである事を再び再認識する。

「皆これ以上無い程に夏を楽しんでいるようだな……よい事だ」

「あれだけの事を無かったかの様に纏めないでくださいませ！」

しみじみと静かに眩き、今までの暴挙を夏ゆえにと纏めようとしている翔の姿に、同じくその場に残されたセシリアが思わず、がー！ と吼える。

「む？ スマン」

「いえ……別に良いのですけど、つい思わず」

思わず翔にツッコミを入れてしまったセシリアを振り返る。

サンオイルは既に塗り終えたのか、瓶を傍らに置き、少し唇を尖らせ、如何すればいいのかわからない、と言うような表情を浮かべ、軽く膝を抱えるような体勢。

そのセシリアの様子を見ながらも、翔は己の目的を遂行する為に、パラソルの影に置いていた釣り道具に近付き、それらを背負う。

「ふむ、ではまあ、俺は釣りに行ってくる」

「はい、いつてらっしゃいませ」

翔は釣り道具を背負いながらセシリアに声を掛け、セシリアは翔の背負う釣り道具に視線を向けながらも、うつ伏せに寝転がりながら翔を送り出す。

砂浜の東側の端に存在する、現在は小さな船が数隻ついている防波堤へ足を向ける翔を、セシリアの瞳はしっかりと最後まで追っていた。

二十三斬 漢たる者何時如何なる時にも冷静に振舞え（後書き）

どうも昨日に引き続き、ストックを投下しております。あつくすぼんばーです。

と言うわけで、臨海学校編が始まりました。

色んな方から希望があつた束さんの出番を、ここで盛り込んでみようと思っておりますので、臨海学校編、お見逃しなく！

さて、束さんの話を盛り込む、と言っておきながらも、少しの間は、セシリア強化話をお送りしたいと思います。

誰得？　と思われるでしょうか？　勿論私得であります。はい。

同じ様にセシリアが好きな方は、私と共に喜びを分かち合いますよう！

これでもう、出番が少ない。影が薄いなんて言わせない！　そんなセシリアが通ります。

本編の話に触れた所で、ここからは雑談をば。

早いやもしれませんが、もう少して今年も終わりですね。

私もこの一年を振り返るように、思わず遠い目をしてしまいます。色々ありました。そう色々……このHPに作品を投稿したのも今年の事ですし。

それに他にも……特に無いですね。

よく普通ではないと、知り合いや友達に言われるのですが、私の目から見れば、自分自身がやる事は、自分の中で普通の事ばかりなので、特に変わった事って無いんですね。

友達から言わせれば、十分変わっているらしいのですが……何処が変わっているのか自分自身ではよく分からないものです。

私は居たつてぬるゝく、毎日を過ごしているだけなのですが……。どうもそうやって過ごしていて、不安を感じなかったり、それでもどうにか暮らしていける事自体がおかしいらしいです。

よく分かりませんが。

まあ、いい年だったか、わるい年だったかで言わせてもらうならば……普通だったんじゃないでしょうかね？

世界的に何が起こったとか、どんな政策が打ち出されたとか、日本のトップが誰になったとか、色々あったと思いますが。

一般レベルで明確な変化が感じられないと、どうしても意識の外の出来事ですので、結局、私個人レベルとしては、それなりにいい年だったんじゃないでしょうかね。

楽しい事も多かったですし。

まあ、そんなこんなで、年内に幾らか更新すると思いますが、ここいらで先に言うておくとしましょうか。

今年は有難うございました。そして、来年もよろしく願いします！

二十四斬 漢なら大海原が似合うものだ

夏真つ盛りのこの季節。

何処に居ても熱い太陽の光が降り注ぎ、そのぎらつく強い陽光でもって人の肌を焼く季節。

そんな季節に臨海学校と言う学校行事で海に訪れていたIS学園一年生の生徒達。

インフィニット・ストラトス 通称ISと呼ばれるマルチフォームスーツの扱いを学ぶ事の出来る学園であるIS学園は、エリート校であると同時に、実質女子校でもあった。

名称として女子校と言うわけではなく、『実質』女子校と言う、ISが世界中で認識されるまでの世界では、状況的におかしな事である。

括りとしては女子校と限定されている訳でもない。にも拘らず、IS学園には女子生徒が圧倒的な人数を誇る。と言うより、今までは女子生徒しか居なかった。

故に、実質女子校となっている。

それは何故か？ 簡単な事、ISと呼ばれる物の扱いを習う為の学園であるという事は、ISを動かせるという事が大前提として必要となってくる資質である。

そして件のISと言う物は、欠陥品だった。

端的に言ってしまうならば、人類の半分にはISを動かす事が出来なかった。つまり、ISと呼ばれる物が反応するのは、女性だけだったという事。

女性にしかISが動かせない、その事実が、IS学園が女子校と言う括りでもない筈なのに、実質女子校となっている実態だった。

しかし最近、その実態を崩す事例が現れた。

つまりそれは、IS学園が、実質女子校と言う現状から抜け出し、本来性別による制限の無い共学と言う面が押し出されたという事で、

今年の一年生には、男子生徒が存在した。

それも、二名と言う少なさではあったが……。

この事実が、当時世界中で驚愕の嵐が巻き起こり、男性でもISを動かせるのではないかと議論され、実験されたが、その結果は芳しくなく、その二人以外誰も起動させる事が出来ず、今では落ち着いている。

そして、世界から一步抜き出た例外である男性二名の内、一人は、現在砂浜で幼馴染である鈴音を背負い、女子生徒達に追い掛け回されている男子。

第一回モンド・グロッソ総合優勝者であり、世界最強の座に着いていたブリュンヒルデ、織斑千冬の弟、織斑一夏。

姉が有名な為、自分もその出来事によって否応無く注目を浴びた男性である。

ビッグネームと言う箔がついている一夏、そして世界から出た例外は二人である為、当然もう一人例外が存在する。

そちらは、何の箔もない……いや、とある筋の一部ではこれ以上無い程に有名なのだが、ISと言う物に関しての箔など何も無く、一夏よりも注目度は幾分か低かった男性。

柏木翔と言う鋭い目付きで、他人に感情を悟らせない表情がデフォルト、いつも冷静で取り乱す事が極端に少ない何処か大人びた雰囲気を感じる男子生徒。

当時、一夏が隠れ蓑になり、あまり騒がれる事が無く、ISが動かせると知られても比較的平穏な毎日を過ごしていた翔は、現在IS学園の臨海学校にて、釣り道具を背負いながら小さな船が何隻か存在する防波堤を歩きながら、辺りを探るように見渡していた。

この防波堤を丸裸にする様に分析している目で辺りを見渡し、時折海の中を覗き込むように防波堤の足元に存在する海面にも目を配り、結局防波堤の端まで来て、ふむ……と思案する様に右手で口元を隠す。

「結局端まで来てしまったが……潮通しが良さそうで竿が出しやすそうな場所は他には無い、か」

翔が立っているのは防波堤の端であり、船が通る為にかれた海への口が翔の目の前に広がっており、テトラなども存在しない。

防波堤の湾内側と海側、どちらも竿が出しやすそうな作りになっており、湾内と海側、どちらでも釣りが出来るような防波堤だった。湾内と海を繋ぐ境界線にもなっている防波堤の端で、翔は適当に持ってきていた釣具を地面へと下ろし、荷物が無くなった翔は、防波堤の縁に立ち、海面を覗き込み、満足そうに一つ頷く。

「この時期ならば鰯かと中りをつけたが、間違っではないなかったな」

翔が覗き込んだ海の中は、鰯と思わしき魚が回遊の為に泳いでいる所だった。

無論、それを見て翔がその群れを逃す筈も無く、持ってきていたアミエビのパックの内一つを空け、適当に疎の群れが居た所へ向かって多めに撒いていく。

海の中を強烈な匂いのするアミエビがゆらゆらと揺れながら落ちていく。

青の中に揺れる無数の赤い点目掛けて、先程回遊していた群れと入れ替わるようにしてやってきた鰯の群れが、アミエビの赤い点目掛けて殺到する。

どうやら、この海の魚は数が中々に多いらしく、鰯の群れもそれなりの数が居るようだ。

過ぎて行った群れが戻ってきたわけではない事を見届けて、満足そうに翔は一つ頷き、仕掛けの作成の取り掛かる。

今回借りた竿は、投げ竿一本と短い短竿を一本で、まずは投げ竿の仕掛けを作る。

投げ竿を伸ばし、リールから出ているナイロンのラインをガイド

に一つ一つ丁寧に通していく。

徐々に穴が小さくなっていくガイドに、戸惑う事無く緑のラインが通っていき、竿先まで通し終わると、そのままラインの先を手元まで伸ばし、とりあえず竿を地面に置き、ロケット天秤を取り出す。竿から出た道糸をロケット天秤へと結び、キスの仕掛けのバックを取り出し、その中から一つ仕掛けを取り出す。

残った仕掛けは取り出さずにそのまま道具入れの中にしまいこむ。そして仕掛けについているスナップ付きサルカンのスナップを外し、それをそのまま天秤の下にある穴に通し、スナップを閉じる。

これで一応は完成したようで、翔は満足そうな雰囲気を出しながらも、その動きは止まらず、出来た仕掛けをとりあえず置いておき、次に取り出したのはゴカイ。

プラスチックパックの中にぶちまけられた人工砂の中で、うにようによと元気に動き回るミミズにも似たゴカイを一匹取り出し、躊躇する事無くその体を小さくちぎっていき、その中の二つを仕掛けについている二本の針へと刺し、竿を持つ。

リールのハンドルを軽く回し、竿先の近くまで天秤が近付いた所で、リールのスプールから伸びる緑の道糸を右手の人差し指で取り、左手でベイルを起こし、そのまま左手は竿尻を掴む。

そして辺りを軽く見渡し、背後に誰も居ない事を確認し、海側に向けて勢い良く振りかぶり、そのまま全力で振り下ろし、その際、取っていた道糸を人差し指から離す。

ロケット天秤と言う大きな重りの付いた仕掛けは、海側に向けられたベクトルそのままに飛んで行き、約10m前後飛んだ所で着水。糸が絡む事無く仕掛けが飛んで行った事を見届けると、翔はそのまま竿を地面へと置き、次は短竿の準備に取り掛かる。

サビキの仕掛けの入った袋から、サビキの仕掛けを一つ取り出し、アミエビを入れる籠を取り出し、短竿のリールから道糸を伸ばした所で、翔の肩眉の眉尻がピクリと一つ動きを見せる。

翔の眉が動きを見せるのとはほぼ同時に、翔にとってはではあるが、

背中に軽い衝撃。

後に重さ、それを感じると同時に翔の口が開かれる。

「束か」

「やつほやつほ、束さんが飛び掛る寸前で束さんだつて気付いてた感じのしょーくに絶賛驚愕中の束さんだよー！」

特に驚いた様子もなく、冷静に束の名前を呼び、そのまま仕掛けを作る手を止めないままに、背中から翔の首に齧りつく様にして左の肩口から出された顔は確かに束の顔。

につこにつこと言った音が良く合いそうなほどに満面の笑顔を浮かべる束は、驚愕中などと言いながらも、嬉しそうなもので、女性らしい身体つきをしている身体を翔の背中にこれでもかと言うほどぐいぐいと押し付ける。

成人後の女性と言うカテゴリーの中でも、明らかに圧倒的な大きさを誇る女性の象徴が、翔の筋肉とパーカーで覆われた固い背中に押しつぶされ、その形をふにやりと柔らかさそうに変えている。

服越しとはいえ、青少年には毒な感触が背中にあるにも拘らず、翔の顔色は変わる事無く、その視線は現在仕掛けを作っている手元へと向けられている。

「ふむ、筈の件か？」

「むっふっふー、しょーくんは束さんの考えてる事が分かるんだねー！ これはもうアレかな？ アレしかないよね？ そう以心伝心、愛しの束さんの考えてる事なんてお見通しして訳だね！？」

「相変わらず楽しそうで何よりだが、俺にISを渡しておいて、自分の大切な妹である筈にISを渡さないと言う事は無いと思ったただけだ」

「そっかー、それもそうだね。束さんってば身内びいきの身内万歳な女の子だからね！ 鼻屑万歳これからもどんどん鼻屑するよー、

いつくんとかね！ 別格なのは筈ちゃんとしょーくん、それにちーちゃんとはとことんなまでに贔屓の対象だから！」

これ以上無い程に楽しそうな表情で、身内を贔屓しまくると宣言した可愛らしい顔立ちの天才に、翔は思わず苦笑を浮かべ、出来上がった仕掛けにアミエビを詰め込み、続きでアミエビを海に撒いた後で、仕掛けを海の中に投入。

東は何が楽しいのか、この熱い季節の中、未だに翔の背中に身体を密着させながら楽しそうな表情で翔の手元をじっと観察している。

「そうか……東に贔屓されていると言う事は、相応に大切に思われていると言う事が、それは嬉しい事だな」

苦笑しながらも少し嬉しそうに、それで居て静かな口調で発せられた翔の言葉に、東の表情は笑顔から、珍しい事に驚いた表情へと変化し、次に起きた変化は、首下から徐々に顔色が赤くなっていくと言う変化。

翔がぶるぶると震えている短竿の先に視線を集中させている内に、東は驚いたように瞳を軽く見開いたような表情から、嬉しそうな笑顔へと表情を正す。

最も、その頃には耳まで顔を赤くさせ、暫くは元に帰りそうに無い。

「あ、あはは、しょーくんは東さんに大切に思われてると、う、嬉しいんだ？」

「当然だろう」

「そ、そそそっかあ！ 当然かあ！ い、いやあ、東さん参っちゃうなあ」

「お前が俺を大切に思うなら、俺はお前を篠ノ之東として大切に思うまでだ」

「あつ、うう……」

束の言葉に、翔はいつもの他人に感情を悟らせないような表情のまま、そんな台詞。

自らのトレードマークになりつつある機械のうさみを僅かに揺らしながら、束は言葉に詰まり、更に頬を紅潮させ、その赤みは紅葉にも似たような色になりつつある。

この男からすれば、家族の様な者として、そして友人として大切に思う、そう言った気持ちで言われた言葉に違いない。

翔から言われる台詞回しを一々勘違いしては身が持たない事を、束は千冬と一緒になって昔からそう思っではいるのだが、どうしても情熱的な台詞に聞えてしまうのは仕方が無い。

そしてその台詞に一々歡喜してしまう自分を抑えきれないのも仕方無い。

少なくとも束はそう思っているし、何より、感情を自らの理性によつてコントロール出来ない、少なくとも翔の事柄に関しては。

逆に、束の台詞に対して動揺を見せずに切り返してくる翔はずい、そう思う度に、結局最後はそんな事どうでも良くなっている。

（惚れた弱み……ってやつだよねぇ〜でへへ）

内心ですらも少し恥かしそうに笑い声を上げる束。

惚れた弱み、束は先程翔の事を臆罵すると恥かしげも無く宣言したが、この決定を束自身、何の疑問も抱いてはいない。

翔にも、欠点が無い訳ではない。

才能の塊であつたり、それなりには顔の造形も整っていたり、誠実さも持ち合わせていたりするが、欠点はある。

友人を大事にしすぎて女性として見られる機会が少ないとか、今の所恋をする気が無い所だとか、少し固すぎる所だったり、目標が見えると脇目も振らずに邁進し過ぎたり……。

そう言った様に、翔にも欠点はある。

しかし、それでも束はその欠点も一緒に包めて翔を贖する。つまりは、欠点すら欠点でないように自分の頭の中で置き換える。そうしてしまう事こそが、束の翔に対する贖の程度であり、惚れた弱みを具体化した意見なのだ。

微妙に蕩けつつある頭で、自己分析を終えた束の視線の先では、ぶるぶると震えながらも上げなかった竿を翔が漸く上げ、その先には仕掛けに付いている全ての針に余す事無く鰯が付いていた。

仕掛けの針全てに魚が付く事を全点掛けと言う。

「い、今思えば束さんとしょーくん、よく仲良くなれたよねー？

今でも束さんはその事が不思議でならないよ」

「そうか？ 俺はそうは思わない」

「えー？ どう見ても束さんとしょーくんは噛み合わない気がするんだよ、現実主義者で天才のしょーくんと鬼才天才の束さん、現実主義者と奇想天外はそりが合わないものなだけどねえ」

「俺が天才と言うのは持ち上げ過ぎのような気もするがな」

束からの評価に、仕掛けに掛かっている鰯を、小さいものは海水の入ったバケツに、少し大きめのものはクーラーボックスにと選別しながら苦笑を刻む。

そんな翔の苦笑に、束は翔の首の前に腕を回し、更に身体を密着させて右手で左手の二の腕を掴むように腕を固定。

空いている左手の人差し指を翔の顔の前に立て、ちつつち、と指を振る。

そんな束の表情は、不敵と言うか、悪戯っぽい雰囲気を感じるというか、にやにやと言うか、そんな笑みを浮かべていた。

「わかってないなーしょーくんは、天才って言うのはやれば何処までも伸び代がある人間の事を言うんだよ？ 後成長速度がすごく

速い人間とかね？ どっちもしょーくんの事じゃん？」

「では束は天才ではないのか？」

「束さんは天才じゃなくて、鬼才天才、わかるかなー？」

「なるほどな、理解した」

今一要領を得ない束の言葉に、翔は特に戸惑う事もなく納得の表情。

素早い理解力と翔の切り返しに、束も満足そうに笑みを浮かべてうむうむ、と何処か偉そうに何度も頷く。

サビキに掛かった鰯を全て外し終え、次のサビキ投入の為にカゴにアミエビを詰め込み、さて投入と言う時、翔は何かに気がついた様に投げた仕掛けの方へ視線を向け、徐に背中に乗っている束の太ももをスカートごと抱え上げ、苦もなくそのまま立ち上がる。

「あわわ、凄いなしょーくん、束さん重くないかい？」

「いや、むしろ軽すぎてちゃんと食事を取っているのか心配になる位だ」

「えっへへへえーそっか」

特に考える事もなく、軽いと返事を寄越した翔に、束は何処か嬉しげに笑う。

古今東西女性に対して体重の話はタブーとされているが、軽いと言われて喜ぶ束の様子からして、他人にあまり興味の無い彼女にとっても、自身の体重の話にはどうも気を使っているようだ。

軽い、と言う言葉に嘘は無いが、束の女性としての象徴はかなりの大きさを誇る。

それでも軽いと思われる秘密は、全体的にメリハリのある身体のラインであるからであらう。

胸はこの上なく豊かではあるが、腰は細く、手足も細い。

女性からすれば、これ以上無い程に羨ましさを感じる身体のライ

ンを、束は見事に維持していた。

「そう言えば、先程の俺と仲良くなれるとは思わなかったと言う話だが……」

「んー？」

束を背中にぺったりと張り付けさせながら、先程仕掛けをぶん投げた竿を持ち、きゅつと軽く手前に一度引き寄せ、リールのハンドルをくるくると軽く回していく。

巻き取られていく糸と、手に伝わる振動を感じながら、背中に張り付いている束に向けて、翔は口を開き、束はそんな翔の言葉に、先を促す意図を含めた疑問系。

首を軽く傾げながら不思議そうに瞳を軽く見開くその姿は、この上なく可愛らしく映るが、束の興味は現在翔の言葉の先に込められていた。

しかし、その様に愛らしい姿の束を見る事無く、翔の視線の先は巻き取られていくラインへと向けられている。

「俺はそうは思っていなかった」

「えー？ そりゃまた何でさ？」

そうは思っていなかった。

つまり、翔自身は束と仲良くなれると、ある程度の確信を持っていたと言う事であり、先程の束の言葉を真っ向から否定する言葉が出てきた。

しかし、束は自身の言葉を否定されたにも拘らず、この上なく嬉しそうな満面の笑顔。

自らの想い人から、仲良くなれると確信していたなど、言われて嬉しくない訳が無いのは当然の事であろう。

結局、問い詰めるような束からの言葉も、ある種の建前と言うか、

ただの形式でしかない。

自分の考えが否定されたから、とりあえず理由を聞いてみる。

今の嬉しそうな束の表情からすれば、その程度の意味合いしかないのが丸分かりの表情。

「束も道は違うが前へ進んでいた、それが理由だ」

「って言うところ……どゆことさー？」

「常に前へ進む事を考えている俺。自ら決めた道をひたすらに前へ進み続ける束。進む道は違えど前へ進む事の重要さを知っている俺と束が相性が悪いと言う事などありえない」

「そ、そっか……そーだよなー！ 束さんとしょーくんってば相性はっちりだもんねー！」

相性が悪くないと真面目に言い切られた事に、自分の意思とは無関係に頬が紅潮していく事実を誤魔化す様に、若干声を大きくして翔の意見に同意する束。

その表情は嬉しさや恥かしさなど、色々な感情が混ざり、中々すごい事になっている。

今だけは翔が束に顔を向けない事を感謝した。

若干大きな声を上げて翔の意見に同意するような束の言葉に、翔は満足そうに、うむ、と一つ頷き、手元までやってきたラインを手に掴み、海面から引きずり出す。

やがて出てきた魚影は、体長約15cm程の白くつやつやした細身の魚。

「それは……？」

「キスだ」

「……………あ、ああ……………ビックリした。キスね、キス、シロギスって呼ばれる魚だね」

「む？ 何故いきなりそんな説明口調なのだ？」

「い、いやぁ……ちょっと」
「そうか」

何を考えたのか、頬を更に紅潮させながら上がってきた魚の解説を始める束に、翔は首を傾げるが、まあいいと口元に掛かっている針を手早く抜き取り、2匹のシロギスをクーラーボックスの中へ放り込む。

そして見事に餌のなくなった針に、先程適当な長さに切ったゴカイを二本の針に手早く刺し、後ろに張り付いている束に、その鋭い視線を向ける。

「え、えっと、何かな？」
「今から投げる。じっとしている」
「う、うん、わかった！」

少し上から目線のように言われた翔の言葉に、何かくるものがあったのか、束は瞳をキラキラと輝かせながら翔の言葉に大人しく従う。

妙に素直な束の様子に首を傾げる翔だが、結局、大人しく言う事を聞いてくれるならばそれで良いかと思いなおし、人差し指で緑のラインを取り、ベイルを起こす。

竿尻の辺りを左手で持ち、鋭い視線は白い雲と青い海の交わる遠くの本線へと向けられる。

そしてまず、束の両腕が通っている肩の筋肉が収縮する様子が束の腕に伝わり、その動きによって、束の両腕がゆっくりと持ち上がり。

次に束の持つ、人目を惹かざるを得ない大きな山を潰している肩甲骨を覆う筋肉が躍動し、それに連動するような形で背筋にもギチギチと力が加わっていく。

そして筋肉に蓄えられた力を一気に伸ばすと同時に、手首、肘、

肩、腰等の間接が連動して回り、それらによって生まれた力のベクトルに従い、仕掛けは雲と海の境界線へと向けて真っ直ぐに進む。仕掛けの着水をその鋭い瞳で見届けた翔は、ラインのたるみのある程度取るようにハンドルを回し、持っていた竿を静かに置く。

（こ、こんな力強い肉体でなんて……いやぁ～ん！ 東さんもしかしたら壊れちゃうかも！）

翔の首に腕を回し、完全に束の両足が地面から浮き上がっている状態ですら、特に苦もなく自分の肉体を動かしていた翔に、何を考えたのか束は、でへへとだらしのない笑い声を上げつつ、その可愛い顔立ちをだらしなく崩していた。

追加で言うならば若干口の端に涎すら垂れているようにも見える。耳元から聞えてくる束の笑い声に、はて？ と首を傾げる翔だが、特に気にする事無く、アミエビを既に詰め終えていた仕掛けを海の中に投入する。

数分か十数分なのか判断が付かないが、暫くの間、妙な笑い声を上げながら翔の背中に張り付く束と、怒涛の勢いで鰻を上げ、さつさとクーラーボックス行くとバケツ行きを選定する翔の姿があった。そして何か思い当たったのか、束の意識が戻り、それにあわせて顔色も戻ってくる。

「そう言えばしょーくん」
「む？」

束の意識が帰還を果たして直ぐ、翔に声を掛け、翔は束に応える。視線を向けた先にある束の表情は、何処となくバツが悪そうな表情でありながらも、何か確信が持てない様な、そんな複雑な表情をしていた。

「零式、どう？」

「調子は悪くない」

「そっか……でも、一応後で見せてね？」

「ふむ、承知」

少し不安そうな声音で翔に提案する束に、一も二もなく頷き、了承する翔。

即座に返答した翔に満足したのか、漸く束は腕を解き、自らの足で地面へと立つ。

そんな束に特に疑問もなく、翔は束を見上げ、その表情を伺うが、いつもの笑顔のまま佇む束。

いつものテンションの高さと、束の笑顔は、ある種のポーカーフエイスでもあると翔は思っている。

勿論、自分の大切な者と触れ合えると言う嬉しさからの笑顔と言うのが無いわけではないが、いつもの笑顔を浮かべる束の感情は読み取りにくい。

そう言う意味では、束の笑顔と翔の感情を悟らせないいつもの表情は似通っていると言える。

「『どんな道だろうと前へ進みたいのなら躊躇するな。自分の進みたい道に誇りと自信を持って』覚えてる？」

「俺がお前に言った言葉だろう、忘れるべくも無い」

いつもの笑顔のまま、それは嬉しそうに、だが唐突に一つの言葉を吐き出す束に、その答えを即答する翔。

未だ群れが散る事無く上がり続けている鰻を選定しつつ、束に向けられた視線が捉えたのは、満足そうに嬉しそうな笑顔を浮かべる束だった。

その大きな胸を張りながら、自信に溢れたような笑顔を翔に向けている。

「そう、しょーくんが私に、東さんに言ってくれた言葉。東さんはね、しょーくんのその言葉で今まで見てた世界が、ドーンッ！って変わった気がしたんだ」

「ふむ……」

「それと同時に、私自身を肯定してくれたみたいに感じたんだ、何の根拠もなく、でも自信に溢れていて、東さんが行こうとしてる道は間違って無いんだよって言われたみたいに思っちゃったんだ」

「例えどんな道であれ、前へ進むのはどんな人物にも必要な事だ。俺は一度もお前を肯定した覚えは無い」

「知ってるよ」

きつぱりと束自身を肯定してなどいないと言い切る翔、だがそれにも拘らず、束は嬉しそうな笑顔を崩す事は無い。

「これは束さんがしょーくんの言葉を勝手に解釈しちゃった束さんの感情の話。私はその時嬉しかったんだよーって言う、ただそれだけの話」

「『世界を変えたい』そう思った原動力が何であるかなど、俺にはどうでも良い事だが……世界を変えるその道を真っ直ぐ前へ進む束に責めるべき所など無い。そしてその結果、世界は確かに変わった。人の意識も、それは世界にとって良いか悪いかと言う評価とは別にとても素晴らしいことだ。お前は確かに前へ進んでいる」

「んっふっふっふっしょーくんは変わらず、自分の道を前へ進む人間が好きだねえ」

「自分の道をただ前へ進む人間はそれだけで素晴らしい。先にある結果が大きい小さいなど関係ない。理想の先にある自分にたどり着こうとしている人は、その姿こそが美しいものだ」

「でもそう言うしょーくんの言葉はとっても心地良く聞えるんだ、

例え、前へ進む過程で多くの人が危ない目に合うってわかっている道でも、進んでみよって気持ちにさせられるんだよ」

間接的に、自分の進んでいる道の先に待つものが、必ず明るい物だとは限らない。そう言っている東は、揺らぐ事無く穏やかな笑顔だった。

そんな東の表情を、相変わらず視線に入れる事無く、翔の視線は、未だ鰻を捉えて離さない仕掛けに通じるラインへ向けられていた。

海の奏でる波の音と、穏やかな潮風が吹き抜ける中、特に気負った様子もなく、ただ静かに翔の口が開かれる。

「例えそうだったとしても……前へ進む姿は素晴らしいものだ」

「そっか……」

「だが……」

「？」

翔らしい答えに、東は苦笑を浮かべるが、続きがあると言うような翔の言葉に、東は不思議そうに首を傾げる。

「お前にとって良くない未来が待っているなら、俺が……いや、俺達がお前を救う。その所為でお前の道が絶たれようともだ、それが俺の進む道だ。お前が世界から疎まれる未来を黙って受け入れるほど俺は人間が出来ていないのでな」

東は人間があまり好きではないし、他人に興味も無い。

そして、自らの考えを否定し見下げ、邪魔してくる人間は最も嫌う女性だった。

翔が言った言葉は、まさしく彼女の邪魔をするという言葉であるはずだが、やはり、翔を嫌うと言う事は出来そうにも無い。

前へ進む人間が好きで、どんな道でも自らが進みたい道を進んで

いる人間は尊敬に値すると言つて憚らない翔。

だが、そんな翔が言ったのだ、束は束の道を進んでいるにも拘らず、その道の先に束が不幸になる未来があるのなら、その道を邪魔してまで束を不幸にする未来から救うと。

その言葉は束にとつて、ある種の救いであり、彼女自身の道に立ちほだかる大きな壁だった。

壁であるにも拘らず、彼女が翔を嫌えない理由。

それは、柏木翔と言う、前へ進む事を何より大事にしている彼から、その道を曲げてまで束が大切だと言われたのとほぼ同義だからであらう。

いつの間にか束に寄越されている翔の表情は何時もの表情なれど、その視線は真剣で冗談の欠片もなく、翔の言葉が本心である事を如実に語っていた。

己の道を曲げて進む道も、己の意思で曲げたならばまた自らの道。そう語っている翔の瞳に、やはり束は嬉しそうに笑う。

「じゃあ、束さんが世界から嫌われちゃったら。せめてしょーくんだけは傍に居てくれる？」

「俺だけではなく箒も千冬も一夏も傍に居るだろうが……まあ、承知した」

「うん！ 何だか束さん元気が出てきたよ！」

「そうか、それは何よりだ」

「じゃー束さんはもう行くね？ 色々と用意しなければならない事があるのだよ！ うはは！」

「ふっ、承知した」

何処か安心したような、そして吹っ切れたような束の表情に、翔はふっと笑みを浮かべ束を見送る。

軽い足取りで防波堤を歩いていく束を見送りながら、翔は少し大きめの鰻をクーラーボックスへ放り込んだ。

束が翔夜の下を去ってから約二時間。

あれから翔は、海の穏やかな波をじつと見据え、心地の良い潮風を肌を感じながら釣りに興じ、クーラーボックスの中には、大量の鰹とキス。

キスの群れにうまい具合に当たったのか、その数はかなりの物で、鰹の方も群れがひっきりなしに回遊してくる為、数えるのが億劫になる程の数になっている。

クーラーボックスの中身を、ふむ……と思案する様に見詰め、クーラーボックスから視線を外し、鰹を釣っていた短竿を引き上げ、流れる様な手つきで仕掛けを解体し、ビニール袋の中に仕掛けを放り込み、短竿を短く仕舞う。

短竿の片づけが終わった翔夜は、次に投げていた投げ竿を手に取り軽く手前に引き、リールのハンドルを回す。

「む？ 付いてるな」

手に伝わるふるふるとした感触と、小刻みに引っ張られているような動きを見せる竿先に、魚が仕掛けに掛かっている事を悟る。

手前まで仕掛けを巻き、引き上げる。

「ほう、キス釣りを最後にしようと思っていた所に一荷とは、後が良いうだな」

一荷とは、一度に二匹釣れる事を指す。

それにサイズも中々のもので、キス釣りに見切りを付けるには丁度良い頃合だと翔は判断。

仕掛けに掛かったキスを針から外し、二匹ともクーラーボックス

の中へとご招待。

そして道糸を右手で握り、左手に持っていた竿を地面へと置くついでに、自らも胡坐を掻いて地面へと座り込み、仕掛けの交換に取り掛かる。

道糸に付けられている天秤を外し、仕掛けごとビニール袋の中へと放り込み、変わりに道具袋の中からウキを取り出し、ウキゴムを外してそれを道糸に通す。

道糸に通したウキゴムを滑らせるようにして上に上げ、適当な場所のでウキゴムにウキを刺し、固定。

次に道具袋から取り出したのはスズキ用の仕掛け、その中から一つ仕掛けを取り出し、それを地面に置きスナップ付きサルカンを取り出し道糸の端に結びつける。

結びつけたスナップ付きサルカンのスナップと、仕掛けについているスナップ付きサルカンのスナップを外し互いに連結させてスナップを閉じる。

そこまでして、一旦仕掛けを地面へと置き、もう一度道具袋を漁って、取り出したのは適当な大きさの球体の鉛、所謂ガン玉と言うやつである。

取り出したガン玉をハリスの適当な位置に固定し、取り敢えずの仕掛けは完成。

「簡単な仕掛けだが……まあ、大丈夫か」

幸いにもキスと鰻は多く釣れたからな……と自分を納得させる様に一つ呟き、海水と生きた小さめの鰻達が入ったバケツを自分の近くへと置き、その中から一匹の鰻を取り出す。

地面へと置いた仕掛けをつまみ上げ、針を手にとって、それを丁度鰻の鼻辺りに引っ掛けるように針を通す。

そして餌も付け終わった仕掛けを青く広がる海へ向かって投げる。着水し、ウキが海面に立つのを見届けて、竿を地面へと置き、自

らも地面に胡坐を掻き、じつと遠くにあるウキを見詰める。

絶えずゆらりゆらりと動き回るウキを見据えながら、翔は波の音や遠くから聞える人の声に耳を傾ける。

相も変わらず照り付ける日差しは厳しいが、夏に鍛錬など毎年の事だった翔にとって、じつとウキを見ながら潮風を感じる事の出来るこの状況は特に苦ではない。

ただ単に暑い中じつとしていれば良いだけなのだ、水分補給はクーラーボックスの中に入れてきていたペットボトルのスポーツドリンクで事足りる。

夏を感じながら旬の魚を釣り上げ、束の間の休日を楽しむ。

人に言えば、爺臭いだの何だの言われるが、翔はそんな事一度も気にした事はなく、休日は自分のやりたい様に過ごしてきた。

人の意見に流されず、自分の意志を貫く翔が、小学や中学の時密かな憧れを集めていたと言う事など、彼自身は知る由も無い事であるが……。

「あの、翔さん」

「む？」

そんな夏を翔としては満喫している一時の時間に、またしても翔に声が掛かる。

今年の夏は誰かから声を掛けられる事が多い……等と思いながらも、それは勿論の事嫌な事ではなく、後ろから声を掛けてきた人物セシリア・オルコットへ顔と視線を向けながら反応する。

後姿と纏う雰囲気だけで声を掛けたのか、翔が振り向き、何時もの感情を悟らせない表情を見た途端、自らの胸に手を置いて少しホツとした様な表情のセシリア。

振り向いた人物が翔だと確認が取れたセシリアは、粗い作りのコンクリートで作られた防波堤の上を歩き、躊躇もなく翔へと近付く。陽光に反射する金色の髪が、軽く掛けられたロール状のもみ上げ

と共に揺れる。

「ご一緒しても宜しいですか？」

「俺は構わんが……皆と共に居なくても良いのか？」

「はい、翔さんとご一緒に今日の休日を過ごしたい、と思っ
ていますわ」

軽く翔からの了解を取ったセシリアは、翔の隣に位置取り、何の躊躇もなくそこへ座り込もうとするが、その行動を、翔の軽く翳した手に止められる。

一緒に居ても良いと許可を取った筈だが、セシリアの行動を止める翔に、軽く首を傾げる。

セシリアが座ろうと動いた行動を止め、首を傾げるセシリアを見て、翔は来ていたパーカーに手を掛けると共に己の口を動かす。

「そのまま座ると尻が辛いだろう」

何の気負いもなしにそう発せられた言葉と共に、翔は着ていた簡素な黒のパーカーを軽く折り畳んで自らの隣に敷く。

軽く一回折る事により、少しばかり厚みの増したパーカーを視線で指しながら、座ると良い。と軽く言う翔に、セシリアは少し申し訳無さそうな表情を浮かべて翔を見る。

そこには特に気にした様子も無く、何時もの感情を悟らせないような表情を浮かべた静かな翔が、胡坐を掻いてそこに座っている。

「良いのですか？ 翔さんのパーカーが汚れてしまいますわ？」

「構わん。パーカー一枚でセシリアの痛みが無くなるならば安い物だ」

「そ、そうですか……で、では、失礼しますわ」

「うむ」

セシリアの言葉に、ふっ、と軽く笑みを浮かべて言われた翔の台詞に特に他意はない。

ただ単に、固いコンクリートに腰を下ろすと身体が辛いのを知っているため、それがパーカー一枚でどうにかなるなら安い。

本当にそれだけの意味で翔は言っているのだが、どうにもその台詞回しが直球過ぎて、ある種の情熱的なまでの口説き文句に聞えたセシリアは、さっと頬赤らめ、この行動と台詞に他意はない、と自らに言い聞かせつつ、おずおずと翔のパーカーの上に腰を下ろし、体育座りの体勢で軽く自らの腕に足を抱え込む。

翔の隣に腰を落ち着けたセシリアを見届け、うむ、と一つ頷き、翔の視線はまたウキへと戻る。

「……」
「……」

そして場を支配するのはまたしても波の音と穏やかな潮風、厳しい陽光。

遠くに浮かぶウキは変化なくゆらりゆらりと自由に動き回っている。

元々そう軽く喋る方ではない翔と、喋りはするが、先程のやり取りがまだ少し尾を引いているセシリアでは、楽に会話が弾むと言うわけにもいかない。

かといって、両者にとってこの空気が悪い物かと問われるならば、そうでもないと言うのが本当の所。

翔にとっては友と過ごす穏やかな時間であり、セシリアにとっては想い人と過ごすゆったりとした時間。

会話が弾まなくともお互いにとって心地の良い時間である事もまた事実なのだ。

胡坐を掻いて、ウキを見詰める翔と、足を抱えた両手の指を絡ま

せたり、何処か落ち着かないような、それでいて嬉しそうなセシリア。

そんな二人にとって、青い海を並んで見ながら、青空の下でゆったりと過ごす時間と言うのは、ロケーション的に見ても最高の物と言えよう。

「翔さんは……」

「む？」

心地の良い沈黙を破ったのは、やはりと言うか、先程の出来事から立ち直ったセシリア。

セシリアからの呼びかけに翔は、軽く言葉と視線を寄越し、ぼうと海を見詰める青い瞳が印象的な美少女の横顔を視界に収める。

金色の髪を陽光に反射させ、潮風に軽く靡く髪を右手で軽く押さえながら、それでもこの時を楽しむように、深く感じ入るように青い瞳は海から視線を外さない。

「どうやってISを動かせるようになりましたの？」

「ふむ、どうやって……か……。正確にはどうやってISを動かせると知ったのか、では無いのか？」

「ふふっ、そうですね、その聞き方が正しいのかもしれませんがね」

セシリアからの疑問に、翔も海へと視線を直しながら、その疑問を少し訂正。

訂正された疑問の内容に、セシリアは軽く笑顔を浮かべている。

出来の悪い言葉遊びをしているような感覚がどうにも可笑しかったのか、それとも、未だに穏やかに流れるこの時間が嬉しく、安心したからなのかは、彼女にしかわからない。

だが、それでも彼女はこれ以上無い程に楽しそうに、それでいて

穏やかに、静かに笑みを浮かべていた。

海に浮かぶウキを視界に捉えながら、ウキの動きを鋭い瞳でゆりゆりりと追いながら、翔は特に考える暇もなく口を開く。

「大げさな理由など無いんだがな……一夏がISを動かせると発覚した少し後ぐらいか、声が聞こえた」

「声、ですか？」

「ああ、声が聞こえた。何時もの夜の鍛錬でロードワークに出ていた俺はその声に従ってコースを決めた」

「それで？ どうしたのです？」

「ロードワーク中、しきりに聞える声を辿って着いたのは一つの建物……いや、これはおかしいな、廃……そう、廃病院だった」

何かを懐かしむように、ゆらゆらと動いているウキを目で追いながら、思い出すようにして饒舌に翔はその時の事を語る。

廃病院といえば、恐怖を煽るスポットとして有名な逸話がいくつもあり、ある意味夏と言う季節にはもってこいの場所ではある。

その様な話をセシリアは聞いたことがあるのか、その表情は、先程までの穏やかな時間を楽しむ余裕のある表情ではなく、何処かしら強張ったような固い表情だった。

心なしか何かを我慢するように生唾を飲み込むような仕草も見受けられる。

ISを動かす事になった切欠の話であり、怪談話では無いと自覚しながらも、夜と廃病院と言うキーワードがセシリアの頭の中にこびり付いて離れない。

この話の語り部である翔も、表情を変えず淡々と話す事もあって、明るい昼間であると言うのに、セシリアの背筋には薄ら寒い何かが駆け巡る。

「街の中は街灯がある。それ故に俺は明かりとなる物がなかったが、

夜目は効く方なのでな、そのまま中に入った」

「こ、ここ怖くなかったんですの？」

「む？ いや、特には、街からそれほど離れてもいなかったしな、辺りが見えないわけではないからな、特に危険はなかった」

あっけらかんとそう語る翔に、セシリアは表情を更に固くしながらも、少し呆れたように、そう言う事ではないのですけれど……と溜め息を一つ溢す。

セシリアが何に対して呆れているのか理解出来なかった翔は、一度軽く首を傾げるが、特に気にしないように続きを話するため、口を開く。

翔の見詰める先にあるウキの動きは、先程までのゆらりゆらりと海を自由に満喫するような動きから、段々と変化を見せていた。

そのウキの動きに、翔は軽くその鋭い瞳を細める。

「廃病院の中は薄暗かったが、街から近いのでな、そこからの光が少し入ってきていて先に進むのに特に障害はなかった。途中、ばら撒かれたカルテや、何かに殴られたようにへこんだアルミの手術室の扉、どう見ても不自然な廊下に飛び散る血痕らしきものがあつたが、特に気にするほどの物でもなかったのでな、無視した」

「どう考えても気にするほどの物ですわよ！？」

「む？ そうか？ 担架で運ばれる患者が余程出血が酷かったのかもしれんし、緊急の手術で慌てて何かを扉にぶつけてしまったのかもしれん」

「ああ……そこまで考える余裕がその時おありなのでしたら、特に怖くはなかったのですわね……」

右手で顔を軽く覆いながら、この人は本当に……とでも言うように溜め息をつくセシリアに、ふむ？ と不思議そうな瞳を向ける翔。だが、そんなセシリアを気にしていると、彼女自身から、続きを

どうぞ、と言う促しが入った為、すぐさまそれを流し、次の話に入る。

セシリアに向けていた視線を、もう一度海に浮かぶウキへ向ける。ウキは明らかに動きに変化を見せ、最早誰から見ても激しく動き回っていると分かる動きへと変わっていた。

「廃病院に入った時から声は途切れていた為、仕方が無いので俺は病院の中をしらみつぶしに探す事にした」

「その躊躇の無い決断力には、最早呆れを通り越して、ある種の憧れを感じますわ……」

「ふむ？ まあいいか……文字通り廃病院の全てを見回った。各階の病室やトイレ、手術室、診察室、談話室、待合所、ナースセンタ―の中、ありとあらゆる所を見て回ったが、手術室や診察室で妙な物音が聞えたりカルテが飛んできたり、談話室にあった朽ちた絵本が一人でに崩れたり、トイレの扉が急に閉まったり、病室のカーテンが何やら動き回っていたが、特に問題はなかった」

「大有りですわ！？」

「む？ あるのか？」

「何でそこまでの事があつて翔さんは冷静に当時の事を躊躇なく思ひ出せるのが不思議でたまりませんわ！？ 普通はトラウマものですよ！？」

思わず、といった風に声を荒げて翔に突っ込みを入れるセシリアに、何に対して突っ込みを入れられているのが理解出来ないと言う様に、翔は首を軽く傾げる。

翔への突っ込みに、興奮しすぎたのか、セシリアは翔へと詰め寄るように状態を翔へと近づけ、体育座りだった状態は膝立ちへ移行している。

我慢できないと言う様に頭を抱えたり、著しく筋肉が発達している翔の鋼の肉体へ向かって、バシバシとアグレッシブな突っ込みを

入れる激しい動きに、布一枚で支えられている豊かな胸がふるふると震える。

普通の男ならば当然の如くその一部分に視線が釘付けになること請け合い、しかも、セシリアほどの美少女であるならば尚更、である筈だが、翔の視線は激しく動き回るウキから外れる事は無い。

段々とヒートアップしていくセシリアの様子はさておき、翔はとりあえず、今の話を終わらせてしまふ事に決めたのか、右の肩や二の腕に襲い掛かる軽い衝撃を無視して口を開く。

「まあ、特に問題はなかった」

「完全に言い切りましたわ!？」

「……そして廃病院の全ての部屋を回りきったが何も見つからなかった」

「更にスルーですわ!？」

「それでも廃病院から声が聞こえてきたことは確かだった。そこで思い当たった線を辿って、目的の物を探して歩き回って、見つけたのは……」

「見つけたのは……なんですか?」

先程までヒートアップし、翔に引つ切り無しに突っ込みを入れていたセシリアは、話の佳境に入ったのを理解したのか、ごくり、と喉を鳴らしながら、話の続きを促す。

最早この話が何の話だったのか忘れているのか、その表情は固く強張り、ISを動かせる事を知った切欠の話を聞く表情ではなくなっている。

「地下への階段だ」

「そ、そそれは流石に……見たら確実にトラウマになる部屋がある所ではありませんか?」

「確実にトラウマになるかどうかは分からんが……れいあ……」

「そ、それ以上はいいですから！ 部屋についてどうしたんですの！？」

「む？ 当然見つけた」

「な、何を……ですの？」

その部屋が何の部屋だったのかを、軽く説明しようとした翔の言葉を遮り、続きを促すが、妙な所で翔が言葉を切るので、セシリアはすっかりその雰囲気とタイミングに怯えてしまっているかのように身を小さく縮めている。

翔は相変わらず、その視線を激しく動き回っているウキへと注ぎ、セシリアが今現在どんな状況なのか見る事は無い。

だが、何を見つけたのか？ と問うセシリアに、一つ首を傾げることは忘れない。

「何を？ 決まっているだろう……っ！？」

翔の口から何を見つけたのかいよいよ語られる、となった瞬間に、翔が勢い良くその場で立ち上がり、それに驚いたセシリアは、はしたなく甲高い悲鳴を上げる。

視線の先にあり、激しく動き回っていたはずのウキは、海面の何処にも見当たらなかった。

「ひゃわわわわっ！」

気が抜けるような悲鳴を上げるセシリアに、視線を向けながらも、翔は迅速に身を動かし、地面に置いてあった竿を勢い良く取り上げ、ぐつと一度大きく手元に引き寄せる。

そして、竿をしゃんと立てて、手元から離さないように翔が持つ竿の先は、勢い良く、そして大きくしなりを見せ、その先についているのが先程つけた鰺の様な小さな魚で無い事を如実に語っていた。

勢い良く海の中を走り回る魚と格闘するように竿をしつかりと立てるように持ち、リールから出ているラインを緩ませないように注意する。

「そこで見つけたのだ、ISを」

「へっ？ IS？」

「何を驚いている？ ISを動かせると知った時の話だったはずだが？」

「あっ、ああ……そうでしたわね、あのタイミングは一番無いタイミングでしたわ……」

海の中にいる魚と格闘しながらも、涼しい顔をして、この話の趣旨である所の目的物を翔は口にする。

それにより、セシリアはこの話が何の話であつたかを思い出し、少しげんなりしたような表情で肩を落とす。

疲れ切った、若しくは拍子抜けした、そういった感情が表に出ているセシリアの表情に軽く疑問を抱きながらも、勢い良く海の中を走り続ける魚に対して、翔はリールの糸が巻かれている部分 スプールの上部にあるつまみを、カリカリと音を鳴らしながら回す。一定まで回した所で、スプールが糸を引っ張られるベクトルに逆らう事無く回り、ラインの張りを保つたまま糸をゆっくりと出していく。

どうやら無理矢理手元に引き寄せるのは拙いと思ったのか、ドラグを緩めて走らせ、魚が疲れるのを待つ作戦に切替えたようだ。

「とにかく、見つけたISに触り、それが起動した事が切欠だ」「なるほど……そうでしたの」

「うむ」

魚が左右に走れば、竿を軽く倒して魚の動きをコントロールし、

ラインを決して緩めずに魚を泳がせる。

ただひたすらにそれを繰り返しながら、セシリアの話に答えていく。

そうして翔がISを起動させられると知った切欠である出来事を聞いたセシリアは、ふむふむと軽く頷いている。

「ではどうやってIS学園へ？ あの時確か試験は終わっていた筈ですわ……」

「ふむ、俺も他の高校の受験を終わらせていたのだが、その事を千冬に報告した所、すぐさま特別にIS学園の試験を受けさせられてな。今に至る、と言うわけだ」

「……身内だから、でしょうか？」

翔がIS学園へと来た経緯を話し終え、それに対しての千冬の実動にセシリアは疑問を持つ。

それも当然の話で、千冬は自らの仕事に私情を挟まない事になりには有名で、実の弟にも教師としての自分を意識させている事からしてもその事実は間違いの無い事実。

それが何故、既に試験の終わっていたIS学園に、翔を入れようとしたのか、その頃既に千冬との繋がりがあつた翔にそんな事をすれば、私情と見られてもおかしくない。

両膝に自らの口元を当てつつ、セシリアは思案するが、その疑問に対する確信に近い答えは、彼女自身の直ぐ上から降ってきた。

「恐らく、身の安全の為だろう。男がISを動かせるなど前代未聞だから……危険に晒さない為には全寮制のIS学園に入れてしまった方が何かあつた時に対処がしやすいという事なのだろう」

「なるほど……」

IS学園の生徒ならば専用のISを持っていても不思議ではない

からな、と締めくくり、また魚との格闘に戻る翔。

翔や一夏にとって、専用のISと言うのは、つまりは防衛手段なのだろう。

世界から見て、例外である二人には何時危険が迫るかわかった物ではない。

いくら翔が強いといっても、生身で熟練のIS乗りに襲われればその結果は分らない。

それに対抗する為の力であり、そうさせない為の防衛線であるIS学園。と言う事なのであろう。

翔から告げられた答えは、限り無く千冬自身が持っている答えと限り無く近い推測である事は間違いないであろうが、それに付け加えて、セシリアは思うことが一つだけあった……。

（考えていないのしょうが……恐らく、少しは私情もあつたと思いますわ。翔さん）

冷静にそう考え、ひたすらに魚と格闘する精悍で凜々しさの際立つ翔の横顔に視線を送る。

未だにその表情は、感情を悟らせない何時もの涼しい顔つきだったが、今戦っている海の中の魚との駆け引きを目一杯楽しんでいるように感じられた。

その横顔を見ていると、セシリアは、翔がどうやってIS学園に来たか、と言う小さな事はどうでも良く思えてくる。

結局、結果として柏木翔はIS学園に在籍し、専用のISを持ち、その力でもってセシリアを負かし、前へ進む事の大事さを教えられ、そんな何時でも前へ進む翔の強さに惹かれ、実情としてセシリアの中で最強を誇る翔が居る。

そして、日々の生活の中で翔に惹かれる気持ちはどんどん大きくなり、今自分と翔はここに立って海を楽しんでいる。

その事実が重要で、大切なのだと、セシリアはそう思いなおし、

自分の中で出た結論に対して嬉しそうな笑顔を浮かべる。

「ふむ、そろそろか……」

竿のしなりが段々と勢いをなくしてきた所で、翔はそう小さく呟き、ここで初めてリールのハンドルに手を当てて回し始める。

ゆっくりと巻かれるハンドルにベイルが連動して動き、ラインを巻き取る動きを見せる。

その動きは翔が回すハンドルの速度に合わせて、ラインが巻き取られる速度も非常に緩やかで、無駄なテンションをラインに与えないようにとの配慮なのだろう。

海面から出ている緑色のラインは、ゆっくりと、だが確実に翔の手元にあるリールへと収まってきている。

自らの中で、今のこの現状がこの上なく幸せな事なのだという結果が出たセシリアは、何処となく体がウズウズするような感覚を覚える。

その感覚に逆らえず、気がつけばセシリアは立ち上がり、翔の直ぐ隣に寄り添うようにして立っていた。

「今釣っているのは、どんな魚ですか？」

「スズキと言う魚だ。大きければ刺身でもいける。白身でこれが中々に淡泊で美味しい」

「どんな感じですか？ 大きそうですね？」

「ああ、これは大きいな……恐らく手元まで来ても現状では上げられんだろう」

冷静にそう言う翔に、セシリアは急に慌てだし、翔に対して対処方法を聞くように口を開く。

「で、では、どうしますの？」

慌てた様に翔へ問い掛けるセシリアだが、そんな彼女自身、慌てつつもこの状況を、この雰囲気を楽しんでいるような空気が感じられる。

何かを吹っ切ったように、普通の少女のように、純粹に海に来ていると言うこの現状を楽しんでいる事が分かるセシリアの生き生きとした表情に、思わず翔は口元を緩める。

緩やかに、ふっとクールな、そして満足そうな笑みを浮かべる翔に、自らが慌てているのを笑われたと思ったのか、セシリアの顔に羞恥の色が混ざる。

「……お、お恥かしい所を……」

「いや、スマンな、お前の慌てっぷりを笑って訳ではない」

「そうですか……そうでしたらよろしいのですが……」

「俺の言った事を実践出来ているようだな、少しばかり嬉しく思っただけだ」

「翔さんの言った事……」

そう告げられた言葉に、セシリアは思い出すように右手の人差し指を顎に当てながら、その青い瞳を空中へ彷徨わせるように動かす。一見無防備そうな表情を、金色の髪を持ち気品溢れる雰囲気のある少女、それも水着姿が非常に眩しい人物がしていると、非常に絵になる。

一見気が強そうに見え、上品な雰囲気纏うセシリアが翔と居る時にふと見せる無防備な表情は、世の男性にとって目の保養であり、同時に目の毒。

そう思われてもおかしく無い程に、彼女のそう言った生き生きした表情は魅力に溢れていた。

そんな無防備な表情、翔にとっては、今を楽しんでいるような生きたセシリアの表情に、やはり満足そうに、ふっと笑みを浮かべる

だけ。

やがてセシリアは、浜辺で翔に言われた事を思い出したのか、漸く魚の魚影が見えてきた事に、瞳を細めている翔に嬉しそうな笑顔を向ける。

「普段自分がしないような事をしてみる、ですか」

答えにたどり着き、彼女にそう言った翔へ笑顔を向けて、セシリアは声を弾ませて翔へと答えを披露する。

セシリアから披露されたその答えに、翔は満足そうに一つ頷く。

「そうだ、普段通りのお前ならば、海の景色は浜辺から見た海の景色だっただろう。だが、普段しないような行動をしたお前は、人の釣りを見て、防波堤からの海を見ている。そんな小さな楽しみが、大事だと思わんか？」

そうセシリアに問いながら、翔は、ニツと笑みを浮かべる。

何時もと違う自分の行動、何時もの自分なら見る事の無い景色、そう言う小さな違い、小さな好奇心を大事にする事は、とても大切な事。

翔自身からそういわれた事で、セシリア自身が感じていた、身体がウズウズする様な感覚が何なのか、漸くはつきりと理解出来た。

それはほんの小さな好奇心、何時もと違う景色を見て、何時もの自分ならしない行動をして、何時もの自分なら知る事のなかった釣りと言う行為を知り。

そんな積もった小さな好奇心が、何となく彼女自身の心を落ち着かせないような、ワクワクするようなそんな気持ちを感ぜさせていたのだ。

心が落ち着かない、身体がウズウズする。

でも不快な感情ではない……そんな気持ちは確かに……。

（とても心地良く、楽しいもの、ですわね）

見た事の無い世界が見たい、知らなかった事を知りたい、した事の無かった事をしてみたい。

そんな小さな好奇心、冒険心が、セシリアを落ち着かなくさせていた物の正体であり、その感情を彼女自身とても悪くないと、楽しいものだと感じていた。

そう感じたセシリアの表情には、自然と穏やかな笑みが宿る。

「そしてお前は、ここで自分のした事のなかった事をする事になる」
「えっ!？」

自分の感じた感情を悪くない、楽しい、と感じた所に、翔から静かに、だが唐突に声が掛かる。

手元まで魚が来ているのを見て、魚の顔を海面から出させ息を吸わせていた翔は、握っていたリールのハンドルから左手を離し、離れた左手でもって、投げ竿を握る。

そうしてフリーになった右手で、彼の隣に静かに寄り添っているセシリアの手を握り、そのまま自らの元へ引き寄せるようにして引っ張り、そのまま腕の中へ閉じ込めてしまう。

二秒も掛からずその体勢になったため、セシリアには暫く何が起こったのか理解出来ないように呆けていたが、彼女は現在、翔に背を預けるようにして翔の腕の中に閉じ込められている。

簡潔に言ってしまうならば、セシリアは後ろから翔に抱きしめられる格好になっていた。

女性特有の細い肩をすっぽり覆う逞しい腕に、露出面積の広い水着と言う格好、当然素肌と素肌が触れ合い、互いの体温を感じられるような状態。

水着と言う物に仕切られてはいるが、所詮薄い生地、はつきり言

って身体のどこからでも互いの体温を感じることが出来る。

そうしてセシリアに伝わる翔のリアルな体温を自覚した瞬間、彼女は自らの状態を自覚し、頬がメルトダウンを起こしたように、一瞬で赤く染まる。

「しししし翔さん！？ あ、あのあの！ こ、これは！？」

互いに水着と言う露出面積の広い格好で、思い人の腕の中に抱かれていてと自覚したセシリアの口調は、この上なく怪しいが、翔は特に気にした様子も無くセシリアの手を取り、投げ竿のリール付近を掴ませる。

セシリアの右手がしつかりと握られている事を確認した後、左手も同じ様に掴ませて、自分が手を離しても彼女が離さないように自らもぐつと握りこむ。

その際、肩を絞るように握りこみ、セシリアの身体を固定する様な体勢になったため、自ずとセシリアの肩も連動して絞られ、彼女自身の二の腕で、豊かな双子山が、ふにやりと左右から潰される格好になる。

正面からのアングルは非常に目の毒……いや、実際の所、セシリアよりも背の高い翔から見下ろす目線の角度が一番目の毒だが、肝心の翔の視線はセシリアの悩ましい谷間ではなく、海面から顔を出す銀色の魚にその視線は注がれていた。

「落ち着け」

「は、はひ……」

「暫くこれをこの状態のまま持っている」

「わ、わかりましたにやっ！？」

セシリアから返って来た了解の返事に、にや？ 等と不思議そうな表情で首を傾げる翔だが、結局、まあいいか、と言う結論に落ち

着いた。

こんな状態にありながらも、意識は魚に向けられている翔とは対照的に、セシリアは色々ギリギリだった。

見た目からは想像もつかない程に力強い腕に、絞り込まれた筋肉で少し固く感じる胸板の感触を自らの背中に感じ、逃がさないようにと閉じられている腕に安心感を感じ、伝わる体温がその安心感を落ち着かなさに変えていく。

そして彼女の耳の上から落ちてくる低めの声は、何時もより距離が近いぶん吐息すらも感じさせる。

何でもない言葉、用件だけをセシリアに伝えているだけの言葉のはずなのに、その声が聞こえるたびに心音のリズムはこれ以上無い程に跳ね上がる。

「このままではこのサイズのスズキは上げられんなのでな、他の釣り人からタモを借りて来る」

「い、いつてらっしゃいませ!？」

ほんの少しばかり落ち着いたのか、セシリアの語尾が漸く安定する。

そんなテンパった様子のセシリアに、タモとは何なのか？ このまま自分を放っておくのか？ 等と言った疑問など、浮かぶ筈もなかった。

送り出しの言葉をセシリアから貰った翔は、うむ、と一つ頷き、セシリアが握った投げ竿を放さないようにゆっくりと身体を離し、手を離してもラインが緩まぬように体制を保ち続けるセシリアを見て満足げに頷いて、踵を返し、他の釣り人の元へ向かう。

翔の支えのなくなった投げ竿を持ち続けるセシリアだけが場に残り、その時になって漸く自分の持っている物の重量に気がつく。

「お、重たい、ですわ……」

セシリアが思わず呟く感想も当然の事で、投げ竿と言うのは仕掛けを遠く飛ばすために長く作られており、魚の動きを受け止める為にしなやかにしなるようにも作られている。

そして、地球には重力と言うものがあり、風と言うものも存在している。

重力は物体を地へと縫い付ける下へ働くベクトルの事で、竿先に行けば行くほど竿と言うのはその先を地面へとしならせる。

それはつまり竿と言う道具が長ければ長いほど、重力の影響を受けるという事と同義。

そして風。

風は高い所にあるものほど影響を受けやすい、高いビルの屋上で受ける風とビルの下で受ける風、どちらが強いかなど感じてみればすぐにわかるもの。

その事を踏まえて話は戻る、投げ竿は長い物。

それはつまり、風の影響を受けやすいという事であり、同時にしなる物である投げ竿はその影響を受けて当然になる。

止めに竿先から出ているラインの先についている大きな銀色の魚は、大きな口をあけて海面から顔を出しているが、息絶えたわけではなくきちんと生きており、抵抗をやめたわけではない。

未だにぶるぶると振動が伝わる投げ竿をしっかりと握りこみながら、その重さに耐える。

訓練の賜物か、セシリアのしなやかな身体はその重量に何とか耐え切っているが、釣竿を持つ事に慣れていない所為か、その身体はぶるぶると震えている。

その影響を受けて、IS学園の女子生徒の中でも発育の良い彼女の身体はあらゆる所が柔らかさそうにぶるぶると震える。

非常に目の毒である。

「済まない、待たせたな。もう少しばかりそのまま居てくれ」

漸くセシリアの下へ帰ってきた翔から告げられたのは、拷問のようない一言だった。

そんな台詞を躊躇なく発する翔の右手には大きな網が握られており、どうやらそれは長く伸びるものなのか、掬い上げる様な使い方を意識した形の網をぐんぐんと伸ばしていく。

そして限界まで伸ばされた網を、防波堤の下に居る海面から顔を出した銀色の魚の尻尾側から網を近づけ、一気に掬う。

網の中にきつちりと目的に魚が納まった光景を目に入れて翔は、うむ、と一つ頷き、未だにふるふると震えているセシリアへ視線を送る。

「もう問題ない。竿を下ろしても良いぞ」

「お、重かったですわ……」

翔から出た解放の言葉に、大きく息を付きながら、持っていた投げ竿をゆつくりと地面へと置く。

そして、網を短くしながら手元へと魚を引き寄せる翔をじつと視界に捉えて、行動を見守る。

漸く手元まで引き上げた網の中に収まっていたのは、銀色の鱗が目を引き大きなスズキだった。

うむ、と満足そうにそのスズキの姿を見て、翔は一つ頷き、躊躇もなくスズキの口の中に親指を潜り込ませ、しっかりと下顎を握りこみ、上顎に刺さった針を抜き、網の中から一気に持ち上げる。

「ふむ……70cm前後といった所か、鱗も綺麗だ。居付ではないな、回遊してきた固体か。大物だな」

「魚臭さが尋常ではありませんけど……確かに綺麗な色ですわね」

陽光を反射するほどに光る銀色の鱗に、70cmを越えるか越え

ないかと言う大きな体。

紛れもなく大物のスズキに、翔は珍しく満足そうな笑みを浮かべて、セシリアへ視線を送る。

「どうだ？ 普段と違う事をした感想は？」

「そうですね……慣れない事をした所為か、少し疲れましたけど……ワクワクしましたわ」

「そうか」

大きく溜め息をつきながらも、その後直ぐに、向日葵が咲いたような華やかな笑顔を咲かせるセシリアに、翔も、ふっ、と笑みを浮かべて、笑みを交し合う。

日差しの強い陽光と、爽やかな潮風に吹かれながら、陽光を反射する金色の艶やかな髪と、光を吸収するような黒の髪を持つセシリアと翔は、銀色が眩しい魚を挟んで笑みを浮かべる。

そんな夏を満喫しているような状況の中で、翔の脳内には、あの時間こえた声が反芻していた。

『私を使ってください……』

ある種の切実さを孕んだその声に、あの時翔はどうしても応えてやらねばならない気がしたのだ。

その声に応えた結果、今セシリアと穏やかな夏の一時を過ごせていると思うと、それも悪くない。純粹にそう思えた。

眩しい太陽を見上げながらそう思う翔の心の声に答えるようにして、翔の水着のポケットの中にある黒いピンが淡く光ったのだが……当然そんな事は、翔もセシリアも知る事はなかった。

二十四斬 漢なら大海原が似合うものだ（後書き）

はい、連日顔を見せる事に不思議な感覚を抱いているあつくすぼんばーです。

一日一回更新と言うこの状況が、何故だか既に違和感を感じています。

おかしい、前までは一日に数話更新していた時期もあったのに……。

おかしい話ですね？

さて、今回もセシリア強化回……の筈なのですが、アレ？
束さん、前へ出すぎじゃないっすか？w

予想以上に出張ってきた束さんです。どうやら私も束さんの事は書きたかった様で、いざ書いてみると束さんパートがすんなりと終わってくれませんでしたw

仕方ないですね。束さん可愛いんだもん、そりゃ止まらないよって話ですよ。

ですが、これもセシリア強化回、セシリアには当然美味しい思いをしていただいています。

そしてやはり、健全な青少年として目の付け所がおかしい翔君です。

翔の事に関しては、これから先色々話を小出しにしていき、本編を進める傍ら、少しずつ語っていかうと思いますん。

さて、ここからは雑談です。

いい加減私の雑談など聞きたくないよ、毎回関係無い事ばかり書きやがって……と思われるかもしれませんが、やはり書きます。べ、別に読んで欲しい、とか、思っただけだからね！

お約束もやった所で、雑談です。

私はピザまんが好きでしてね……色んなコンビニにあるピザまんを食べ歩く事もしばあります。

と言っても、私の住んでいる所の近くにあるコンビニは、ローソン、セブン、ポプラ、ファミマ、位なのです。

少し遠出する機会にサンクスやら何やら寄っていますが……。

個人的には……セブンのピザまんは具が多くてチーズ少な目、サンクスのピザまんはチーズが多くて具が少な目、と言う印象があります。

ちなみに好きなのはローソンのピザまんです。

好きなコンビニもローソンです。

気がついたらローソンに向かっている事が多いです。

ポプラの方がローソンより全然近いのに、態々ローソンへ行きます。

一人美人な店員さんもいますしね！

関係ないですか、そうですか……。

さて、では今回はこの辺りで、これでストックは切れます。

なので次の更新は少しだけ間が空くと思いますが、ご容赦をorz

……皆さんは何処のコンビニが好き、とかあるんでしょうかねえ

？

二十五斬 漢には粹な演出も必要だ

炎天下でありながら、広がる景色によってある種の涼しさを感じられる、海と言う場所に臨海学校という行事にて訪れているIS学園一年生の生徒達。

その中でも異色である男子生徒の一人柏木翔と、イギリスの代表候補生であるセシリア・オルコットは、肩を並べて大海原を見ながら釣りに興じ、餌である鰹が切れた為、釣りを切り上げ、砂浜へと向かっていた。

段々と多くの女子生徒達が声を上げる砂浜へ向かってゆつたりと歩く翔とセシリア。

ゆつたりとした歩みによって揺れるクーラーボックスの中身は、大量の鰹とキスによって埋め尽くされており。

銀色の眩しい大型のスズキ4匹は、下顎に紐に縛られたフックを通され、翔の右手に持たれており、歩みに合わせてその巨体をゆつたりと揺らしている。

釣り道具の入った袋と竿の入ったケースを黒のパーカーの生地に包まれた左肩に引っさげ、クーラーボックスを右肩に、フックに吊られたスズキを右手で持ち、と多くの荷物を持っているが、この炎天下の中涼しげな表情でゆつたりと翔は歩く。

その隣を陽光に反射する金色の髪を持つセシリアが、水着姿のまま翔の隣を歩いているが、その視線はチラチラと翔を捉えている。

自身の少し上に存在する、翔の精悍な顔つきをチラチラと見るセシリアの様子は、明らかに何か言いたそうな視線であり、その視線に気がつかない翔ではない。

何度目かのセシリアの視線に合わせるようにして、鋭い目はセシリアの視線と交差する。

「何かあるのか？」

「あ、えつと……あのですね……」

急に視線を合わせられたのが恥かしかったのか、問いかけられた翔の質問に直ぐには答える事が出来無いセシリア。

身体の前面で手を組み、組み合わせた手を下に降ろしたまま、もじもじと忙しく指を動かす。心なしか頬が上気しているのも気の所為ではないだろう。

歩きながらも少し恥かしそうに、と言うか何か遠慮しているように、視線を忙しく動かす指へと落としながらセシリアは口を開く。

「もし、お時間がまだよろしければ、私とビーチバレーは如何ですか？」

言いながらも視線を翔の顔へと上目気味に流す。

その雰囲気は既に15歳やそこいらの色香ではなく、流し目気味に見上げてくる瞳の色は遠慮気味に、だが少し期待するような色の込められた誘いの瞳。

迷惑になっていないだろうか？ 受け入れてもらえるだろうか？ そんな感情の籠められたその瞳の色は、普段胸を張って歩いている筈のセシリア・オルコットと言う少女からは考えられない瞳の色だった。

可憐で優美な容姿に、相手の様子を伺いながらも誘う瞳は一種のギャップによってその雰囲気は構成されていた。

無論、普段でも魅力的な少女ではあるが、翔に見せるこの一瞬の表情こそ、セシリアと言う一人の少女としての表情である。

煌く陽光と金色とは裏腹の不安が込められ、それによって揺れる蒼の瞳は、海に揺れる水面を連想させる。

そんな魅力的な瞳を覗かせるセシリアの少女としての表情を他所に、翔の瞳は虚空を数秒泳ぎ、簡潔に答えを出す。

「ふむ、少しぐらいならば別に構わんが」

「そ、そうですか！ 良かったですわ」

簡潔に出した翔の答えに、セシリアの瞳は不安そうな色が霧散し、後には夏の太陽の下に咲く金色の美しい花卉が満開となっていた。

そんなセシリアの花が咲いたような表情に翔も、ふっと笑みを浮かべてセシリアを見やる。

「ならば、パラソルの下で少し待っていると良い」

「えっと、翔さんは一緒に行かないんですの？」

「俺はこいつを厨房に預けてくる。すぐに戻るから気にするな」

「そう言う事ですか、分かりましたわ」

クールに笑みを浮かべたまま、スズキを持った手を軽く掲げ、その続きでクーラーボックスを軽く叩く。

翔のアップルする動作に、得心がいったと言う様に、セシリアは花の咲いたような笑顔から、ふわりと言う音が似合う様な微笑を浮かべる。

「では行つて来る」

「はい、行つてらっしゃいませ」

近所のコンビニまで行つてくる、とでも言わんばかりに軽くセシリアに声を投げかけ、スズキを持った右手を掲げて体中の筋肉を躍動させる為に、セシリアへ向けている身体を旅館のある方へ向ける。セシリアからの送り出しの言葉を聞いた瞬間には、既に翔の体中の筋肉は躍動を始めていた。

砂浜の砂が薄く敷かれているアスファルトを蹴りだす力は力強く、サンダルであるにも拘らず、その足裏はしっかりと地を握り締めているかのような音と共に固い地面を蹴り抜く。

鍛えこまれた足腰から発生する筋肉のバネは、しなやかに伸びながらも、着地した足はしっかりと大地を踏みしめ、そして蹴りぬかれる。

そうして全身を躍動させながら身体を前へ動かしている翔。だが、その重心はブレを見せる事無く、クローボックスや釣具の入っている袋を揺らす衝撃は最小限に抑えられている。

鍛え上げられた翔の肉体が如何にハイスペックな物なのか、何気ない少しの動作で理解が出来る。

そうして全身を躍動させながら大地を蹴りだす翔の後姿が、セシリアの視界から消えるまで、そう時間は掛からず、数十秒見送っただけでセシリアの視界から翔の後姿はその姿を消した。

銃器を扱う者は眼が良くないと勤まらない。その例に漏れる事無く、セシリアも動体視力はかなり良い方だ。

そのセシリアの目から見た翔の肉体は、やはりハイスペックであり、剣の道を歩んでいるからかはセシリアの知る所ではないが、足腰の強靭さは注目すべき所であるし、その他にももう一つ……。

（身長からは見合わないあのストローク……生身で戦えば幾らでも間合いが誤魔化されますわね……）

瞳を細めて見据えていた翔の肉体は、その身長に見合わないほど足が長い。

それ故に一步を踏み出すストロークが大きく、全体の体型が分かりにくい胴着等を着用して相対した場合、その身長に誤魔化されて長いストロークによる一步で間合いを見誤ると言う事が在り得る。

この様な所でも、翔の肉体は、事戦いに置いては反則的なスペックを持っている事が、また一つ明らかになった。

身長はそう高い方ではない翔だが、肉体を構成する割合と言う意味では、日本人の中で信じられないほど闘いに向いている体型なのだ。

身長に見合わぬ長い足、筋肉の付き易い身体、筋肉は付くだけでなく絞り込まれ、付いた筋肉はしなやかでバネがある。

ある種完成されていると言っても良い翔の肉体にもし、身長が加わっていたのなら……。

「生身の格闘技で世界王者……ありえない話では無いですわ……」

掌で日差しを遮る様に太陽に手を翳し、海と同じく蒼穹の空を見上げながら、セシリアは自分の言ったありえそうなＩＦに溜め息を漏らす。

そして、翔に対しての考察が終了したセシリアの頭に過ぎるのは一つの考え、必要無いと思いながらも、彼に恋焦がれる乙女としては、しておいても良かったのではないかと言う行動。

「手伝った方が、良かったかもしれませんわね……」

微妙に力なく言葉を発するセシリアは、翔とビーチバレーが出来ると言うだけで浮かれ上がった自身の恋愛経験の無さに、またしても溜め息を溢すのだった。

陰鬱、とはまた違った、ふわふわと雲の上を歩いている様な、そんな幸せなセシリアの悩みとは裏腹に、頭上に輝く太陽は、全てを燃え上がらせ、沸かせ湧かせる様に輝いていた。

クーラーボックスとスズキを、調理許可の出た厨房の一角へ預けて、太陽に温められ、温度が急上昇している砂浜へ舞い戻ってきた翔の視界に入ったのは、かなりの数になる女性達の集まりが、一箇所に集中しているという光景で、翔の記憶が確かならば、そこはビーチバレーのコートがあった場所。

自らの記憶を確かめる為、ゆったりと砂浜の上を歩き、そこへ近付くと、確かに人込みの向こうにビーチバレーに使われるであろうネットが見える。

「しかし、何故集まっているのだ？」

翔の記憶では、こぞって集まる程のイベントがあったような記憶は無い。

解せんな……と静かに呟きながら、ビーチバレーのコートへ向けて歩きつつ、視線を彷徨わせ、一緒にビーチバレーをすると約束した筈のセシリアの姿を探す。

視界に見える限りの範囲内に、蒼の水着がよく似合う少女の姿は確認できず、人込みに囲まれたビーチバレーコートと多くのカップルや友人同士の連れ合いが夏を楽しんでいる砂浜と海しか見えない。探し人が見当たらないのなら、するべき事は一つ。

ビーチバレーをしようと約束したのだから、ビーチバレーコートに行つて、待っていれば良い。

当然の思考をした翔は、特に気負う事無く、女子だらけの人込みに近付いていく。

ビーチサンダルを履いた足が、暖められた砂を巻き上げ、サンダルの間に入るが、特に支障は無い。

ビーチバレーコートに近付き、翔がそこにざっと視線を巡らせる限り、見知った顔がちらほらと見える事から、集まっているのは凡そがIS学園の生徒達らしい。

態々IS学園の生徒達がこぞって集まっている光景に、はて？と首を傾げる翔。

「あ！ 柏木君よ！」

「え？ ホントだ！ ほらほら！ 道開けて！」

「頑張つてね！ 柏木君！」

「アンタどっち応援すんの？」

「私は断然織斑君！」

「くっ！ アンタ織斑君派か……」

「私も織斑君！」

「やっぱり柏木君派って少数派なのね……」

「まあ、柏木君の性格知ってる子って少ないし」

一人の女子生徒が、翔を発見した瞬間。あちらこちらで女子生徒達からの声が上がりつつ、翔の前にビーチバレーコートまでの道が広がる。

その先には、翔の探し人である蒼の水着が似合う少女と、親友である所の織斑一夏が、ネットを挟んで相對しており、一夏の隣には、翔と一夏共通の幼馴染である鳳鈴音が立っている。

ネットを挟んで相對する三人の内、蒼の水着がよく似合う少女セシリア・オルコットと織斑一夏は、何とも微妙な表情を浮かべており、對照的に鈴音は挑発的とも言えば良いのか、釣り気味の瞳を勝気に光らせ、不敵な笑みを浮かべていた。

その微妙な空気と状況から、翔は状況を察して、苦笑を浮かべるが、その歩みは止まる事無く迷う事無く真っ直ぐにコートへと向けられていた。

当然そのまま行けば、IS学園の女子生徒達が並んだ間を通過していく事になるのだが、翔は特に気にした素振りはない。

コートへ近付いた時と同じ様に、ゆったりと歩を進める翔の耳に、一夏の名前があちらこちらから飛び込んでくる。翔の名前も聞えては来るが、その機会は少ない。

それに、よくよく見れば、翔の名前を出しているのは、比較的翔と話す機会が多い生徒達ばかり。

昔から知っている一夏の人気者っぷりが、ここでも發揮されている事に、翔は少し苦笑を浮かべる。

（人を惹き付けるのは、昔から変わってはいないな）

翔が見ていた昔からそうだった。

織斑一夏と言う人物は、誰にでも平等に接する人物であり、誰とも短期間の間に仲良くなれる。

知らぬ内に人を惹き付ける魅力が、一夏の特徴であり、それに例外はなく、翔も見事にそれに巻き込まれ、今に至っている。

無論、翔自身に魅力が無いというわけではない。が、しかし、翔の魅力は、知るには少しハードルが高い。

自らの道を真つ直ぐに邁進する鋭く意志の強い瞳、物静かで落ち着いた雰囲気。そんな諸々を越えて話し掛けなければならない。

それは少々年若い者にはハードルが高い、にも拘らず中学時代、翔は圧倒的な人気を誇っていた。

話し掛け辛く、翔の魅力を知る機会が殆ど無い筈、その状況を崩したのが、一夏の存在である。

誰でも惹き付ける一夏が緩衝材となり、翔と話せる機会を誰とでも作り、あらゆる人物が翔の人となりを知る。

そうやって交友を広げていった結果が、中学時代の圧倒的な人気である。

孤高と言っても差し支えない程に、自らの道を邁進する翔を巻き込み、一般よりも一段高い所に存在していた精神を引き落とし、一般と同じ所に落ち着かせる。

一夏がしたのはそう言う事であり、言うなれば、孤高の狼を群れの中に引き込む、それと同じ事をしたのだ。

気高き精神を持つ孤高の狼をも惹き付けた男は、現在コートで微妙な表情を浮かべていたが、翔が来た事によって、幾分か安心したのか、少しホツとした表情へと変化していた。

あからさまとも言える表情の変化を見せた一夏に、翔は苦笑を隠せない。

結局、気高き孤狼が一夏に惹き付けられたように、一夏もまた、

孤狼の気高き精神に魅せられていると言う事なのだろう。

「おせーぞ、翔」

「そう言うな。俺は俺でやる事があつたのでな」

コート内に翔が入り、一夏とネットを挟んで相対した瞬間、安堵したような表情を浮かべつつも、翔に文句を投げかける。

そんな一夏の文句をさらりと受け流しながら、翔はふっと笑みを浮かべる。

「申し訳ありませんわ。何故か知らぬ間にこの様な事になってしま
いまして……」

一夏と翔が軽口を叩き合っていると、翔の隣から、申し訳無さそうに表情を歪め、少し肩を落としたセシリアが、謝罪を入れてくる。心なしか、陽光の下で眩しく煌く筈の、彼女の金色の髪にも精彩を欠いている様に見える。

申し訳なさが前面に出ており、ぱつと見ただけでは今一分からないだろうが、セシリアの纏うその雰囲気は、少し残念そうな雰囲気も混ざっている。

恐らく彼女は、翔と楽しくビーチバレーをして、少しでも長く同じ時間を共有したかった。と言うささやかな欲求もあつたのだろう。金色の髪が精彩を欠いている様に見えるのは恐らくその為だろうが、申し訳なさが前面に押し出されている事から、結局翔がセシリアに掛けてやれる言葉は、一つしかない。

「まあ、そう気にするな。こう言うのも偶には悪くない。それに恐らく元凶は本音辺りだろう」

「ぎくうつ!？」

「その発言でもうバレたぞ? 早いな、謎究明まで5分もなかった

ぞ？ 本音」

周りで騒ぐ女子達の声に掻き消されないような音量で、尚且つ全員に聞える様にそう言った翔の発言に、これ以上無い程に分かりやすいリアクションで応える女子生徒が一人。

バレない様に女子達の垣根の中に紛れ込んでいたのか、その人物は、えへへ〜とバツが悪そうに笑い声を上げ、冷や汗を浮かべて翔達の前に姿を現す。

左右の耳の上辺りで結わえた細いツインテールに、余った髪は後ろへ流すという、少し特徴的な髪型に、垂れ眼気味な瞳が印象的な、緩い雰囲気の本音は、何故かこの真夏の海と言う場所にも拘らず、黄色い着ぐるみの様な衣装で、その身体を覆っている。

誰もが明らかに突っ込みを入れざるをえないその光景に、何故か誰も突っ込みを入れない。

真夏の気温に、照りつける日差しは強い。その下にいる一人の女子生徒は、明らかに蒸れそうな着ぐるみを纏っている。

顔が出ている分、普通の着ぐるみよりはマシであろうが、それだけである。

普通ならこの様な場所で着る者はまず居ない。

「えへへ〜、ゴメンね？ しわぎん」

「別に俺は構わんが、今度から調子に乗って不用意に言いふらさぬ事だ」

「うう……何やったのかまでバレてる……わかったよ〜」

「と言う事だ、セシリア、俺は気にしていない」

「分かりましたわ……」

困った奴だ、と言うように苦笑を浮かべて、本音の頭に手を置く翔に、セシリアは少し本音へ羨ましそうな視線を向けつつ同意、落ちていた肩も少し持ち上げる。

えへへ、と少し誤魔化すように笑みを浮かべる本音を諷めるようにして、少し強めにぐりぐりと翔の手が、本音の頭の上を動く。注意されている筈なのに、何故かその本音の雰囲気は少し嬉しう。

そんなやり取りをしていると、本音が前へ出て、翔へ絡んでいるのに釣られたのか、数人の人影が女子生徒達を押しつけて翔へと近寄る。

「どうも成り行きみたいだけど……頑張つてね？」

「シャルロットか、まあ、出るからには勝つつもりでやる。やり過ぎない様にはするつもりだが」

一本の三つ編みにされた金色の髪を揺らし、最初に翔へ声を掛けてきたのは、シャルロットであり、その表情には、翔へ向けての苦笑が刻まれている。

未だに周りの大多数が、一夏への声援で包まれる女子生徒達を、シャルロットの視線がぐりと巡り、最終的に翔へ視線が固定された時には、なにやらシャルロットは、身体の前で手を組み合わせ、己の二の腕で谷間を作るように肩を絞り、頬を少し紅潮させて、全体的にもじもじとしている。

そして翔へ固定していた筈の視線は、上目気味に翔を見上げ、直ぐに地面へ落とすと言う動きを繰り返していた。

チラチラと見上げて来る様なシャルロットの様子に、翔は不思議そうに首を傾げる。

「ぼ、僕は翔を、お、応援してるから！」

「？ ふむ、わかった。ならばシャルロットの期待に応える為に何としても勝とう」

「う、う、うん！ が、頑張つてね！」

貴方だけを、貴方だけに、そう言った意図の込められたシャルロットの言葉に、首を傾げながらも、熱く応える翔。

そんな翔の真摯な態度に、何か限界に達したのか、そ、それだけだから！ と叫ぶようにして言い捨てながら、シャルロットはもう一度女子達の中へと戻っていく。

ふむ……？ とシャルロットの様子に首を傾げる翔の前に、また人影が現れる。

「ぼ、ボス……そのままプレーなさるのですか？」

「む？ まあ、パーカとサンダルは誰かに預けようと思っているが……」

「で、では！ 私にパーカーを預けさせてもらっても、よ、よろしいですか？」

何処かおずおずと翔に声を掛けてきたラウラに、翔は向き直る。そしてなにやら意気込んでいながらも、徐々に尻すばみになっていくラウラの言葉と、見上げるような視線に、一も二もなく、翔は頷く。

「ふむ、こちらから願いたい所だ。預かってもらえるか」

「はい！ 是非っ」

必要以上に力んだ様子のラウラは、胸の前で両手の拳を握り、ガッツポーズを連想させるポーズをとりながら翔を見上げ、口元はいつも以上に引き絞られている。

そんなラウラの様子に、首を傾げるが、結局預かってくれると言っているのだから、その善意こそが翔の中では重要だった。

疑問を感じていた表情を正し、何時もの感情を悟らせない表情に戻った翔は、着ていたパーカーの前面に手を掛け、すると、装飾の無いシンプルなパーカーを脱ぐ。

剣を引き戻し、振り降ろす為に鍛え上げられた肩から二の腕の筋肉。引き絞られた胸筋は分厚い鉄の板を連想させる。その下にある腹直筋は綺麗に6つに割れ、その左右には前鋸筋と腹斜筋が肌の上からその筋を見せている。

ぎらつく太陽の陽光が突き刺さっている背中も満遍なく鍛え込まれ、肩甲骨付近を覆っている細かな筋肉も、各々の存在を主張するように隆起し、背広筋も絞り込まれ、如何にも強固そうな雰囲気を感じさせる。

今の今まで黒のパーカーに包まれていた翔の肉体は、凡そ男子が鍛えこむ平均を大きく逸脱していた。

15歳……いや、翔の誕生日は春である事を考えると16歳であり、16歳として考えるならば、常識では考えられ無い程に鍛え込まれている。

この海全体を見渡しても、男性の中に翔ほどの肉体を持っている男性は存在していない。

そんな翔の肉体は、男性が憧れを感じる肉体である事は言うまでもなく、周りで見ていたES学園女子生徒達も、この時ばかりはその肉体に溜め息を漏らさずにはいられなかった。

無論、この男には、周りの事等あまり気にする事ではなく、呑気に手に持った黒のパーカーを、目の前で翔の肉体に思わず眼を奪われているラウラへ向けて差し出す。

「では頼む」

「……」

「ラウラ？ どうした？」

「……っ！？ は、はい！ お預かりします！」

「スマンな、助かる」

翔の声に、思わず我に返ったラウラは慌てて差し出されたパーカーを受け取る。

そしてまたもやその視線を翔の肉体へ固定する。

ラウラは翔の身体を直に見たのは初めての事なので、仕方が無いと言えば仕方が無い事だ。

この平和な日本で、軍事に関わっている訳でも無いにも拘らず、陽光の下に晒されている翔の肉体は、実践的な運用を目的とした絞り込まれた肉体。

明らかにただ漠然と鍛えている肉体ではない、その使用目的が明確にあり、その為に鍛えこまれた筋肉である事が、外から見ただけで一目瞭然。

無駄な筋肉が一切無い事と、どうしても抑えられない筋肉の肥大化を最小限に止めている事がラウラの目を引きつける最大の要因だった。

「ず、随分と鍛えこまれているんですね……」

「む？ ああ、剣を振っていたら勝手にこうなったただけだ、何もおかしい事は無い」

「いや、その肉体が既におかしいだろ」

「そんな事は無い。お前も剣を振り続けてみる。そう変わらない身体になる」

「何年振ってりゃいいんだよ……大体振れつつたって真剣だろ？それを振るにもある程度筋肉が必要だつての」

「振れなくてもそれなりに振っていれば勝手に付いていく」

「どんなスパルタだよ……」

「成る程……流石はボスです」

翔の発言にツツコミを入れた一夏が、逆にげんなりさせられた所で、ラウラは何でもない様に己の肉体の事を話す翔を、尊敬の眼差しで持って見上げていた。

そのキラキラとした輝きを宿した無垢な表情に、翔は思わず苦笑を浮かべる。

若干16歳で、大の大人でさえ届かないほどの肉体になった翔に、引いた目や気味の悪がる目ではなく、ラウラのように純粹に憧れの目でもって応えられる事に、翔は慣れてはいない。

男は憧れの目が多いが、女性でラウラのように純粹な憧れの目で見られたのはそう多くは無い。

セシリアやシャルロットは関心し、鈴音は少し引き気味、千冬、箒は性別の違いから自分達ではほぼ確実に届かない領域の翔の肉体を、憧れでもって応えた。

束はなにやらくねくと、自らの身体を抱きしめながら身体をくねらせると言う謎の行動でもって応え、蘭は何やら陶醉するような目で応えていた。

ラウラは、丁度千冬や箒のような目で、翔を見上げている。

今名前を挙げた女性以外では、好意的な目はそう多くないのが本当の所。

「まあ、そう大した事ではない」

「何が大した事は無いだ、この世界の中でたった一つの目的の為に鍛え上げられた肉体だ。お前はもつとその肉体を誇っている。その領域に届く者が今の世界にどれだけ居る事が……」

何やら翔のパーカーを両手できゅっと握り、もじもじとパーカーと翔に視線を行き来させているラウラに、本当に些細な事だと言う様に、軽く手を振る翔。

そんな翔に掛かる、低めの女性の声。

間違いないその声は、IS学園1年1組担任、織斑千冬のも物であり、その声が聞えた方向に、翔とラウラは同時に目を向ける。

そこには、黒のビキニがよく似合う扇情的な格好の千冬が、仁王立ちで翔の肉体に視線を下から上へ巡らせていた。

剣を握る者として、憧れざるをえないその肉体を、大した事ではないと言い切る翔に、溜め息までついている。

「織斑教諭」

「教官……」

「ボーデヴィツヒ、お前は私の意見が間違っていると思うか？」

「いえ！ 思いません！ 私としても素晴らしい肉体だと思います！」

「そうだろう」

ラウラの返答に、何故か自信満々に千冬が一つ頷く。

「翔さんの事なのに、何故織斑先生が自信満々なのか分かりませんわ……」

「何か言ったか？ オルコット」

「いえ、何でもありませんわ、おほほほ」

聞えるか聞こえないかと言う声量で、セシリアからのツッコミが入った瞬間、千冬の鋭い視線がセシリアを捉えるが、その視線を、セシリアはさらりと交わす。

まあいい、と気にしない様にセシリアから翔へと、千冬は視線を移す。

そしてその視線は、翔の足元で固定される。

「サンダルでは動きにくいだろう、私が預かってもいいが？」

「む？ 助かりますが……」

「別に構わん、気にせず預ける。その代わり、確実に勝ってもらう」
「ふむ、承知」

千冬からの提案に、軽く乗った翔は、履いていたビーチサンダルから足を引き抜き、陽光に暖められ、それなりに洒落になっていない暑さの砂浜に、躊躇なく足を下ろす。

熱い砂に足をつけているというのに、翔の表情は一切の歪みを見せずに涼しい顔を保っている。

実際、すり足の多い武道を嗜んでいる翔の足裏の皮は分厚く、そして固くなっており、砂浜の砂くらいではびくともしない。

日々の鍛錬の成果が、このような場面でも生かされている。

持ち主の足が無くなったサンダルを手に取るうとしやがみ込もうとした翔よりも先に、千冬がその細い腰を折り、膝を曲げずに足元にあるサンダルに手を掛ける。

その際に、肉付きが良く健康的なハリのある太ももが悩ましい光景が広がっていたが、周りは女子ばかりなので、そのアングルに声を上げる者は居なかった。

……いや、一部の女子は何やら黄色い声を上げていたような気もするが、恐らく気のせいである。

特に苦もなく千冬は足元にあった翔のサンダルを拾い上げる。

「確かに預かった」

「助かります」

「では私達は観戦に戻るとしよう。行くぞ、ボーデヴィツヒ」

「はい、教官。ではボス、頑張ってください」

「承知」

自らが出てきた用を済ませると、千冬は踵を返し、女子生徒達の集団の中へと足を向ける。

ラウラもそれに続くようにして千冬を追いかけるが、何かを思いついた様にふと立ち止まる。

そして数秒何か悩むように、眼帯の付いていない赤い瞳を虚空へと投げ、彷徨う。

結論が出たのか、何やら少しばかり頬をさっと赤く染めて、ラウラはその小柄でスレンダーな身体に、翔のパーカーを羽織るようにして着込む。

自らの腕をパーカーの袖に差し込むが、その手は袖から出る事無く、袖口が足りない丈に従ってへにやりと力なく垂れている。

その様子に何やら嬉しそうに、ラウラは袖に隠れている手でもって、自らの口元を隠し、少し浮かれている様子で女子集団の中へ戻る。

「ボスのパーカー……少し、私には大きいな……」

「あー！ ラウラ、それずるいよ！」

「何がずるいものか、私だって頑張ってボスに切り出したのだぞ！」

「全く、うまくやったものだ……本当ならそのパーカーは今頃私が着ていたはずなのだがな……」

何やら夢見心地なラウラが女子達の中へ入って行った後、その様な会話が繰り返り広げられていたが、これから試合の翔には何ら関係無い事である。

再びセシリアの隣に並び、ネットを挟んで一夏と鈴音と対峙する。パーカーを脱いだ翔の肉体に、一夏はげんなりとした表情を浮かべ、鈴音は更に闘志を燃やしている。

「相変わらず非常識な身体だよなあ……」

「ですが、ここまで鍛え上げられているという事は評価すべき対象ですわ」

「それもそうだけどなあ」

「ふむ、別段気にするような事ではあるまい。鍛えているからと言ってスポーツが出来るわけではない」

「中学の時、体育のドッジで鈴が翔の投げたボールに当たって紙の様に吹き飛ばされていった事は忘れてねえよ」

「あの時の借りをここで返してやるわ！」

「……ふむ、そんな事もあったな」

「同情しますわ……」

ネットを挟んで相変わらずげんがりしている一夏、闘志を燃え上がらせ、何を考えているのかニヤリと、明らかに不穏な事を考えているのが丸分かりな鈴音。

対してセシリアは不憫そうな瞳を鈴音に向け、翔は考え込むように口元に右手を当てている。

主に鈴音が原因で、両チームの間には埋めがたいテンションの差異が見受けられるが、そんな事とは関係なく、陽光が煌く砂浜で、ビーチバレーは進行される。

セシリア・翔のペアからはセシリア、一夏・鈴音のペアからは鈴音、その二人が代表でじゃんけんをした結果、まずサーブ権は一夏・鈴音のペアへ渡る。

サーブは鈴音がするのか、本格的なビーチバレー用と思われるボールが鈴音の手に渡る。

ビーチバレーは2人と言う人数の少なさと、コートがそう広く無い為、明確なポジションニングは存在しない。

故に一夏は鈴音から見て左側に立っており、その位置はネットとエンドラインの丁度中間地点辺りで、最初の立ち位置としては無難な場所といえる。

それとは対照的に、セシリア・翔のチームは明確にポジションが分かれている。

翔が後ろでセシリアが前と言う位置。

鈴音はサーブ位置に立ち、右手の人差し指で器用にボールを回転させながら、明確なポジション分けをされている翔とセシリアを見て、不敵に笑う。

「それで良い訳？」

「問題ない」

「そう言う事ですわ。存分に打って下さいな。鈴さん」

鈴音からの挑発とも取れる表情と声に、翔は冷静に、そして悠然と少し腰を落として構える。

セシリアも、翔を見習い、余裕のある表情と声で持って、鈴音に
応えながら少し腰を落として構える。

その際、青のビキニに包まれた豊かな2つの山がふりと揺れて
いたのを、鈴音の目は見逃す事はなく、その様子に、鈴音の瞳は更
に釣り上がって行く。

「何よ何よ！ 何なのよ！ その余裕と揺れは！ ええそうよ！
私は揺れませんよー！」

「きゅ、急にどうしたのかしら？ 鈴さんは……」

「ふむ、分かんが、やる気は十分のようだな」

「鈴……」

「何よ一夏！ その目は！ そんな目私に向ける暇があるなら前向
きなさい！ 前！」

「い、イエッサー！」

困惑したようなセシリアの身体の動きに、豊かな双子山はまたし
ても悩ましげに揺れ、それに過剰反応する鈴音に、一夏は態々後ろ
を向いて不憫そうな視線を送る。

そんな一夏の視線に、鈴音は檄を飛ばし、一夏は律儀に直立不動
で敬礼を鈴音に送ってから、また気合を入れる様に少し腰を落とし
て構える。

翔だけは、戸惑う事も無く悠然と構えたまま。

睨み付けるような鈴音の瞳に怯む事無く、その全てを受け入れて
腰を少し落とし、砂浜を鍛え上げられた足でしっかりと踏みしめる。
悠然と受け止めるような翔の鋭い視線を、何か色々と鬱憤が溜ま
り、釣り上がった瞳で見返す鈴音。

人差し指の先で回転させていたボールを、少し浮かせて、ふわり
と右手で受け止める。

「あの時の私の痛みを思い知れー！ ふっ！」

余程ボールをぶつけられた時の痛みが痛かったのか、自らが持っているボールに叫びを籠めて、高く垂直にそのボールを放り投る。放り投げたボールを視線で追い、空高く煌く太陽の陽光に照らされるボールが、最高到達点まで達したのを見届け、後は重力に従って落下する寸前、小柄な鈴音の身体は、くつと少しばかり沈み込み、その小柄さを生かした、体重を感じさせないふわりとした跳躍。巻き上げる砂の量も極少量、しかしその高さは、普通の女性では考えられないほどに高い。

鈴音のバネがありしなやかな足に纏わり付く少量の砂が、宙を跳ぶ鈴音の様子を如実に表す小粋な演出を披露する。

落下してくるボールに、小柄な鈴音の身体が近付いた瞬間、振り上げていた手を、ボールへと叩き付ける。その際、空中と言う不安定な状態ながら、腰に捻りを啜えて、その力が向かうベクトルへ更に負荷を掛ける。

肌がボールを弾く小気味良い音を響かせた瞬間、そのボールはそのベクトルに従って飛んで行き、その到達点には腰を入れて構える翔の姿がある。

高速で飛来するボールから片時も目を離さない翔の瞳が、ボールの動きを分析する。

細くしなやかな鈴音の右腕から放たれたとは思えないほどの速度で飛来するボールには、翔から見て若干左に回転が掛かっているのを、翔の鋭い瞳は見逃す事は無い。

ボールの動きを刹那の瞬間に分析し終えた翔は、自らの身体を少しばかり右に動かす、それと同時に、翔が身体を動かした方向へボールが少し曲がる動きを見せ、寸分違わぬ動きで翔がレシーブの為に構えた腕へ吸い込まれるようにして入っていく。

当然の事ながら、高速で飛来したボールは翔の腕へ当たり、かな

り良い音を響かせながら、そのボールは速度を殺され、またしても宙へと舞い上がる。

翔の若干前方へ投げ出されたボールを、翔は視線で追うと同時に、身体でも追い、何の問題もなくボールの落下地点へ到達した翔は、両腕を上へと掲げ、落ちてきたボールを、ネット前にふわりとトスを上げる。

その際、ざつとネット前に視線を巡らせる。

トスによって高く持ち上げられたボールを捉えているセシリア、セシリアのブロックの為に、セシリアの正面に構えている一夏、その一夏をカバーする様に一夏の右後ろに構える鈴音。

それらが視界に入ると同時に、相手コートの穴を探すように、ざつと視線を向ける。

「センターの中間に刺せ！」

「了解しましたわ！」

上げられたトスがネット前に到達する頃にはその分析を終え、翔からの指示がセシリアへ飛び、その指示に異議を唱える事無く従ったセシリアが、くつと身体を少し沈ませ、跳躍。

しなやかで美しいラインを保つ足から放たれた跳躍は、セシリアの身体を高く持ち上げ、最高到達点から少し落ちてきたボールを捉える。

「ふっ！」

後ろから上げられたトスを寸分違わず捉えたセシリアが、自らの右腕を鞭の様にしなませ、ボールを若干上方から叩き落す様にして振り抜く。

翔からの指示と、勢い良く振り抜かれたセシリアの右腕から放たれるインパクトの音と同時に、ボールはその指示に従って、相手コ

ートのだ真ん中へと高速で打ち落とされる。

無論、それを見ていない鈴音と一夏ではなく、セシリアから放たれるスパイクの向かう先へと既に動いている……同時に。

「あっ！」

「うお！？」

コートの中真ん中に飛来するボールへ向かって、同時に動いてしまった一夏と鈴音は、当然互いと見合う事になり、一瞬その動きを止めてしまう。

その一瞬で、高速で飛来したボールは、一夏と鈴音の間に突き刺さり、その衝撃に従って、砂浜の砂をふわりと巻き上げる。

地面に衝突した衝撃で、大半の勢いを殺されたボールは、転々と空しく地面を転がり、後には見合った鈴音と一夏だけが残る。

空しい空気が間に流れる一夏と鈴音とは対照的に、セシリアと翔は、クールに片腕でタッチを決めている。

「織斑さんと鈴さんの性格を見抜いた的確な指示、流石ですわ」

「お前の正確なスパイクも流石だな」

クールに互いの右腕同士でタッチを交わし、セシリアは微笑み、翔はふっとクールな笑みと、種類は違うが笑みを交し合うセシリアと翔に、敵側のコートで鈴音が爆発する。

瞳を吊り上げ、両手も拳を握って天高く掲げて、地団駄を踏みながら、がーっと鈴音は一夏に食って掛かる。

「何やってんのよ！ 一夏！ アンタはタツパあるんだからブロックしなさいよ！」

「んな事言われてもなあ……あのペア、結構反則だぜ？」

「それでもよ！ 負けて悔しくないの！？」

「いや、巻き込まただけだしな、別段悔しくは無い」

「キーッ！ 押しても引いても段々手応えが無くなって来た感じが益々翔を連想させるわ！」

「そ、そうか？」

「褒めてない！ 照れるな！」

片や、まるで何かの掛け合いの様なやり取りを繰り広げる凸凹コンビに、片や冷静な眼と正確なスパイクを持つ息の合ったコンビ。

当然その後の試合運びも予想された物で、一夏と鈴音のペアも途中から息が合ってきたのだが、ペアとしての相性が良いのか、翔とセシリアのペアに後一步届かない。

悠々とセシリアと翔のペアが1セットを先取した所で、コートとサーブ権の交代。

このセットをセシリアと翔のペアが取れば、その時点でセシリアと翔のペアの勝利となる。

サーブ権の渡ったセシリアと翔のペア。その2人の内、サーブ位置に立っているのはセシリアであり、その事からも、サーブを打つのはセシリアである事は明白である。

「行きますわよ」

「来なさい！ セシリア！」

軽くボールを右手に持って掲げたセシリアから飛んできた言葉に、鈴音は腰を落とし、構え、気合十分と言った瞳と言葉で持って、それに応える。

チラリとセシリアの鮮やかな蒼が特徴的な瞳が前方に向けられる。そこには、やはり腰を落とし、悠然と構えて相手を見据える翔が存在し、そんな勝負に手を抜かない姿勢の翔に、軽く笑みを浮かべ、同時にセシリアは持っているボールを、比較的ゆったりとした動作で宙へと放り投げる。

蒼の瞳がボールを追い、それと同時に身体でもボールを追うように軽やかな動作で跳躍、その高さはやはり高く、身長が鈴音より高い分、最高到達点も高い。

鈴音よりも高い位置で捉えられたボールは、しなやかなセシリアの鞭の様にしなる腕によって打ち出される。

「はっ！」

短く吐き出された息と声に呼応する様に打ち出されたボールの勢いは、やはり女性が打ったとは思え無い程に速い速度。

回転の無いフラットに打ち出されたボールは、かなりの速度を保ったまま、鈴音と一夏のコートへと向かい、その着地点は一夏。

大の男でも怯みそうな速度で向かってくるボールに、一夏は慌てる事無くその身体をボールの正面に持つて行き、腰を落とし、合わせられた腕で持つて受け止める。

「よっ、と……」

軽い声と共に受けられたセシリアのサーブは、一夏の腕によって、容易く宙へと舞い戻る。

ネット前付近へと放物線を描いて飛んでいくボールの落下点には、既に鈴音が待機しており、その両手は上方へと掲げられ、その体勢は既にトスを上げる準備が整っている。

そして、ボールがネットに対して右を向いている鈴音の手に触れた瞬間、ふわりとボールはもう一度宙を舞い、若干右上方へと飛んでいく。

「一夏！」

「おう！」

トスを上げた鈴音の激に、一夏は気合を入れながらそれに答える。声と共に砂を巻き上げながらネット前へ走りこみ、助走をつけたまま、ネット前に舞い上がるボールへ向けて跳躍。

その際、弓形に反らされた背中に、確り背広筋と脊柱起立筋によって構成されている背筋が浮き上がり、収縮している様が見て取れる。

ボールに叩き付ける為に振り上げた右手を、身体をくの字に曲げる要領で背筋を伸ばした瞬間に解放し、勢い良くボールへと叩き付ける。

「つらあ！」

「ふっ！」

女性のしなやかな腕では、あまり鳴る事の無い、鈍い打撃音が響き渡ると同時に、一夏の前には翔の物と思われる両手が現れる。

だが、右サイドから走りこみ、そのまま右手で打ち出されたボールは、左斜め下へ向かい、翔の右手の端を掠めて、コートへと落ちていく。

無論、相手は翔だけでは無い。

翔の右手の端に当たり、少しばかりその速度を減速させた一夏のスパイクを、確りと蒼の瞳が捉えており、その蒼の瞳を持つセシリアがボールへ向けて走りこんで、そのまま右腕を前方に差し出しながら、スライディング。

偶然なのか確信なのか分からないが、ボールの下へと滑り込んだセシリアの右腕に、スパイクが当たり、ボールは高く宙へと舞い戻る。

その方向は、翔とセシリアのコートで言う、左サイドへと大きく逸れていく。

「翔さん！」

ボールの行く先を見届けながらも、セシリアは翔の名前を呼ぶ。うつすらと汗を掻いている白い肌に、砂浜の砂が纏わり付いており、普段の彼女ならば、その事を気にしている筈だが、今ばかりは縋るような気持ちで、自らの状態よりも先に声を絞り出す。

「承知」

明らかに明後日の方向へと飛んでいくボールを眼で追いながら、必死に声を絞り出した様子のセシリアに、翔は反射的に声を返し、その足を跳ね上げる。

短距離を走るだけにも拘らず、大量の砂を蹴散らしながら、左に飛んでいくボールを追い越し、向かってくる形になったボールへ向かって、ぐつと深く沈み込み、跳躍。

その際にも、減速の為に巻き上げた大量の砂と、跳躍時に爆発したように舞い上がる砂で、一時的に辺りの視界は砂で埋め尽くされる。

規格外の脚力で砂を巻き上げた跳躍は、普通ならば考えられ無い程に高い。

最高到達点に到達していない筈のボールに、翔の身体が追いついた時には、既に翔の身体はこれ以上無い程に弓形に反っており、背筋が収縮して、ギリギリと音を上げそうなほどに、その形を露にしている。

複雑に浮かび上がる背中周りの筋肉とは裏腹に、前面の腹筋や大胸筋はピンと伸ばされ、収縮を今か今かと待っているようにも見える。

もう既に、全身を使って腕を打ち下ろすしか無い状態になって、翔は何かに気がついた様に、はっとした表情を浮かべ、同時に口を動かす。

「スマン、上手く避ける」

その短い言葉は誰に向けられた言葉なのか、極薄い砂塵が立ち込める中、翔の見下ろしたコートの中で、その事を正しく理解している人物が、未だに呆然としている表情の鈴音の左手首を掴み、切羽詰ったような声を上げながら、鈴音をぐいっと引き寄せる。

「何やってんだ、鈴！ 少し離れるぞ！」

「はっ？ えっ？ 何？」

「いいから！ ここはヤバイ！」

状況を良く理解出来ない鈴音の表情を、とりあえずスルーし、鈴音の左手首を掴んだ一夏は、鈴音を伴い、コートから少し離れる。その時には、既に翔の瞳はコートになく、自らの腕の射程圏内に入ったボールに向けられ、複雑な形を取っていた背中周りの筋肉を一気に伸ばし、それと連動して、腹筋と大胸筋を収縮させる。

そうする事によって、体勢は一夏がやったのと同じ様に、くの字に折れ曲がったような体勢になっているが、翔が取っている体勢は、一夏のそれとは訳が違う。

背中中の筋肉に籠められた力を解放し、それと連動して、腹筋で上体の全体を振り子の要領で引き起こし、同時に振り下ろしたその手は、大胸筋のサポートもあって、腕だけで打っているのとは訳が違う。

文字通り全身の筋肉を連動させて打つスパイク、それも、翔程に鍛えこまれた肉体でそれをするとうなるか？

「ふんっ！」

一夏の打ったスパイクよりも数段高い音。空気を入れた袋を破裂させたような破裂音が一つ大きく響いた瞬間、同時に空気を切り裂

くような音にならない音も聞える。

そしてその刹那の後、コート内に小規模の爆発が起きた。

明らかにおかしいとしか言い様がない速度で叩き落されたボールは、文字通りコートの砂浜に突き刺さり、そこを中心として大量の砂が辺りに舞い散る。

突如として起こった砂塵に、コート周りに居た学生達は、軽く混乱の渦に巻き込まれている。

あちらこちらから、何が起こったのか？ 隕石でも降って来た？ などと言った言葉が飛び交っている。

そんな砂塵と混乱が渦巻くコートへ、重力に逆らう事無く落下し着地した翔を待っていたのは、セシリアからの、呆れたような言葉だった。

「流石に、これは非常識だと思いますわ」

「む？ スマン。やり過ぎないように気をつけていたのだがな、つい反射的にな」

「だから前のセットはレシーブとトスだけでしたのね……」

「まあ、そう言う事だ」

コートに着地した翔に声を掛けつつ、隣に並ぶ。

冷静に言葉を交わしていく翔とセシリアの視界は、砂塵が立ち込め、そう良くは無い。

しかし、2人の瞳は、確かに相手のコートへ向けられていた。

視界があまり良く無い中、悲鳴や疑問の声が大きく聞こえ、それに連鎖してどんどんその声は更に大きくなると言う、負の連鎖が始まっているが、所詮人の作り出した砂塵。

そう長く続く訳は無く、どんどんと視界が良くなってくる。そして、舞い上がっていた砂が地面へと帰還し、視界がクリアになった。まず最初に見えたのは、女子生徒達の一部が混乱によってもみくちゃになっている映像だった。

その瞬間、翔の視界は何者かによって後ろから遮られる。

「むっ？」

「翔さんは見てはいけませんわ」

「よくわからんが、承知した」

「何見てんのよ！？ 一夏ー！」

「うぎゃああああ！ 目があ！ 目があ！」

「ホラホラ！ あんた達！ さっさとその状態を何とかしなさいよ！」

「そうですね、幾らなんでもみつともないですわよ」

翔はセシリアに後ろから視界を塞がれている為、何が起こっているのか現状では理解出来ていないが、鈴音の台詞とその後の一夏から聞いた絶叫に、何かが地面を転がりまわっている音。

それらの音と声から、鈴音が一夏に目潰しを喰らわせ、その痛みに一夏が地面をのた打ち回っている事が理解できる。

その事実から次々と翔の頭の中に予測が展開され、一つの推測に行き着く。

「皆は水着を整え終えたか？」

「見ていましたの？」

「いや、単なる予測だ。鈴音が態々目などと狙いにくい場所を狙って、一夏に見るなと言う台詞。それは視界を塞がなければ鈴音にとつて面白く無い事が一夏の目の前に広がっていたからだ。そして鈴音は一夏に好意を抱いている。これだけである程度は予測できようと言うものだ」

「時折翔さんの頭の中がどうなっているのか、私には理解出来ない時がありますわ……」

「ふむ……」

呆れたまでの洞察力と予測力に、セシリアは翔の背中に自身の身体を力なく押し付けながら溜め息を一つ吐き出す。

たった一つの一夏の行動から、目の前で何が起こり、何故自分が視界を塞がれているか理解した翔。

事実、翔の言った通り、翔や一夏の目の前では、先程の混乱によってもみくちやになった女子生徒達が居り、その格好は凡そ男性には見せられない様な、あられもない格好だった。

ある者は水着の片紐がずれ、ある者は水着の下が片方ずり下がり、またある者は誰かの水着を手に持っていたり、酷い者に至っては水着のブラが無くなり、手で押さえている者まで居る始末。

何が起こったのか理解出来ていなければ、ただの露出好きの変態集団だと思われても仕方が無い。

そんな惨状だった。

だがそれも少しの間で、段々と状況が整ってくると、次はセシリアにとって不満とも思える現状が鎌首を持ち上げる。

セシリアの不満、それは、セシリアに視界を塞がれながらも、冷静に事が終わるのを待っている翔の姿だった。

全く動揺した様子のない翔。そんな動揺の浮かんでいない翔が、セシリアにとつての不満点だった。

現在セシリアは翔の視界を塞ぐ為に、翔の後ろから手を伸ばしてその鋭い瞳を覆っている。

翔の瞳を後ろから覆っているセシリアは、翔よりも少し背が低いつまり、翔の視界を防ぐ為に、セシリアは自らの身体を押し付けるようにして手を伸ばしているのだ。

そう、水着と言う互いに露出面積が広く、薄い布を身に纏っただけの状態で密着していると言い換えても良いその状況に、翔は動揺していないという事と同義なのである。

同年代の中では、かなり発育した方である豊かなバストを惜しげもなくふにやりと形が変わるほどに翔の背中に押し付け、括れのある腰も密着し、優美な曲線を描き白く長いしなやかな足も、互いに

触れ合っている。

男性ならば、誰もがどうにかなってしまいそうな状況に居るにも拘らず、ふむ、と冷静に一言を漏らしながら腕を組むこの男には、やはり動揺は微塵も無い。

勿論、それが狙いでセシリアはこの体勢になったわけではないし、多少の事で揺らぐ翔ではないと言う事も理解している。

しかし、一人の女として、想い人の動揺している所を見て見たいと思う思いもあれば、下心を欲しているわけではないが、自らの身体で動揺してもらえないと言う事は、一人の女としてみてもらえていないのではないかと、と言う不安すら浮かんでくる。

「翔さんは……」

「む？」

「性欲がありでないのかしら？」

「何を言っている……俺とて16だ、それ相応の意識はある」

「ですが、今のこの状況で同様すら見て取れないというのは……女として自信をなくしますわ」

「心頭滅却すれば火もまた涼し、と言うだろう」

詰まる所、やせ我慢だ。そう言ってふっと笑ったような気配を感じた時、何故だかセシリアは安堵を感じると同時に、やせ我慢だと涼しげに言い切る翔に、女としての情熱が湧いてくるのを感じる。

男はプライドの生き物だと言うし、そんなくだらない物に生きてどうするのか？ そう感じている女性も少なくないと聞くが、セシリアは自分なりのプライドを持って生きている究極系とも言える翔が、どうしても格好良く、魅力的に見えた。

自分なりのプライドに生きる翔は、こんなにも格好良いではないか、そう思うと同時に、涼しげにしているこの男を、どうしても自分のものにしたい。自分に振り向かせたい。そんな思いが湧き上がる。

プライドとは、気高さ、高貴さと言っても良い。そしてそれらは、他人に振りかざすものではなく、自分に向けられるものであり、自らを成長させる為の物でもある。

その事が分かっている柏木翔と言う男は、セシリアの中で、間違いないくらいいい男であった。

そんな事を思いながら、大体収集が付いてきた場を見据えて、翔の瞳を押さえていた手を外す。

「む、もう問題ないのか？」

「ええ、問題ありませんわ」

セシリアが手を押さえている下で、自らの瞳を閉じていたのか、その鋭い瞳を今開く。

そして隣に視線を動かすと、セシリアが上体を少しばかり前に倒し、自らの身体の後ろで手を組んだまま、下から大きな蒼の瞳で翔を見上げるようにして、翔を覗き込んでいるセシリアを見つける。

陽光を吸収するような蒼の瞳に、その逆の金色の髪を揺らめかせながら、セシリアは、嬉しそうに、楽しそうに翔へと笑顔を送る。

「翔さんは、いい男、ですね？」

「ふむ、俺がいい男かどうか、と言うのには余り興味が無いが、お前がそう思うならばお前の中ではそうなのだろう」

「ええ、そうですわ」

悟りきったような台詞を静かに腕を組んだままセシリアに言い放ち、それに対して、セシリアはやはり嬉しそうに、その可憐な笑顔を益々深めていくのだった。

「微妙にラブってる所悪いんだけど……」

「ラブってなどいない！」

「そうだよ！ そんなのは嘘だ！」

「教官とシャルロットの言う通りだ！」

「はいはい、あんた達はちょっと黙ってて」

呆れた様に翔とセシリアに声を掛けてくる鈴音に、何故か前へ出て来ようとした千冬とラウラ、シャルロットを待たしても女子集団の中へと押し込めて、翔とセシリアに向き直る。

相も変わらず呆れた表情の鈴音に、翔は思わず首をかしげ、数秒の沈黙の後、合点がいったと言うように掌を打ち、何時もの感情を悟らせない表情で鈴音の瞳を見返す。

「バレーの続きだな？」

「アンタはあの惨状を見てから言え！」

「私もその発言だけは無いと思ってしまいましたわ」

翔の発言に、セシリアは呆れ、鈴音はがーっと吼えながら、その指を鈴音と一夏の居たコートへと向けている。

そこには、うおー、なんだこりや……と冷や汗を掻きながら、何かが衝突した後埋まった様に形を変えている砂浜を覗いている一夏の姿があった。

その光景に、ふむ？ と首をかしげる翔。

「ボールは何処だ？」

「埋まってるのよ！ あの中に！ 埋まるって何よ！？ 意味がわからないわ、大体あんなの受けたら私のか細い腕なんてばつきり折れちゃうわよ！ 複雑骨折よ！ 戻らなくなっちゃうわよ！」

「か細い？ それにばつきりって言ってるのに複雑骨折って何だよ？」

「一夏五月蠅い！」

「はい！」

「ふむ、つまりどういう事だ？」

鈴音による怒涛の発言に、ビーチバレー用のボールを砂浜に埋める事になった男が首を傾げる。

何故かこんな時だけ言いたい事が伝わらない翔に対して、鈴音は思わず自らの右足で砂浜を固めるように踏みまくる。

ぼすっぼすっ、と何度も埋まっては抜け埋まっては抜けを繰り返す鈴音の足。

「私達の負けで良いって言うてんのよ！ あんなボール喰らったらトラウマ物よ」

「ふむ、承知した」

「鈴音さんの発言も中々にトラウマ物だと思いますわ」

鈴音の言葉を悠然と受け入れた翔に、セシリアは呆れすら感じながら、太陽が未だ猛威を振るう空を見上げる。

結局、翔のスパイクを恐れた鈴音によって、鈴音と一夏のペアが試合放棄。

セシリアと翔のペアが勝利と言う結果に終わった。

一般家庭では考えられ無い程に豊富な調理器具と、作業スペース、そして高価なコンロや、油物を揚げる為のフライヤー。

どれも中々お目に掛かる事のない物で溢れている、この場合は、IS学園の1年生がお世話になっている花月荘の厨房の一角。

そこに翔の姿はあった。

周りと同じ白い調理服に着替え、布に巻かれた何かを右手に持ち、調理用まな板の敷かれた横のスペースにある流し台に立っていた。

そのまま布に包まれた何かをまな板の上に置き、肩から掛けてい

たクーラーボックスを下において、蓋を開ける。

むわり、と魚独特の匂いが鼻をつくが、翔の表情は変化を見せず、何時もの感情を悟らせない表情。

鰯とキスが大量に入ったクーラーボックスを眺め、うむ、と満足そうに一つ頷いて、中身を流し台に置いてあつた大きなザルの中に中身をぶちまける。

水気を含んだ物がぶちまけられる独特の音と共に、鰯とキスがザルの中を満たしていく。

ザルから零れ落ちるのではないかと思うほどにぶちまけられた所で、その勢いは止まり、最後の一匹がザルの中に入った所で、流し台に付いている水道の蛇口を捻る。

出てきた透明の水をザルの中に一通り通してから、また蛇口をひねり、水流を止める。

そこで一旦流し台から離れると、厨房にある業務用の巨大な冷蔵庫の扉を開け、中から、紐に繋がれた3匹の大きなスズキをずるずると引き出し、紐を掴んだまま板の前まで戻り、まな板の上にある作業スペースへ、豪快にスズキを置く。

「ふむ、まずはやはり鰯とキスの下処理からか……」

特に何かしらの感情が込められているわけではなく、作業項目の羅列の一文を読むように呟くと、まな板の上に置いてあつた布をはらりと開く。

それと同時に、布の中に響く金属音が聞こえ、布が開き、中身が何であつたのか、その正体が明らかになる。

布の中身は、まごう事無き包丁であり、どれもそれなりの値段はしそうな一品ばかり。

大小が大雑把ではあるが分かれている出刃包丁に、長さが色々と存在する刺身包丁、見て取れるのはその二種類だけだった。

また、その中には包丁ではないが、木の柄に金属製の頭を持った、

鱗取りも大小両方が揃えてある。

その中から小さい鱗取りを手に取り、流し台の前に立ち、もう一つ空のザルを並べて流し台に置く。

そして、魚の入っているザルから適当に魚を一匹手に取り、手に持った鱗取りで魚の身体を撫で付けていく、バリツバリツと特徴的な音を出しながら、魚の鱗を落としていく。

粗方落し終わったらと判断したら、水道の蛇口を捻り、出てきた水でもって綺麗に鱗を洗い流し、空のザルへと放り込む。

その作業を飽きる事無く続けていく、その速度は、現在魚の下処理をしている板前の一人とそう変わらない速度。

淡々と、しかし、かなりの速さと集中力でもって終わらせていくその作業は、あつという間に終了し、魚の入っていたはずのザルは、見る見る内にその内容を減らして行き、遂にその中身を空にする。ここまで30分は掛かっていない。

「さて、次は……」

空だったザルは中身を一杯にし、中身を埋めていた筈のザルはその中身を空にした後、水で鱗取りをさつと洗い、その鋭い瞳をまな板の上に飛ばし、小出刃を手にとってまな板の前に立つ。

鱗取りを、包んでいた包丁達の中に直すと、布をまな板の脇へと退ける。

そして、先程鱗を取った魚を手に取り、まな板の上に置く、手に取ったのは鰻で、それを見た瞬間、背中を上にして手に持ち、躊躇なく小出刃を頭側の背びれの上から垂直に刃を入れる。

体の側面にある鰭まで刃が到達したら手を止め、左斜め上へと左手を動かす、すると頭と共に内臓も一緒に取れ、頭を流し台へ、内臓と頭の無くなった身体は、ざつと水洗いをして、空になったザルへと放り込む。

次に手に取ったのはキスで、それを視界に入れると、迷い無く小

出刃の切っ先を腹へと刺し込み、頭側へ刃をすつと動かし、腹を開く、そして体の側面についている鰭の後ろから頭側へ切り込み、中骨まで到達したら、裏返し、もう一度同じ様に刃を入れ、中骨まで到達したら、そのまま小出刃を起こし、軽く背を叩いて、すたと頭を落とし、内臓と共に引き抜く。

そうして頭と内臓を失ったキスは、先程の鰻と同じように軽く水洗いされ、鰻を放り込んだザルと同じザルへと放り込まれる。

迷いの無い処理方法とその手際の良さに、厨房からの視線を一身に集めている事に気が付いたが、特に気にせず次に取り掛かる。

何せ今回は数が多い、この全てを調理しようと思えば、視線に構う時間は勿体無い。

そんな事を考えながらも、魚を処理していく動きは止める事無く、その全てを手際良く処理していく。

ザルの中にあつた魚を全て処理しきるまでに掛かった時間は1時間程、夕食までにはまだもう少し猶予がある。

ざつと時間を確認した翔は、それでも次の作業へと取り掛かる。

「ふむ、簡単にフライと天麩羅が妥当な所か……天麩羅のだしとフライヤーもあるわけだからな」

キスと鰻を、どういった料理にするか、その最終形を決めている間もその手は動いている。

時折拭いていても、やはり追いつく事の無かった魚の血が広がるまな板を、さつと水で洗い、続いて小出刃も水で洗って、水気を含んだ布巾で軽く刃の部分を拭き、ザルから1匹魚を取り出し背鰭の直ぐ上に小出刃の刃を当てて切り込む。

すつと刃が通ると、そのまま尾まで一気に刃を引く、切れ目を更に大きく切り開き、最終的にお腹側の皮を残して身を開く。

そのまま裏返して、同じ様に刃を入れていく、お腹の皮を残した所でまた身を開き、お腹の鰭から繋がる骨に小出刃の刃を当てて、

ゴンツと小出刃の背を叩くと、骨と身が分断される。

身を広げて骨を流し台へと落す。

背開きにされた鰻は、大きいタツパーへと広げられる。

残りの鰻とキスも同じ様に背開きにされ、タツパをどんどんと埋めていき、最終的には何枚になったのか数えるのも億劫になる程の背開きにされた魚の身がタツパの上に並ぶ事となった。

一人で処理しているとは思えないほどの短時間で魚を捌いていく翔に、厨房の視線は完全に集まっていたが、それでも翔は気にする事無く、冷蔵庫から卵を数個取り出し、ボールにその全てを割り入れ、適当に溶いた所で手を止めて作業台の上に置く。

次にパン粉と片栗粉、そして空のタツパーを2つ取り出し、1つのタツパーの上に大量のパン粉を、もう1つのタツパーに片栗粉をぶちまけ、卵を溶いたボールの隣へ置く。

同じ流れで空のボールに天麩羅粉を溶き、それも作業台の上に置き、フライヤーの設定温度を確認、170度に設定されているのを確認し、直ぐに次の作業に取り掛かる。

塩とあらびき胡椒を取り出し、タツパーに敷かれている鰻とキスに、薄く塩を振っていき、粗方全てに振り終わった所で、全てを裏返し、また同じ様に塩を振る。

塩を振り終わったら、タツパを手に取り、その中からキスだけを手にとって、溶いた天麩羅粉にその身をつけて、次々にフラウヤーへと放り込む。

じゅわつと小気味良い音が響くと同時に、油で物が揚がっていく香ばしい香りが辺りを包み、調理音でうるさい筈の厨房で、誰かが生唾を飲み込む音が聞える。

無論、翔が態々それに構うわけも無く、全てのキスをフライヤーに入れ終わると、タツパーを戻し、鰻しか居なくなつたタツパーにあらびき胡椒を振り掛けていき、満遍なく掛かった所で、また裏返して振っていく。

塩と胡椒を満遍なく掛けられた鰻の尻尾を持って、片栗粉を両面

に満遍なく付けて、それを次に卵につけ、最終的にその身をパン粉を纏わせる。

その作業を1匹につき、2サイクルずつ繰り返し、大きく衣を纏った鰯がタッパーに並べられる。

この時のコツは、つけたパン粉を意図的に落とさない事と、パン粉を付ける時、大量のパン粉でその身を包み、本当に軽く押さえるだけと言う事。

こうする事によって、油で揚げた時に衣が立ち、美味しそうに揚がるのだ。

そうして、1匹ずつ素早く確実に作業を終えていくが、その途中にぴくりと肩眉を動かし、徐に作業を中断して、菜箸とクッキングペーパーを敷いたタッパーを持ち、フライヤーの前に立つ。

「そろそろか……」

フライヤーの中を跳ね踊っているキスの1つを菜箸で掴み、タッパーの上へと上げる。

そこにはカラリと揚がった天麩羅の衣を纏った白い身のキスが存在していた。

天麩羅の状態を確認して、うむり、と一つ満足そうに頷くと、天麩羅を次々にタッパーへと上げていき、最終的に大量のキスの天麩羅で埋め尽くされたタッパーを、取り合えず作業台へと置く。

そして大皿を取ってきた翔は、その上にキスの天麩羅をぶちまけ、夕食の為に並べられた膳の近くへと置き、元々やっていた作業へと戻る。

全ての鰯がパン粉を纏い終えると、その全てをもう一度フライヤーの中へと放り込む。

またしても香ばしい香りの漂う厨房に、今度は幾つも生唾を飲み込む音が聞える。が、勿論知った事ではない。

全ての鰯がフライヤーの中で踊っているのを確認した翔は、その

鋭い視線を、スズキへと向け、もう一度まな板の前に立ち、包丁や鱗取りが並べられている布の中から、大きな鱗取りを取り出し、躊躇無くそれでスズキの身体を撫で付ける。

鰯やキスと言った比較的小型の魚とは違い、鱗が取れる音も大きく、鱗が取れる量も違う。

大量の鱗が流し台に飛び散り、1匹目が粗方取り終わり、軽く水洗い。

その流れでもう1匹の鱗取りが終了した所で、2匹のスズキをまな板の上に置き、フライヤーの前に菜箸とクッキングペーパーを敷いたタッパーを持って立つ。

パン粉が綺麗なきつねいろに揚がっているのを見て、次々とフライをタッパーの上に放り込んでいき、全てのフライを放り込んだ所で、そのタッパーを作業台の上へ置く。

「ふむ……取り合えず鱗取りを終えるか」

そう一言呟くと、言葉通りに流し台に立ち、鱗取り器を手に持って、最後のスズキの鱗を取り、水洗い。

まな板の上に最後のスズキを置くと、またしても大皿を取り出し、タッパーの中にある鰯のフライを大皿の上に次々と乗せていき、その全てが乗り切った所でキスの天麩羅が置いてある近くに置いておく。

天麩羅とフライ、その二つが山盛りになっっている大皿を見て、満足そうに一つ頷き、もう一度まな板の前に立ち、包丁達の中から、先程の小出刃よりも一回り大きな出刃包丁を手取る。

そして、並んでいるスズキの内、1匹を残して、後は作業台の上に置いて順番待ちをさせる。

まな板の上に横たわる大きな体のスズキの腹に出刃の切っ先を刺し込み、お腹を開き、キスと同じ様に頭を落す。

落とした頭は流し台に落とし、まな板の上を布巾で軽く拭き、血

や内臓の切れ端などを綺麗に拭いていく。

頭の無くなった身を持って流し台に移動、蛇口を捻って水を出し、手でもって内臓を引きずり出して、身を軽く水洗い。

綺麗になったスズキの身をまな板の上に置き、その身を軽くクツキングペーパーでふき取り水気を切る。

頭の無くなったスズキは、お腹を翔の体のある方に向けてまな板に横たわっている。

その身は頭が無くとも大きな身体をしている。

大きな身を見て、満足そうに一つ頷くと、裂いたお腹の尻尾側にある鰭の直ぐ上から、出刃包丁の刃を当てて、お腹を裂いた延長戦のような形で刃を入れ、最初は皮だけ切る様に切っ先だけ。

二回目に刃を入れる時は、出刃包丁の腹辺りの刃で、身の中ほどまで刃を入れる感じで尻尾付近まで刃を引く。

三回目に刃を入れて、切っ先が中骨に当たっている感触を感じながら、やはり尻尾付近まで刃を引くと、次は身をくるりと回し、背中を翔の体側に向けるように回転させる。

そして先程キスと鰻を背開きにした様に背鰭の直ぐ上から刃を入れて、やはり三回刃を入れる。

お腹の切れ目と背中の中切れ目が貫通した所から、スズキの頭があった方へ刃を向ける形で、出刃の切っ先を潜り込ませ、左手で身を押さえながら一気に刃を頭側へ滑らせ、身が骨から離れると、次は逆に尻尾側へ刃を向けて、同じ様に滑らせる。

すると片側の身は綺麗に骨から離れて身だけになる。

その身を脇にどけて、未だ骨が存在している身を裏返して、先ほどと同じ様に捌き、三枚に下ろされたスズキが完成。

身だけを残し、骨は流し台に落とされる。

残りの二匹も同じようにして下ろされ、まな板の上には6枚のスズキの白身だけが残される。

「さて、後は腹骨を取って、皮を引いて、中骨を取って、造りにす

るだけだ」

やはり作業項目を確認するようにして言葉にしながらも、その手は止まる事は無い。

身の一つを手にとると、出刃の刃を身の真ん中からお腹側へと当てて、骨が並んでいる所を見つけると、身と共にそぎ落とすように腹骨を取り除く。

次に、尻尾側の端に刃を当てて、薄く身を切り、そのまま刃を斜めにして頭側に少しだけ切り込む。

そのまま刃は動かさず、尻尾側の身を持って、ぐいぐいと上下に揺らすようにして身を引いていく、すると、ビツビツ、と独特の音を立てながら、皮が身から分断されていき、最終的に皮は身から離れる事になる。

張り付く場所を失い、ひらひらと薄くなってしまった皮は、流し台へと落とされ、最終的には真っ白なスズキの身だけが残る。

その大きな身を翔から見て尻尾側が翔の身体を向く様に回転させる。

右手で身の中心辺りを撫で付けて、骨のある位置を確認すると、骨のある中心から若干右側に出刃の刃を入れて、身を切り分ける。

同じ様に中心から若干左側にも刃を入れて、分断。

最終的には中骨の存在する、細い身は流し台へと直行。

後は身を、造りの形に刺身包丁で切り分けて盛り付けるだけだ。

「ふむ、皆は喜んでくれるだろうか……余計な事で無ければ良いのだが」

同じ様に後2匹のスズキも同じ様に下ろしながら、料理を出した時の皆の反応を予想しながら、翔は手を動かしていくのだった。

二十五斬 漢には粹な演出も必要だ（後書き）

どうも、お馴染み、あつくすばんばーです。

いやはや、中々時間が掛かってしまいました。申し訳ありません。そんな時間を掛けた中身はつと……あるえ？ 何でこんな事になつてるんだ？ この話居るー？ っていうか無駄に長いよ！

はい、すみません、かるーい話で次回のセシリア強化回に繋げようとしたんですが、無理でした。

細かく書いてると文章の量がどんどん肥大化してしまつて……はい。

なので後半は描写が適当かもしれませんが、許してくださいorz

はい、と言う事で、次回もセシリア強化回だと打ち明けた所で、雑談コーナーです。

では、恒例のアレ、行ってみましょうか。

別に見たくないのなら、見なくてもいい……だが……だが私は見て欲しいと思っている。この気持ちは無駄なものなのか？

と言う訳で、ネタが何時尽きるか分からない恒例ですが、それも済みました所で、雑談です。

ここ最近で起こった変化、と言えば？ そう、そうですねー、勿論皆さんも知っている……新規アニメ放送ですね。

え？ 知らない？ 普通は新年の事だろって？ いやですよーお客さん（？）当たり前前の事なら私以外の誰かがやってくれてますって。

と言う訳で、今回は新規アニメについてです。

私が注目してるアニメ第1位、これはもう男子高校生の日常ですね。

あのシニールさ、そして私が昔やっていたような事、これはもう

私にとって見る以外の選択肢などありませんでしたね。

勢い余って単行本を揃えると言うフライングに走りました。はい。男子高校生の日常、面白いですよ、ホント、あのシニールさと面白さが分かる方は、多分私とお友達になれます。

いえ、なりましょう。

さて、今回はもう一つ話の種を。

最近どうも、やりたい事が一つ増えてですね、ネットラジオとか生放送とか、やってみるのも面白いんじゃないかなーとか思ってます。

見知らぬ誰かに自分を発信する。

これってとってもワクワクしません？ 少なくとも私はワクワクします。

私がラジオや生放送やって面白い人物なのか？ と問われれば…

…うん、そうですね、わかりませんわ

まあ、そんなこんなで、楽しそうだなーとか思ってるんですよ。

やるとしたら、ラジオか生放送か……悩む所ですね。

どっちも面白そうです。

ではでは、私の雑談を聞いてくれた方も、そうじゃない方も、またお会いしましょう。

あつくすぼんばーでした。

……あー、お便りとか読んでみてえー……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3154s/>

IS インフィニット・ストラトス ~ 黒衣の侍 ~

2012年1月5日23時49分発行